独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊

旧練兵場遺跡Ⅱ（第19次調査）

第一分冊

２０１１．２

香　川　県　教　育　委　員　会
独立行政法人国立病院機構善通寺病院

遺跡遠景　　東から

遺跡遠景　　南から

調査区全景（垂直）

Ｃ区全景　西から

D 区 SH51（写真中央に鍛冶炉）　南から

D 区 SH55　　西から

B 区 SB10　　南西から

A 区 SB04 全景　　北東から

A 区 SB04（SP424）断面　　南から

B 区 SR02 下層下位　遺物出土状況　　北から

B 区 SR02 下層下位　遺物出土状況　　南から

SR02 上層溝下層　遺物出土状況　　南東から

SR02 上層　遺物出土状況　　東から

26次
SH1020a
3009
3073
2967
2968
2912
3061
3672
2988
3593
4051
4087
3629
4235
4717

他地域からの搬入土器

23次 SH5011
356
5456
224
3841
2956
4033
3734
3693
3982
3842
3287
3635
2318
3843
3844

内面朱付着土器

ガラス玉、勾玉、管玉未成品

銅鏃

弥生中期土器（SR02）

弥生終末期～古墳初頭の土器（SR02 他）

サヌカイト製　打製石庖丁

磨製石斧

漁網錘

序　　文

旧練兵場遺跡は、香川県内において最大規模をもつ集落遺跡として周知されています。特に弥生時代については、瀬戸内海沿岸部はもとより西日本でも有数の規模を誇る大規模集落として認知されています。今回の報告書はその中枢部分の調査成果の報告です。

大規模集落は弥生時代中期後半から古墳時代前期にわたって営まれており、今回の発掘調査でも50棟の竪穴住居跡などを確認しました。これらの居住遺構の数もさることながら、出土遺物には四国島内を始めとして、東北部九州地方から近畿地方にかけての瀬戸内海沿岸部から運ばれた土器や、極めて多量の銅鏃やガラス玉などが含まれており、県内の他の弥生時代の集落跡には見られない特徴をもっています。これらは、当時の人々が、他の地域から交易によって入手した貴重品や、土器や石器などの日用品を求めて旧練兵場遺跡に集ったことを示しており、当時の経済において旧練兵場遺跡が拠点として機能したことを表しています。

今後、一極集中する流通に傾斜した香川県の弥生時代の社会とはどのような経済であったのか、大規模集落を構成する多くの人々はどのように編成されていたのかなど、発掘調査成果を広く公開し、分析することによって明らかになるさまざまな事柄は、確実に弥生時代の研究を深化させていくものと信じます。

本報告書が香川県はもとより全国の弥生時代の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、独立行政法人国立病院機構善通寺病院を始めとした関係機関並びに地元関係者各位には、多大な援助と協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、埋蔵文化財の保護について今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年3月

香川県埋蔵文化財センター
所長　大山　真充

例　　言

1．本報告書は、善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第２冊で、香川県善通寺市仙遊町二丁目に所在する旧練兵場遺跡 (きゅうれんぺいじょういせき) の報告を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が独立行政法人国立病院機構から委託され、香川県教育委員会を調査主体とし、旧財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（平成 15 年度まで）と香川県埋蔵文化財センター（平成 16 年度から）を調査担当として実施した。調査・報告書作成に伴う費用は、全て独立行政法人病院国立機構本部及び同善通寺病院が負担した。

3．現地調査及び報告書作成に当たって、下記の関係機関や多くの方々の協力や教示を賜った。記して謝意を表したい。（敬称略）

　独立行政法人国立病院機構本部　同善通寺病院　善通寺市教育委員会　地元自治会　石黒立人 (愛知県埋蔵文化財センター)　大久保徹也 (徳島文理大学)　大澤正己 (たたら研究会)　上田健太郎 (兵庫県埋蔵文化財センター)　梅木謙一 (松山市考古館)　栗林誠治、近藤　玲 (財団法人徳島県埋蔵文化財センター)　柴田昌児 (財団法人愛媛県埋蔵文化財センター)　田崎博之、村上恭通、吉田　広 (愛媛大学)　出原恵三 (財団法人高知県埋蔵文化財センター)　寺前直人 (大阪大学)　中村　豊 (徳島大学)　禰宜田佳男 (文化庁) 濱田延充 (寝屋川市教育委員会)　林　大智 (財団法人石川県埋蔵文化財センター)　菱田哲郎 (京都府立大学)　平井典子 (総社市教育委員会)　松井　章、三好孝一 (財団法人大阪府文化財センター)　山崎　健、橋本裕子 (奈良文化財研究所) 若林邦彦 (同志社大学)

4．本報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。
本報告書の執筆は各担当が行い、文末に文責を記した。編集作業は信里芳紀が担当した。また、弥生時代の鉄製品の冶金学的所見についてたたら研究会大澤正己氏より、動物遺存体・古人骨について奈良文化財研究所山崎健・橋本裕子氏より玉稿を頂いた。

5．本報告書の遺構名は、基本的に現地調査で使用したものを踏襲するが、報告書作成作業で欠番になったものや、新たに確認されたことにより追加したものが含まれる。

6．本報告書の測地系は、既往の調査区との整合を図るため日本測地系平面直角座標系第Ⅳ系を使用したので注意されたい。

7．本報告書の実測図は、以下の縮尺を基本としている。
土器 (1/4)・石器 (1/2)・木器 (1/4)・金属器 (2/3)・土製品 (1/2、1/4)

8．実測図中に、赤色顔料や摩滅痕等の特徴が認められるものについては、図中にアミ掛けで表現した。また、 他地域からの搬入土器と考えられるものは、報告番号の横に地域名等を示した。

9．本報告に当たって、実測・分析・保存処理等を下記の機関等に業務委託した。
土器実測 (株式会社九州文化財研究所)　遺物トレース (株式会社イビソク)　土壌分析・樹種同定・種子同定 (株式会社古環境研究所)　金属器保存処理 (財団法人山梨文化財研究所　株式会社吉田生物研究所　株式会社京都科学)　木製品保存処理 (株式会社吉田生物研究所)　赤色顔料 (株式会社パレオ・ラボ)　鉛同位体比分析 (財団法人元興寺文化財研究所)　鉄器構造分析 (パリノサーヴェイ株式会社)　金属元素分析 (パリノサーヴェイ株式会社)　放射性炭素年代測定 (株式会社加速器分析研究所)　土器付着炭化物放射性炭素年代測定 (株式会社パレオ・ラボ)　管玉材質分析・X 線写真撮影 (株式会社パレオ・ラボ)　ガラス玉蛍光 X 線分析 (遺物材料研究所)

10. 調査で作成した記録類及び出土遺物は、香川県埋蔵文化財センターで一括して保管しているので、活用されたい。

本文目次

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第２節　発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第３節　整理作業の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　自然環境と地形環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
第３節　既往調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

第３章　調査の成果

第１節　調査概要と報告手順・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
第２節　微地形と土層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
第３節　縄文晩期から弥生前期の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
第４節　弥生時代中期から古墳時代前期の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
第５節　古墳～中世の遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 260
第６節　近世以後の遺構分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 350
第７節　柱穴跡の遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 355
第８節　河川跡の遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第９節　遺構に伴わない遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 204

第４章　自然科学的分析

第１節　放射性炭素年代測定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 211
　　　　放射性炭素年代測定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 211
　　　　旧練兵場遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）・・・・・・・・・・・・・・ 215
第２節　堆積層の土壌分析及び河川出土樹木の樹種同定・・・・・・・・・・・・・・・・ 220
　　　　香川県旧練兵場遺跡における土壌分析・樹種同定・種子同定・・・・・・・・・・ 220
　　　　旧連兵場遺跡出土木製品の樹種・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 246
　　　　香川県旧練兵場遺跡出土木製品の樹種調査結果　その１・・・・・・・・・・・・ 252
　　　　香川県旧練兵場遺跡出土木製品の樹種調査結果　その２・・・・・・・・・・・・ 264
第３節　動物遺存体同定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 266
　　　　旧練兵場遺跡から出土した動物遺存体と古人骨・・・・・・・・・・・・・・・・ 266
第４節　青銅器鉛同位体比分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 274
第５節　鉄器および鍛冶関連資料の構造分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 303
　　　　鉄製品及び鍛冶関連資料の構造分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 303

鉄製品及び鍛冶関連資料の構造分析に対するコメント・・・・・・・・・・・・・・・・・ 360
出土鉄製品の構造分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 362
第６節　黒変部を認める石製品について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 373
第７節　旧練兵場遺跡出土赤色顔料の蛍光Ｘ線分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 394
第８節　ガラス玉の蛍光Ｘ線分析による元素分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 411

第５章　総括

第１節　弥生中期後半から古墳初頭の土器編年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 417
第２節　旧練兵場遺跡における外来系土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 444
第３節　弥生時代中期から古墳時代前期の金属器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 463
第４節　旧練兵場遺跡の漁具・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 472
第５節　旧練兵場遺跡の弥生時代集落について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 476
第６節　古代・中世の景観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 494

挿図目次

図１　調査区割 …… 4
図２　遺跡の位置（その１）…… 5
図３　遺跡の位置（その２）…… 6
図４　地質環境 …… 8
図５　地形分類 …… 11
図６　遺跡分布（縄文後期～古墳前期）…… 12
図７　遺跡分布（縄文後期～晩期）…… 16
図８　青銅器及び関連遺物分布 …… 18
図９　下川津遺跡の基幹的灌漑水路 …… 20
図 10　遺跡分布（弥生前期）…… 21
図 11　遺跡分布（弥生中期前半）…… 22
図 12　遺跡分布（弥生中期後半～後期前半）…… 23
図 13　遺跡分布（弥生後期後半～終末期）…… 25
図 14　遺跡分布（古墳前期）…… 26
図 15　既往の調査区分布 …… 31
図 16　遺構平面（全時代）…… 34
図 17　旧河道分布 …… 36
図 18　旧河道断面 …… 37
図 19　基本層序概念 …… 39
図 20　Ｂ・Ａ区東壁断面 …… 40
図 21　Ａ区西壁断面 …… 41
図 22　Ｂ区西壁断面 …… 42
図 23　Ａ区南壁断面 …… 43
図 24　Ｃ・Ｄ・Ｅ区西壁断面 …… 44
図 25　縄文晩期～弥生時代前期遺構分布 …… 46
図 26　SX36 平・断面 …… 47
図 27　SX36 出土遺物（1）…… 48
図 28　SX36 出土遺物（2）…… 49
図 29　SX37 平・断面・出土遺物 …… 50
図 30　SK42 平・断面 …… 50
図 31　SK42 出土遺物 …… 51
図 32　弥生時代中期～古墳前期の遺構分布 …… 53
図 33　SH01 平・断面・出土遺物（1）…… 56
図 34　SH01 出土遺物（2）…… 57
図 35　SH02 平・断面・出土遺物（1）…… 59
図 36　SH02 遺物出土状況 …… 60
図 37　SH02 出土遺物（2）…… 61
図 38　SH02 出土遺物（3）…… 62
図 39　SH04 平・断面 …… 63
図 40　SH04 遺物出土状況 …… 64
図 41　SH04 出土遺物 …… 65
図 42　SH05 平・断面・出土遺物（1）…… 67
図 43　SH05 出土遺物（2）…… 68
図 44　SH06 平・断面・出土遺物 …… 69
図 45　SH06 遺物出土状況 …… 70
図 46　SH07 平・断面・出土遺物 …… 72
図 47　SH09 平・断面 …… 74
図 48　SH09 遺物出土状況 …… 75
図 49　SH09 出土遺物（1）…… 76
図 50　SH09 出土遺物（2）…… 77
図 51　SH10 平・断面・出土遺物（1）…… 79
図 52　SH10 出土遺物（2）…… 80
図 53　SH13 平・断面・出土遺物 …… 81
図 54　SH14 平・断面・出土遺物（1）…… 83
図 55　SH14 出土遺物（2）…… 85
図 56　SH15 平・断面 …… 85
図 57　SH15 出土遺物 …… 86
図 58　SH16 平・断面・出土遺物 …… 88
図 59　SH17 平・断面 …… 89
図 60　SH17 出土遺物 …… 90
図 61　SH18 平・断面・出土遺物 …… 92
図 62　SH27 最終床面平・断面 …… 93
図 63　SH27 上層床面遺物出土状況 …… 94
図 64　SH27 上層床面平・断面 …… 95
図 65　SH27 柱穴断面・出土遺物（1）…… 96
図 66　SH27 出土遺物（2）…… 97
図 67　SH27 出土遺物（3）…… 98
図 68　SH28 平・断面 …… 100
図 69　SH28 出土遺物 …… 101
図 70　SH29 平・断面・出土遺物（1）…… 103
図 71　SH29 出土遺物（2）…… 104
図 72　SH31 平・断面 …… 106
図 73　SH31 遺物出土状況 …… 107
図 74　SH31 出土遺物（1）…… 108
図 75　SH31 出土遺物（2）…… 109
図 76　SH31 出土遺物（3）…… 110
図 77　SH32・33 平・断面・出土遺物 …… 112
図 78　SH35 平・断面 …… 115
図 79　SH35 断面 …… 116
図 80　SH35 遺物出土状況 …… 117
図 81　SH35 出土遺物（1）…… 118
図 82　SH35 出土遺物（2）…… 119
図 83　SH35 出土遺物（3）…… 120
図 84　SH36 平・断面 …… 123
図 85　SH36 出土遺物（1）…… 124
図 86　SH36 出土遺物（2）…… 125
図 87　SH37 平・断面 …… 126
図 88　SH37 出土遺物 …… 127
図 89　SH38 平・断面 …… 128
図 90　SH38 出土遺物（1）…… 129
図 91　SH38 出土遺物（2）…… 130
図 92　SH39 平・断面・出土遺物（1）…… 132
図 93　SH39 出土遺物（2）…… 133
図 94　SH40 平・断面・出土遺物（1）…… 135
図 95　SH40 出土遺物（2）…… 136
図 96　SH41 平・断面 …… 137
図 97　SH41 出土遺物 …… 138
図 98　SH42 平・断面 …… 140
図 99　SH42 遺物出土状況 …… 141
図 100　SH42 出土遺物（1）…… 142
図 101　SH42 出土遺物（2）…… 143
図 102　SH43 平・断面・出土遺物 …… 145
図 103　SH44 平・断面・出土遺物（1）…… 147
図 104　SH44 出土遺物（2）…… 148
図 105　SH46 平・断面・出土遺物 …… 150
図 106　SH48 平・断面・出土遺物 …… 152
図 107　SH49 平・断面 …… 153
図 108　SH51 平・断面 …… 154
図 109　SH51 出土遺物（1）…… 155
図 110　SH51 出土遺物（2）…… 156
図 111　SH52 平・断面・出土遺物 …… 159
図 112　SH54 平・断面・出土遺物 …… 160
図 113　SH55 平・断面 …… 161
図 114　SH55 出土遺物 …… 162
図 115　SH56 平・断面・出土遺物 …… 164
図 116　SH57 平・断面・出土遺物 …… 166

図 117　SH59 平・断面・遺物出土状況 …… 167
図 118　SH59 出土遺物 …… 168
図 119　SH63 平・断面・遺物出土状況・出土遺物 …… 170
図 120　SH64 平・断面・出土遺物 …… 171
図 121　SH65 平・断面・遺物出土状況・出土遺物 …… 172
図 122　SH66 平・断面・出土遺物 …… 173
図 123　SH67 平・断面・出土遺物 …… 174
図 124　SH68 平・断面 …… 175
図 125　SH69 平・断面 …… 175
図 126　SH70 平・断面・出土遺物 …… 176
図 127　SH71 平・断面・遺物出土状況・出土遺物 …… 177
図 128　SH72 平・断面・出土遺物 …… 178
図 129　SB03 平・断面・出土遺物 …… 180
図 130　SB04 平・断面 …… 181
図 131　SB04 出土遺物（1）…… 182
図 132　SB04 出土遺物（2）…… 183
図 133　SB05 平・断面・出土遺物 …… 184
図 134　SB06 平・断面・出土遺物 …… 185
図 135　SB07 平・断面 …… 187
図 136　SB07 出土遺物 …… 188
図 137　SB08 平・断面・出土遺物 …… 189
図 138　SB09 平・断面・出土遺物 …… 191
図 139　SB10 平・断面 …… 193
図 140　SB10 出土遺物 …… 194
図 141　SB11 平・断面・出土遺物 …… 195
図 142　SB12 平・断面 …… 197
図 143　SB12 出土遺物 …… 198
図 144　SB13 平・断面・出土遺物 …… 200
図 145　SB14 平・断面・出土遺物 …… 201
図 146　SB15 平・断面・出土遺物 …… 203
図 147　SB16 平・断面・出土遺物 …… 204
図 148　SB17 平・断面・出土遺物 …… 206
図 149　SB18 平・断面・出土遺物 …… 207
図 150　SB19 平・断面・出土遺物 …… 208
図 151　SB20 平・断面・出土遺物 …… 209
図 152　SB21 平・断面・出土遺物 …… 210
図 153　SB22 平・断面・出土遺物 …… 211
図 154　SB23 平・断面・出土遺物 …… 213
図 155　SB24 平・断面・出土遺物 …… 214
図 156　SB25 平・断面・出土遺物 …… 215
図 157　SB26 平・断面・出土遺物 …… 217
図 158　SB27 平・断面・出土遺物 …… 218
図 159　SB28 平・断面・出土遺物 …… 219
図 160　SK04 平・断面・出土遺物 …… 220
図 161　SK06 平・断面・出土遺物 …… 221
図 162　SK08 平・断面・出土遺物（1）…… 223
図 163　SK08 出土遺物（2）…… 224
図 164　SK08 出土遺物（3）…… 225
図 165　SK13・14 平・断面・出土遺物 …… 227
図 166　SK15・16・27・28 平・断面・出土遺物 …… 228
図 167　SK32・34・40 平・断面・出土遺物 …… 229
図 168　SP1909・1916 平・断面・出土遺物 …… 231
図 169　ST01 平・断面 …… 232
図 170　ST01 平・断面 …… 233
図 171　ST01 平・断面 …… 234
図 172　ST01 出土遺物 …… 235
図 173　ST02 平・断面・出土遺物 …… 237
図 174　ST03 平・断面 …… 239
図 175　ST03 出土遺物 …… 240
図 176　SD04 断面・出土遺物 …… 241
図 177　SD06 平・断面・出土遺物 …… 242
図 178　SD25 断面・出土遺物 …… 243
図 179　SD26 断面・出土遺物 …… 244
図 180　SD28・29 平・断面・出土遺物 …… 245
図 181　SD55・56 平・断面・出土遺物 …… 247
図 182　SD86・106 平・断面 …… 248
図 183　SD86・106 出土遺物（1）…… 249
図 184　SD86・106 出土遺物（2）…… 250
図 185　SD86・106 出土遺物（3）…… 251
図 186　SD129 断面・出土遺物 …… 253
図 187　SX02 平・断面・出土遺物 …… 255
図 188　SX23 平・断面・出土遺物 …… 256
図 189　SX24 平・断面・出土遺物 …… 257
図 190　SX30 平・断面・出土遺物 …… 259
図 191　SX35 平・断面・出土遺物 …… 260
図 192　古墳後期～中世遺構分布 …… 261
図 193　SB01 平・断面・出土遺物 …… 263
図 194　SB02 平・断面・出土遺物 …… 264
図 195　SB30 平・断面・出土遺物 …… 264
図 196　SB31 平・断面・出土遺物 …… 265
図 197　SB35 平・断面・出土遺物 …… 266
図 198　SB36 平・断面 …… 267
図 199　SB37 平・断面 …… 268
図 200　SB38 平・断面・出土遺物 …… 269
図 201　SB39 平・断面・出土遺物 …… 270
図 202　SB40 平・断面・出土遺物 …… 271
図 203　SB41 平・断面・出土遺物 …… 272
図 204　SB42 平・断面・出土遺物 …… 273
図 205　SB43 平・断面・出土遺物 …… 274
図 206　SB44 平・断面・出土遺物 …… 274
図 207　SK21 平・断面・出土遺物 …… 275
図 208　SK30 平・断面・出土遺物 …… 275
図 209　SD01 平・断面・出土遺物（1）…… 276
図 210　SD01 出土遺物（2）…… 277
図 211　SD02 断面・出土遺物 …… 279
図 212　SD03 断面・出土遺物 …… 280
図 213　SD05 断面・出土遺物 …… 281
図 214　SD08 断面・出土遺物 …… 281
図 215　SD11 断面・出土遺物 …… 282
図 216　SD12 断面・出土遺物 …… 283
図 217　SD14・30 断面・出土遺物（1）…… 284
図 218　SD14・30 出土遺物（2）…… 285
図 219　SD14・30 出土遺物（3）…… 286
図 220　SD15 平・断面・出土遺物 …… 287
図 221　SD16 断面・出土遺物 …… 287
図 222　SD17 断面 …… 288
図 223　SD17 礫出土状況 …… 289
図 224　SD17 出土遺物（1）…… 290
図 225　SD17 出土遺物（2）…… 291
図 226　SD17 出土遺物（3）…… 292
図 227　SD17 出土遺物（4）…… 293
図 228　SD17 出土遺物（5）…… 294
図 229　SD17・97 出土遺物（6）…… 295
図 230　SD18 断面・出土遺物（1）…… 297
図 231　SD18 出土遺物（2）…… 298
図 232　SD19・20 断面・出土遺物 …… 300
図 233　SD21 断面・出土遺物 …… 301
図 234　SD24・126 断面・出土遺物（1）…… 302
図 235　SD24 出土遺物（2）…… 303
図 236　SD27 断面・出土遺物 …… 304

図 237　SD31 断面 …… 305
図 238　SD31 出土遺物（1）…… 306
図 239　SD31 出土遺物（2）…… 307
図 240　SD31 出土遺物（3）…… 308
図 241　SD31 出土遺物（4）…… 309
図 242　SD31 出土遺物（5）…… 310
図 243　SD32 断面・出土遺物 …… 311
図 244　SD33 断面・出土遺物 …… 312
図 245　SD35・94 断面・出土遺物 …… 313
図 246　SD36 断面 …… 314
図 247　SD36 出土遺物（1）…… 315
図 248　SD36 出土遺物（2）…… 316
図 249　SD37・75 断面・出土遺物 …… 317
図 250　SD38 断面・出土遺物 …… 317
図 251　SD39 断面・出土遺物 …… 318
図 252　SD42 断面・出土遺物 …… 318
図 253　SD43 平・断・立面・出土遺物 …… 319
図 254　SD44・98 断面・出土遺物 …… 319
図 255　SD50 断面・出土遺物 …… 320
図 256　SD52 断面・出土遺物 …… 321
図 257　SD53 断面・出土遺物 …… 321
図 258　SD60 断面・出土遺物 …… 322
図 259　SD61 平・断面・出土遺物 …… 322
図 260　SD62・102 平・断面・出土遺物 …… 323
図 261　SD67 断面・出土遺物 …… 324
図 262　SD70 断面・出土遺物 …… 325
図 263　SD71 平・断面・出土遺物 …… 327
図 264　SD72 断面・出土遺物（1）…… 328
図 265　SD72 出土遺物（2）…… 329
図 266　SD72 出土遺物（3）…… 330
図 267　SD76 断面・出土遺物 …… 330
図 268　SD77・78・79 断面・出土遺物 …… 331
図 269　SD80・68 断面・出土遺物 …… 332
図 270　SD83・74 断面・出土遺物（1）…… 334
図 271　SD83 出土遺物（2）…… 335
図 272　SD84 断面・出土遺物 …… 335
図 273　SD85 断面・出土遺物 …… 335
図 274　SD92 断面・出土遺物 …… 336
図 275　SD93 断面・出土遺物 …… 337
図 276　SD99 断面・出土遺物 …… 337
図 277　SD101 断面・出土遺物 …… 338
図 278　SD108 断面・出土遺物 …… 339
図 279　SD113 断面・出土遺物 …… 339
図 280　SD114 断面・出土遺物 …… 340
図 281　SD115 断面・出土遺物 …… 340
図 282　SD116 断面・出土遺物 …… 340
図 283　SD117 断面・出土遺物 …… 341
図 284　SD122 断面・出土遺物 …… 341
図 285　SD124 断面・出土遺物 …… 342
図 286　SD125 平・断面・出土遺物 …… 343
図 287　SD127 平・断面・出土遺物 …… 343
図 288　SD128 断面・出土遺物 …… 344
図 289　SX04 平・断面・出土遺物 …… 345
図 290　SX17 平・断面・出土遺物 …… 345
図 291　SX20 平・断面・出土遺物 …… 346
図 292　SX39 平・断面 …… 347
図 293　SX39 出土遺物 …… 349
図 294　SX41 平・断面・出土遺物 …… 349
図 295　近世以後遺構分布 …… 351
図 296　SK03 平・断面・出土遺物 …… 352
図 297　SD23 断面・出土遺物 …… 352
図 298　SD105 平・断面・出土遺物 …… 353
図 299　SX03 平・断面・出土遺物 …… 354
図 300　SX06 平・断面・出土遺物 …… 355
図 301　所属遺構不明の柱穴跡分布 …… 356
図 302　Ａ区柱穴跡出土遺物（1）…… 360
図 303　Ａ区柱穴跡出土遺物（2）…… 361
図 304　Ｂ区柱穴跡出土遺物 …… 363
図 305　Ｃ区柱穴跡出土遺物（1）…… 364
図 306　Ｃ区柱穴跡出土遺物（2）…… 365
図 307　Ｄ区柱穴跡出土遺物 …… 366
図 308　Ｅ区・Ｆ区柱穴跡出土遺物 …… 367
図 309　SR01 平・断面　遺物出土状況　Ｆ区南壁断面 …… 3
図 310　SR01 出土遺物（1）…… 4
図 311　SR01 出土遺物（2）…… 5
図 312　SR01 出土遺物（3）…… 6
図 313　SR02 最下層下位平・断面　遺物出土状況 …… 7
図 314　SR02 最下層下位出土遺物 …… 10
図 315　SR02 下層 SR02 下層平・断面　遺物出土状況 …… 11
図 316　SR02 最下層番号取り上げ出土遺物（1）…… 14
図 317　SR02 最下層番号取り上げ出土遺物（2）…… 15
図 318　SR02 最下層一括取り上げ出土遺物（1）…… 16
図 319　SR02 最下層一括取り上げ出土遺物（2）…… 17
図 320　SR02 下層下位出土遺物（1）…… 19
図 321　SR02 下層下位出土遺物（2）…… 20
図 322　SR02 下層下位出土遺物（3）…… 21
図 323　SR02 下層下位出土遺物（4）…… 22
図 324　SR02 下層下位出土遺物（5）…… 23
図 325　SR02 下層下位出土遺物（6）…… 24
図 326　SR02 下層南半出土遺物（1）…… 26
図 327　SR02 下層南半出土遺物（2）…… 27
図 328　SR02 下層南半出土遺物（3）…… 28
図 329　SR02 下層南半出土遺物（4）…… 29
図 330　SR02 下層南半出土遺物（5）…… 30
図 331　SR02 下層南半出土遺物（6）…… 31
図 332　SR02 下層南半出土遺物（7）…… 32
図 333　SR02 下層南半出土遺物（8）…… 33
図 334　SR02 下層南半出土遺物（9）…… 34
図 335　SR02 下層北半出土遺物（1）…… 35
図 336　SR02 下層北半出土遺物（2）…… 36
図 337　SR02 下層中位出土遺物（1）…… 38
図 338　SR02 下層中位出土遺物（2）…… 39
図 339　SR02 下層中位出土遺物（3）…… 40
図 340　SR02 下層中位出土遺物（4）…… 41
図 341　SR02 下層中位出土遺物（5）…… 42
図 342　SR02 下層上位出土遺物（1）…… 44
図 343　SR02 下層上位出土遺物（2）…… 45
図 344　SR02 下層上位出土遺物（3）…… 46
図 345　SR02 下層上位出土遺物（4）…… 47
図 346　SR02 中層出土遺物（1）…… 49
図 347　SR02 中層出土遺物（2）…… 50
図 348　SR02 上層溝下層平・断面　遺物出土状況 …… 51
図 349　SR02 上層溝下層遺物出土状況 …… 55
図 350　SR02 上層溝最下層出土遺物（1）…… 57
図 351　SR02 上層溝最下層出土遺物（2）…… 58
図 352　SR02 上層溝下層Ｂブロック番号取り上げ出土遺物（1）‥ 59
図 353　SR02 上層溝下層Ｂブロック番号取り上げ出土遺物（2）‥ 60
図 354　SR02 上層溝下層Ｂブロック番号取り上げ出土遺物（3）‥ 61
図 355　SR02 上層溝下層Ｂブロック番号取り上げ出土遺物（4）‥ 62
図 356　SR02 上層溝下層Ｆブロック番号取り上げ出土遺物（1）‥ 64

図 357　SR02 上層溝下層 F ブロック番号取り上げ出土遺物（2）‥ 65
図 358　SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物（1）‥‥ 66
図 359　SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物（2）‥‥ 67
図 360　SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物（3）‥‥ 68
図 361　SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物（4）‥‥ 70
図 362　SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物（5）‥‥ 71
図 363　SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物（6）‥‥ 72
図 364　SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物（7）‥‥ 73
図 365　SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物（8）‥‥ 74
図 366　SR02 上層溝下層 B ブロック出土遺物（1）‥‥‥‥‥ 75
図 367　SR02 上層溝下層 B ブロック出土遺物（2）‥‥‥‥‥ 76
図 368　SR02 上層溝下層 F ブロック出土遺物（1）‥‥‥‥‥ 77
図 369　SR02 上層溝下層 F ブロック出土遺物（2）‥‥‥‥‥ 78
図 370　SR02 上層溝下層 L・J ブロック出土遺物（1）‥‥‥ 79
図 371　SR02 上層溝下層 L・J ブロック出土遺物（2）‥‥‥ 80
図 372　SR02 上層溝下層 L・J ブロック出土遺物（3）‥‥‥ 82
図 373　SR02 上層溝下層 W ブロック出土遺物（1）‥‥‥‥ 83
図 374　SR02 上層溝下層 W ブロック出土遺物（2）‥‥‥‥ 84
図 375　SR02 上層溝下層 E ブロック平・断面　遺物出土状況 ‥ 85
図 376　SR02 上層溝下層 E ブロック出土遺物（1）‥‥‥‥‥ 86
図 377　SR02 上層溝下層 E ブロック出土遺物（2）‥‥‥‥‥ 87
図 378　SR02 上層溝下層 E ブロック出土遺物（3）‥‥‥‥‥ 88
図 379　SR02 上層溝下層一括取り上げ出土遺物（1）‥‥‥ 89
図 380　SR02 上層溝下層一括取り上げ出土遺物（2）‥‥‥ 90
図 381　SR02 上層溝上層 B・N ブロックアゼ出土遺物　‥ 91
図 382　SR02 上層溝上層 L・J ブロック出土遺物（1）‥‥‥ 93
図 383　SR02 上層溝上層 L・J ブロック出土遺物（2）‥‥‥ 94
図 384　SR02 上層溝上層 L・J ブロック出土遺物（3）‥‥‥ 95
図 385　SR02 上層溝上層 L・J ブロック出土遺物（4）‥‥‥ 96
図 386　SR02 上層溝上層 L・J ブロック出土遺物（5）‥‥‥ 97
図 387　SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物（1）‥‥‥ 98
図 388　SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物（2）‥‥‥ 99
図 389　SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物（3）‥‥‥ 100
図 390　SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物（4）‥‥‥ 101
図 391　SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物（5）‥‥‥ 103
図 392　SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物（6）‥‥‥ 104
図 393　SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物（7）‥‥‥ 105
図 394　SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物（8）‥‥‥ 106
図 395　SR02 上層平・断面　遺物出土状況　E 区北壁断面‥‥‥ 107
図 396　SR02 上層　遺物出土状況 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 109
図 397　SR02 上層 A ブロック出土遺物（1）‥‥‥‥‥‥ 112
図 398　SR02 上層 A ブロック出土遺物（2）‥‥‥‥‥‥ 113
図 399　SR02 上層 B ブロック出土遺物（1）‥‥‥‥‥‥ 114
図 400　SR02 上層 B ブロック出土遺物（2）‥‥‥‥‥‥ 116
図 401　SR02 上層 B ブロック出土遺物（3）‥‥‥‥‥‥ 117
図 402　SR02 上層 B ブロック出土遺物（4）‥‥‥‥‥‥ 118
図 403　SR02 上層 B ブロック出土遺物（5）‥‥‥‥‥‥ 119
図 404　SR02 上層 B ブロック出土遺物（6）‥‥‥‥‥‥ 120
図 405　SR02 上層 B ブロック出土遺物（7）‥‥‥‥‥‥ 121
図 406　SR02 上層 B ブロック番号取り上げ出土遺物（1）‥ 122
図 407　SR02 上層 B ブロック番号取り上げ出土遺物（2）‥ 123
図 408　SR02 上層 B ブロック番号取り上げ出土遺物（3）‥ 124
図 409　SR02 上層 C ブロック出土遺物（1）‥‥‥‥‥‥ 125
図 410　SR02 上層 C ブロック出土遺物（2）‥‥‥‥‥‥ 126
図 411　SR02 上層 C ブロック番号取り上げ出土遺物　‥‥‥ 127
図 412　SR02 上層 E ブロック出土遺物（1）‥‥‥‥‥‥ 128
図 413　SR02 上層 E ブロック出土遺物（2）‥‥‥‥‥‥ 129
図 414　SR02 上層 E ブロック出土遺物（3）‥‥‥‥‥‥ 130
図 415　SR02 上層 F ブロック出土遺物（1）‥‥‥‥‥‥ 132
図 416　SR02 上層 F ブロック出土遺物（2）‥‥‥‥‥‥ 133
図 417　SR02 上層 F ブロック出土遺物（3）‥‥‥‥‥‥ 134
図 418　SR02 上層 F ブロック出土遺物（4）‥‥‥‥‥‥ 135
図 419　SR02 上層 F ブロック出土遺物（5）‥‥‥‥‥‥ 136
図 420　SR02 上層 F ブロック出土遺物（6）‥‥‥‥‥‥ 137
図 421　SR02 上層 F ブロック出土遺物（7）‥‥‥‥‥‥ 138
図 422　SR02 上層 F ブロック出土遺物（8）‥‥‥‥‥‥ 139
図 423　SR02 上層 F ブロック出土遺物（9）‥‥‥‥‥‥ 140
図 424　SR02 上層 F ブロック出土遺物（10）‥‥‥‥‥‥ 141
図 425　SR02 上層 F ブロック出土遺物（11）‥‥‥‥‥‥ 142
図 426　SR02 上層 F ブロック出土遺物（12）‥‥‥‥‥‥ 143
図 427　SR02 上層 F ブロック出土遺物（13）‥‥‥‥‥‥ 145
図 428　SR02 上層 F ブロック出土遺物（14）‥‥‥‥‥‥ 146
図 429　SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物（1）‥ 147
図 430　SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物（2）‥ 148
図 431　SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物（3）‥ 149
図 432　SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物（4）‥ 150
図 433　SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物（5）‥ 151
図 434　SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物（6）‥ 152
図 435　SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物（7）‥ 153
図 436　SR02 上層 G ブロック出土遺物（1）‥‥‥‥‥‥ 155
図 437　SR02 上層 G ブロック出土遺物（2）‥‥‥‥‥‥ 156
図 438　SR02 上層 G ブロック出土遺物（3）‥‥‥‥‥‥ 157
図 439　SR02 上層 G ブロック出土遺物（4）‥‥‥‥‥‥ 158
図 440　SR02 上層 G ブロック出土遺物（5）‥‥‥‥‥‥ 159
図 441　SR02 上層 G ブロック番号取り上げ出土遺物　‥‥‥ 160
図 442　SR02 上層 I ブロック出土遺物（1）‥‥‥‥‥‥ 161
図 443　SR02 上層 I ブロック出土遺物（2）‥‥‥‥‥‥ 162
図 444　SR02 上層 J ブロック出土遺物（1）‥‥‥‥‥‥ 163
図 445　SR02 上層 J ブロック出土遺物（2）‥‥‥‥‥‥ 164
図 446　SR02 上層 J ブロック出土遺物（3）‥‥‥‥‥‥ 165
図 447　SR02 上層 J ブロック出土遺物（4）‥‥‥‥‥‥ 166
図 448　SR02 上層 J ブロック出土遺物（5）‥‥‥‥‥‥ 167
図 449　SR02 上層 J ブロック番号取り上げ出土遺物（1）‥ 168
図 450　SR02 上層 J ブロック番号取り上げ出土遺物（2）‥ 169
図 451　SR02 上層 J ブロック番号取り上げ出土遺物（3）‥ 170
図 452　SR02 上層 J ブロック番号取り上げ出土遺物（4）‥ 171
図 453　SR02 上層 K ブロック番号取り上げ出土遺物（1）‥ 172
図 454　SR02 上層 K ブロック番号取り上げ出土遺物（2）‥ 173
図 455　SR02 上層 K ブロック番号取り上げ出土遺物（3）‥ 174
図 456　SR02 上層 K ブロック番号取り上げ出土遺物（4）‥ 175
図 457　SR02 上層 L ブロック出土遺物（1）‥‥‥‥‥‥ 177
図 458　SR02 上層 L ブロック出土遺物（2）‥‥‥‥‥‥ 178
図 459　SR02 上層 L ブロック出土遺物（3）‥‥‥‥‥‥ 179
図 460　SR02 上層 L ブロック出土遺物（4）‥‥‥‥‥‥ 180
図 461　SR02 上層 L ブロック出土遺物（5）‥‥‥‥‥‥ 181
図 462　SR02 上層 L ブロック出土遺物（6）‥‥‥‥‥‥ 182
図 463　SR02 上層 L ブロック番号取り上げ出土遺物　‥‥‥ 183
図 464　SR02 上層 M ブロック番号取り上げ出土遺物　‥‥‥ 184
図 465　SR02 上層 N ブロック出土遺物（1）‥‥‥‥‥‥ 185
図 466　SR02 上層 N ブロック出土遺物（2）‥‥‥‥‥‥ 186
図 467　SR02 上層 N ブロック出土遺物（3）‥‥‥‥‥‥ 187
図 468　SR02 上層 N ブロック出土遺物（4）‥‥‥‥‥‥ 188
図 469　SR02 上層 O ブロック出土遺物（1）‥‥‥‥‥‥ 190
図 470　SR02 上層 O ブロック出土遺物（2）‥‥‥‥‥‥ 191
図 471　SR02 上層 O ブロック出土遺物（3）‥‥‥‥‥‥ 192
図 472　SR02 上層 O ブロック出土遺物（4）‥‥‥‥‥‥ 193
図 473　SR02 上層 P ブロック出土遺物（1）‥‥‥‥‥‥ 194
図 474　SR02 上層 P ブロック出土遺物（2）‥‥‥‥‥‥ 195
図 475　SR02 上層 P ブロック出土遺物（3）‥‥‥‥‥‥ 196
図 476　SR02 上層層位不明出土遺物（1）‥‥‥‥‥‥‥ 198

図 477　SR02 上層層位不明出土遺物（2）…… 199
図 478　SR02 上層層位不明出土遺物（3）…… 200
図 479　SR02 上層層位不明出土遺物（4）…… 201
図 480　SR02 上層層位不明出土遺物（5）…… 202
図 481　SR02 上層層位不明出土遺物（6）…… 203
図 482　包含層出土遺物 (1) …… 205
図 483　包含層出土遺物 (2) …… 206
図 484　包含層出土遺物 (3) …… 207
図 485　包含層出土遺物 (4) …… 208
図 486　包含層出土遺物 (5) …… 209
図 487　包含層出土遺物 (6) …… 210
図 488　暦年較正結果 …… 214
図 489　[参考] 暦年較正年代グラフ　その１ …… 218
図 490　[参考] 暦年較正年代グラフ　その２ …… 219
図 491　旧練兵場遺跡Ｂ区西壁における植物珪酸体分析結果 …… 224
図 492　旧練兵場遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）…… 238
図 493　旧練兵場遺跡の木材Ⅰ …… 239
図 494　旧練兵場遺跡の木材Ⅱ …… 240
図 495　旧練兵場遺跡の木材Ⅲ …… 241
図 496　旧練兵場遺跡の木材Ⅳ …… 242
図 497　旧練兵場遺跡の木材Ⅴ …… 243
図 498　旧練兵場遺跡の木材Ⅵ …… 244
図 499　旧練兵場遺跡の種実 …… 245
図 500　写真図版：旧練兵場遺跡出土木製品の切片の光学顕微鏡写真 (1) …… 250
図 501　写真図版：旧練兵場遺跡出土木製品の切片の光学顕微鏡写真 (2) …… 251
図 502　香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真　その１ … 255
図 503　香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真　その２ … 256
図 504　香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真　その３ … 257
図 505　香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真　その４ … 258
図 506　香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真　その５ … 259
図 507　香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真　その６ … 260
図 508　香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真　その７ … 261
図 509　香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真　その８ … 262
図 510　香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真　その９ … 263
図 511　香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真　その 10 … 265
図 512　SR02（弥生時代後期前半期）における動物遺存体の出土分布状況　その１・268
図 513　SR02（弥生時代後期前半期）における動物遺存体の出土分布状況　その２・269
図 514　銅鏃１（左：試料採取前、右：試料採取後）…… 276
図 515　鉛１の XRF スペクトル …… 276
図 516　銅鏃２ …… 277
図 517　鉛２の XRF スペクトル …… 277
図 518　銅鏃３（左：試料採取前、右：試料採取後）…… 278
図 519　鉛３の XRF スペクトル …… 278
図 520　銅鏃 4 …… 279
図 521　鉛４の XRF スペクトル …… 279
図 522　銅鏃 5 …… 280
図 523　鉛５の XRF スペクトル …… 280
図 524　銅鏃 6 …… 281
図 525　鉛６の XRF スペクトル …… 281
図 526　銅鏃 7 …… 282
図 527　鉛７の XRF スペクトル …… 282
図 528　銅鏃 8 …… 283
図 529　鉛８の XRF スペクトル …… 283
図 530　銅鏃 9 …… 284
図 531　鉛９の XRF スペクトル …… 284
図 532　銅鏃 10 …… 285
図 533　鉛 10 の XRF スペクトル …… 285
図 534　銅鏃 11 …… 286
図 535　鉛 11 の XRF スペクトル …… 286
図 536　銅鏃 12（左：試料採取前、右：試料採取後）…… 287
図 537　鉛 12 の XRF スペクトル …… 287
図 538　銅鏃 13 …… 288
図 539　鉛 13 の XRF スペクトル …… 288
図 540　銅鏃 14 …… 289
図 541　鉛 14 の XRF スペクトル …… 289
図 542　銅鏃 15（左：試料採取前、右：試料採取後）…… 290
図 543　鉛 15 の XRF スペクトル …… 290
図 544　銅鏃 16 …… 291
図 545　鉛 16 の XRF スペクトル …… 291
図 546　鉛 17 の XRF スペクトル …… 292
図 547　本調査における香川県善通寺市旧練兵場遺跡出土資料の鉛同位体比（Ａ式図）…… 298
図 548　本調査における香川県善通寺市旧練兵場遺跡出土資料の鉛同位体比（図 547 の拡大－Ａ式図）…… 298
図 549　本調査における香川県善通寺市旧練兵場遺跡出土資料の鉛同位体比（Ｂ式図）…… 299
図 550　本調査における香川県善通寺市旧練兵場遺跡出土資料の鉛同位体比（図 549 の拡大－Ｂ式図）…… 299
図 551　本調査における香川県善通寺市旧練兵場遺跡出土資料と比較資料が示す鉛同位体比（Ａ式図）…… 300
図 552　本調査における香川県善通寺市旧練兵場遺跡出土資料と比較資料が示す鉛同位体比（図 551 の拡大－Ａ式図）… 300
図 553　本調査における香川県善通寺市旧練兵場遺跡出土資料と比較資料が示す鉛同位体比（Ｂ式図）…… 301
図 554　本調査における香川県善通寺市旧練兵場遺跡出土資料と比較資料が示す鉛同位体比（図 553 の拡大－Ｂ式図）… 301
図 555　旧練兵場遺跡 第 19 次調査銅鏃の変遷 …… 302
図 556　分析鉄器 …… 321
図 557　鉄製品の顕微鏡組織 …… 322
図 558　鉄製品の顕微鏡組織 …… 323
図 559　鉄製品の顕微鏡組織 …… 324
図 560　微細遺物の顕微鏡組織 …… 325
図 561　微細遺物の顕微鏡組織 …… 326
図 562　鉄製品の顕微鏡組織 …… 327
図 563　鉄製品・微細遺物の顕微鏡組織 …… 328
図 564　微細遺物・鉄製品の顕微鏡組織 …… 329
図 565　微細遺物の顕微鏡組織 …… 330
図 566　微細遺物の顕微鏡組織 …… 331
図 567　微細遺物の顕微鏡組織 …… 332
図 568　微細遺物の顕微鏡組織 …… 333
図 569　微細遺物の顕微鏡組織 …… 334
図 570　微細遺物の顕微鏡組織 …… 335
図 571　微細遺物の顕微鏡組織 …… 336
図 572　微細遺物・鉄製品の顕微鏡組織 …… 337
図 573　ガラス質溶解物の顕微鏡組織 …… 338
図 574　ガラス質溶解物・銹化鉄片の顕微鏡組織 …… 339
図 575　マクロ組織 …… 340
図 576　マクロ組織 …… 341
図 577　マクロ組織 …… 342
図 578　マクロ組織 …… 343
図 579　マクロ組織 …… 344
図 580　マクロ組織 …… 345
図 581　マクロ組織 …… 346
図 582　マクロ組織 …… 347
図 583　マクロ組織 …… 348
図 584　マクロ組織 …… 349
図 585　マクロ組織 …… 350
図 586　マクロ組織 …… 351
図 587　マクロ組織 …… 352
図 588　EPMA 調査 …… 353

図 589　EPMA 調査 …… 354
図 590　EPMA 調査 …… 355
図 591　EPMA 調査 …… 356
図 592　EPMA 調査 …… 357
図 593　EPMA 調査 …… 358
図 594　鉄製品の顕微鏡組織 …… 359
図 595　資料の切断状況 …… 365
図 596　遺跡出土製品のマクロ組織写真 …… 366
図 597　遺跡出土製品の顕微鏡組織写真 …… 367
図 598　遺跡出土製品の顕微鏡組織写真 …… 368
図 599　SEM-EDX による成分分析（B 切断片）…… 369
図 600　SEM-EDX による銹化鉄の成分分析（B 切断片）… 370
図 601　ＥＤＸ分析 …… 371
図 602　Ｘ線回折図 1 …… 372
図 603　石製品実測図 …… 373
図 604　蛍光 X 線分析測定位置 …… 375
図 605　軟 X 線写真図 …… 376
図 606　X 線スペクトル（測定箇所 1）…… 377
図 607　X 線スペクトル（測定箇所 2）…… 378
図 608　X 線スペクトル（測定箇所 3）…… 379
図 609　X 線スペクトル（測定箇所 4）…… 380
図 610　X 線スペクトル（測定箇所 5）…… 381
図 611　X 線スペクトル（測定箇所 6）…… 382
図 612　X 線スペクトル（測定箇所 7）…… 383
図 613　X 線スペクトル（測定箇所 8）…… 384
図 614　X 線スペクトル（測定箇所 9）…… 385
図 615　X 線スペクトル（測定箇所 10）…… 386
図 616　X 線スペクトル（測定箇所 11）…… 387
図 617　資料写真図 …… 388
図 618　作業状況写真図 …… 389
図 619　実体顕微鏡写真図 …… 390
図 620　軟 X 線写真図 …… 391
図 621　分析前後資料写真 …… 392
図 622　赤色顔料の蛍光 X 線分析結果（1）…… 398
図 623　赤色顔料の蛍光 X 線分析結果（2）…… 399
図 624　赤色顔料の蛍光 X 線分析結果（3）…… 400
図 625　赤色顔料の蛍光 X 線分析結果（4）…… 401
図 626　赤色顔料の蛍光 X 線分析結果（5）…… 402
図 627　赤色顔料の蛍光 X 線分析結果（6）…… 403
図 628　赤色顔料の蛍光 X 線分析結果（7）…… 404
図 629　赤色顔料の蛍光 X 線分析結果（8）…… 405
図 630　赤色顔料の蛍光 X 線分析結果（9）…… 406
図 631　赤色顔料光学顕微鏡写真（1）…… 407
図 632　赤色顔料光学顕微鏡写真（2）…… 408
図 633　赤色顔料光学顕微鏡写真（3）…… 409
図 634　赤色顔料光学顕微鏡写真（4）…… 410
図 635　旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 8（104253）の蛍光 X 線スペクトル ‥ 413
図 636　旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 9（104254）の蛍光 X 線スペクトル ‥ 413
図 637　旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 12（104255）の蛍光 X 線スペクトル ‥ 413
図 638　旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 13（104256）の蛍光 X 線スペクトル ‥ 414
図 639　旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 14（104257）の蛍光 X 線スペクトル ‥ 414
図 640　旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 16（104258）の蛍光 X 線スペクトル ‥ 414
図 641　旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 17（104259）の蛍光 X 線スペクトル ‥ 415
図 642　旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 18（104260）の蛍光 X 線スペクトル ‥ 415
図 643　旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 20（104261）の蛍光 X 線スペクトル ‥ 415
図 644　旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 21（104262）の蛍光 X 線スペクトル ‥ 416
図 645　旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 22（104263）の蛍光 X 線スペクトル ‥ 416
図 646　土器編年　その 1 …… 424
図 647　土器編年　その 2 …… 425
図 648　土器編年　その 3 …… 426
図 649　土器編年　その 4 …… 427
図 650　土器編年　その 5 …… 428
図 651　土器編年　その 6 …… 429
図 652　土器編年　その 7 …… 430
図 653　土器編年　その 8 …… 431
図 654　土器編年　その 9 …… 432
図 655　土器編年　その 10 …… 433
図 656　土器編年　その 11 …… 434
図 657　土器編年　その 12 …… 435
図 658　土器編年　その 13 …… 436
図 659　土器編年　その 14 …… 437
図 660　土器編年　その 15 …… 438
図 661　土器編年　その 16 …… 439
図 662　外来系土器　その 1（河内・阿波）…… 445
図 663　外来系土器　その 2（土佐）…… 447
図 664　外来系土器　その 3（伊予）…… 448
図 665　外来系土器　その 4（伊予）…… 449
図 666　外来系土器　その 5（吉備）…… 450
図 667　外来系土器　その 6（吉備）…… 451
図 668　外来系土器　その 7（吉備）…… 452
図 669　外来系土器　その 8（備中）…… 453
図 670　外来系土器　その 9（備中）…… 454
図 671　外来系土器　その 10（備後）…… 455
図 672　外来系土器　その 11（備後）…… 456
図 673　外来系土器　その 12（安芸）…… 457
図 674　外来系土器　その 13（西部瀬戸内）…… 458
図 675　外来系土器　その 14（豊前・豊後ほか）…… 459
図 676　外来系土器　その 15（系統不明）…… 460
図 677　外来系土器　その 16（系統不明・山陰・伊勢湾）　461
図 678　旧練兵場遺跡における鉄器の変遷 …… 464
図 679　旧練兵場遺跡における鍛冶遺構・鍛冶関連遺物の変遷 … 465
図 680　銅鏃変遷 …… 468
図 681　銅鏃集成 …… 469
図 682　旧練兵場遺跡における石錘の変遷 …… 472
図 683　旧練兵場遺跡と関連遺跡の蛸壺 …… 473
図 684　日本海沿岸の刺突漁具と旧練兵場遺跡への搬入 …… 474
図 685　中期後半古段階（Ⅱ -2 様式）…… 479
図 686　中期後半新段階古相（Ⅲ -2 様式）…… 480
図 687　中期後半新段階新相 …… 481
図 688　中期後半新段階新相 …… 482
図 689　後期前半中段階 …… 483
図 690　後期前半新段階（旧Ⅴ期前半新）…… 485
図 691　後期後半古段階（旧Ⅴ期後半古）…… 486
図 692　後期後半古段階（旧Ⅴ期後半古）…… 488
図 693　後期後半新段階（旧Ⅴ期後半新）…… 489
図 694　終末期古段階（旧終末期古）…… 490
図 695　終末期中段階（旧終末期新）…… 491
図 696　終末期新段階 …… 492
図 697　古墳前期古段階 …… 493

表目次

第一分冊
表１　発掘調査面積・期間・体制一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
表２　整理作業期間・体制一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
表３　丸亀平野遺跡動態１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
表４　丸亀平野遺跡動態２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
表５　丸亀平野遺跡動態３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
表６　青銅祭器・鏡一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
表７　丸亀平野の基幹的灌漑水路一覧　その１・・・・・・・・・・・・・・・・19
表８　丸亀平野の基幹的灌漑水路一覧　その２・・・・・・・・・・・・・・・・20
表９　既往の調査一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
表 10　旧河道変遷　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
表 11　竪穴住居跡一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
表 12　掘立柱建物跡一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・179
表 13　柱穴跡出土遺物一覧　その１　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・357
表 14　柱穴跡出土遺物一覧　その２　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・358
表 15　柱穴跡出土遺物一覧　その３　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・359
第二分冊
表 16　SR02 上層溝下層出土遺物報告区分・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
表 17　SR02 上層溝上層出土遺物報告区分・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
表 18　SR02 上層出土遺物報告区分　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・106
表 19　測定試料及び処理　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・213
表 20　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果　・・・・・・・・・・・・・・213
表 21　分析試料及び結果　その１　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・217
表 22　分析試料及び結果　その２　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・217
表 23　旧錬浜場遺跡における植物珪酸体分析結果　・・・・・・・・・・・・・223
表 24　旧練兵場遺跡における樹種同定結果　その１　・・・・・・・・・・・・232
表 25　旧練兵場遺跡における樹種同定結果　その２　・・・・・・・・・・・・233
表 26　旧練兵場遺跡における種実同定結果　・・・・・・・・・・・・・・・・237
表 27　旧練兵場遺跡出土木製品の樹種同定結果リスト　・・・・・・・・・・・249
表 28　香川県旧練兵場遺跡出土木製品同定　その１　・・・・・・・・・・・・254
表 29　香川県旧練兵場遺跡出土木製品同定　その２　・・・・・・・・・・・・265
表 30　旧練兵場遺跡から出土した動物遺存体の種名一覧　・・・・・・・・・・267
表 31　SR02（弥生時代後期前半）から出土した動物遺存体（L/R）　・・・・・・・・・・272
表 32　集計表（L/R）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・273
表 33　分析試料一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・274
表 34　分析試料から検出された元素とその強度　・・・・・・・・・・・・・・275
表 35　本調査における香川県善通寺市旧練兵場遺跡出土資料の鉛同位体比　・・295
表 36　これまでに測定された弥生時代の銅鏃・三稜鏃の鉛同位体比　その１　・296
表 37　これまでに測定された弥生時代の銅鏃・三稜鏃の鉛同位体比　その２　・297
表 38　供試材の履歴と調査結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・318
表 39　供試材の履歴と調査項目　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・319
表 40　出土遺物の調査結果のまとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・320
表 41　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・363
表 42　測定条件　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・374
表 43　蛍光 X 線分析結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・376
表 44　土器の時期ごとの付着顔料　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・394
表 45　弥生時代後期の土器の器種ごとの付着顔料　・・・・・・・・・・・・・394
表 46　分析対象資料　その１　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・396
表 47　分析対象資料　その２　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・397
表 48　分析した旧練兵場遺跡出土ガラス小玉の詳細出土地区・玉の特徴・・・・・・・・412
表 49　旧練兵場遺跡出土ガラス玉の化合物元素濃度分析結果・・・・・・・・・・・412
表 50　型式分類１　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・419
表 51　型式分類２　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・420
表 52　型式の共伴状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・421
表 53　編年対照　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・440
表 54　外来系土器の集計　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・444
表 55　銅鏃一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・466
表 56　鉄鏃と銅鏃の法量分布　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・467
表 57　銅鏃保有率　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・470
表 58　掘立柱建物跡と溝状遺構の方向による分類　・・・・・・・・・・・・・497
掲載資料一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・499

写真図版目次

巻頭図版１
　遺跡遠景　　東から
　遺跡遠景　　南から
巻頭図版２
　調査区全景（垂直）
巻頭図版３
　Ｃ区全景　西から
巻頭図版４
　Ｄ区 SH51（写真中央に鍛冶炉）　南から
　Ｄ区 SH55　　西から
巻頭図版５
　Ｂ区 SB10　　南西から
巻頭図版６
　Ａ区 SB04 全景　　北東から
　Ａ区 SB04（SP424）断面　　南から
巻頭図版７
　Ｂ区 SR02 下層下位　遺物出土状況　　北から
　Ｂ区 SR02 下層下位　遺物出土状況　　南から
巻頭図版８
　SR02 上層溝下層　遺物出土状況　　南東から
　SR02 上層　遺物出土状況　　東から
巻頭図版９
　他地域からの搬入土器
巻頭図版 10
　内面朱付着土器
巻頭図版 11
　ガラス玉、勾玉、管玉未成品
　銅鏃
巻頭図版 12
　弥生中期土器（SR02）
巻頭図版 13
　弥生終末期～古墳初頭の土器（SR02 他）
巻頭図版 14
　サヌカイト製　打製石庖丁
巻頭図版 15
　磨製石斧
巻頭図版 16
　漁網錘
図版１　調査区全景
　調査区全景（垂直）
図版２　遺跡遠景
　遺跡の遠景　　北から
　遺跡の遠景　　西から
図版３　調査前風景ほか
　調査区全景（調査前）　　南東から
　香色山山頂付近流紋岩産出状況　　北から
図版４　Ａ区
　Ａ区全景　　北から
　Ａ区全景　　北から
図版５　Ａ区
　Ａ区全景　　西から
　Ａ区北側遺構検出状況　　北から
図版６　Ａ区
　Ａ区全景　　北から
　Ａ区南東部全景　　北西から
図版７　Ａ，Ｂ区
　Ａ区全景　　西から
　Ｂ区全景　　西から
図版８　Ｂ，Ｃ区
　Ｂ区西壁断面　　北から
　Ｃ区全景　　西から
図版９　Ｄ区
　Ｄ区全景　　南東から
　Ｄ区全景　　西から
図版 10　Ｄ区
　Ｄ区全景　　東から
　Ｄ区全景　　西から
図版 11　Ｄ，Ｅ区
　Ｄ区東側全景　　西から
　Ｅ区全景（SR02 部分）　　東から
図版 12　Ｆ区
　Ｆ区全景　　東から
　Ｆ区（SR01 部分）全景　　東から
図版 13　Ａ区 SH02・04
　Ａ区 SH02・04　　北から
　Ａ区 SH02 完掘　　東から
図版 14　Ａ区 SH04
　Ａ区 SH04 中央土坑（K2）土器出土状況　　東から
　Ａ区 SH04（SP183）　　北から
図版 15　Ａ区 SH09・10，SX02
　Ａ区 SH09 完掘状況　　南東から
　Ａ区 SH10，SX02　　南から
図版 16　Ａ区 SH10・13
　Ａ区 SH10　　南から
　Ａ区 SH13　　西から
図版 17　Ａ区 SH13・14・15
　Ａ区 SH13・14・15　　西から
　Ａ区 SH14 床面銅鏃出土状況　　北から
図版 18　Ａ区 SH17
　Ａ区 SH17 床面　　南西から
　Ａ区 SH17 と SB04 柱穴跡の重複　　南から
図版 19　Ａ区 SH63，Ｂ区 SH27
　Ａ区 SH63 炉跡（SK11）土器出土状況　　東から
　Ｂ区 SH27　　東から
図版 20　Ｂ区 SH27
　Ｂ区 SH27 最終床面　　東から

B 区 SH27 最終床面　　西から
図版 21　B 区 SH27・28
B 区 SH27 上層床面　　南から
B 区 SH28　　北から
図版 22　B 区 SH28・29
B 区 SH28 断面　　東から
B 区 SH29 袋状鉄斧出土状況　　北から
図版 23　B 区 SH29・31
B 区 SH29　　北から
B 区 SH31 石鏃出土状況　　南から
図版 24　B 区 SH31
B 区 SH31 床面石庖丁出土状況　　南から
B 区 SH31 朱精製器出土状況　　南から
図版 25　B 区 SH65
B 区 SH65 炉跡（SK20）　　東から
B 区 SH65 炉跡（SK20）遺物出土状況　　東から
図版 26　C 区 SH44，D 区 SH51
C 区 SH44　　北から
D 区 SH51（写真中央に鍛冶炉）　　南から
図版 27　D 区 SH51
D 区 SH51 完掘　　東から
D 区 SH51　鍛冶炉断面　　東から
図版 28　D 区 SH51
D 区 SH51 断面　　北から
D 区 SH51 鍛冶炉の炭層　　北から
図版 29　D 区 SH51・55
D 区 SH51 鍛冶炉完掘状況　　北から
D 区 SH55　　西から
図版 30　D 区 SH55
D 区 SH55　　西から
D 区 SH55 完掘　　西から
図版 31　D 区 SH55
D 区 SH55 炉跡断面　　東から
D 区 SH55 炉跡断面　　東から
図版 32　A 区 SB02・03
A 区 SB02・SB03　　西から
A 区 SB03（SP319）　　北から
図版 33　A 区 SB03・04
A 区 SB03（SP340）　　北から
A 区 SB04 全景　　北から
図版 34　A 区 SB04
A 区 SB04 全景　　西から
A 区 SB04（SP332）断面　　南から
図版 35　A 区 SB04
A 区 SB04（SP397）断面　　北から
A 区 SB04（SP397）断面　　北から
図版 36　A 区 SB04
A 区 SB04（SP398）断面　　南から
A 区 SB04（SP398）柱痕内焼土出土状況　　南から
図版 37　A 区 SB04
A 区 SB04（SP401）断面（途中）　　南から
A 区 SB04（SP401）断面　　東から
図版 38　A 区 SB04
A 区 SB04（SP415）断面　　南から
A 区 SB04（SP417）断面　　東から
図版 39　A 区 SB04・05
A 区 SB04（SP424）断面　　南から
A 区 SB05 全景　　西から
図版 40　B 区 SB07
B 区 SB07　　南から
B 区 SB07（SP541）断面　　南から
図版 41　B 区 SB07
B 区 SB07（SP541）断面　　南から
B 区 SB07（SP552）断面　　東から
図版 42　B 区 SB07
B 区 SB07（SP566）断面　　南から
B 区 SB07（SP579）断面　　北から
図版 43　B 区 SB07・09
B 区 SB07（SP580）断面　　南から
B 区 SB09（SP564）断面　　西から
図版 44　B 区 SB09・10
B 区 SB09（SP799）断面　　東から
B 区 SB10　　南から
B 区 SB10　　南から
図版 45　B 区 SB10
B 区 SB10（SP806・579）　　南から
B 区 SB10（SP822・826）断面　　南から
図版 46　B 区 SB10，C 区
B 区 SB10（SP821）　　東から
C 区掘立柱建物群　　東から
図版 47　C 区 SB12
C 区 SB12　　西から
C 区 SB12（SP1288）　　西から
図版 48　C 区 SB12
C 区 SB12（SP1288）断面　　北から
C 区 SB12（SP1316）断面　　北から
図版 49　C 区 SB12
C 区 SB12（SP1339）　　南から
C 区 SB12（SP1339）断面　　南から
図版 50　C 区 SB13
C 区 SB13　　東から
C 区 SB13（SP1343）根石検出状況　　北から
図版 51　A 区 SK08，SX02
A 区 SK08・SX02 遺物出土状況　　南から
A 区 SK08 中位遺物出土状況　　北から
図版 52　A 区 SK14，B 区 SK21
A 区 SK14 断面　　北から
B 区 SK21 断面　　北から
図版 53　B 区 SK32，D 区 SK42
B 区 SK32　　南から
D 区 SK42 断面　　東から
図版 54　F 区 SK40，A 区 SD16
F 区 SK40 断面　　東から
A 区 SD16　　北から
図版 55　B 区 SD14・17
B 区 SD14 蛸壺出土状況　　南から
B 区 SD17　　東から
図版 56　B 区 SD17
B 区 SD17　　東から
B 区 SD17　　西から
図版 57　B 区 SD17
B 区 SD17 西端　　東から
B 区 SD17 最終埋没層　　東から
図版 58　B 区 SD17
B 区 SD17 最終埋没層　　西から
B 区 SD17 断面　　東から
図版 59　B 区 SD17
B 区 SD17 断面　　東から
B 区 SD17 獣骨出土状況　　東から
図版 60　B 区 SD17・18

B 区 SD17 最終埋没層須恵器出土状況　東から
B 区 SD18 断面　西から
図版 61　B 区 SD19・20
B 区 SD19・20　東から
B 区 SD19・20　西から
図版 62　B 区 SD19・20・21
B 区 SD19・20　西から
B 区 SD21　西から
図版 63　B 区 SD24
B 区 SD24 断面　西から
B 区 SD24（断面⑤）　西から
図版 64　B 区 SD24・28
B 区 SD24（断面⑦）　西から
B 区 SD28　西から
図版 65　B 区 SD31
B 区 SD31 断面　東から
B 区 SD31 断面　西から
図版 66　B 区 SD36・43
B 区 SD36　南から
B 区 SD43　南から
図版 67　D 区 SD67・76
D 区 SD67 断面　東から
D 区 SD76 銅鏃出土状況　東から
図版 68　D 区 SD86・106
D 区 SD86 断面　北から
D 区 SD106 遺物出土状況　北から
図版 69　F 区 SD124, B 区 ST01・02
F 区 SD124　北から
B 区 ST01・02　北から
図版 70　B 区 ST01
B 区 ST01（土器棺）断面　南西から
B 区 ST01　東から
図版 71　B 区 ST01
B 区 ST01　東から
B 区 ST01 歯牙
図版 72　B 区 ST02，D 区 ST03
B 区 ST02　南から
D 区 ST03（土器棺）　北から
図版 73　D 区 ST03
D 区 ST03（土器棺）検出状況　西から
D 区 ST03（土器棺）　北から
図版 74　A 区 SX03，C 区 SX36
A 区 SX03　西から
C 区 SX36 断面　東から
図版 75　E 区古代条里型地割溝，A 区近代遺構
E 区古代条里型地割溝（SD100・97・128）完掘　東から
A 区近代遺構検出状況　西から
図版 76　B 区，C 区近代遺構
B 区西側近代柱穴跡　北から
C 区近代遺構　東から
図版 77　D 区近代遺構，A 区 SR01
D 区近代遺構　西から
A 区 SR01 下面遺構　北西から
図版 78　F 区 SR01，E 区 SR02
F 区 SR01 最下層断面・遺物出土状況　北から
E 区 SR02 全景　南から
図版 79　E 区北壁断面，B 区 SR02 最下層下位
E 区西側調査区北壁断面（SR02 北肩部）　南から
B 区 SR02 最下層下位　北から
図版 80　B 区 SR02 最下層下位
B 区 SR02 最下層下位　東から
B 区 SR02 下層下位遺物出土状況　南から
図版 81　B 区 SR02 下層下位
B 区 SR02 下層下位遺物出土状況　南から
B 区 SR02 下層下位遺物出土状況　北から
図版 82　E 区 SR02 下層下位
E 区 SR02 下層下位木製品出土状況　西から
E 区 SR02 下層下位木製品出土状況　西から
図版 83　E 区 SR02 下層下位
E 区 SR02 下層下位木製品出土状況　北から
E 区 SR02 下層下位木製品出土状況　北から
E 区 SR02 下層下位木製品出土状況　北から
図版 84　E 区 SR02 下層下位
E 区 SR02 下層下位木製品出土状況　東から
E 区 SR02 下層下位木製品出土状況　東から
図版 85　E 区 SR02 下層下位
E 区 SR02 下層下位木製品出土状況　北から
E 区 SR02 下層下位サヌカイト盤状剥片・木製品出土状況　北から
図版 86　E 区 SR02 下層下位，上層溝下層
E 区 SR02 下層下位サヌカイト盤状剥片・木製品出土状況　北から
E 区 SR02 上層溝下層（J ブロック）獣骨 1 出土状況　西から
図版 87　E 区 SR02 上層溝下層
B 区 SR02 上層溝下層遺物出土状況　西から
B 区 SR02 上層溝下層遺物出土状況　北から
図版 88　E 区 SR02 上層溝
E 区西側 SR02 上層溝完掘　東から
E 区 SR02 上層溝断面　西から
図版 89　E 区 SR02 上層溝
E 区 SR02 上層溝断面　西から
E 区 SR02 上層溝断面　東から
図版 90　E 区 SR02 上層溝上層
E 区 SR02 上層溝上層　遺物出土状況　東から
E 区 SR02 上層溝上層（B ブロック）土器群　南から
図版 91　E 区 SR02 上層溝上層
E 区 SR02 上層溝上層（L・J・F ブロック）土器群　南から
E 区 SR02 上層溝上層（L・J・F ブロック）土器群　南から
図版 92　E 区 SR02 上層溝上層
E 区 SR02 上層溝上層土器群（F ブロック）搬入土器備中（2968）出土状況　南から
E 区 SR02 上層溝上層土器群　上面から
図版 93　E 区 SR02 上層溝上層
E 区 SR02 上層溝上層土器群　上面から
E 区 SR02 上層溝上層土器群　上面から
図版 94　E 区 SR02 上層溝上層
E 区 SR02 上層溝上層土器群　上面から
E 区 SR02 上層溝上層土器群　上面から
図版 95　E 区 SR02 上層溝上層
E 区 SR02 上層溝上層土器群　上面から
E 区 SR02 上層溝上層土器群　上面から
E 区 SR02 上層溝上層遺物出土状況　上面から
図版 96　E 区 SR02 上層溝上層，SR02 上層上面
E 区 SR02 上層溝上層土器群　東から
E 区 SR02 上層上面土器群検出状況　東から
図版 97　予備調査
予備調査トレンチ　分銅型土製品出土状況　北から
予備調査トレンチ　弥生後期土器包含層　北から
図版 98　SK08，17 次 SR01 出土遺物
基準資料（A 区 SK08　弥生後期前半新段階）

基準資料（17 次 SR01　土器溜り，弥生中期後半中段階）
図版 99　23 次 SH1068 出土遺物
基準資料（23 次 S 区 SH1068　弥生終末期古段階）
図版 100　２次 ST12 出土遺物
基準資料（２次 ST12　弥生終末期新段階）
図版 101　14 次 SH11，F 区 SH59 出土遺物
基準資料（14 次 SH11　古墳前期前半中段階）
基準資料（F 区 SH59 土器溜り　弥生中期後半中段階）
図版 102　SR01，SR02 下層出遺物
弥生前期土器（SR01)
図版 103　SR02 最下層，SR02 下層出土遺物
弥生中期　壷内面加飾
弥生中期土器（SR02 下層）
図版 104　SR02 最下層，SR02 下層出土遺物
弥生中期土器（SR02 下層）
図版 105　SR02 下層出土遺物
弥生中期土器（SR02 下層）
図版 106　SR02 上層溝下層出土遺物
弥生後期土器（SR02 上層溝下層）
図版 107　SR02 上層溝下層出土遺物
弥生後期土器（SR02 上層溝下層）
図版 108　SR02 上層溝下層出土遺物
弥生後期土器（SR02 上層溝下層）
図版 109　SR02 上層溝下層出土遺物
弥生後期土器（SR02 上層溝下層）
図版 110　SR02 上層溝下層出土遺物
備中からの搬入土器（SR02 上層溝下層）
弥生後期土器（SR02 上層溝下層）
図版 111　SR02 上層溝下層出土遺物
図版 112　SR02 上層溝上層，SR02 上層出土遺物
終末期支脚集合（SR02 上層）
図版 113　SH71, SR02 上層溝下層, SR02 上層溝上層, SR02 上層，包含層，14 次，23 次，弘田川出土遺物
分銅型土製品
図版 114　SH52，SB13，SR02 下層，SR02 上層溝下層，SR02 上層溝上層，SR02 上層，包含層出土遺物
紡錘車
図版 115　SH01・07・29・38・48・51・52・56，SR02 上層出土遺物
鉄製品
図版 116　SH04・14・16・17・27・29・35・38・42・48・51・52・56，SB10 出土遺物
ガラス玉・勾玉　ガラス玉　鉄器切断片　勾玉（ヒスイ製）
B 区 ST01 土器棺
図版 117　SH04・09・10・27・28・31・35・38・41・44・46・48・51・55，SD17 出土遺物
打製石鏃（微高地遺構出土）
図版 118　打製石鏃(SR02 出土)　打製石鏃(遺構外出土　異系統)
図版 119　SH01・13・39・55，SD31，B 区柱穴，SR02 上層，包含層出土遺物
砥石（黒色頁岩製）　砥石（流紋岩製手持ち砥石　多面使用）
図版 120　SH06，SR02 上層溝下層，SR02 上層出土遺物
砥石（流紋岩・安山岩製手持砥石　単面使用）
図版 121　SH31・39，SX24，SR02 上層出土遺物
砥石（安山岩製置砥石）
図版 122　SH10・28・35・38・51，SD31，SR02 上層溝上層出土遺物
砥石（流紋岩製）
砥石（砂岩製搬入石材）
図版 123　SH35，SD55，SR02 上層出土遺物
切断具（サヌカイト・結晶片岩製）
図版 124　SH51，SD31・70，SR02 最下層，SR02 上層，包含層出土遺物
石錐（サヌカイト製）　石匙､打製石斧（サヌカイト･安山岩製）
図版 125　SR02 上層出土遺物
打製石庖丁（サヌカイト製）
図版 126　SR02 上層出土遺物
打製石庖丁（サヌカイト製）
図版 127　SH31･44，SD05，SR02 上層溝下層，SR02 上層溝上層，SR 上層出土遺物
打製石庖丁（頁岩・結晶片岩・流紋岩）
磨製石庖丁（ホルンフェルス・頁岩・結晶片岩・安山岩製）
図版 128　SD31，SR01 最下層，SR02 下層出土遺物
サヌカイト製大型剥片
石棒（結晶片岩製）
図版 129　SD36・51・108，包含層出土遺物
磨石（花崗岩製）
図版 130　SH27・28・36，SB04，SR02 下層，SR02 上層溝下層，SR02 上層，包含層出土遺物
叩石（砂岩・花崗岩製ほか）
図版 131　SH29・38・40・41，SB04，SR02 上層溝上層，SR02 上層出土遺物
焼石
図版 132　SX36 出土遺物
図版 133　SX36，SK42，SH02 出土遺物
図版 134　SH02 出土遺物
図版 135　SH02・04 出土遺物
図版 136　SH04・06・09 出土遺物
図版 137　SH09・10・14・15 出土遺物
図版 138　SH17・27・29 出土遺物
図版 139　SH29・31・35 出土遺物
図版 140　SH35・36・38・40・41・42 出土遺物
図版 141　SH42・44 出土遺物
図版 142　SH44・51・56・59 出土遺物
図版 143　SH59・63・64・65・66，SB04 出土遺物
図版 144　SB04，SK08 出土遺物
図版 145　SK08 出土遺物
図版 146　SK08，SP1909，ST01 出土遺物
図版 147　ST03，SD28・55・86 出土遺物
図版 148　SB43，SD11・14・86，SX02 出土遺物
図版 149　SD14・17 出土遺物
図版 150　SD17・18・31 出土遺物
図版 151　SD31・53・72 出土遺物
図版 152　SD72・83・108・124・125・128，SX04，SP01・558 出土遺物
図版 153　SP1876，SR01，SR02 最下層，SR02 下層出土遺物
図版 154　SR02 下層出土遺物
図版 155　SR02 下層，SR02 上層溝下層出土遺物
図版 156　SR02 上層溝下層出土遺物
図版 157　SR02 上層溝下層出土遺物
図版 158　SR02 上層溝下層出土遺物
図版 159　SR02 上層溝下層出土遺物
図版 160　SR02 上層溝下層，包含層出土遺物
図版 161　SB12 出土遺物（根石・詰石）
図版 162　SB12・13 出土遺物（根石・詰石）
図版 163　SB13・14 出土遺物（根石・詰石）
図版 164　SH35 柱穴出土遺物（根石・詰石）
図版 165　SR02 最下層，SR02 下層，SR03 最下層出土遺物
図版 166　SR02 下層出土遺物
図版 167　SR02 下層出土遺物

図版 168　SR02 下層出土遺物
図版 169　SR02 上層溝下層出土獣骨
　獣骨 1
　獣骨 2
　獣骨 3
　獣骨 4
　獣骨 5
　獣骨 6
図版 170　SR02 上層溝下層出土獣骨
　獣骨 7
　獣骨 8
　獣骨 9
　獣骨 10
　獣骨 11
　獣骨 15
図版 171　SR02 上層溝下層出土獣骨
　獣骨 12
　獣骨 13
　獣骨 14
　獣骨 16
　獣骨 17
　獣骨 18
図版 172　SR02 上層溝下層出土獣骨
　獣骨 19
　獣骨 20
　獣骨 21
　獣骨 22
　獣骨 23
　獣骨 24
　獣骨 25
　獣骨 26
　獣骨 27
図版 173　SH29，SP696・1760，SR02，SR02 上層溝出土獣骨
　獣骨 43
　獣骨 51
　獣骨 53
　獣骨 55
　獣骨 50
　獣骨 52
　獣骨 54
　獣骨 56
図版 174　SR02 上層溝出土獣骨
　獣骨 57
　獣骨 59
　獣骨 62
　獣骨 61
　獣骨 58
　獣骨 60
　獣骨 63
　獣骨 64
図版 175　SR02 上層溝，SR02，SD02 出土獣骨
　獣骨 65
　獣骨 67
　獣骨 72
　獣骨 66
　獣骨 68
　獣骨 71
　獣骨 73
図版 176　SD17・36 出土獣骨
　獣骨 75
　獣骨 74
　獣骨 80
　獣骨 79
　獣骨 76
　獣骨 77
　獣骨 83
　獣骨 78
図版 177　SD33・36・97，SX41 出土獣骨
　獣骨 81
　獣骨 84
　獣骨 86
　獣骨 82
　獣骨 85
　獣骨 87
図版 178　SH01・02・04・40・41，SB04・10，SR02 上層出土遺物
図版 179　SH01・07・09・35・38・51・52・71，SR02 上層溝下層，SR02 上層，包含層出土遺物
図版 180　SH29・51 出土遺物

付図目次

遺構全体図（弥生～古墳前期）
遺構全体図（古墳後期～近代）

ＣＤ－ＲＯＭ目次

遺構全体図（弥生～古墳前期）
遺構全体図（古墳後期～近代）
観察表

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

新病院統合事業は、善通寺病院の敷地の西部にあった臨床研修研究棟及び機能訓練棟、南西部にあった屋内体育館及び看護学校教場棟等を解体・撤去して、新しい施設を建設するという内容である。

このうち、看護学校については、平成８・９年度に用地の発掘調査を実施し、平成13年度までに新しい施設が建設された。

その他の施設については、平成10年度に厚生労働省四国厚生支局（旧厚生省四国医務支局）から香川県教育委員会に対して、用地内の埋蔵文化財の有無及び取扱い等についての照会が行われ、両者間での本格的な調整作業が開始された。

調整に際しては、病院敷地全体が周知の埋蔵文化財包蔵地という特殊な環境であるため、香川県教育委員会では事業予定地における試掘調査を実施することで、遺構・遺物の存否を確認し、保護措置の方法についての判断を行った。

上記の試掘調査の結果にもとづいて、より詳細な調整が行われ、掘削工事等によって埋蔵文化財に影響を及ぼす箇所について、本格的な発掘調査を行うことで合議に至った。

第２節　発掘調査の経過

発掘調査は、平成13年４月１日から平成17年３月31日までの期間で実施した。

発掘調査の実施機関は、平成13年度から平成15年度までは、香川県教育委員会から再委託された財団法人香川県埋蔵文化財調査センターであり、平成16年度は、同年度から香川県の直営機関となった香川県埋蔵文化財センターである。

発掘調査の対象となった箇所については、新しい施設や設備等の詳細な配置図と設計図が未完成であったため、用地の全域にわたって全面調査を実施した。

調査は、円滑な工程管理が図れるように、対象地全体をＡ～Ｚ区、Ⅶ・Ⅷ区の28地区に小区分した上で実施した。

なお、調査中に遺構の現状保存協議は実施しておらず、調査範囲内の遺構は記録作成を行った後、ほぼ全て消滅した。

第３節　整理作業の経過

出土品等の整理作業は、平成17年度にＸ・Ｙ区について実施し、看護学校建設事業地に当たるⅠ～Ⅵ区と合わせて、平成20年度に第１冊目の発掘調査報告書を刊行した。

残りの26地区については、各地区のまとまりごとに全体を３区分して、平成20年度から継続して作業を実施している。

このうち、平成20年度は、調査対象地の北部に当たるＡ～Ｆ区を中心として作業を行い、平成21年度は、同地の中央部に当たるＧ～Ｚ区について作業を行った。

本書は、当該事業に係る第２冊目の発掘調査報告書で19次調査のＡ～Ｆ区の調査成果を収録した。今後、Ｇ～Ｚ区、Ⅰ～Ⅱ区の調査成果を収録する第３冊目の報告書を刊行して、すべての作業を終了する予定である。(西岡)

年　度		平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
面積(㎡)		3,250	4,854	3,616	3,547
期　間		平成13年 4月1日～ 平成14年 3月31日	平成14年 4月1日～ 平成15年 3月31日	平成15年 4月1日～ 平成16年 3月31日	平成16年 4月1日～ 平成17年 3月31日
体　制	香川県教育委員会 事務局文化行政課	(総　括) 課　長　北原和利 課長補佐　小国史郎 (総務・芸術文化グループ) 副主幹　中村禎伸 主　査　須崎陽子 主任主事　亀田幸一 (文化財グループ) 副主幹　大山真充 主　任　西岡達哉 文化財専門員　古野徳久 文化財専門員　宮崎哲治	(総　括) 課　長　北原和利 課長補佐　渡邊勇人 (総務・芸術文化グループ) 主　任　香川浩章 主　査　須崎陽子 主任主事　亀田幸一 (文化財グループ) 副主幹　大山真充 主　任　片桐孝浩 文化財専門員　古野徳久 文化財専門員　佐藤竜馬	(総　括) 課　長　北原和利 課長補佐　森岡　修 (総務・芸術文化グループ) 主　任　香川浩章 主　査　須崎陽子 主任主事　八木秀憲 (文化財グループ) 副主幹　大山真充 主　任　片桐孝浩 文化財専門員　佐藤竜馬 主任技師　松本和彦	(総　括) 課　長　北原和利 課長補佐　森岡　修 (総務・芸術文化グループ) 主　任　香川浩章 主　査　堀本由紀 主任主事　八木秀憲 (文化財グループ) 課長補佐　大山真充 主　任　山下平重 文化財専門員　佐藤竜馬 主任技師　松本和彦
	香川県埋蔵文化財センター (平成15年度までは財団法人香川県埋蔵文化財調査センター)	(総　括) 所　長　小原克己 次　長　川原裕章 (総務係) 参　事　河野浩征 副主幹　大西誠司 係　長　多田敏弘 主　査　山本和代 主任主事　高木康晴 (調査係) 主任文化財専門員　廣瀬常雄 主任文化財専門員　藤好史郎 文化財専門員　森下英治 主任技師　黒木康弘 調査技術員　森　麻子	(総　括) 所　長　小原克己 次　長　渡部明夫 (総務係) 参　事　河野浩征 副主幹　野保昌弘 係　長　多田敏弘 主　査　山本和代 主任主事　高木康晴 (調査係) 参　事　梅木正信 主任文化財専門員　藤好史郎 文化財専門員　森下英治 主任技師　黒木康弘 調査技術員　森　麻子	(総　括) 所　長　中村　仁 次　長　渡部明夫 (総務係) 参　事　河野浩征 副主幹　野保昌弘 係　長　多田敏弘 主　査　塩崎かおり 主　査　田中千晶 (調査係) 主任文化財専門員　藤好史郎 文化財専門員　森下英治 文化財専門員　宮崎哲治 主任技師　松井和久 主任技師　黒木康弘 調査技術員　森　麻子 調査技術員　加納裕之 調査技術員　中里伸明	(総　括) 所　長　中村　仁 次　長　渡部明夫 (総務課) 課　長　野保昌弘 係　長　松崎日出穂 主　査　塩崎かおり 主　査　田中千晶 (調査課) 参　事　河野浩征 課　長　藤好史郎 主　任　片桐孝浩 文化財専門員　福家正人 主任技師　細川健一 主任技師　信里芳紀 調査技術員　森　麻子 調査技術員　中嶋将史

表１　発掘調査面積・期間・体制一覧

年　度		平成20年度	平成21年度
期　間		平成20年4月1日～平成21年3月31日	平成21年4月1日～平成22年3月31日
体　制	香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課	(総　括) 課　　長　春山浩康 課長補佐　武井壽紀 (総務・生涯学習推進グループ) 副主幹　香西としみ 主　　任　林　照代 (文化財グループ) 主幹(兼)課長補佐　藤好史郎 主　　任　森　格也 文化財専門員　乗松真也	(総　括) 課　　長　春山浩康 課長補佐　武井壽紀 (総務・生涯学習推進グループ) 副主幹　香西としみ 主　　任　林　照代 (文化財グループ) 主　　幹　藤好史郎 主　　任　森　格也 文化財専門員　小野秀幸
	香川県埋蔵文化財センター	(総　括) 所　　長　大山真充 次　　長　廣瀬常雄 (総務課) 課　　長　廣瀬常雄(兼務) 主　　任　宮田久美子 主　　査　嶋田和司 主　　査　古市和子 (資料普及課) 課　　長　西岡達哉 文化財専門員　森下英治 文化財専門員　宮崎哲治 嘱　託　員　整理作業員24名	(総　括) 所　　長　大山真充 次　　長　深谷　右 (総務課) 課　　長　深谷　右(兼務) 副主幹　林　文夫 主　　任　宮田久美子 主　　任　古市和子 (資料普及課) 課　　長　西岡達哉 主任文化財専門員　森下英治 文化財専門員　宮崎哲治 文化財専門員　信里芳紀 嘱　託　員　整理作業員12名

表２　整理作業期間・体制一覧

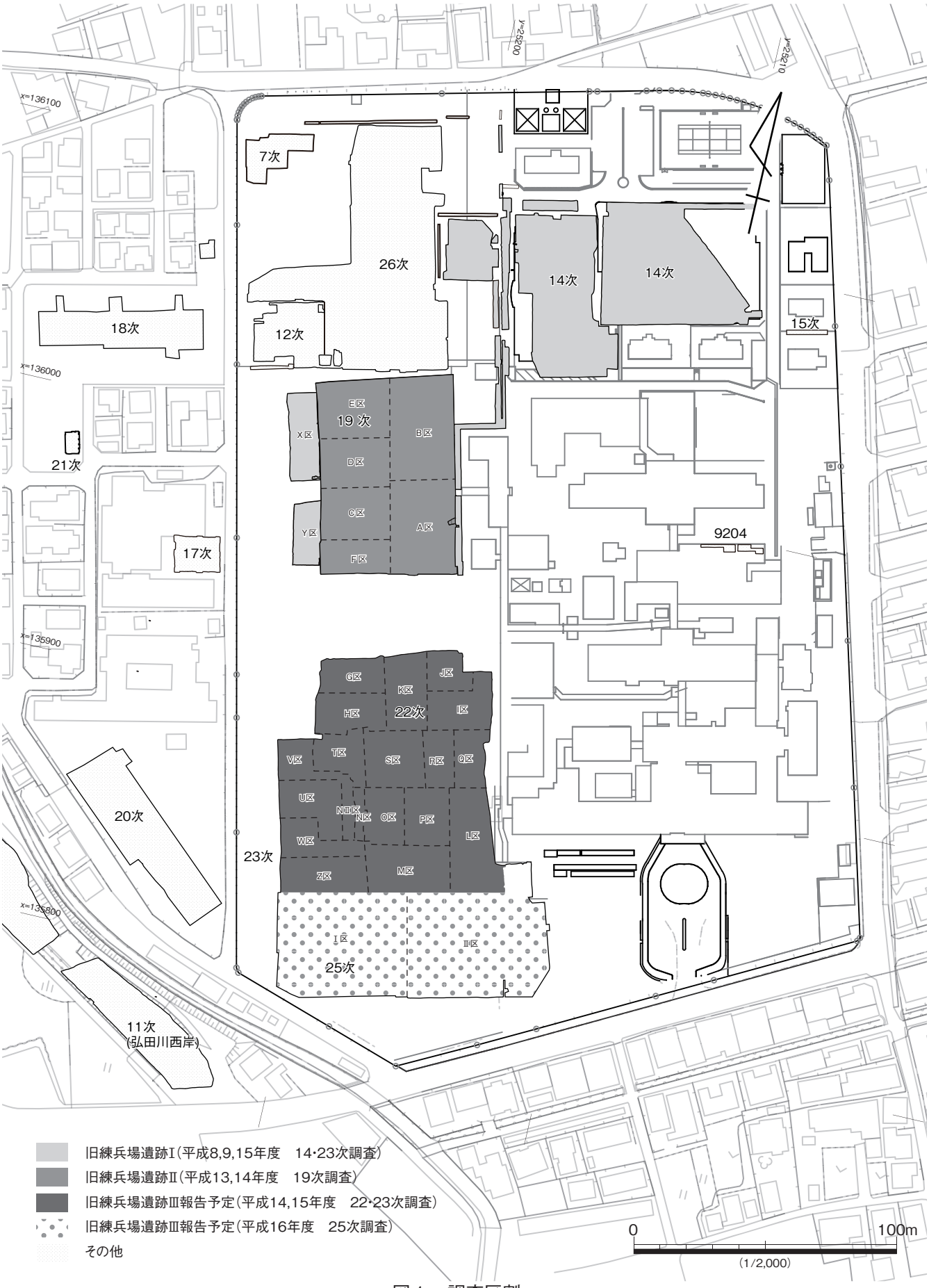

7次
26次
12次
14次
14次
15次
18次
21次
17次
20次
23次
11次
(弘田川西岸)
19 次
22次
25次
9204
E区
B区
X区
D区
C区
A区
Y区
F区
G区
K区
J区
H区
I区
V区
T区
S区
R区
Q区
U区
NII区
NI区
O区
P区
L区
W区
Z区
M区
I区
II区
x=136100
x=136000
x=135900
x=135800
y=22600
y=22610
旧練兵場遺跡Ⅰ(平成8,9,15年度　14･23次調査)
旧練兵場遺跡Ⅱ(平成13,14年度　19次調査)
旧練兵場遺跡Ⅲ報告予定(平成14,15年度　22･23次調査)
旧練兵場遺跡Ⅲ報告予定(平成16年度　25次調査)
その他
0
100m
(1/2,000)

図１　調査区割

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　自然環境と地形環境

地勢

旧練兵場遺跡は、香川県中部地域の善通寺市仙遊町に所在する遺跡である。遺跡が所在する沖積平野は、丸亀平野と呼ばれ、市街化が進む現在においても条里型地割を留める田園風景を保っている。善通寺市は平野南西部に所在し、人口約 34,000 人 (平成 22 年 4 月現在) の自治体である。また、近代に旧帝国陸軍の軍都が設置されたことで知られる。遺跡の箇所には練兵場として利用されたことから遺跡名称として遺跡台帳に登載された。(信里)

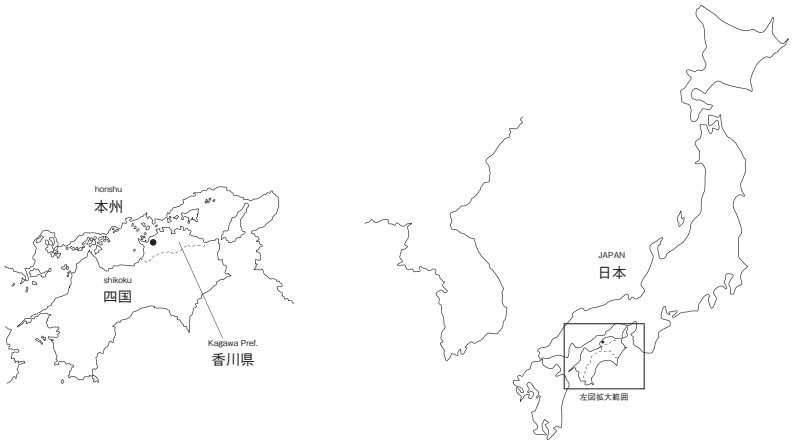


図２　遺跡の位置（その１）

図３　遺跡の位置（その２）Ｓ＝１：25,000

＜地質環境＞

基盤の花崗岩

讃岐地域は地質的には西南日本内帯にあり、領家帯という地質構造区に属す。領家帯は瀬戸内海沿岸の広い範囲に分布する花崗岩で構成され、中生代後期（約１億３千年前）に地下深く生成し、新生代後期までの隆起や侵食といった地殻変動によって地表面に現れた基盤岩である。讃岐地域の山塊の基盤には領家帯花崗岩が広く分布し、山塊裾部や低丘陵等、遺跡がよく立地する区域の多くはその風化土壌が地表面の土層（いわゆる地山）となる。また、平野に堆積する沖積層は風化土壌が浸食され再堆積した土層であり、石英や黒雲母、角閃石等、母岩の花崗岩を構成していた鉱物が含まれる。

同じ領家帯花崗岩と言っても、構成する鉱物は一様ではなく、黒雲母が多い黒雲母花崗岩等、数種類の花崗岩に区分されている。細かく見ると、小地域ごとに土器の胎土中に含まれる鉱物の種類や色調、質感等に違いがあるのは、この花崗岩の種類が異なることも要因である場合が多い。

旧練兵場遺跡が立地する丸亀平野西部では、標高 616m の大麻山とその北側の筆ノ山、我拝師山には黒雲母花崗岩が分布する。一方、吉原地区を挟んで北側に位置する標高 460m の天霧山には花崗閃緑岩が分布する。両者は有色鉱物の種類が若干異なり、黒雲母花崗岩は岩石中に黒雲母を多く含み、花崗閃緑岩は角閃石を多く含む。また、前者は斜長石の Na 分が多く、後者は Ca 分が多い等、弘田川中流の吉原地区を境として、南北で基盤の花崗岩の種類が異なっている。弘田川下流域に所在する遺跡の土器胎土と、当遺跡の土器胎土に若干の違いが見られることは、これが要因である。

貫入岩の分布状況

また、花崗岩中には、第三紀の地殻変動等に伴い地下から貫入した岩石が多く分布する。石英斑岩等の半深成岩類は基盤の花崗岩中に脈状に貫入した状態で見られる。輝緑岩、玄武岩も脈状に見ることができる。これらはとても硬く、比重も大きい。また、チャート等古相の岩石を捕獲した礫岩の状態で見られることもある。

弥生時代の伐採斧は、縄文期の伐採斧と異なり、厚みや重量を求める傾向にある。縄文期の石斧が結晶片岩や蛇紋岩等、変成岩を主に使用するのに対して、弥生期は玄武岩やヒン岩といった硬く重い半深成岩や深成岩を選択する。県内でもこのような半深成岩が産出するのは間違いない。ただし、県内の半深成岩を弥生時代に本当に利用したかどうかは定かでない。

旧練兵場遺跡周辺では、明確な貫入岩は知られていないが、金倉川上流の満濃池堤下付近には、石英斑岩の岩脈が見られる。

和泉層群の形成

中生代から新生代にかけての６千５百万年前頃、現在の讃岐山脈周辺は海底に没する状況にあった。その際の堆積岩を和泉層群と呼び、紀伊半島から松山平野までの広い範囲に分布する。讃岐地域では、砂岩を主体とする堆積岩層（Ａ層）と、それを不整合に覆う黒色頁岩を主体とする堆積岩層（Ｂ層）に区分されている。一部ではその間に化石を多く含む泥岩質の堆積岩が見られる。

砂岩の円礫は、平野内の河床に多数含まれるが、黒色頁岩はあまり目立たない。遺跡出土の敲石類も、石材は砂岩が多い。

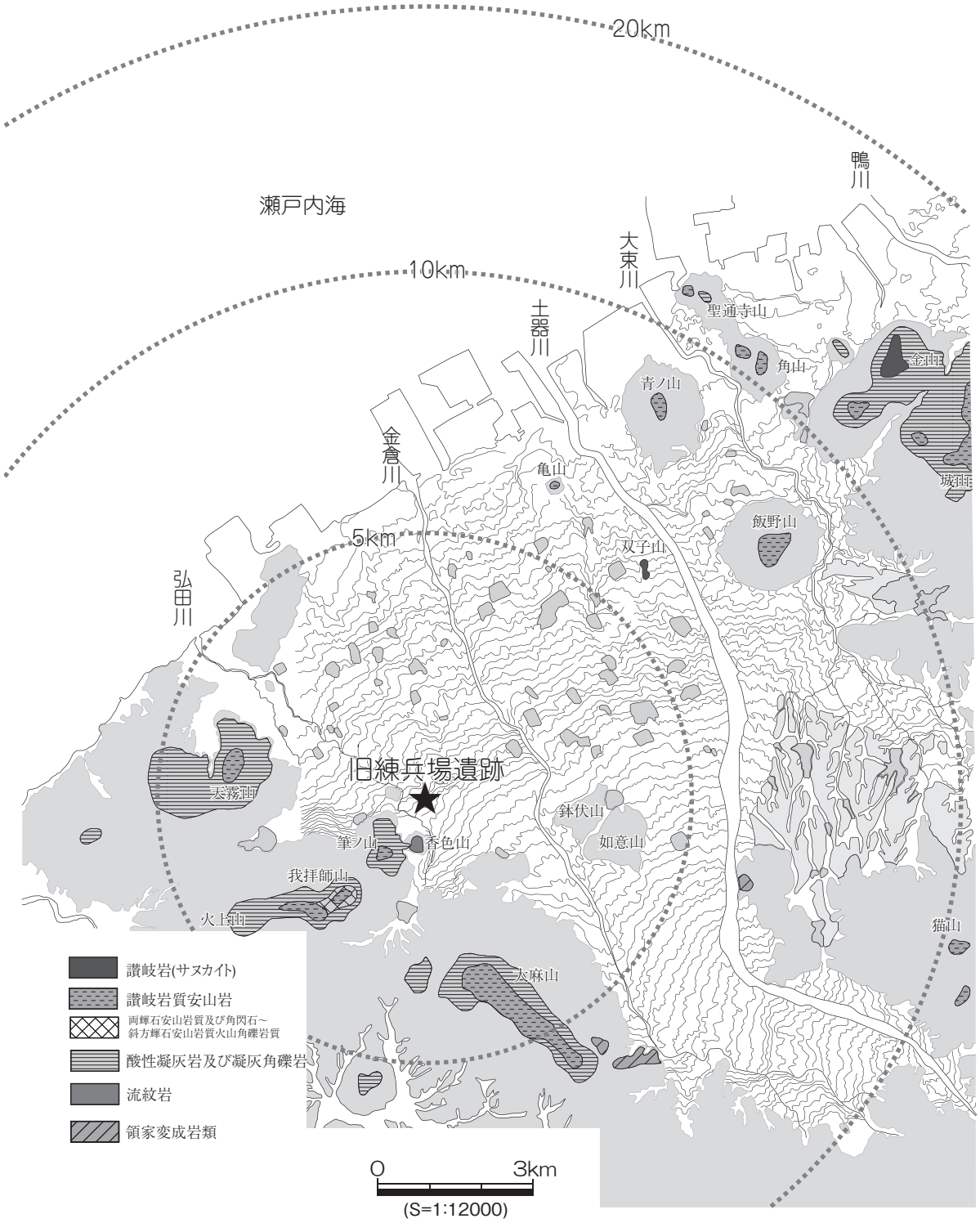

20km
10km
5km
瀬戸内海
鴨川
大束川
土器川
金倉川
弘田川
聖通寺山
角山
金山
青ノ山
城山
亀山
飯野山
双子山
旧練兵場遺跡
天霧山
鉢伏山
如意山
筆ノ山
香色山
我拝師山
火上山
猫山
大麻山
讃岐岩(サヌカイト)
讃岐岩質安山岩
両輝石安山岩質及び角閃石～
斜方輝石安山岩質火山角礫岩質
酸性凝灰岩及び凝灰角礫岩
流紋岩
領家変成岩類
0
3km
(S=1:12000)

図４　地質環境

瀬戸内火山活動に伴う讃岐層群の形成

新生代第三紀後期の中新世（約１千５百万年前）には瀬戸内海沿岸地域、特に讃岐地域を中心として大規模な火山活動に見舞われた。その際の溶岩や火山砕屑岩は讃岐層群と呼ばれ、基盤花崗岩の上部を覆う。この火山岩は、主に凝灰岩と安山岩で構成され、現在円錐形や台地状を呈する標高 150 ～ 400m の山塊の頂上付近に主に分布する。

五色台山塊は基盤の花崗岩の上部に分厚い角礫凝灰岩層があり、その上を概ね４層の安山岩が覆う。

角礫凝灰岩層には拳大程の亜角礫が多数捕獲されており、その一部には細石刃の石材として使用されたハリ質安山岩が含まれる。ハリ質安山岩は、成分的には流紋岩に近似し、石英粗面岩や松脂岩等と呼ばれる岩石で、善通寺市香色山やさぬき市多和、東かがわ市五名等でも露頭が知られ、安山岩が噴出する前の噴出岩と推定されている。

安山岩の最上層にはサヌカイトと呼ばれるガラス質の安山岩がある。サヌカイトは五色台に近接する金山や城山でも見ることができる。

一方、丸亀市土器町双子山ではサヌカイトの拳大の亜角礫を捕獲した安山岩があり、捕獲岩としてのサヌカイトはいくつかの遺跡で実際に出土している。

旧練兵場遺跡周辺では、大麻山、筆ノ山、我拝師山、天霧山等に讃岐層群が分布する。これらの山は、頂上付近に安山岩が分布し、その直下に軟弱な凝灰岩層が分布することから、凝灰岩が侵食を受け、頂上部から中腹にかけて、急峻な崖を形成する場所が多い。

また、標高 100m 以下の香色山や甲山等小規模な独立丘陵も山頂部には火山岩が分布する。香色山は周辺では珍しく流紋岩に覆われた丘陵で、裾部にはハリ質安山岩を含む露頭が見られる。甲山は山頂部に花崗岩質の安山岩が分布する。また、天霧山の裾には柘榴石を含む流紋岩が存在する。

石材資源としての地質環境

現在讃岐地域で確認できる最も古い遺跡は旧石器時代後期、２万５千年前の姶良丹沢火山噴火による火山灰（AT 火山灰）降下の後に形成された遺跡である。ＡＴ以前の中国山地の遺跡では金山や五色台産のサヌカイトが使われており、ＡＴ以前よりサヌカイト石材が使われたのは確実である。今後、讃岐地域においてもＡＴ以前の遺跡が見つかる可能性がある。

旧石器時代に使われた讃岐地域の石材資源は、圧倒的にサヌカイトが多い。打製石器のほとんどはサヌカイトを使用するため、国分台遺跡や城山遺跡のサヌカイト石材原産地に所在する遺跡には、原石から素材剥片を獲得し、製品加工までの多数の石器が分布する。細石刃期から縄文時代草創期にかけては、角礫凝灰岩中に含まれるハリ質安山岩が石材として使用される。それ以外にも、叩石に和泉層群の砂岩が使用される。

縄文時代から弥生時代までの約１万年の長期にわたり、金山のサヌカイトが使われる。板状に割れ易い性質を利用して、剥片の小口部を敲打して石理に沿って分割するような打撃法で剥片を得る、いわゆる「両極打撃法」を反映する剥片・石核類が中腹を中心に濃密に分布する。弥生時代中期頃には打面調整を伴う横長剥片剥離技術が導入されている。

縄文時代の打製石斧の石材は、サヌカイトばかりではなく讃岐層群の安山岩も用いられる。石錘・石皿には和泉砂岩が多く、叩石には砂岩とともに石英斑岩等の半深成岩類が用いられる。打製石斧の石材のように、サヌカイトばかりに依存しない石材使用状況が見られ、同じサヌカイトでも丸亀市土器町の

双子山に産出するサヌカイトも少量ながら使用されたり、五色台東斜面の赤子谷第２地点遺跡等金山以外の剥片生産遺跡もある等、金山サヌカイト一辺倒ではないことがわかる。ただ、金山産サヌカイトが流通に占める割合は他の石材と比較して圧倒的に多い。

弥生時代の磨製石器の素材は、前期段階の石庖丁に安山岩や流紋岩のものが多く認められる。それ以外にもスクレイパーや加工斧にも安山岩が使用される。しかし、中期以後になると、石庖丁はサヌカイト一色となり、加工斧等の石斧類は中央構造線より南の西南日本外帯の変成岩及び玄武岩系の石材を使用する等、石材と器種の関係性が強固となり、広域で物資流通が成立した可能性を考える材料になる。

古墳時代以後、石室石材に各地の安山岩が使用され、石棺石材にみられる讃岐地域の２大産地は、全国的にも先行して石棺を使用し始めた地域として重要である。後に阿蘇石等にとって代わられるものの、讃岐地域の石材利用は、専業化した工人集団を基盤としてさまざまな分野で需要拡大を図っている。

古代から中世にかけての石造物や近世の石垣石材等、広域に流通する石材生産は後世においても引き継がれる。(森下)

＜地形環境＞

旧練兵場遺跡は、標高 25m 前後の扇状地の扇端付近に立地し、水系的には遺跡の西部の現弘田川水系、東部の現金倉川水系の合流点に相当する位置に遺跡が形成されている。遺跡内には、東部を中心に２条の旧河道の存在が想定されており、その一部は発掘調査においても確認されている (木下 1998)。遺跡内及びその南側の一帯は、近代以降の旧帝国陸軍の大規模な地形改変により、微地形の起伏が失われているが、遺跡東部の２条の旧河道は現金倉川に関係した旧河道の可能性が高い。これらの旧河道は、旧練兵場遺跡の周辺の既往の発掘調査の成果から、弥生時代前期から古代にかけて順次埋没したことが確認されている。現金倉川の両岸には、1 ～ 1.6m 程の段丘崖を伴っており、この崖面は高橋学氏が瀬戸内東部の臨海平野で指摘している完新世段丘崖に相当する可能性が高い (高橋 1995. 木下 1998)。古代末と想定される段丘崖と氾濫原面の形成以降は、段丘上を河道が流下することは見られなかったが、旧練兵場遺跡の中心となる弥生時代から古墳時代には、複数の旧河道が遺跡内及び周辺に複数存在していたことが想定できる。水田経営に不可欠な利水面でも良好な条件下に集落形成が行われたと見ることができる。

遺跡の立地する扇状地は、砂礫層によって主体的に形成されていることが発掘調査で確認されている。砂礫層の堆積年代を示す資料は得られていないが、考古学的な層位関係から、縄文後期以前の年代が想定される。発掘調査ではこの砂礫層が現地表面から浅い位置で確認される箇所が複数見られ、このような場所は微高地 (旧中州) と推定できる。現状で平坦化が行われている段丘上も、以前は複数の微高地が点在していた景観が想定できる。(信里)

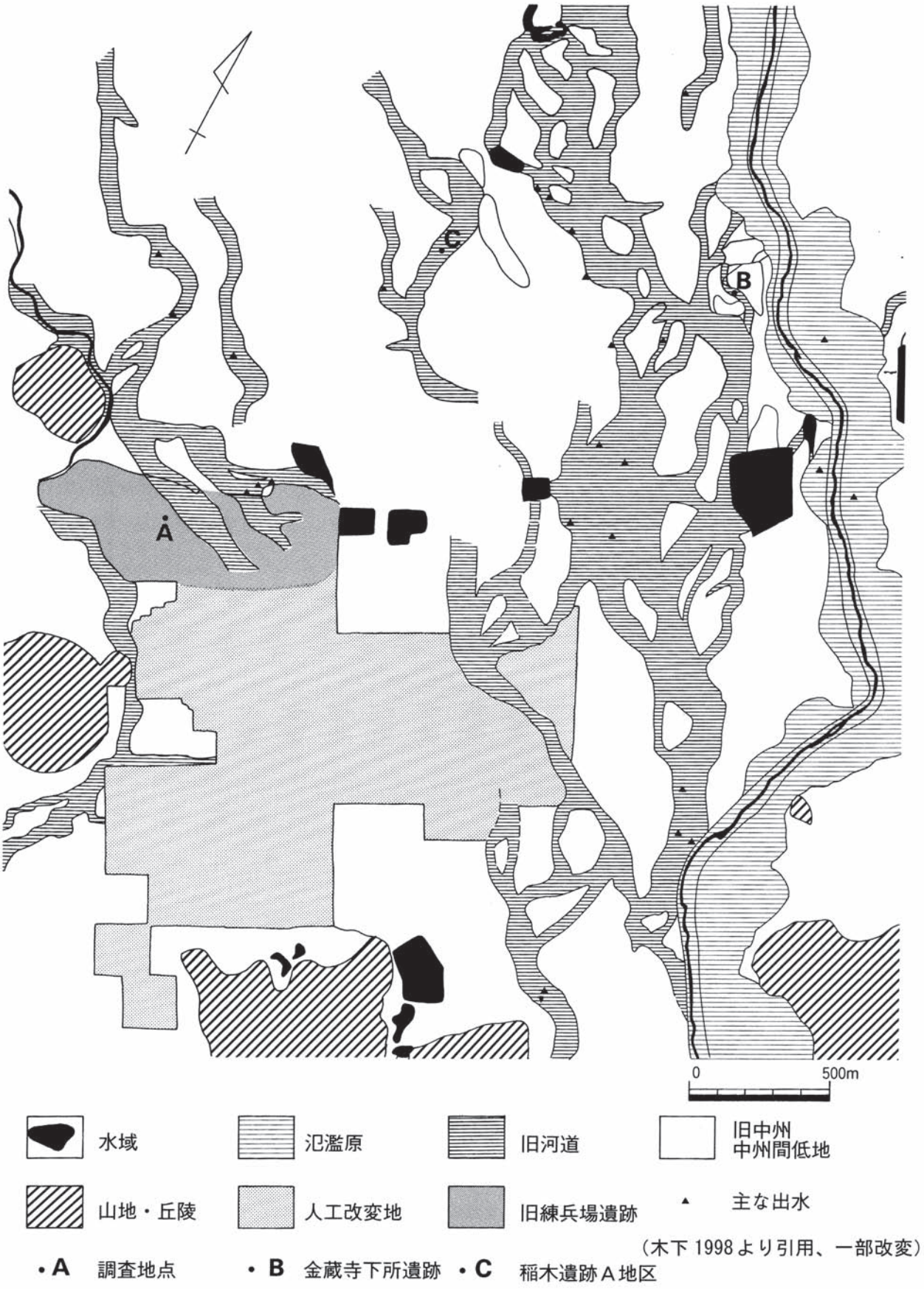

A
B
C
0
500m
水域
氾濫原
旧河道
旧中州
中州間低地
山地・丘陵
人工改変地
旧練兵場遺跡
主な出水
（木下 1998 より引用、一部改変）
・A 調査地点
・B 金蔵寺下所遺跡
・C 稲木遺跡Ａ地区

図５　地形分類

第２節　歴史的環境

歴史的環境については、「旧練兵場遺跡Ⅰ」をはじめ既刊の報告書において詳述されているが、本報告書での報告内容と深く関係する縄文時代後期から古墳時代前期について、再度概観しておきたい。

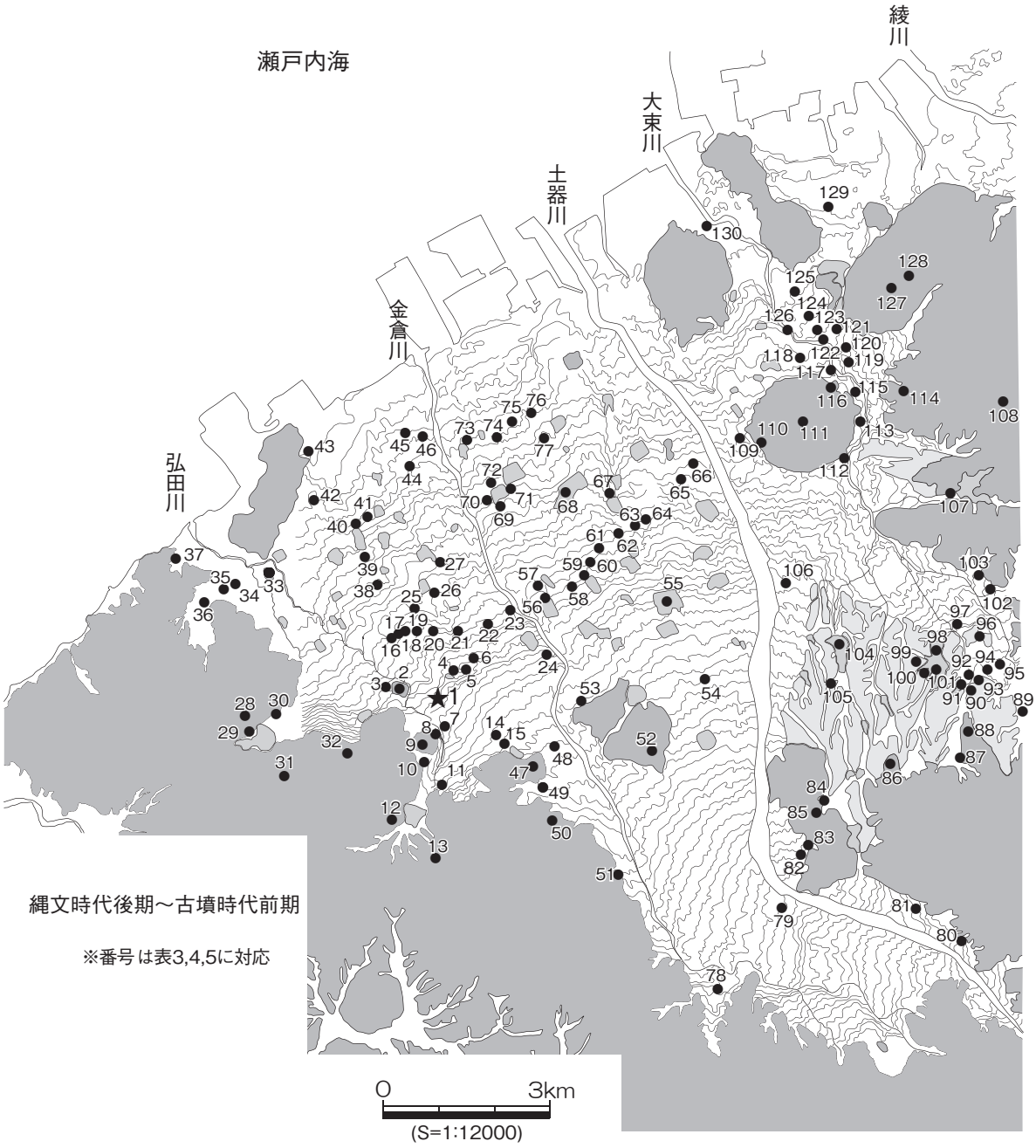


図６　遺跡分布（縄文後期～古墳前期）

番号	遺跡名	縄文			弥生									古墳		備考
		後期	晩期	晩期(突帯文)	前期(古)	前期(新)	中期(古)	中期(中)	中期(新)	後期(古)	後期(新)	終末期(古)	終末期(新)	古墳(前)	古墳(中)	
1	旧練兵場遺跡															
2	甲山遺跡															
3	甲山北遺跡										土器棺?	土器棺?				
4	九頭神遺跡											石棺墓?				
5	九頭神東遺跡															
6	石川遺跡															
7	善通寺西遺跡															
8	佐伯八幡山遺跡										壺棺墓?					
9	香色山山頂遺跡										土器棺墓	石棺墓				
10	平谷										石棺墓					
11	王墓山古墳										石棺墓					
12	北原遺跡															
13	大麻山シスト群											?	?			
14	生野本町遺跡															
15	生野南口遺跡															
16	乾遺跡															
17	阿弥陀堂遺跡															
18	中村遺跡															
19	中村東遺跡															
20	永井遺跡															
21	稲木遺跡A地区															
22	稲木遺跡C・D・E地区											弥生墓				
23	金蔵寺下所遺跡															
24	西原遺跡															
25	永井北遺跡															
26	稲木北遺跡															
27	小塚遺跡															
28	月信遺跡															
29	西碑殿遺跡															
30	矢ノ塚遺跡															
31	吉原火上山遺跡															
32	我拝師山遺跡															
33	舟岡山遺跡										?					
34	中東遺跡															
35	奥白方南原遺跡															
36	奥白方中落遺跡															
37	西白方瓦谷遺跡															
38	三井遺跡					鋳造鉄滓片										
39	笠屋遺跡							?	?							
40	庄八尺遺跡															
41	中又北遺跡															
42	青木地区															
43	木下遺跡										?	?	?			
44	南鴨遺跡															
45	北鴨遺跡															
46	中津兵庫遺跡										?	?	?			
47	生野山遺跡															
48	生野原遺跡															
49	山南遺跡															
50	大麻岡															

表３　丸亀平野遺跡動態１

番号	遺跡名	縄文			弥生									古墳		備考
		後期	晩期	晩期(突帯文)	前期(古)	前期(新)	中期(古)	中期(中)	中期(新)	後期(古)	後期(新)	終末期(古)	終末期(新)	古墳(前)	古墳(中)	
51	岩崎遺跡															
52	公文山(如意山)遺跡															
53	鉢伏山北麓遺跡															
54	垂水妙見遺跡															
55	宝幢寺跡															
56	龍川五条遺跡															
57	五条遺跡															
58	龍川四条遺跡															
59	三条番ノ原遺跡															
60	三条黒島遺跡						大溝	大溝	大溝	大溝	大溝	大溝	大溝	大溝		
61	郡家原遺跡															
62	郡家一里屋遺跡															
63	郡家大林上遺跡															
64	郡家田代遺跡										大溝	大溝	大溝	大溝		
65	川西北七条Ⅰ遺跡															
66	川西北鍛冶屋遺跡															
67	郡家南部運動広場															
68	田村池遺跡															
69	平池南遺跡															
70	平池西遺跡															
71	平池東遺跡															
72	中の池遺跡															
73	道下遺跡										大溝	大溝	大溝	大溝		
74	新田橋本遺跡															
75	今津中原遺跡															
76	津森位遺跡															
77	田村遺跡															
78	買田岡下遺跡															
79	吉野下秀石遺跡															
80	樫林南遺跡															
81	町代遺跡															
82	羽間遺跡															
83	安造田東3号墳下層															
84	室塚遺跡(谷)															
85	綾歌運動公園															
86	室塚遺跡(丘陵)									群集墓						
87	平尾墳墓群												群集墓	群集墓		
88	定連遺跡												弥生墓			
89	原遺跡															
90	佐古川・大麦田遺跡															
91	佐古川遺跡															
92	佐古川・窪田遺跡					周溝墓	周溝墓									
93	石塚山遺跡												弥生墓			
94	池下遺跡															
95	北内遺跡															後期後半から終末期の溝に木器未製品
96	行末遺跡															
97	行末西遺跡															
98	仁池遺跡															
99	北原遺跡															
100	椎尾遺跡															
101	椎尾東遺跡															

表４　丸亀平野遺跡動態２

番号	遺跡名	縄文			弥生									古墳		備考
		後期	晩期	晩期(突帯文)	前期(古)	前期(新)	中期(古)	中期(中)	中期(新)	後期(古)	後期(新)	終末期(古)	終末期(新)	古墳(前)	古墳(中)	
102	庄遺跡											■	■			
103	次見遺跡					▒				鍛冶遺構	■					
104	大窪池遺跡								▒							
105	下土居遺跡								■		■	■				
106	西内遺跡				▒						▒					
107	楠見池西遺跡									▒						
108	城山南麓							▒								
109	飯野・東二瓦礫遺跡						■			▒	■					
110	飯野山西麓遺跡								■		■					
111	飯野山山頂									▒						
112	東坂元秋常遺跡					▒		■			▒	▒				
113	東坂元三ノ池遺跡							■								
114	飯山一本松遺跡									▒						
115	川津川西遺跡	▒	▒	▒					▒	▒	▒		▒			
116	川津東山田遺跡				▒			▒		▒	■	■	▒			
117	川津一ノ又遺跡							■		▒	■	■	■			
118	西又遺跡					■	■	▒	▒	▒	▒	▒	▒	■		
119	川津井手の上遺跡										■					
120	川津六反地遺跡				■					■	■	■				
121	川津昭和遺跡							大溝	大溝	大溝	大溝	大溝	大溝			
122	川津二代取遺跡				▒	■	■				■	■	■	■	■	
123	川津下樋遺跡			▒	■	■		■		■	■	■	■	■		
124	川津中塚遺跡			▒		▒					■	■	■	■		
125	下川津遺跡		▒	▒	■	大溝	大溝	大溝	大溝	大溝	鍛冶遺構	鍛冶遺構	鍛冶遺構	■	大溝	
126	川津元結木遺跡				■						■	■				
127	常山遺跡								■							
128	長者原遺跡								■							
129	文京町二丁目西遺跡	?	?		▒						▒			▒		
130	伊勢町遺跡					?	?									

表５　丸亀平野遺跡動態３

■ 遺構が確認されている遺跡

▒ 流路又は包含層、遺物が確認された遺跡

図７　遺跡分布（縄文後期～晩期）

１．縄文時代後・晩期

丸亀平野西部及び北東部、南東部において遺構・遺物が確認されており、全体の分布傾向が平野中央から臨海部を指向している点は注意される。旧練兵場遺跡を含め、多くの遺跡では包含層や旧河道からの断片的な土器の出土に留まり、居住遺構が不明なものが多い。また、弥生時代の遺構検出面となる黄灰色シルト～粘土層中から遺物が確認されている事例もあり、今後の調査の進展によって遺跡数は増加する可能性が高い。土器型式から見て、多くの集落は移動性に富んだ比較的短期間に営まれた集落である可能性が高いが、その中でも遺物出土量や継続期間から見て拠点的な集落と見られるのは、平野西部

の永井遺跡や平池西、平池南遺跡である。永井遺跡は、中部瀬戸内における縄文後期の津雲 A 式から晩期中葉の谷尻式に継続する集落であり、居住遺構自体は不明であるが、旧河道から出土した多量の土器片や打製石斧等の遺物から、近接地に住居等の生活域が想定される (渡部編 1990)。打製石斧や集落立地から見て、原初的な農耕が行われた可能性は十分に想定され、生業面と密接に関わる打製石斧の具体的な機能の解明が待たれる。

平池西・平池南遺跡は、刻目突帯文土器出現直前の晩期中葉から晩期末葉の遺跡であるが、柱穴跡群や磨製石斧埋納遺構等の集落構成の一端を示す資料がある。平池西・平池南遺跡の継続期間が、永井遺跡に後続することから、拠点的な集落の移動が行われたことも想定できる。

２．弥生時代

集落分布

旧練兵場遺跡の中心となる弥生時代の丸亀平野では、遺物のみ出土した遺跡を含めて約 130 の遺跡 (集落) が確認されている。全体的な分布傾向は、現在の土器川を境にして東西に区分でき、水系ごとに流域で更に二つから三つ程の群に細分される。土器川西岸では旧練兵場遺跡を中心とした分布を描くが、東岸の現大束川水系では上流域の綾歌地域と下流の川津地域にまとまって分布している。特に川津地域ではやや狭い領域に時期ごとに地点を違えながら集落が営まれる。現在も扇状地の地形面を良好に留める土器川、金倉川上流域における集落の分布は、現在あまり知られていない。

これらの集落は、旧練兵場遺跡を除いて継続期間が短く、1 様式程度で消滅するものが多い。また、集落消滅後に 3 ～ 5km 圏内で新たに集落形成が認められる場合が多いことから、これらを同一系譜上にある集落と見れば、一定の地域内で移動と消滅を繰り返していると理解し、遺跡群として捉えることも可能である。

青銅器の分布状況

中の池遺跡の中期初頭段階の細形銅剣の翼部破片を最古とし、丸亀平野での青銅製祭器の流入が開始される (東編 2006)。続く中期中葉までの期間で完形品での埋納状態が復元できる資料は、我拝師山の外縁紐 2 式銅鐸や瓦谷の中細形銅剣及び平形Ⅰ式銅剣、中細形銅矛等の資料がある。いずれも多彩な青銅製祭器が展開しているのが特徴である。また、矢ノ塚遺跡の銅剣形土製品の存在から、青銅祭器に連なる別素材を使用した重層的な祭祀の存在が想定できる (吉田 2010)。

旧練兵場遺跡において集落形成が大規模化しはじめる中期後葉～後期初頭には、青銅祭器が平形Ⅱ式銅剣と扁平紐式銅鐸に収斂されるとともに、丸亀平野南西部に平形銅剣が集中して埋納されたと見られ、旧練兵場遺跡の集落の動向と密接に関係している可能性が高い (松本 1976. 松本・岩橋 1983. 吉田 2010)。

青銅製祭器の消滅後、終末期には鏡 (片) の流入が開始される。鏡片は、内行花文鏡や方格規矩鏡等の後漢鏡に加えて倣製鏡が少数含まれ、丸亀平野南西部の旧練兵場遺跡及びその周辺の集落にその分布が集中している。また、鏡 (片) は、大麻山山塊のキッチョ塚出土例 (松本・岩橋 1983) を除いて副葬品として機能せず、竪穴住居の廃絶に伴い廃棄された状態で確認されており、北部九州を中心とした取扱い方とは異なっている。

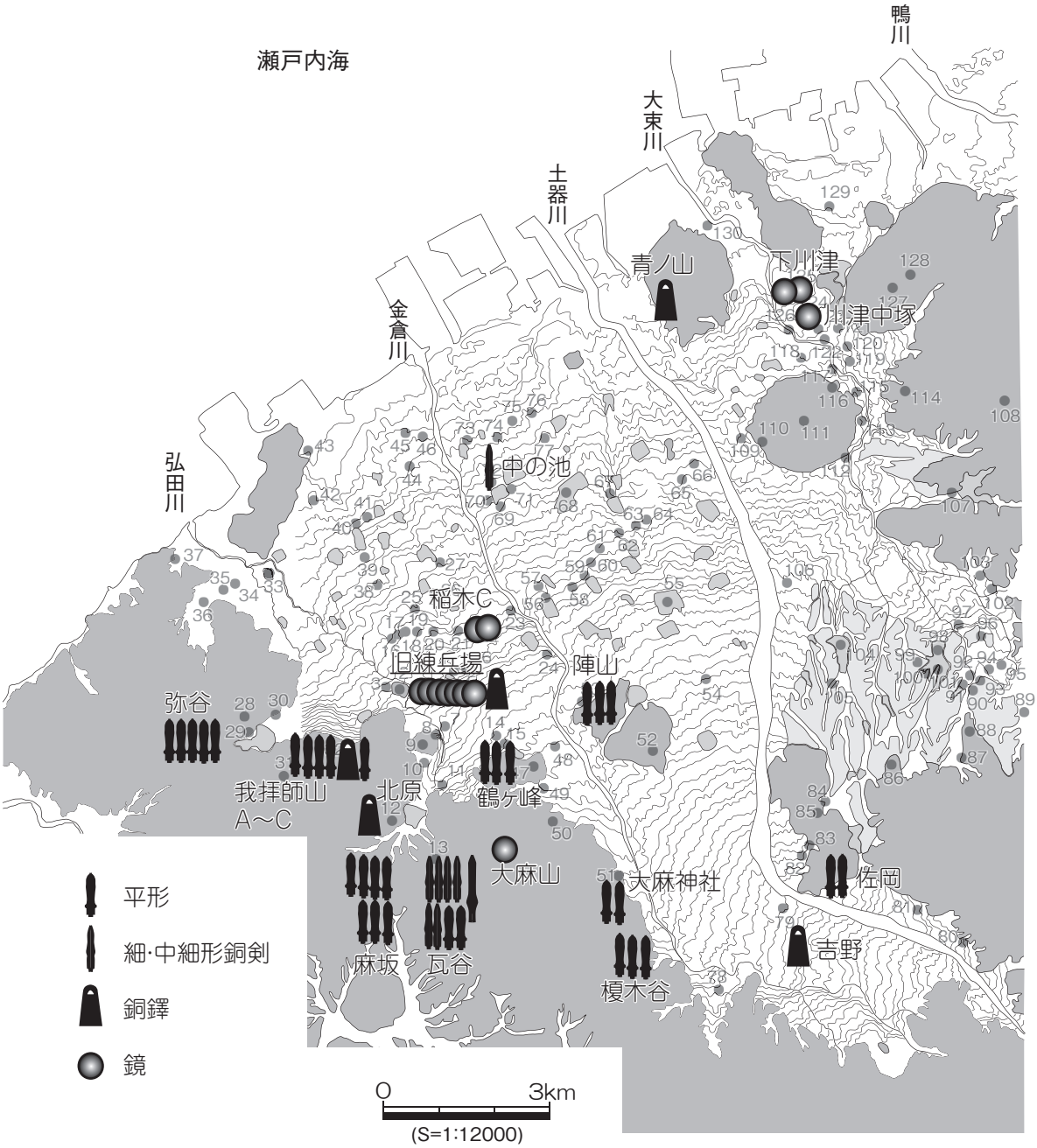


図８　青銅器及び関連遺物分布

番号	遺跡名	出土地	遺構名	遺跡種別	時期	型式	備考
1	旧練兵場遺跡　23 次Ｓ区	善通寺市仙遊町	竪穴住居	集落	弥生終末期	内行花文鏡	破片
2	旧練兵場遺跡　22 次Ｌ区	善通寺市仙遊町	包含層	集落	不明	内行花文鏡	破片
3	旧練兵場遺跡　25 次Ⅱ-3 区	善通寺市仙遊町	竪穴住居	集落	弥生終末期	雲雷文内行花文鏡	破片
4	旧練兵場遺跡　26 次 3B 区	善通寺市仙遊町	溝	集落	不明	方格規矩鏡か獣帯鏡	破片・7 世紀末葉の溝に混入
5	旧練兵場遺跡	善通寺市仙遊町	箱式石棺？	墓	不明	内行花文鏡	所在不明『漢式鏡』736
6	甲山北	善通寺市中村町	-	集落？	-	方格規矩四神鏡？	表面採集資料、旧練兵場隣接地
	大麻山	善通寺市	?	?	?	-	
7	稲木遺跡　C 地区	善通寺市稲木町	包含層 (4 層)	集落	弥生後期～終末期	方格規矩鏡	破片
8	稲木遺跡　C 地区	善通寺市稲木町	包含層 (4 層)	集落	弥生後期～終末期	内行花文鏡？	破片
9	下川津遺跡	坂出市川津町	掘立柱建物	集落	終末期	方格規矩鏡？	破片・平安時代の建物柱穴に混入
10	川津中塚遺跡	坂出市川津町	竪穴住居	集落	後期後葉	内行花文鏡	破片
11	旧練兵場遺跡　27 次Ⅰ区	善通寺市仙遊町	土坑	集落	弥生終末期	仿製内行花文鏡	破片
12	彼ノ宗遺跡	善通寺市仙遊町	竪穴住居	集落	弥生終末期	仿製内行花文鏡？	破片
13	キッチョ塚	善通寺市大麻町	箱式石棺	墓	弥生終末期？		
14	下川津遺跡	坂出市川津町	竪穴住居	集落	弥生終末期	仿製偽銘帯鏡	完鏡

表６　青銅祭器・鏡一覧

松本敏三・岩橋孝 1983『讃岐青銅器集成図録』瀬戸内海歴史民俗資料館
吉田広・高山剛 1996「武器形青銅器集成」『古代学協会四国支部第 10 回松山大会資料　弥生後期の瀬戸内海』古代学協会四国支部
吉田広 2006「第 8 章第 1 節丸亀市中の池遺跡出土の銅剣」『中の池遺跡第 12 次調査』丸亀市教育委員会　(財) 元興寺文化財研究所
後藤守一 1925『漢式鏡』雄山閣
渡部明夫 1994「香川県　共同研究　弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 56 集
松本敏三 1986「解説　古墳時代　鏡」『香川県史第十三巻資料編　考古』香川県

基幹的灌漑水路

弥生時代前期以降、大溝と呼ばれる基幹的灌漑水路が出現する。基幹的灌漑水路の出現は、水田稲作との関係が伺えるが、その規模や複数回に及ぶ改修、継続期間の長さが注意されてきた (大久保 1995. 佐藤 1996. 信里 2002.2008)。細かな時期比定では、瀬戸内型甕出現期の前期後半には開削されており、磨製石器類や木製農耕具の定着・増加との共時的な関係にあると見られる。平野北東部の川津地域における下川津遺跡から川津中塚遺跡の事例では、延長約 500m にわたって検出しているが、微地形を考慮すると約 800m 延長距離を想定することができる。

表５は丸亀平野における基幹的灌漑水路の一覧である。金倉川左岸から弘田川にかけての地区を除いて、弥生前期後半から丸亀平野内のほぼ全ての水系で基幹的灌漑水路が開削される。前期に開削された基幹的灌漑水路の多くは後期、あるいは古墳前期まで継続して維持される。一方、弥生後期に開削されたものは、条里型地割施行前夜の古墳後期・終末期まで継続する傾向がある。また、集落居住域から離れた位置が調査地となる場合は、土器片流入の機会に乏しいと考えられることや、浚渫等の行為が繰り返されたことを考慮すると、開削の時間的な上限を後期と判断した基幹的灌漑水路についても、開削年代が遡ることを念頭に入れておく必要がある。また、開削が前期段階に想定される基幹的灌漑水路に隣接して、後期の基幹的灌漑水路が開削される事例が多い。これらを考慮してもう一度開削時期や丸亀平野内の分布状況を見ると、前期後半には、それ以降の耕地開発の基本的なスタイルが確立しており、後期段階の増加現象は水路網の拡充と評価できる。

基幹的灌漑水路の開削・維持には、複数の集落間での協業が想定されるが、注意すべきはかなり長期間に及ぶ灌漑水路の機能期間と比較して、集落の継続期間が短命的であることである。集落の消滅や移動、旧練兵場遺跡のような大規模集落の出現と消滅等の動向は、灌漑水路網に象徴される生産活動の動向とは異なった論理で生じている可能性も想定しておく必要がある。

大東川～土器川右岸

遺構名	上面幅 (m)	底面幅 (m)	深さ (m)	断面積 (㎡)	形状	弥生Ⅰ	弥生Ⅱ	弥生Ⅲ	弥生Ⅳ	弥生Ⅴ	弥生Ⅵ	古墳前	古墳中	古墳後	古墳終
川津下樋 SD20	4.2	2.3	0.3	1.0		■	■	■	■						
川津下樋 SD46	2.5	1.0	0.6	1.1	U 字形	■	■	■	■	■					
川津下樋 SD19	4.6	1.7	0.5	1.6	逆台形	■	■	■	■						
西又 SD06	3.0	3.5	0.7	2.3	逆台形	■	■	■	■	■	■	■			
川津下樋 SR01	5.6	3.0	1.0	4.3	逆台形	■	■	■	■	■	■	■			
飯野東二瓦礫SD16	3.4	2.3	0.5	1.3	逆台形		■	■	■						
川津昭和 SD01	3.0	0.7	0.6	1.1	逆台形			■	■	■	■	■			
川津下樋 SD24	2.4	0.9	0.6	0.9	逆台形					■	■	■	■	■	■
川津二代取 SD04	2.7	1.6	0.5	1.1	逆台形					■	■	■			
川津中塚 SD Ⅱ 95	4.0	2.0	0.4	1.2	逆台形					■	■				
下川津 SD Ⅱ 20・Ⅲ 86	2.9	1.4	0.6	1.2	逆台形	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
川津二代取 SD05	2.6	1.1	0.7	1.2	逆台形					■	■	■	■		
川津中塚 SD Ⅱ 96	3.0	1.5	0.6	1.4	逆台形					■	■	■			
下川津 SD Ⅱ 01	3.6	1.0	0.6	1.4	逆台形					■	■	■			
川津中塚 SR03	5.2	4.5	0.4	1.9	逆台形					■	■				

表７　丸亀平野の基幹的灌漑水路一覧　その１

土器川左岸～金倉川右岸

遺構名	上面幅 (m)	底面幅 (m)	深さ (m)	断面積 (㎡)	形状	弥生Ⅰ	弥生Ⅱ	弥生Ⅲ	弥生Ⅳ	弥生Ⅴ	弥生Ⅵ	古墳前	古墳中	古墳後	古墳終
三条黒島 SD01	3.6	1.1	1.1	2.5	逆台形										
郡家田代 SD40	2.0	1.0	0.6	0.9	逆台形										
郡家田代 SD35	2.8	1.8	0.4	0.9	逆台形										
三条黒島 SD01 他	3.6	1.1	1.1	2.5	逆台形										
三条黒島 SD10	1.9	1.5	0.4	0.6	逆台形	?	?	?	?						
郡家一里屋Ⅲ区 SD01	1.4	0.8	0.6	0.6	逆台形										
龍川五条 SD51・52	4.8	1.9	1.0	3.3	逆台形										

金倉川左岸～弘田川

遺構名	上面幅 (m)	底面幅 (m)	深さ (m)	断面積 (㎡)	形状	弥生Ⅰ	弥生Ⅱ	弥生Ⅲ	弥生Ⅳ	弥生Ⅴ	弥生Ⅵ	古墳前	古墳中	古墳後	古墳終
新田橋本遺跡 1 区 SD01	3.2	2.2	0.7	1.8	逆台形	?	?	?							
善通寺西 1 号溝	6.0	4.0	0.6	3	逆台形										
善通寺西 4 号溝	3.5	2.5	0.5	1.5	逆台形	?	?	?							

表８　丸亀平野の基幹的灌漑水路一覧　その２

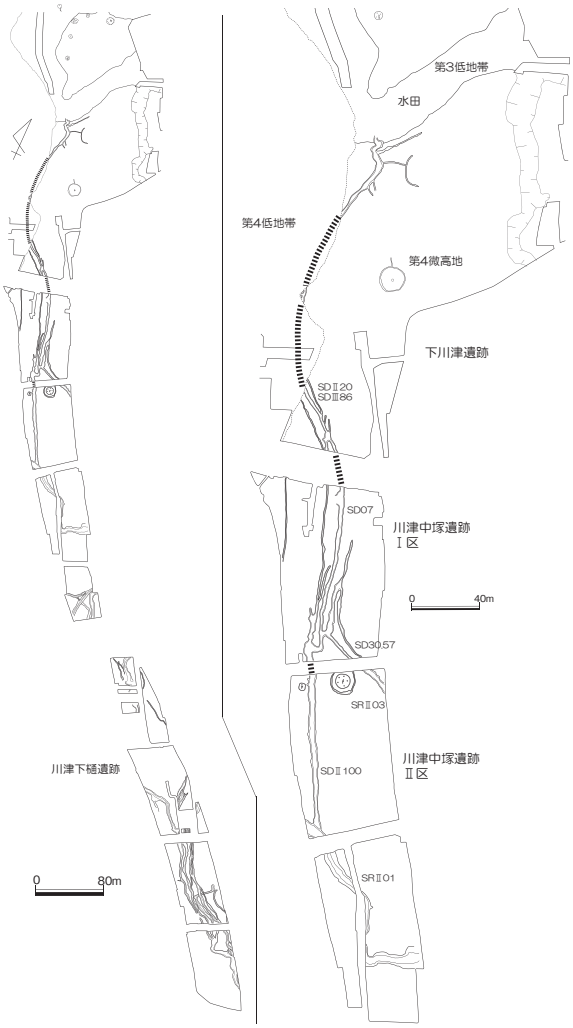


図９　下川津遺跡の基幹的灌漑水路

図 10　遺跡分布（弥生前期）

次に時期別の集落分布の変遷や特徴を概観する。

弥生時代前期

弥生時代前期の集落数は、中期後半以降と比較してあまり多くなく、丸亀平野内で４群程度の遺跡群が展開する。また、各群内には近接して複数の環濠集落が含まれることが通有となっていた可能性が高い (信里 2003)。環濠は大規模なものではなく、龍川五条遺跡の事例から竪穴住居５～６程度の居住単位を囲繞する長軸 80m 程のものが多い (宮﨑 1996. 森下 1998)。龍川五条遺跡や佐古川・窪田遺跡 (山元 2006) では、環濠集落に若干の空閑地や旧河道を挟んで周溝墓群や木棺墓群を伴い、基礎的な集落景観を形成していた。

図 11　遺跡分布（弥生中期前半）

前期前半期の初期遠賀川式土器は、下川津遺跡を始め行末西遺跡、稲木遺跡Ａ地区 (西岡編 1989) 等で確認されているが、その多くの集落で縄文晩期以前の土器片を伴うことが多く、遺跡立地は継続していると見られる (信里 2000)。一方、瀬戸内型甕に象徴される前期後半から出現する集落においては、縄文晩期土器を伴うものが少なく、前期前半期の集落から分かれて新たに出現するものと推定できる。

旧練兵場遺跡では、前期初頭の初期遠賀川式土器を伴う貯蔵穴や旧河道中に当該期の遺物が含まれるが、遺構・遺物の検出数から見て、小規模な集落が営まれたと推定できる。

弥生中期前半

環濠集落を始めとした弥生前期後半から続く集落の多くは、櫛描文が出現する中期初頭を境にして

図 12　遺跡分布（弥生中期後半～後期前半）

衰退していく傾向がある。遺跡数においても弥生時代で最も少ない段階となり、集落間関係の再編が行われた可能性が高い。集落立地では、前期段階と異なって山麓を指向する城山南麓や月信遺跡 (笹川 1991) 等が少数出現しているが、所謂高地性集落に該当する集落は未だ見られない。前期後半から続く周溝墓を基本とした墓制は、中期初頭を最後として消滅し、それ以後後期までの墓制資料が欠落する。

旧練兵場遺跡では、７次調査で中期前葉の貯蔵穴が確認されているが、前期段階と同じく明確な遺構形成の痕跡は希薄である。凹線文出現期直前の中期中葉段階になると２次調査地点 (笹川 1996) を中心に、掘立柱建物等の居住遺構の形成が明確化する。

弥生中期後半～後期前半

凹線文期である中期後葉には、旧練兵場遺跡を中心した平野南西部の弘田川上流域、奥白方中落遺跡 (森下 2008) を中心にした北西部の弘田川下流域、北東部の川津東山田遺跡 (山元 2001) を中心とした大東川下流域を中心に遺跡群の形成が進む。

旧練兵場遺跡では、各微高地に居住単位が認められ、本格的な遺構形成が始まる。各居住単位は、竪穴住居と掘立柱建物を基礎的な組み合わせとしているが、遺跡内部で掘立柱建物で集中する箇所が認められる。梁間 1 間の掘立柱建物が出現するのもこの段階であり、竪穴住居と組み合うことで、集落単位を構成する (森下 1999・2006. 信里 2009)。また、旧練兵場遺跡群に隣接した西碑殿遺跡 (廣瀬編 1994) においても掘立柱建物の集中域が確認されており、集落内あるいは遺跡群内での特定の機能空間が存在していた可能性がある。集落立地では、火上山遺跡 (岩橋 1991) や月信遺跡 (笹川 1991) 等を典型例として、丘陵斜面に立地する集落が多く見られるようになる。これらは、近隣の平地部の集落に組み合うことで存在しており、両者は補完的な関係にあると推測される。また、丘陵斜面地の集落には両刃・片刃石斧を多く保有する傾向があり、その生産活動について平地部の集落を含めた検討が必要であろう (森下 1999)。

後期初頭から前半期には、遺跡数が平野中央部と南部においてやや増加するものの、多くの集落が継続する傾向にある。旧練兵場遺跡では、本書において報告する 19 次調査地を中心に瀬戸内の各地域からの搬入土器が多く検出されるともに竪穴住居等の遺構の数や検出地点が増加し、集落の拡大傾向が認められ、周辺集落との差異が顕在化する。

また、具体的な鉄器生産を示す資料として、平野南東部の次見遺跡で鍛冶炉が確認されている (信里 2006)。鉄器の出土例や高松平野の事例から推測すれば、今後、中期末葉に遡る鍛冶遺構が確認される可能性が高い。

後期後半～終末期

旧練兵場遺跡は継続するとともに、平野全域で遺跡数の増加が著しい。小規模集落も併せると弥生時代で最も遺跡数が多い段階である。旧練兵場遺跡内においても当該期の遺構数が最も多い。また、弘田川や金倉川下流域の臨海部で集落が増加している。弘田川河口の中東遺跡 (森下 2008) で製塩土器が出土している等、当該期が丸亀平野における臨海部の土器製塩が開始される時期に当たることから (大久保 2002)、新たに進出する集落の生産活動の解明が期待される。

鉄器生産では丸亀平野の中核となる川津遺跡群の下川津遺跡 (藤好・西村編 1990) や旧練兵場遺跡において鍛冶炉が確認されており、後期後半期から終末期までの継続した鉄器生産が想定できる (信里 2004)。両遺跡群間での生産の分掌関係が成立している可能性もあり、遺跡群内での鍛冶技術レベルのより詳細な検討を行う必要がある。

また、同期にサヌカイト製石器を始めとした石器類の急激な減少が進行しており、鍛冶遺構や成品で確認できる鉄器化と共変関係にあることが指摘でき、集落の動向と併せて検討が必要である。

中期段階で不明確であった墓域の様相も明らかになる。平野南東部の平尾墳墓群では、木棺墓・土坑墓群が見られる等、丘陵上を中心に群集する墓地形成の痕跡が確認されている。また、旧練兵場遺跡の平野南西部では箱式石棺を採用するようで、既に滅失した佐伯八幡山やキッチョ塚を始め大麻山西麓の箱式石棺墓群は本時期に相当する可能性が高い (矢原 1973)。一方で、少数であるが平地部に墓域形成する事例があり、旧練兵場遺跡 3 次調査 (仙遊遺跡　笹川 1986) では線刻をもつ箱式石棺墓、九頭神遺

図 13　遺跡分布（弥生後期後半～終末期）

跡 (笹川 1988) や稲木遺跡では、箱式石棺との折衷形と見られる小竪穴式石室が見られる。また、終末期には、石塚山古墳群で墳丘墓が出現している (國木 1993)。これらの墓地が明確化する背景には、集落数の増加や鉄・土器製塩等の集落間における生産と流通の分掌化、あるいは集落内部の分掌・分節化の動向と関連している可能性が高い。

古墳時代前期

遺跡数に減少が見られるが、弥生終末期から継続する集落も少なくない。弥生終末期に遺跡群の中核となった旧練兵場遺跡や下川津遺跡は継続しており、集落数の減少の要因となっているのは、小規模集

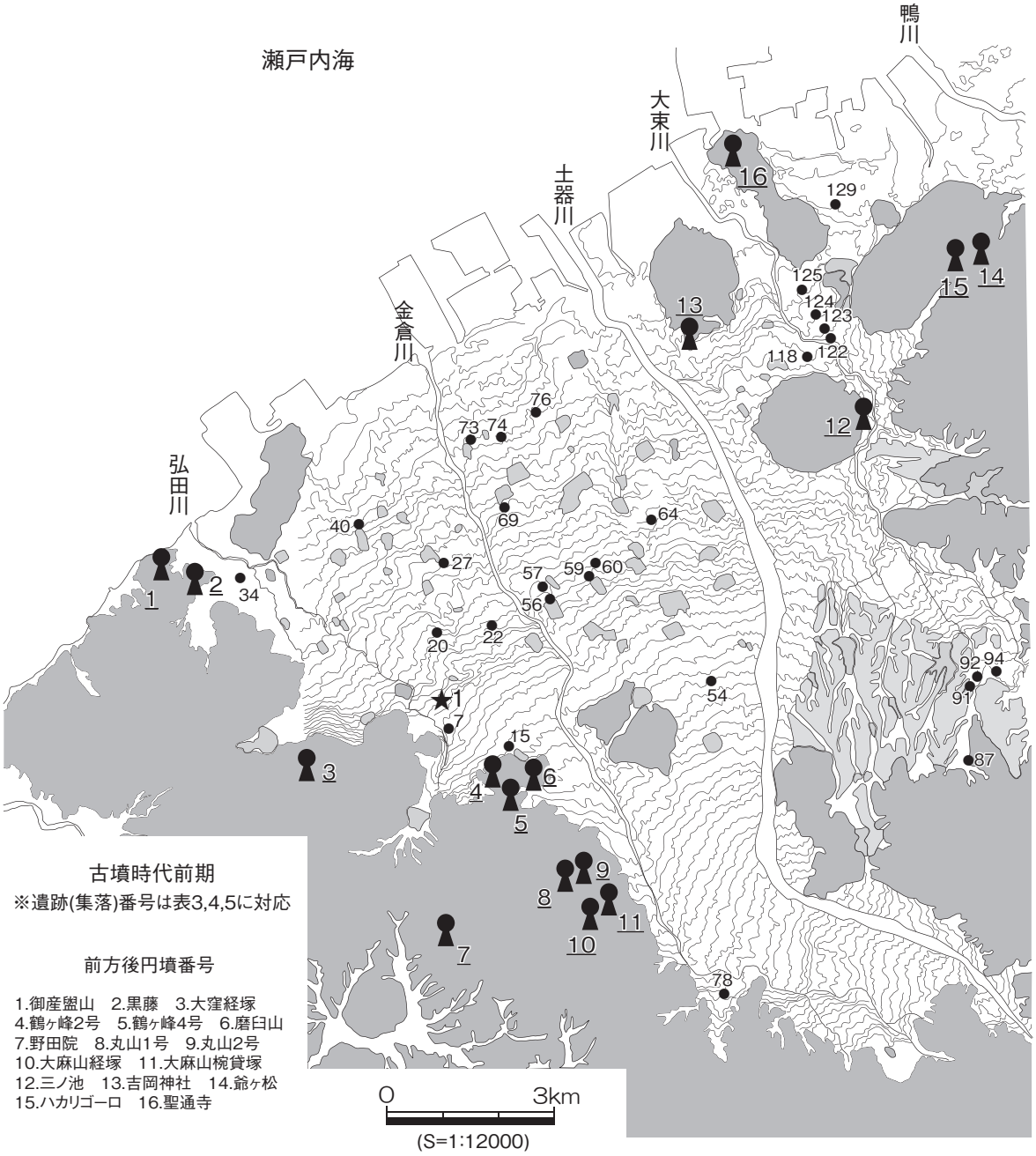


図 14　遺跡分布（古墳前期）

落の動向と考えられる。小規模集落の実数は、今後の調査の進捗で増加する可能性が高く、集落自体は弥生終末期からの延長線上にあると考える。

旧練兵場遺跡の南部の大麻山山塊には、大麻山経塚 (全長 31m)・野田院古墳 (全長 48m)・鶴ヶ峰 4 号 (全長 34m) 等の小規模前方後円墳が多く築造される。これらは数群に分かれて築造されており、旧練兵場遺跡の複数の微高地に点在する遺構分布に類似するなど、集落景観及びその構造が墳墓分布に投影された可能性が高い。(大久保 2006)

このような状況も、古墳前期後半に大きな変化を認めるようになる。集落では旧練兵場遺跡や下川津遺跡等弥生後期段階から中核的な集落が急速に衰退する。古墳築造においても、集成編年 3 期の快天山

古墳 (全長 100m) 築造以降は、小規模前方後円墳が減少していく等新たな動きが見られる。集落と古墳に共時的な変化が認められることとなり、弥生後期から継続した社会関係の解消が行われた可能性が高い。(信里)

東信男編 2006『中の池遺跡－第 12 次調査－』丸亀市教育委員会　(財) 元興寺文化財研究所
岩橋　孝 1991「火上山遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 2 年度』香川県教育委員会
大久保徹也 1995「第 5 章第 10 節　基幹的灌漑水路と灌漑単位」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 6 冊　上天神遺跡』香川県教育委員会ほか
大久保徹也 2002「備讃地域における弥生後期土器製塩の特質」『環瀬戸内海の考古学』古代吉備研究会
大久保徹也 2006「備讃地域における前方後円墳出現期の様相」『日本考古学協会 2006 年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会 2006 年度愛媛大会実行委員会
木下晴一 1998「第 2 章遺跡の立地と環境」『旧練兵場遺跡Ⅴ』香川県教育委員会
國木健司 1993『石塚山古墳群』綾歌町教育委員会
笹川龍一 1985『彼ノ宗遺跡～弘田川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告～』善通寺市教育委員会
笹川龍一 1986『仙遊遺跡発掘調査報告書－旧練兵場遺跡仙遊Ⅰ地区－』善通寺市教育委員会
笹川龍一 1988『九頭神遺跡発掘調査報告書』九頭神遺跡発掘調査団　善通寺市教育委員会
笹川龍一 1991『月信遺跡　県営畑地帯総合整備事業善通寺西部地区碑殿農道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』月信遺跡発掘調査団
佐藤竜馬 1996「第 2 節歴史的環境」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 24 冊　郡家田代遺跡』香川県教育委員会ほか
高橋　学 1995「臨海平野における地形環境の変貌し土地開発」『古代の環境と考古学』古今書院
田崎博之 1996「瀬戸内海沿岸部における弥生時代～古墳時代前期の出土鏡集成」『弥生後期の瀬戸内海－土器・青銅器・鉄器から見たその領域と交通　古代学協会四国支部第 10 回松山大会資料』古代学協会四国支部
信里芳紀 2002「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相」『弥生時代前期末・中期初頭の動態　第 16 回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集』古代学協会四国支部
信里芳紀 2003「讃岐地域における弥生時代前期集落の様相」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会
信里芳紀 2004「下川津遺跡における鉄器生産の可能性について～弥生後期の鍛冶関係資料の新例」『財団法人香川県埋蔵文化財センター研究紀要ＸⅠ』財団法人香川県埋蔵文化財センター
信里芳紀 2006「中・東部瀬戸内地域における弥生時代の鉄製品」『石器から鉄器への移行期における社会の変革を考える　近畿弥生の会第 2 回テーマ討論会発表要旨集』近畿弥生の会
信里芳紀 2008「大溝の検討－弥生時代灌漑水路の位置付け－」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅳ』香川県埋蔵文化財センター
信里芳紀 2009「旧練兵場遺跡を描くにあたっての二、三の問題」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅴ』香川県埋蔵文化財センター
藤好史郎 1978「善通寺遺跡の溝について」『教育香川昭和 53 年 6 月』
藤好史郎・西村尋文編 1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会ほか
西岡達哉編 1989『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 6 冊　稲木遺跡』香川県教育委員会ほか
廣瀬常雄編 1994『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 10 冊　金蔵寺下所遺跡　西碑殿遺跡』香川県教育委員会ほか
松本敏三 1976「野田院古墳で想う (ニ)」『教育香川　昭和 51 年 1 月号』
松本敏三・岩橋孝 1983『讃岐青銅器集成図録』瀬戸内海歴史民俗資料館
森下英治 1998『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 29 冊　龍川五条遺跡Ⅱ』香川県教育委員会ほか
森下英治 1999「讃岐地方における弥生時代中期集落の機能と構造について」『瀬戸内の弥生中期集落　古代学協会四国支部第 13 回大会資料』古代学協会四国支部
森下英治 2006「瀬戸内の大規模密集型集落－香川県旧練兵場遺跡と周辺遺跡－」『日本考古学協会 2006 年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会 2006 年度愛媛大会実行委員会
森下英治編 2008『県道丸亀多度津線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　中東遺跡 2　奥白方中落遺跡　奥白方南原遺跡』香川県教育委員会
宮崎哲治 1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 26 冊　龍川五条遺跡Ⅰ』香川県教育委員会ほか
矢原高幸 1973『善通寺の古代文化』
山元素子 2001『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 38 冊　川津東山田遺跡Ⅰ区』香川県教育委員会ほか
山元素子 2006『一般国道 32 号綾歌バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 1 冊　佐古川・窪田遺跡』香川県教育委員会ほか
吉田　広・高山　剛 1996「武器形青銅器集成」『弥生後期の瀬戸内海－土器・青銅器・鉄器から見たその領域と交通　古代学協会四国支部第 10 回松山大会資料』古代学協会四国支部
吉田　広 2010「Ⅳ香川の青銅器文化」『銅鐸分布圏における武器形青銅器の実相に関する包括的研究』
真鍋昌宏編 1987『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 3 冊　矢ノ塚遺跡』香川県教育委員会ほか
渡部明夫編 1990『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 9 冊　永井遺跡』香川県教育委員会ほか

第３節　既往調査の概要

１．既往の調査と調査区名称

旧練兵場遺跡は、六車恵一氏や故矢原高幸氏によって学会に紹介されて以来、大規模な弥生時代の集落跡と認知された (六車 1956, 矢原 1973)。昭和 33(1958) 年には故矢原高幸氏や尽誠学園教諭大久保義朗氏によって現在の独立行政法人病院機構善通寺病院の前庭の発掘調査が実施されている (尽誠学園史学会 1959)。

その後、旧練兵場遺跡における発掘調査は行政主体の開発対応となり、昭和 58 年度以降、工事立会等の小規模な調査を含め 42 回にわたって実施されてきた。その中で、周知の埋蔵文化財包蔵地としての「旧練兵場遺跡」とは別に、包蔵地内の各地区で「仲村廃寺」「彼ノ宗遺跡」等の遺跡名称が個別に付された状況があった。この状況は、既往の調査成果を網羅的に把握し、遺跡全体としての検討を行う際の障害となることや、今後継続される発掘調査に伴う遺跡名称の混乱を招くと考えられるため、今回の報告を行うに当たり遺跡名称を「旧練兵場遺跡」に統一し、調査区名称を新たに与えることとした。また、昭和 33 年に行われた最初期の発掘調査については、調査箇所の特定が難しいことから、昭和 58 年以降の行政主体の発掘調査について調査区名称を与えた。

表 9 は、過去の調査事例の一覧表である。調査区名称は、県教育委員会や善通寺市教育委員会等調査主体となった機関を区別せず、1983 年以降の調査について、西暦の中で 4 桁を用いて表記した。また、一定の調査面積を有する本発掘調査については、調査区名称とは別に調査次数を付すことにより、過去の発掘調査成果を容易に検索できるようにした。

旧練兵場遺跡は約 45 万㎡の範囲にわたって周知されているが、これまでの発掘調査面積は、約 5 万㎡であり全体の約 11% に相当する。既往の調査区の分布は、遺跡の推定範囲中央に位置する 3 次調査を境にして東西二つに区分され、主に西側を主体として発掘調査が実施されてきた。発掘調査では弥生時代から中世に属する遺構・遺物が検出されているが、ここでは弥生時代における主要遺構のみ分布状況の概略を記す。

竪穴住居を中心とした弥生時代の遺構は、14・19・22・23・25・26 次調査を中心とした現在の独立行政法人病院機構善通寺病院の敷地から現在の弘田川に隣接する 2 ・11 次調査の範囲に集中して確認される傾向がある。中でも 19・22・23 次調査では竪穴住居跡や掘立柱建物跡等の遺構や、他地域からの搬入土器や銅鐸片・鏡片等の青銅器が集中して検出される等、現状では遺跡内における中核部的な様相を示している。

遺跡の東側の大部分を占める近畿中国四国農業研究センター及びその隣接地では大規模な発掘調査の事例が無く、実態が不明であるが、1･5 次調査及び 0011 調査区付近に竪穴住居跡の集中が認められる。青銅器等の貴重品の出土事例は見られないが、同敷地を中心とした遺跡西側で大規模な発掘調査が実施されていないことに起因している可能性が高い。9412 調査区付近は竪穴住居跡等の居住遺構が確認されず、低地帯の存在を示す堆積層が確認されていることから、9412 調査区を南東から北西方向へ抜ける旧河道の存在が想定できる。この旧河道を境にして、巨視的には東西二つのエリアに分かれて竪穴住居等の居住遺構が分布していると見られる。

本書は、上記のとおり竪穴住居跡等の遺構が密集し、銅鏃等の青銅器が多く確認された遺跡西側の微高地上で実施された報告となる。(信里)

尽誠学園史学会 1959「国立病院前庭遺跡発掘調査概報」『西讃史談』1
六車恵一 1956「讃岐弥生式土器集成図録」『文化財協会報』特別号 1 香川県文化財保護協会
矢原高幸 1973『善通寺市の古代文化』善通寺市
1. 善通寺市教育委員会『仲村廃寺発掘調査報告 (旧練兵場遺跡内)』1984.3
2. 善通寺市教育委員会『彼ノ宗遺跡～弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告～』1985.3
3. 善通寺市教育委員会『仙遊遺跡発掘調査報告書 - 旧練兵場遺跡仙遊Ⅰ地区 -』1986.3
4. 善通寺市教育委員会『仲村廃寺～旧練兵場遺跡における埋蔵文化財確認調査報告書～』1989.3
5. 善通寺市教育委員会『山南遺跡･彼ノ宗遺跡発掘調査報告書～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5 ～』1999.3
6. 善通寺市教育委員会『旧練兵場遺跡　市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2001.1
7. 善通寺市教育委員会『旧練兵場遺跡　特別養護老人ホーム仙遊荘建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』2002.3
8. 善通寺市教育委員会『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7 旧練兵場遺跡』2002.3
9. 善通寺市教育委員会『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 9 旧練兵場遺跡』2004.3
10. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和 58 年度』1984.12
11. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和 59 年度～昭和 62 年度』1988.3
12. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 63 年度』1989.3
13. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 3 年度』1992.3
14. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 4 年度』1993.3
15. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 5 年度』1994.3
16. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 6 年度』1995.3
17. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 7 年度』1996.3
18. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 8 年度』1997.3
19. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 9 年度』1999.2
20. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 10 年度』2000.3
21. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 11 年度』2001.3
22. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 12 年度』2002.3
23. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 13 年度』2003.3
24. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 14 年度』2003.11
25. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 15 年度』2005.3
26. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 16 年度』2006.1
27. 香川県教育委員会『香川県文化財年報　平成 19 年度』2009.2
28. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡 - 平成 5 年度国立善通寺病院内発掘調査報告 -』1994.3
29. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡Ⅱ - 平成 6 年度四国農業試験場内発掘調査報告 -』1995.3
30. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡Ⅲ - 平成 7 年度国立善通寺病院内発掘調査報告 -』1996.3
31. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡Ⅳ - 平成 7 年度四国農業試験場内発掘調査報告 -』1996.3
32. 香川県教育委員会『旧練兵場遺跡Ⅴ - 平成 9 年度国立善通寺病院内発掘調査報告 -』1998.3
33. 香川県教育委員会『広域基幹河川弘田川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　弘田川西岸遺跡』2008.1
34. 香川県教育委員会ほか『善通寺病院看護学校建設及び統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　旧練兵場遺跡Ⅰ』2009.2
35. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『国立善通寺病院改修事業に伴う旧練兵場遺跡発掘調査概報 1- 平成 13 年度・平成 14 年度上半期の発掘成果概要報告 -』2003.6
36. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成 8 年度』1997.5
37. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成 9 年度』1998.6
38. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成 13 年度』2002.6
39. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成 14 年度』2003.6
40. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成 15 年度』2005.3
41. 香川県埋蔵文化財センター『香川県埋蔵文化財センター年報　平成 16 年度』2006.10
42. 笹川龍一ほか 2010「平成 11 年度旧練兵場遺跡の調査概要について－善通寺市ふれあいサロン五岳建設工事に伴う発掘調査－善通寺市文化財保護協会報第 29 号」善通寺市文化財保護協会

調査番号	年度	調査次数	調査種別	調査要因	調査主体	調査面積	調査概要	文献	備考
8308	s58	1	確認調査	範囲確認調査	善通寺市教委	1200	弥生終末期の竪穴住居１棟、古代末～中世の溝を検出	1.10	仲村廃寺１
8404	s59	2	本発掘調査	弘田川河川改修	善通寺市教委	3635	弥生中期～終末期の竪穴住居 38 棟、鏡片･銅鏃･ガラス玉出土	2.11	彼ノ宗
8507	s60	3	本発掘調査	個人住宅建設	善通寺市教委	135	弥生後期後半の箱式石棺・土器棺墓を確認	3.11	仙遊
8703	s62	4	本発掘調査	下水道建設	県教委	22	弥生中期末の竪穴住居１棟・掘立柱建物１棟を確認	11	旧練兵場
8811	s63	5	確認調査	範囲確認調査	善通寺市教委	1137	弥生中期～終末期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居を確認	4.12	仲村廃寺２
9109	h3		確認調査	四国農業試験場施設整備	県教委	146	弥生時代後期の竪穴住居、弥生中期の掘立柱建物を検出	13	
9205	h4		確認調査	四国農業試験場施設整備	県教委	66	弥生後期～古墳時代竪穴住居４棟、土坑、柱穴を確認	14	
9204	h4		工事立会	善通寺病院サービス棟建設	県教委	41	古墳時代後期の竪穴住居、平安時代の溝、弥生～古墳時代の土器だまりを検出	14	
9210	h4	6	本発掘調査	弘田川河川改修	県教委	460	弥生後期～古墳時代竪穴住居多数、包含層中から小銅鐸片が出土。	14	弘田川西岸
9305	h5	7	本発掘調査	善通寺病院保育所建設	県教委	305	弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居 14 棟を検出	15.28	
9309	h5		工事立会	四国農業試験場施設整備	県教委	70	全域で弥生～古代の遺構を確認	15	
9309-2	h5		確認調査	弘田川河川改修	県教委		弘田川の堆積層を確認	28	
9310	h5		工事立会	善通寺病院水道管埋設工事	県教委	100	弥生前期末の貯蔵穴２基、弥生後期の竪穴住居４棟検出	28	
9310-2	h5		工事立会	善通寺病院下水道管埋設工事	県教委	120	弥生時代後期の竪穴住居５棟、中世の溝等を確認	28	
9310-3	h5	8	本発掘調査	善通寺病院看護学校増築	県教委	150	弥生中期～終末期の竪穴住居９棟、古墳時代の掘立柱建物を確認	15.28	
9404	h6	9	本発掘調査	四国農業試験場品質管理施設建設	県教委	120	弥生中期の掘立柱建物１棟、弥生後期の竪穴住居２棟、古墳時代後期の竪穴住居１棟確認	16.29	
9412	h6	10	本発掘調査	四国農業試験場パイプライン設置工事	県教委	100	全域で弥生～中世の遺構を確認	16.29	
9504	h7	11	本発掘調査	弘田川河川改修	県教委	6390	弥生～古墳時代の竪穴住居 62 棟、弥生中期の独立棟持柱建物を確認	33	弘田川西岸
9504-2	h7	12	本発掘調査	善通寺病院研修棟建設	県教委	690	弥生中期～終末期の竪穴住居群、弥生後期初頭の掘立柱建物群を確認	17.30	
9511	h7	13	本発掘調査	四国農業試験場タンパク機能解析実験棟建設	県教委	300	弥生後期の竪穴住居２棟、弥生中期の掘立柱建物１棟、古墳時代後期の溝１条確認。	17.31	
9511-2	h7		工事立会	善通寺病院備蓄倉庫建設	県教委	780	弥生後期から終末期の竪穴住居等を確認	32	
9610	h8	14	本発掘調査	善通寺病院看護学校新築	県教委	6000	弥生後期の竪穴住居溝跡、条里型地割坪界溝を検出	34	
9710	h9	15	本発掘調査	善通寺病院雨水管敷設工事	県教委	30	弥生～古代の旧河道を検出	32	
9704	h9		工事立会	善通寺病院水源地建設	県教委	300		32	
9809	h10	16	本発掘調査	善通寺病院看護学校付帯工事	県教委	30	弥生～古代の旧河道を検出	20	
9808	h10		確認調査	確認調査	善通寺市教委	30	弥生中期～後期の柱穴群を確認	5	彼ノ宗
9909	h11		工事立会	四国農業試験場排水設備工事	県教委	800	弥生中期後半～後期の竪穴住居を検出	21	
9911	h11	17	工事立会	老人ホーム建設	善通寺市教委	201	旧河道から弥生中期が一括出土	21	
0006	h12	18	本発掘調査	市営住宅建設	善通寺市教委	1068	弥生後期竪穴住居、旧河道を検出	6	
0101	h12		工事立会	四国農業試験場西門・水路改修	県教委	122592		22	
0104	h13	19	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	5000	弥生中期～後期の竪穴住居・掘立柱建物多数、旧河道検出	35.39	本書
0107	h13	20	本発掘調査	特別養護老人ホーム仙遊荘建替	善通寺市教委	1430		7.23	
0202	h13	21	本発掘調査	市営住宅付帯工事	善通寺市教委	46	弥生後期の竪穴住居３棟確認	8	
0206	h14		工事立会	善通寺病院電柱設置工事	県教委	10		24	
0204	h14	22	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	4854	弥生中期～後期の竪穴住居・掘立柱建物、古墳時代後期の竪穴住居群検出。鏡片出土	24	
0504	h15	23	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	3616	弥生中期～終末期の竪穴住居 72 棟を始め、掘立柱建物等を多数確認。扁平紐式銅鐸片、舶載内行花文鏡片出土。	25	
0312	h15	24	確認調査	公民館建設	善通寺市教委	70	弥生後期の竪穴住居、古墳時代の包含層を検出	9	
0312-2	h15		工事立会	近畿中国四国農業研究センター下水道建設	県教委	200	弥生後期の竪穴住居、旧河道を検出	25	
0404	h16	25	本発掘調査	善通寺病院統合事業	県教委	3547	弥生後期～終末期の竪穴住居、弥生中期の掘立柱建物群を検出。扁平紐式銅鐸片、舶載内行花文鏡片が出土	26.41	
0406	h16		工事立会	近畿中国四国農業研究センター電気設備埋設	県教委	6	弥生後期竪穴住居１棟検出	26	
0804	h20	26	本発掘調査	善通寺養護学校移転整備事業	県教委	2760	弥生中期～終末期の竪穴住居多数、条里型地割に合致する大溝を検出。鏡片が出土。	42	

表９　既往の調査一覧

図 15　既往の調査区分布

第３章　調査の成果

第１節　調査概要と報告手順

（１）調査の概要

本書に収録する調査成果は、旧練兵場遺跡第 19 次調査であり、現地調査は、平成 13 年度から平成 14 年度上半期に実施した。調査面積は 4,000㎡である。発掘調査区の位置は遺跡西部に位置し、過去に小規模なものを中心に数件の本発掘調査が実施されていたが、微高地上面の大規模な調査としては今回報告する第 19 次調査が最初となる。

調査の結果、縄文時代晩期から古代、近代にかけての極めて密集した遺構・遺物を確認した。中でも調査の中心となるのは、弥生時代中期から古墳時代前期の集落を構成する住居群と、近接する旧河道から出土した他地域からの搬入土器を含む多量の遺物群である。弥生時代の集落は、凹線文の出現期である弥生中期後半から明確に形成され、後期前半から後半期に遺構の盛期があり、終末期から古墳前期は少数の住居で構成される。中期後半から後期前半期には竪穴住居と掘立柱建物が基礎的な単位として認められるが、後期後半以降は竪穴住居のみとなる。継続期間の長さと同時に、各細別時期の集落構成を俯瞰できる。

継続期間の中で特筆すべき事象を列挙すれば、後期前半期の他地域からの多量の搬入土器、後期後半期の鍛冶遺構 (SH51)、後期後半期を中心とした多量の銅鏃が挙げられる。

他地域からの搬入土器は、土佐・阿波等の四国島内のみならず、備中・安芸等の山陽地方や遠距離の河内等の近畿地方、豊前・豊後等の東北部・東部九州地方の瀬戸内海沿岸の各地域に及ぶ。模倣土器が含まれていることから見て、人的移動を伴った現象の可能性が高く、物流の結節点としての旧練兵場遺跡の性格を特徴付けるものと言える。

銅鏃は、今回の第 19 次調査だけでも 18 点に上り、時間的な累積を考慮しても極めて多量と言え、流通途上における集積を示唆するものとして大きな問題を提起することとなった。

（２）報告手順

報告を行うに当たって、調査の成果については原則として時代別に記述を進めることとし、都合上 8 節に分割した。時代別に分割した各節内においては、基本的に竪穴住居跡 (SH)・掘立柱建物跡 (SB)・土坑 (SK)・墓 (ST)・溝状遺構 (SD)・不明遺構 (SX)、柱穴跡 (SP) の順序で、第 1 分冊に掲載している。遺構番号は､現地調査段階で付与したものを優先したが､整理作業の結果､欠番となったものも存在する。また、時代別に報告する都合上、遺構番号が必ずしも連番にならない。多量の遺物が出土した旧河道跡部分（SR01・02）については、遺構に伴わない遺物とともに第 2 分冊に収録した。委託により実施した理化学的分析等の成果は第 2 分冊に収録している。遺構･遺物写真については、第 3 分冊に収録した。

遺物観察表については、挿図・図版対照用の情報を記載した略表を第 2 分冊に収録しており、詳細については、付録の CD-ROM に収録している。

全ての遺構名称を記載した全体平面図については、検出された遺構数や重複が多いことから、付録の CD-ROM に ai と eps のデータ形式で収録しているので、活用願いたい。(信里)

X区
Y区
X=136.020-a
X=136.010-a
X=136.000-a
X=135.990-a
X=135.980-a
X=135.970-a
X=135.960-a
Y=25.160-b
Y=25.170-b
Y=25.180-b
Y=25.190-b
Y=25.200-b
Y=25.210-b
Y=25.220-b
a=0.725
b=0.193
SR
撹乱
0
10m
(1/400)

図 16　遺構平面（全時代）

第２節　微地形と土層序

微地形

今回報告する第 19 次調査地は、遺跡の西部に位置する。第 19 次調査及び周辺において実施されたこれまでの発掘調査において微地形を検討する材料となる旧河道跡が多く検出されているため、これらを参照しながら微地形を概観しておく。

第 19 次調査地及びその隣接地の調査では６条の旧河道跡が確認されている。大規模な旧河道跡は、北東部の第 14・15 次調査地で確認された旧河道１と、南西部第 25 次調査及び第 11 次調査で検出された旧河道５・６である。この旧河道１と４・５に挟まれた第 19 次調査地付近では、顕著な蛇行が認められる小規模な旧河道２・３が存在している。遺構検出面のレベルから、これらの旧河道の間の部分が微高地となるが、明瞭な微高地は更に限定される。また第 22・23 次調査を中心に確認された弥生前期の埋没が想定される SD07 の流下方向を見ると、かなりの蛇行を繰り返している。おそらく、明瞭な微高地を迂回する形で開削された可能性が高く、当時の微地形をある程度反映していると考えられる。また、遺構検出面の上面に、基本層序のＶ層とする砂礫層が露出する箇所が点在している。これは、扇状地の形成過程において残された旧中州と考えられる。微視的には、旧河道の間の部分に数箇所の明瞭な微高地を構成する砂礫層と考えられる。

図 18 は、第 14 次調査から第 11 次調査の旧河道跡が検出された調査区の壁面図を合成したもので、北東から南西方向の断面概略図となる。巨視的に見て北へ傾斜する扇状地上を斜交した作図となるために河床面のレベル差が正確に反映されていないが、この図と表 10 の変遷表を使用し微地形の略歴を説明する。

旧河道１・２の最下層は、上位の砂礫層と下位の黒色シルトで埋没しており、旧河道２には晩期後葉から弥生前期前半の遺物を含むことから、これらの旧河道は縄文晩期後葉までに形成されていた可能性が高い。堆積状況から見て、当該期には流水と帯水を繰り返す環境下にあったと考えられ、河川としての機能はほぼ停止していたと見られる。

弥生時代前期には、旧河道１と旧河道５の間に存在する旧河道 3、SD07 は埋没して平坦化する。縄文晩期後葉から弥生前期にかけて河床面の低下と、形成途上にあった微高地上の旧河道の埋没が同時に進行したものと考えられる。少なくともこの段階までに、弥生中期後半以降に展開する大規模集落の基盤となる地形面が形成されたと考えられる。

弥生中期以降に継続する旧河道は、旧河道１・２・４・５であるが、旧河道１・２では帯水状態を示すシルト～粘土層の堆積のみ確認され、盛んな流水が見られない凹地に変化している。この凹地は、隣接する住居群からの土器等の遺物の断続的な廃棄が行われており、上層の古代と考えられる耕作土が形成されるまで、長期間にわたって埋没が進行したと考えられる。面的に調査が実施された第 11 次調査の旧河道５は、弥生時代中期後半から古代末までの遺物が出土している。堆積状況からは、一定の埋没の進行と河床の低下を繰り返す状況が想定され、複数の河道が錯綜している可能性が高い。したがって弥生中期以降に恒常的な河川活動が想定できるのは旧河道４・５となる。弥生時代中期以降は、旧河道５を中心とした遺跡西部に河道がほぼ固定化され、微高地上の高燥化が進行したと考えられる。また、旧河道５の上位には、中世以降と見られる耕作土が見られ、河川活動が停止されていることから見て、河道は隣接する現弘田川に移動し、河床の更なる低下が行われたと見られる。時期的には、古代末頃と推定できることから、完新世段丘崖の形成 (高橋 1995) と関連した地形環境の変化と推定できる。(信里)

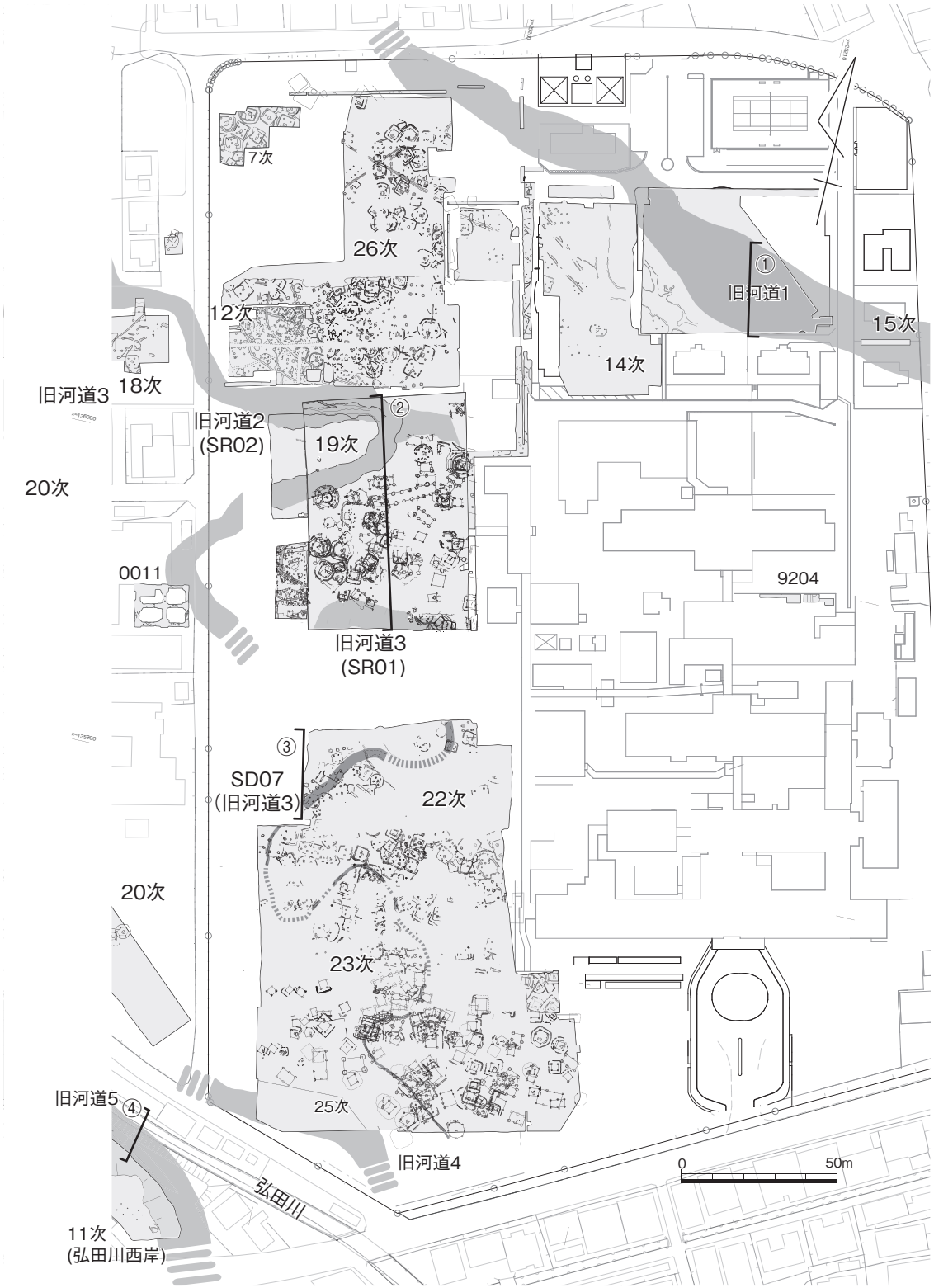

7次
26次
12次
18次
旧河道3
旧河道2
(SR02)
19次
20次
0011
旧河道3
(SR01)
①
旧河道1
15次
14次
9204
②
③
SD07
(旧河道3)
22次
20次
23次
25次
旧河道5
④
旧河道4
弘田川
11次
(弘田川西岸)
0
50m

図 17　旧河道分布

	旧河道 1	旧河道 2	旧河道 3（SD07）	旧河道 4	旧河道 5	現弘田川
縄文晩期	?	流水	流水	?	?	
弥生前期	流水	流水	埋没	?	?	
弥生中期～古墳前期	凹地・遺物投棄	凹地・遺物投棄	居住域	?	流水	
古墳後期	耕作地	耕作地	居住域	流水	流水	
古代 (7c ～)	耕作地		居住域	耕作地	流水	?
中世	耕作地		耕地	耕作地	耕作地	流水

表 10　旧河道変遷

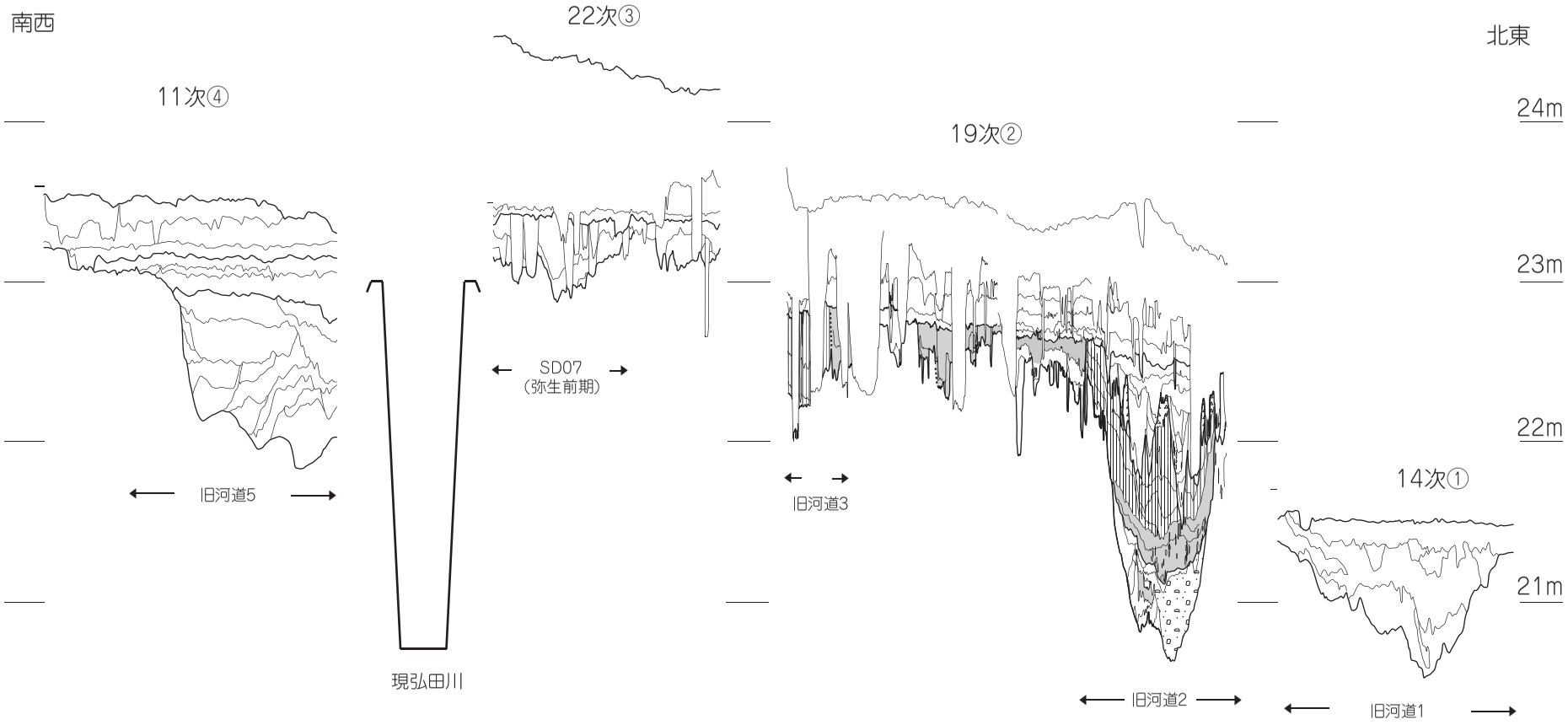


図 18　旧河道断面

基本層序

既往の調査成果を基にして、基本層序を整理しておく。Ⅰ層は、現在の工作物に伴う盛土層と近代の練兵場期の整地層である。Ⅱ層は中世から近世の連続する耕作土層であり灰色系のシルトを基調とし、上層からの鉄分の沈着が著しい。Ⅲ層は灰褐色～黒褐色系の粘土層であり、古代以前の遺構の埋没土と見られる。また、Ⅲ層は微高地の上面でⅠ層及びⅡ層に伴う削平が著しい箇所においては確認されない場合がある。本来的にはⅢ層上面が古代以前の遺構の掘り込み面となるが、遺構の重複が激しい調査区においては、弥生時代から古代の遺構の掘り込みのラインがⅢ層上面まで追えず、Ⅲ層中位での遺構検出を余儀なくされることが多い。

Ⅳ層は黄色系のシルト～粘土層であり、弥生時代以降の遺構のベース層である。後述するⅤ層の砂礫層を覆う状態で堆積しており、Ⅳ層の下面は凹凸を伴う。数層に細分されるがⅤ層上面では砂礫・粗砂を多く含み、上位に移るに従いシルト質となり上部の高燥化が著しい。第19次調査区南部ではⅢ・Ⅳ層間に弥生時代前期初頭に埋没した旧河道(SR01)を、調査区北部では縄文晩期から弥生終末期に埋没した旧河道跡(SR02)を検出しており、Ⅳ層堆積時点ではかなりの起伏を伴う微地形を呈していたと考えられる。堆積年代は明確ではないものの、Ⅳ層中に縄文後・晩期の土器片を伴う地点が見られ、これらが堆積年代の一端を示している。また、SX23のような地床炉と考えられる焼土が集中して確認できる箇所が見られることや、第11次調査区でⅣ層中に縄文後期の包含層が確認されているため、Ⅳ層中に縄文期の遺構面が存在している可能性が高いと考えられる。

また、弥生時代中期以前の遺構埋没土はⅣ層のブロック土で埋め戻されていることが多く、Ⅳ層上部の高燥化の著しいことと関連して遺構検出を困難なものとしている。

Ⅴ層は扇状地を主体的に構成する砂礫層であり、上面が起伏に富み、箇所によっては顕著なラミナを認める粗砂～中粒砂層を介在させる。礫自体に締まりはなく、平野の中流域で認められる基底礫層とは異なる。Ⅳ層上面で見られ縄文晩期から弥生時代に埋没する旧河道跡SR02は、Ⅴ層の堆積が深い位置において確認できる箇所に対応しており、弥生時代以降の遺構のベース面となるⅣ層上面の起伏は、Ⅴ層の堆積が深く影響している。つまり、Ⅴ層が現地表面から浅い位置で検出され、その上面が弥生時代以降の遺構検出面となる箇所は、微高地(旧中州)に相当すると判断できる。

Aライン土層(A・B区西壁)

調査区南部にSR01、北部にSR02が存在し、中央やや南寄りの部分ではⅣ層が薄く、その下位の比較的浅いレベルにⅤ層の砂礫層が見られることから、低地帯間の微高地上を通過するラインの土層となる。A区側ではSR01を除き微高地上となるため、SH14・48等の遺構の重複が激しい。SR02が存在するB区北部へ向かうにつれⅣ層は降下していき、古代の溝に伴う越流堆積層や古代から中世段階の溝を埋没させるⅡ層が厚く堆積する。古代の溝であるSD36の掘り込み面とⅣ層間には古墳時代後期～古代の土器を伴う堆積層が部分的に見られ、下面でSH31、SB24等の弥生時代の住居跡や掘立柱建物跡を検出した。

SR02は砂礫層のⅤ層の堆積によって形成された旧河道跡である。最下層は主に流水堆積に伴う砂礫層で埋没し、縄文晩期中葉～弥生前期の土器片を伴うが、最下層の南側のⅣ層に接する立ち上がりはグライ化の影響もあり明確に確認はできなかった。下層には弥生時代中期中葉～末葉の土器片、上層には終末期～古墳初頭の土器片が多量に投棄されているが、盛んな流水の痕跡は見られず、河道としての機

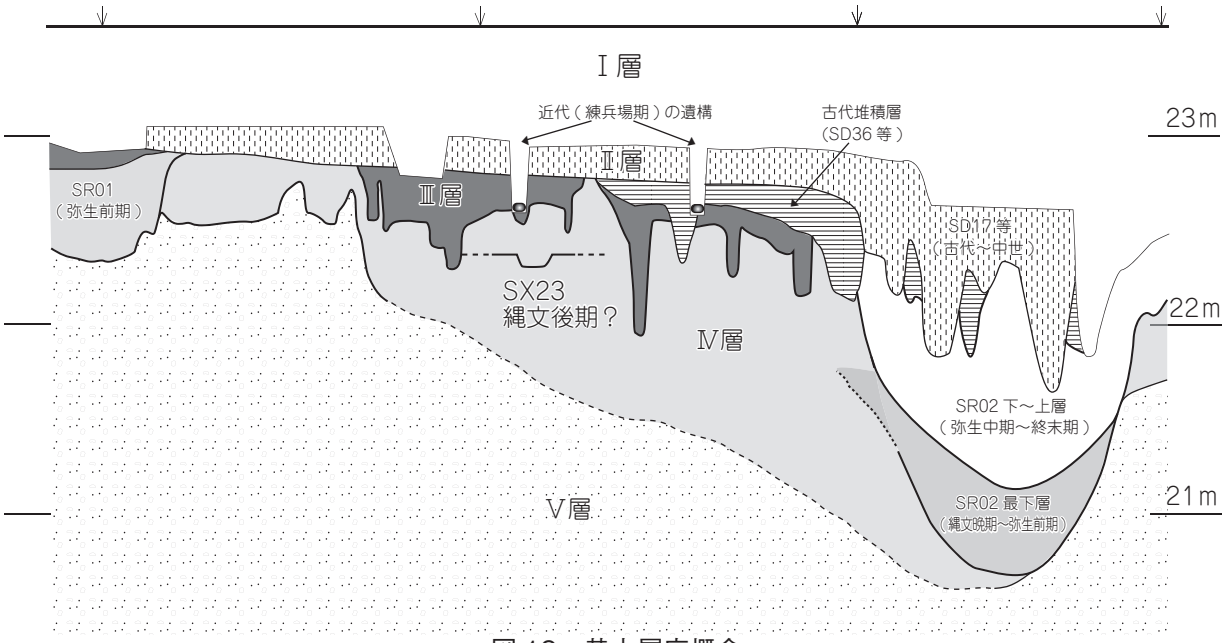


図 19　基本層序概念

能を停止した凹地状態にあったものと推定できる。

Ｂライン土層 (Ａ・Ｂ区東壁)

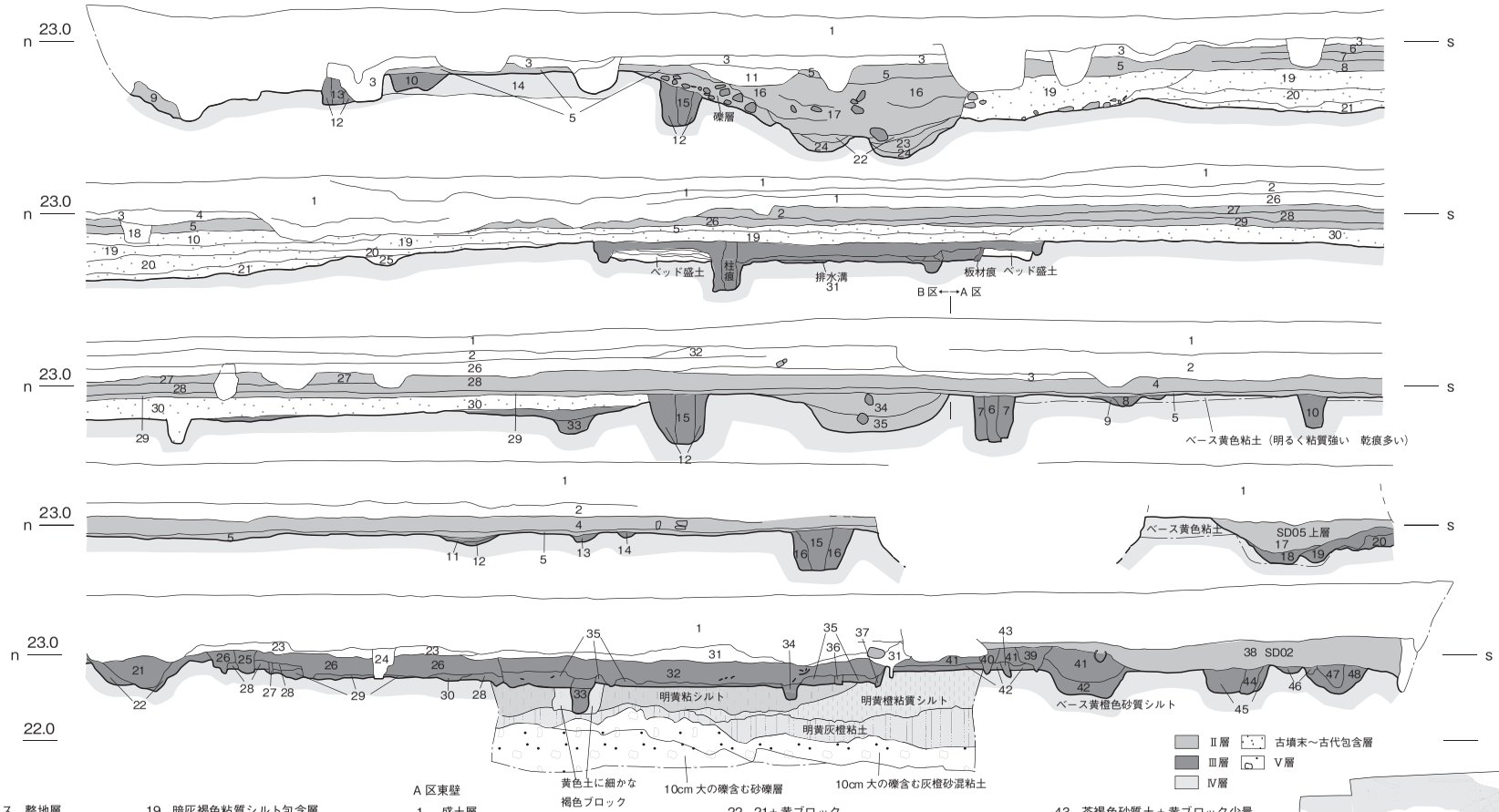
調査区の東壁の南北ラインの土層である。微高地上となる南側から SR02 が存在する低地に向かってⅣ層が降下していき、８世紀に埋没する SD18 以北には、Ａラインと同様に古墳時代後期～古代の須恵器等を包含する堆積層が存在する。SH01 が存在する南側微高地上では、平面検出に成功した竪穴住居跡以外に、竪穴住居跡の埋没土と見られるⅢ層が見られる箇所が存在しており、遺構の重複が著しい。

Ｃライン土層 (Ｃ・Ｄ・Ｅ区西壁)

南部はⅤ層の砂礫層が比較的浅い位置に見られ、微高地上となり、Ⅳ層の堆積が薄い。SH35 や貯蔵穴である SX36 等の弥生時代の遺構の深度が極端に浅く、これらの上面にはⅡ層がほぼ全域が見られるため、古代～中世段階の耕作に伴う大規模な削平が行われた可能性が高い。

北部に対応するＤ・Ｅ区では古代以降の溝が錯綜する。条里型地割に伴う坪界溝はⅡ層に類似した埋没土をもつ。

高橋　学 1995「臨海平野における地形環境の変貌し土地開発」『古代の環境と考古学』古今書院



B 区東壁

1　バラス　整地層
2　灰色シルト（バラス混）
3　明黄褐色砂質土
4　暗黄褐色砂質土
5　灰白色砂質土（Mn 混）
6　暗黄灰色砂質土（旧耕土）
7　淡灰白色砂質土
8　暗灰色砂質シルト
9　黒色粘質シルト SD24
10　淡灰黄色砂質シルト
11　淡灰色砂質土 Fe
12　濁黄色土
13　黄＋褐色ブロック
14　明黄色砂質ブロック
15　黒褐色粘質シルト
16　暗灰色砂質土（Fe 沈着層入る）
17　Fe 沈着層
18　黄灰色砂ピット
19　暗灰褐色粘質シルト包含層
20　灰茶色砂質シルト（SR02）
21　濁黄色シルト
22　Fe 層
23　灰色砂質土
24　灰色粘質土
25　暗茶褐色粘質シルト
26　盛土（漆喰片多量）
27　暗灰橙色砂質シルト
28　灰色砂質シルト
29　灰白色シルト
30　灰色粘質シルト
31　灰黒色粘質土
32　焼土・石・炭
33　暗茶褐色黄ブロック混
34　暗黒褐色粘質シルト
35　灰黒色粘質シルト

A 区東壁

1　盛土層
2　暗黄灰色砂質土※根石ピットと同じ土
3　灰色砂質土（旧耕土層）
4　淡灰色砂質土（旧耕土層）Fe 含む
5　灰白色砂質土（下面に Mn 沈着層）
6　黒褐色粘土
7　褐色粘土＋黄色粘土ブロック
8　茶褐色粘質土
9　茶褐色粘質土＋黄色粘土ブロック
10　褐色粘土＋黄色粘土ブロック
11　淡灰白色シルト（きめ細かい）
12　灰茶色粘土＋褐色粘土＋黄色粘土ブロック
13　茶褐色粘土＋黄色粘土ブロック
14　灰色シルト＋黄色粘土ブロック
15　茶褐色粘質土＋黄色粘質土ブロック層
16　茶褐色＋黄色粘質土ブロック層
17　灰茶色粘質土（黄ブロック少量混）
18　茶褐色＋黄色粘土ブロック層
19　灰茶色＋黄褐色ブロック層
20　濁黄灰色シルト層（淡灰色土がブロック状に混じる）
21　茶褐色粘質土
22　21＋黄ブロック
23　＝17 ただし黄ブロックを含まない
24　濁茶灰色シルト
25　茶灰色シルト＋黄ブロック
26　暗褐色砂質シルト　南ほど黄ブロック多い
27　暗灰色砂質シルト　板痕か
28　黄色砂質シルト＋褐色砂質土ブロック　古期貼床ベット層
29　褐色砂質土＋黄色ブロック　古期埋土
30　暗褐色砂質シルト
31　暗灰色褐色シルト層
32　暗茶褐色砂質シルト
33　32＋黄色ブロック
34　＝33
35　茶褐色砂質土＋黄色土ブロック　古期埋土か貼床か？
36　茶褐色シルト
37　茶褐色砂質シルト
38　灰色礫混砂質シルト SD02 埋土　北にも薄く広がる
39　灰色砂質土
40　淡灰褐色砂質土
41　茶褐色砂質シルト＋黄色土ブロック　SH 埋土か
42　41＋黄色土＋橙色土ブロック　SH 埋土か
43　茶褐色砂質土＋黄ブロック少量
44　淡茶灰色砂質土（黄橙ブロック細粒含む）
45　黄橙色砂質土＋淡茶灰色シルトブロック
46　＝42　41･42 の SH の壁溝か？
47　淡灰色シルト（新しいピット）
48　淡茶灰色＋黄橙色シルトブロック

0　2m
（1/80）

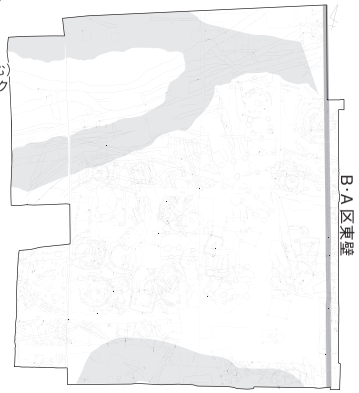
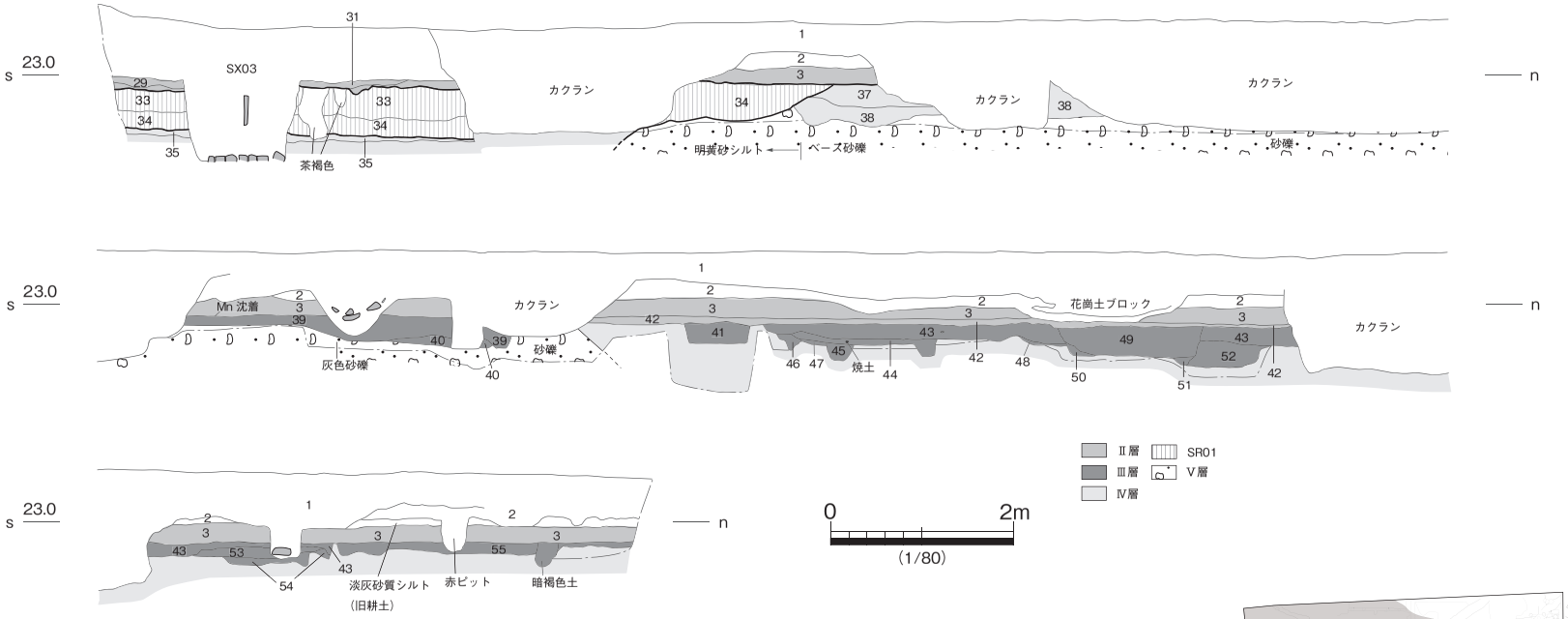


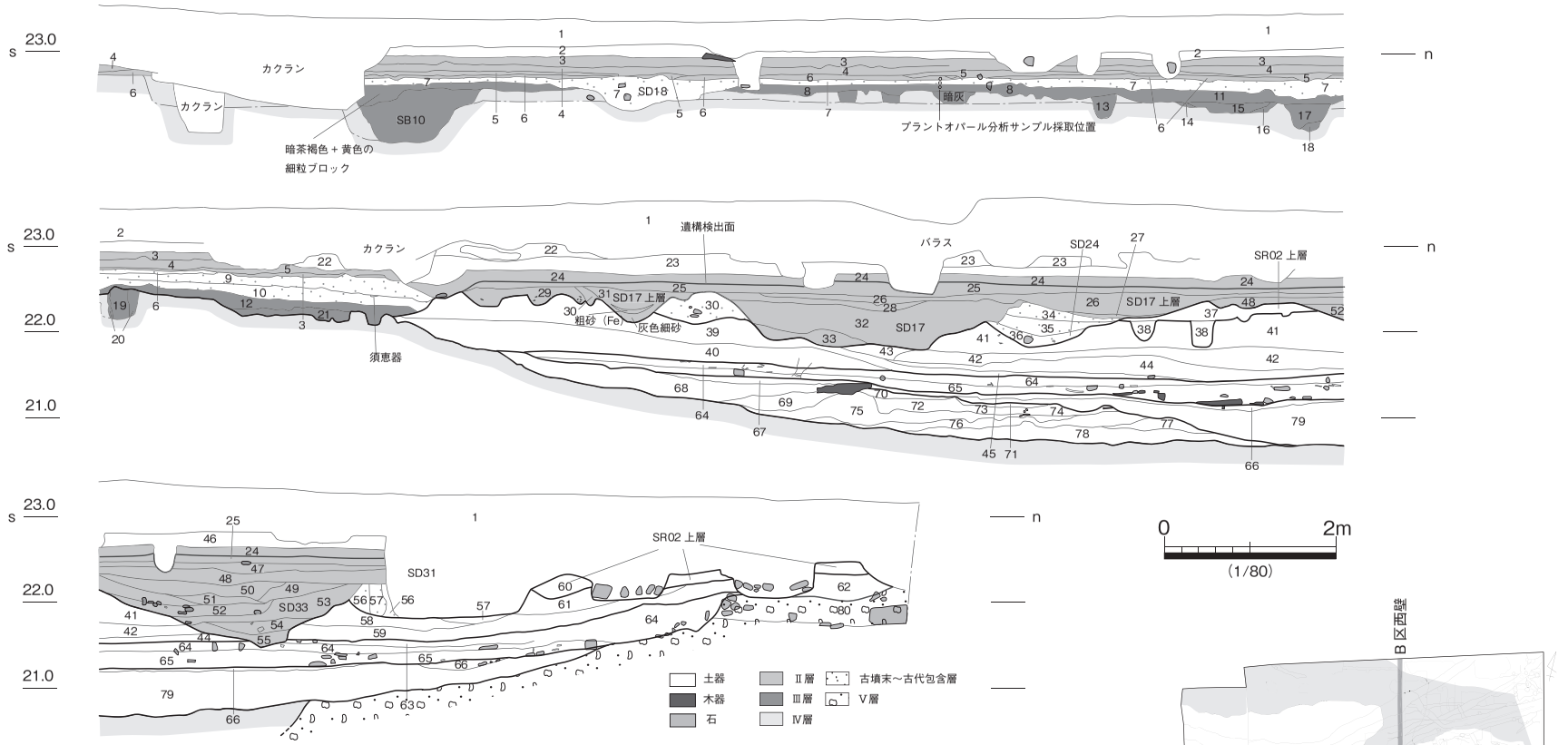
図 20　B・A 区東壁断面

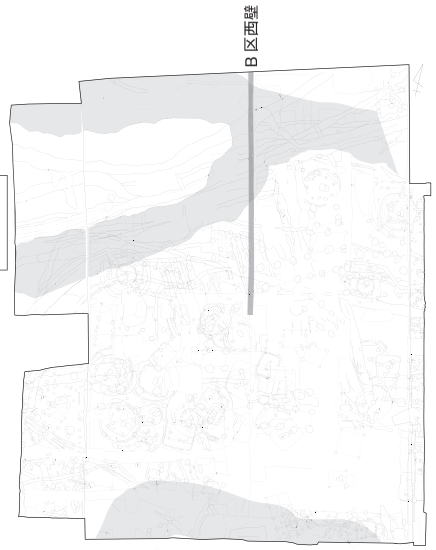


1　盛土層
2　暗黄灰色砂質土
3　灰色礫混砂質シルト
37　暗灰褐色砂質土
38　暗黄褐色砂質土（礫混）
39　暗灰色礫混粗砂
40　灰褐色粗砂
41　暗茶褐色シルト
42　灰褐色粗中砂
43　暗茶褐色砂質土
44　茶褐色砂質土（焼土・炭含む）
45　暗茶灰色砂質シルト（黄ブロック混）･･･SH14 を切るピット
46　淡い灰橙色砂質シルト（褐色ブロック混）
47　濁黄灰色砂質シルト　（貼床層）
48　黒色土（炭層）（焼土含む）
49　暗褐色粘質シルト（礫混）
50　＝49　（炭ブロック混）
51　濁黄灰色砂質土
52　黄色＋褐色土ブロック
53　黄色＋褐色土ブロック－褐色土が量的に多い　貼床か
54　黄色＋褐色ブロック－黄色土が量的に多い　壁溝か
55　暗茶褐色砂質シルト

＊29,31,33,34,35：図 23A 区南壁断面参照

図 21　A 区西壁断面

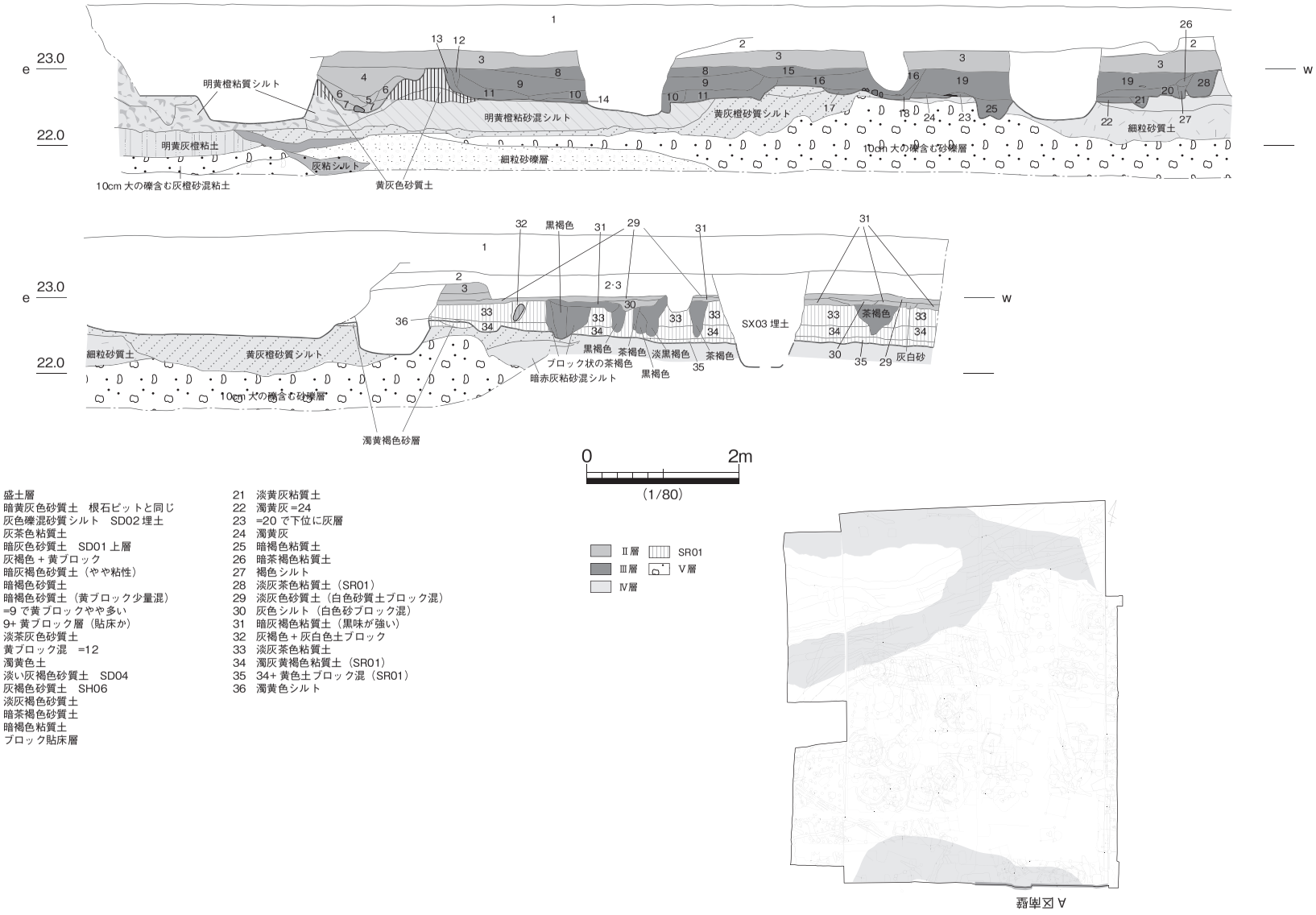




1　カクラン及び整地層
2　灰色シルト（旧耕土）
3　灰色シルト（Mn）
4　灰黄色シルト（Fe）
5　灰白色砂質シルト（淡小砂）
6　淡灰褐色粘質シルト
7　暗灰褐色砂質シルト（SD36 関係）
8　暗灰褐色粘質シルト（地山ブロック混）
9　暗灰色（やや淡い）粘土層
10　暗灰色（やや黄味）粘土層
11　暗灰褐色混砂粘質土（褐色土細粒ブロック混）
12　淡灰色砂質シルト（若干黄色土ブロック混）
13　暗灰色＋黄色ブロック
14　灰色粗砂
15　灰色砂質シルト
16　淡灰色砂質シルト
17　暗灰色粘土層
18　灰黄色ブロック
19　暗褐色＋黄色ブロック
20　淡灰色＋黄色ブロック大
21　灰色＋黄色ブロック
22　灰色粘質シルト（旧耕土）
23　黄褐色砂質シルト（練兵場期）
24　灰色砂質シルト（旧耕土）
25　淡灰橙色粘質シルト（Fe 沈着）
26　灰黄色粗砂（SD17 上層）
27　Fe・土器包含層
28　灰白色粗砂
29　暗茶褐色粘質シルト（弥生後期包含層）
30　灰褐色粘質シルト
31　灰色砂質シルト（SD17 上層）
32　淡灰色粗砂（シルト層）（SD17）
33　灰橙褐色粗砂（Fe 沈着）
34　紫灰褐色粘質シルト
35　暗茶灰色粘質シルト
36　灰白色粗砂（Fe 混）
37　暗茶褐色粘質シルト　土器小片多量　（SR02 上層）弥生後期
38　暗灰褐色粘質シルト
39　淡灰茶色粘質シルト（薄い Fe 斑）
40　暗灰茶色粘質シルト
41　淡灰茶褐色粘質土　中期
42　暗灰茶色粘質土　中期
43　灰色砂ラミナ
44　淡灰黄色粘質シルト
45　黄色粘質シルト層
46　暗灰色砂質シルト（旧耕土）
47　灰黄色～灰白色粗砂　（礫・土器小片混）
48　橙褐色粘質シルト（Fe 沈着）
49　暗灰褐色砂質シルト
50　暗灰褐色粘質シルト
51　灰白色砂
52　暗灰色砂
53　淡褐色粘質シルト
54　淡灰色細砂
55　暗灰褐色粗砂（Fe 沈着）
56　灰褐色粘質シルト
57　暗褐色
58　淡灰茶褐色粘質シルト
59　淡黄褐色粘質シルト
60　暗茶褐色　（SR02 上層）
61　淡灰茶色粘質シルト
62　淡黄褐色シルト
63　明黄色粘土層
64　暗灰色粘土層
65　灰黒色粘土層 (黒ベタ層)
66　茶色シルト J
67　淡茶色シルト (有機質含む)
68　暗灰青色砂
69　灰青色砂 (暗灰砂･泥炭質をラミナ状に含む)
70　暗灰青色砂（茶灰色と灰青白色砂の互層ラミナ）
71　乳灰青色砂
72　茶灰及び青灰色砂礫
73　黒色泥炭質
74　茶色泥炭質
75　明青灰色砂
76　砂混茶褐色シルト
77　粗砂質茶色シルト
78　淡青灰色砂礫
79　茶の下の砂礫
80　明黄色シルト（ベース）

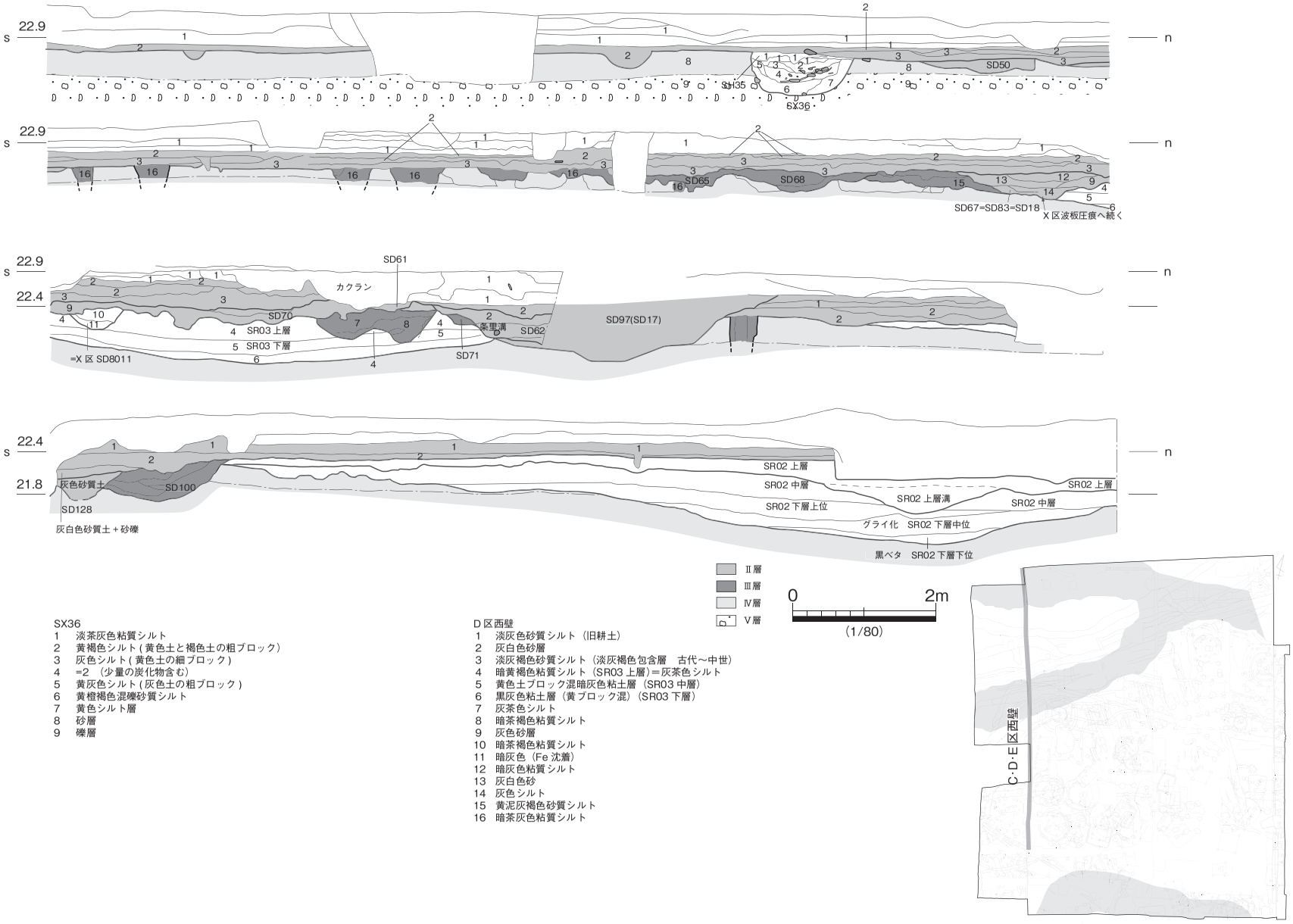
37、38、60＝SR02 上層
39 ～ 44、58、59、61、62＝SR02 中層
64、65＝SR02 下層
66、79＝SR02 最下層上位
67 ～ 78＝SR 最下層下位

図 22　B 区西壁断面



1　盛土層
2　暗黄灰色砂質土　根石ピットと同じ
3　灰色礫混砂質シルト　SD02 埋土
4　灰茶色粘質土
5　暗灰色砂質土　SD01 上層
6　灰褐色＋黄ブロック
7　暗灰褐色砂質土（やや粘性）
8　暗褐色砂質土
9　暗褐色砂質土（黄ブロック少量混）
10　=9 で黄ブロックやや多い
11　9+ 黄ブロック層（貼床か）
12　淡茶灰色砂質土
13　黄ブロック混　=12
14　濁黄色土
15　淡い灰褐色砂質土　SD04
16　灰褐色砂質土　SH06
17　淡灰褐色砂質土
18　暗茶褐色砂質土
19　暗褐色粘質土
20　ブロック貼床層
21　淡黄灰粘質土
22　濁黄灰 =24
23　=20 で下位に灰層
24　濁黄灰
25　暗褐色粘質土
26　暗茶褐色粘質土
27　褐色シルト
28　淡灰茶色粘質土（SR01）
29　淡灰色砂質土（白色砂質土ブロック混）
30　灰色シルト（白色砂ブロック混）
31　暗灰褐色粘質土（黒味が強い）
32　灰褐色＋灰白色土ブロック
33　淡灰茶色粘質土
34　濁灰黄褐色粘質土（SR01）
35　34+ 黄色土ブロック混（SR01）
36　濁黄色シルト

図 23　A 区南壁断面



SX36
1　淡茶灰色粘質シルト
2　黄褐色シルト (黄色土と褐色土の粗ブロック)
3　灰色シルト (黄色土の細ブロック)
4　=2 （少量の炭化物含む）
5　黄灰色シルト (灰色土の粗ブロック)
6　黄橙褐色混礫砂質シルト
7　黄色シルト層
8　砂層
9　礫層

D 区西壁
1　淡灰色砂質シルト（旧耕土）
2　灰白色砂層
3　淡灰褐色砂質シルト（淡灰褐色包含層　古代～中世）
4　暗黄褐色粘質シルト（SR03 上層）＝灰茶色シルト
5　黄色土ブロック混暗灰色粘土層（SR03 中層）
6　黒灰色粘土層（黄ブロック混）（SR03 下層）
7　灰茶色シルト
8　暗茶褐色粘質シルト
9　灰色砂層
10　暗茶褐色粘質シルト
11　暗灰色（Fe 沈着）
12　暗灰色粘質シルト
13　灰白色砂
14　灰色シルト
15　黄泥灰褐色砂質シルト
16　暗茶灰色粘質シルト

図 24　C・D・E 区西壁断面

第３節　縄文晩期から弥生前期の遺構と遺物

調査区南部にSR01、北部にSR02が存在し、その間の部分はⅤ層とした砂礫層が一部露出する微高地（旧中州）となっている。旧河道跡(SR01・02)ともに縄文時代晩期中葉までには形成されており、堆積状況から帯水と流水を繰り返す環境にあったことが想定される。また、SR02についてはその後も凹地として継続するが、SR01は弥生前期をもってほぼ埋没が完了している。

微高地上面における縄文期の遺構は、炭素年代によって想定される屋外炉跡（SX23）以外には見られない。SX23は上面に攪乱層が及び、Ⅳ層中位レベルで検出していることから見て、弥生前期以前はⅣ層の堆積途上にあった可能性が高い。

弥生前期の遺構は、C・D区を中心とした調査区南西部に集中し、3基の貯蔵穴跡(SK42、SX36・37)を確認している。貯蔵穴が分布するC・D区では、弥生中期以降の遺構に弥生前期土器が混入して見られることが多いことから、貯蔵穴に隣接して住居群等の居住遺構が営まれていた可能性が指摘できる。

貯蔵穴跡からの出土土器は、弥生前期前半期の古相を示す一括資料と評価できる。旧河道跡(SR01・02)出土資料には、貯蔵穴跡出土土器に後続する前期前半期新相の資料が見られることから、2小様式程度の短期間に少数の住居群と貯蔵穴を基本とした集落が営まれる景観が復元できる。これは、弥生中期後半以降の大規模集落が明確に形成される以前の典型的な集落状況を示しており、旧練兵場遺跡全体でこうした小規模な住居群が想定できる箇所が3地点程存在している。弥生時代前期後半は、明確な遺構は確認はできない。遺跡北西部に隣接する甲山南麓で当該期の遺物が表面採集されていることや、本調査区から約100m北側の第7次調査地で中期前葉の貯蔵穴を確認しており、小規模な住居群が頻繁に移動している状況が想定できる。

本節では、微高地上面の遺構の報告を行い、旧河道跡(SR01・02)については、第2分冊の第4章第8節を参照していただきたい。(信里)

SX36（図26～28）

遺構　C区西壁際で検出した不定形土坑である。C区の調査で東半分を検出し、その後Y区の調査で西半分を検出した。Y区はすでに「旧練兵場遺跡Ⅰ」で報告済みだが、今回の報告では両調査区の図面を統合し、遺構の全形を図示した。

SX36は、C区の弥生時代後期竪穴住居跡SH35の構築により、掘り形の上面が削平を被っている。しかし、SH35の掘削深度は当該遺構まで及んでいないことから、当該遺構の下半部は原形を留めている。検出面における大きさは、長径1.52m、短径1.36m、深さは最深部で0.5mを測る。断面形は逆台形を呈し、北側側壁に階段状のテラスが付属する。

当該遺構は基盤層が黄色系シルトから砂層に変化する境付近に構築されている。遺構のすぐ北で基盤の砂層（bライン8層）が南に向かって下降し、基盤の黄色系シルト層（同7層）がそれに沿って堆積する位置に当たる。したがって当該遺構は黄色シルト面で検出したが、床面付近まで掘り下げると、礫層が露出する。基盤層中には10～20cm大の礫が含まれており、遺構内に堆積した埋土も同サイズの礫が多数含まれる。

遺構内堆積層で遺物が最も多く出土した層位は、底面から約0.15～0.4m上部の黄褐色系ブロック層（aライン3層、bライン4層）である。その層位では土器片が遺構内一面に広がり、細かな炭化物粒

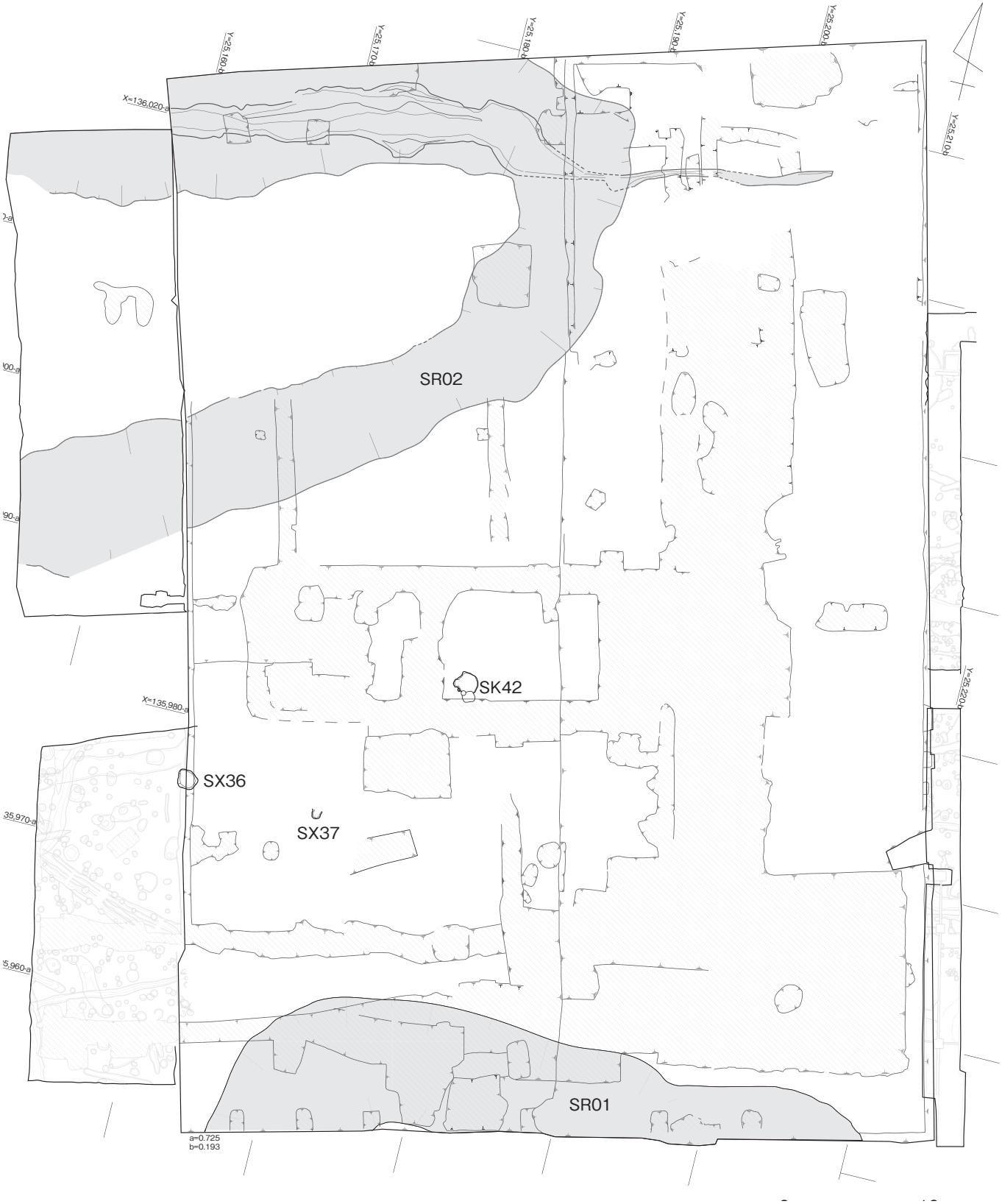


図 25　縄文晩期～弥生時代前期遺構分布

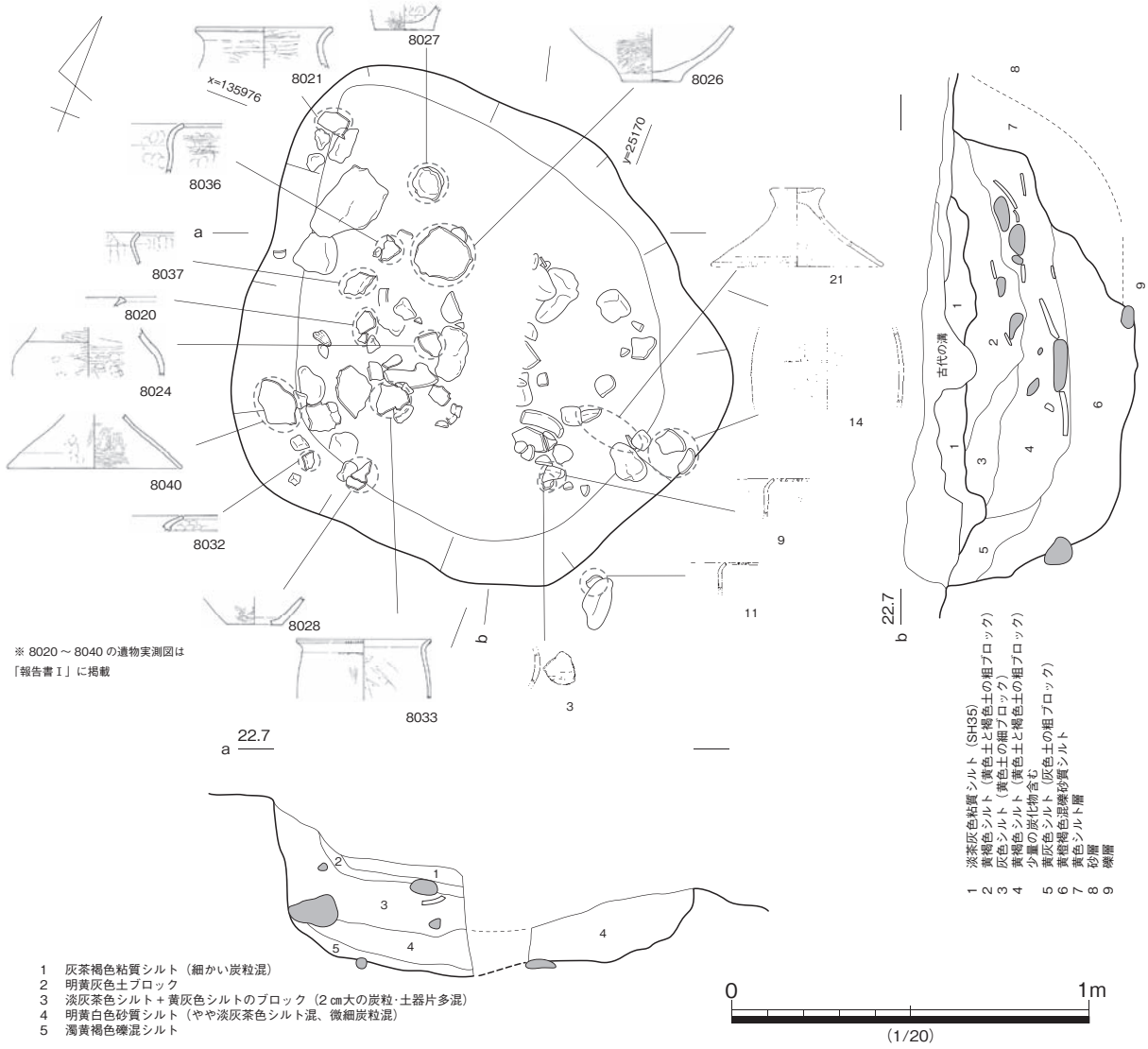


図 26　SX36 平・断面

が含まれていた。層厚は 0.3m で、層のさらに上部は基盤土ブロック層で覆われる。遺構の床面には厚さ 0.15m の黄褐色系砂質シルト層が堆積していた。基盤層に類似し、炭等の混在はほとんどない。

遺構の機能としては、底面付近に炭化物を含まない埋土層が存在すること、遺物出土層に含まれる炭化物が少量であること等から、貯蔵穴等に使用した後、ごみ穴として使われ埋没したという想定が妥当であると考えられる。(森下)

土器　1 ～ 7 は壺である。1 は口頸部境に段をもたない壺であり、肉厚な口縁部が短く外反する。2 は口頸部境に段をもつ壺で、段より上位で口縁部が短く外反する。3 の壺胴部片には、ヘラ描きによる山形文が見られる。8 ～ 13・15 ～ 17・19・20 は如意形口縁甕である。いずれも口縁部の外反の度合いが弱く、胴部外面の沈線は 1 ～ 2 条である。13 は胴部外面上位にヘラ描き沈線間に山形文を描く。19・20 は甕底部片であり、胴部と底部の境は明瞭に区分される形態をもつ。14・18 は突帯文土器系の甕である。14 は頸胴部境に 1 条のヘラ描き沈線をもち、頸部に山形文を描く。胴部外面は、縦方向のケズ

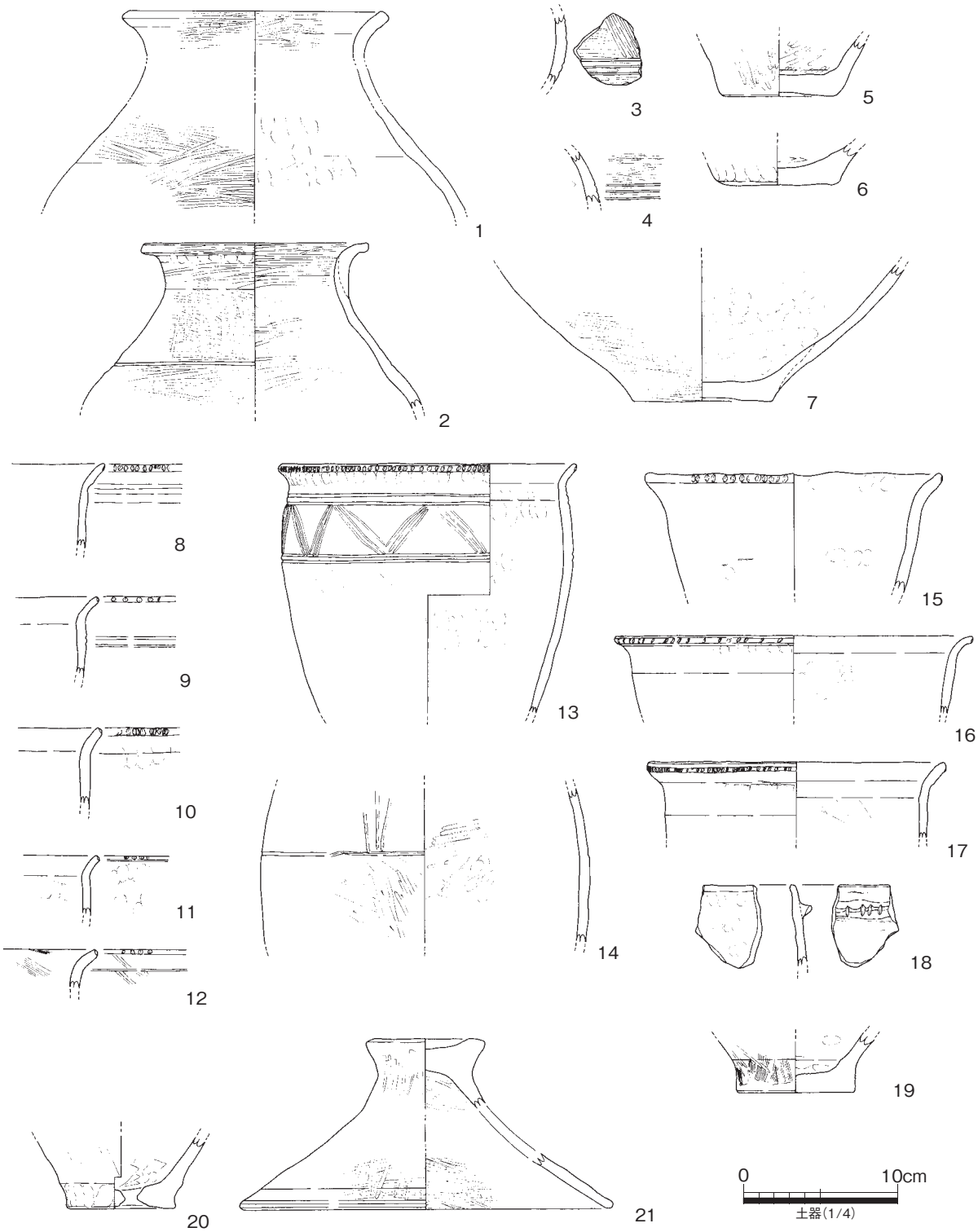


図 27　SX36 出土遺物（1）

リ調整を施した後、散漫な縦位のミガキ調整を行う。18 は口縁上端部を面取りし、同端部からやや下がった位置に細い刻目突帯を施す。14・18 ともに、胎土は他の如意形口縁甕と差異がない。21 は蓋であり、形態から甕に伴うものと見られ、内外面ともにミガキ締める。

壺及び甕に見られる形態的な特徴や、突帯文系の甕を伴うことから、初期遠賀川式土器群の一括資料

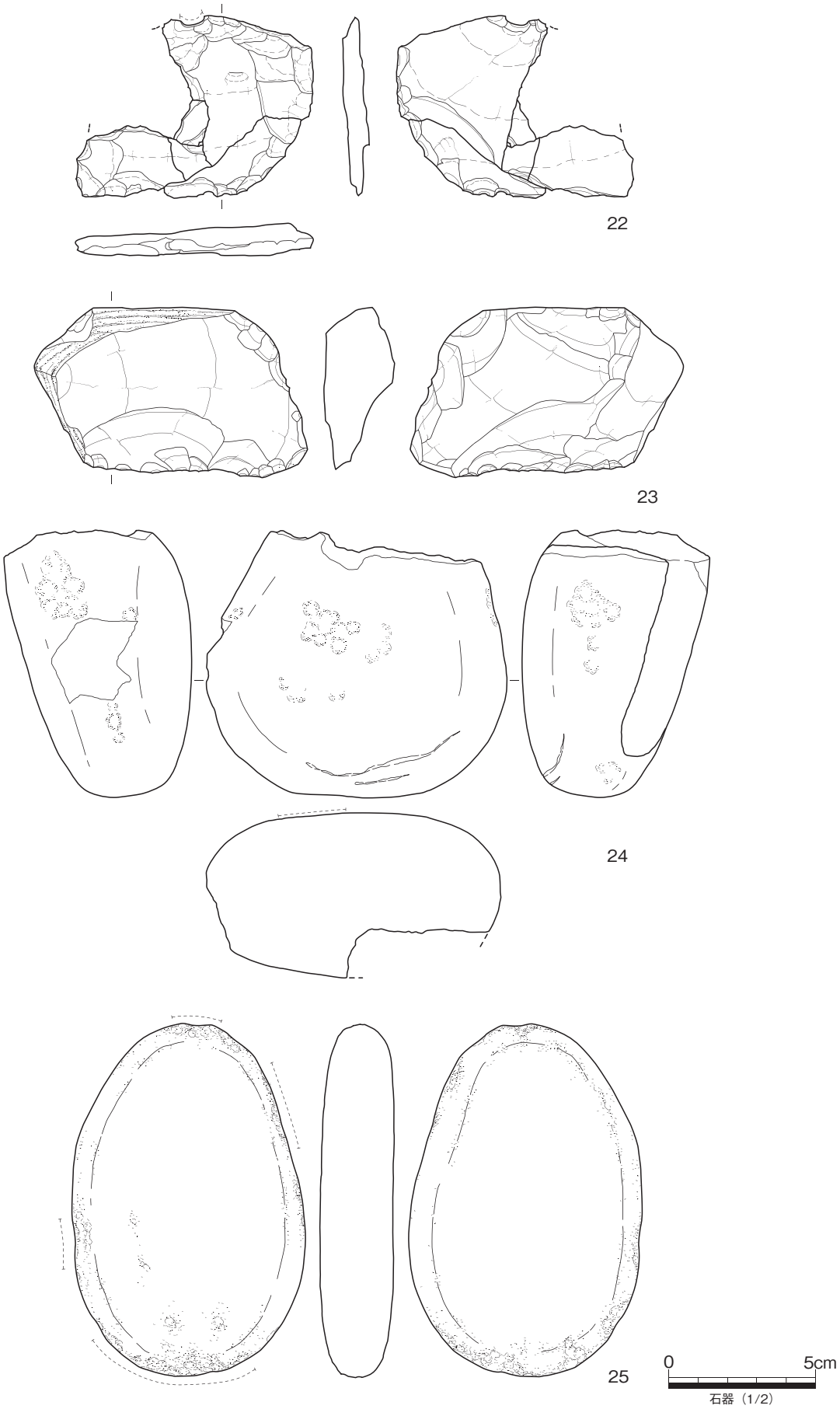


図 28　SX36 出土遺物（2）

と捉えることができ、本遺構の廃絶時期を弥生時代前期初頭と推定する。

（信里）

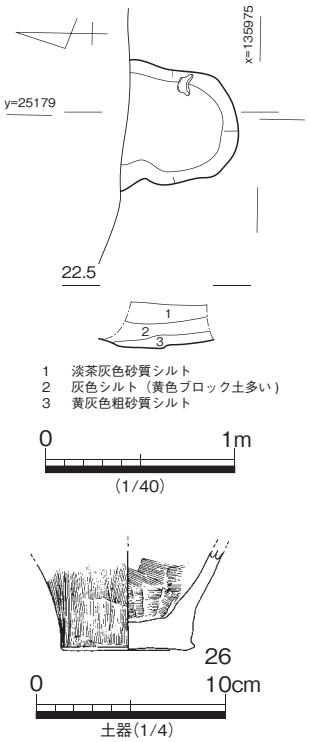


図 29　SX37 平・断面・出土遺物

SX37（図 29）

遺構　C区西側で検出した不定形土坑である。大部分を後世の竪穴住居跡等に破壊され、一部のみが残る。出土遺物は弥生前期頃と推定できる土器片が出土したのみである。長さ 0.59m 以上、幅 0.6m、深さ 0.28m を測る。埋土は基盤層に類似した黄色系シルトで、1 層は茶色味を帯び、2 層は基盤土ブロックを含む灰色土、最下層の 3 層は基盤土に極めて類似した土層である。（森下）

土器　26 は甕底部片であり、胴部との境が明瞭な厚みのある底部をもつ。弥生時代前期初頭の初期遠賀川式土器と見られる。（信里）

SK42（図 30・31）

遺構　D区南東で検出した土坑である。平面形は円形で直径 1.5m、深さ 0.45m を測る。断面は円筒形を呈し、側面の傾斜角が垂直に近い。底面は中央がやや窪むものの、概ね平坦面を形成している。埋土は基盤層に類似した黄色土ブロックを多く含むシルト層で、底面から 0.15m 程浮いて土器片がまとまって出土した。炭化物や焼土はほとんど出土しなかった。土坑の機能としては、SX36 と同様に貯蔵穴として掘開された可能性が高い。（森下）

土器　27 ～ 39 は出土遺物である。27 の壺は口頸部及び頸胴部境に 1 条沈線を施し、頸部に無軸木葉文を描く。木葉文は、十字の沈線によって分割された区画に描かれており、四葉の交点となる中央部に珠点をもたな

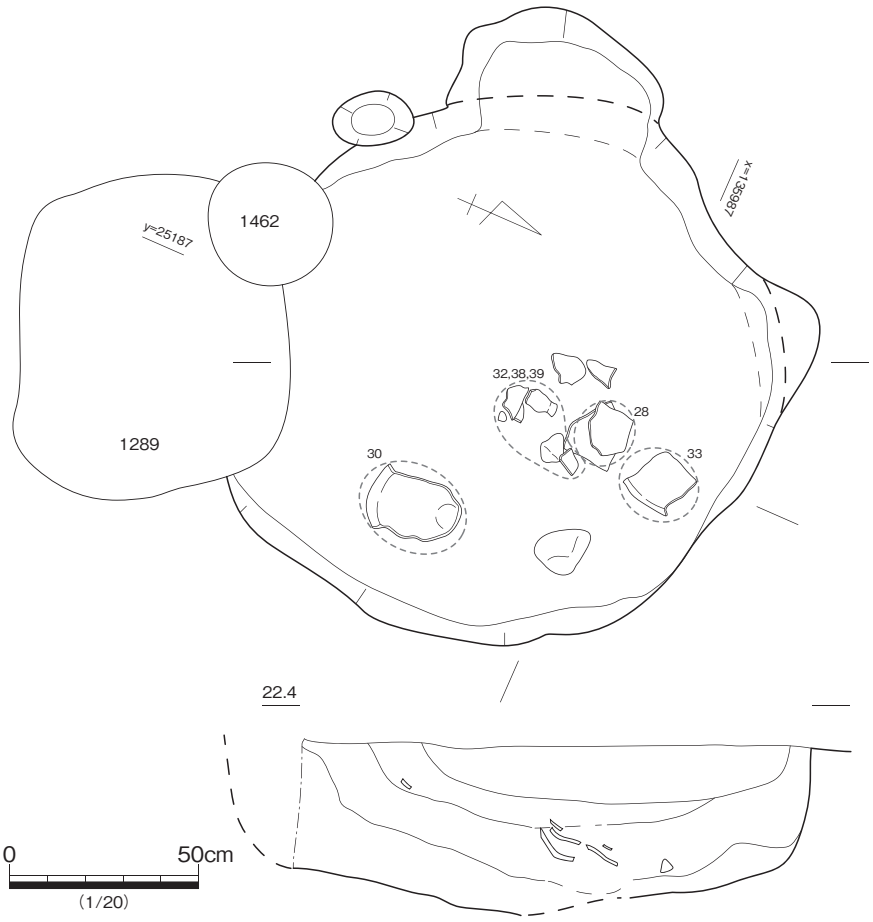


図 30　SK42 平・断面

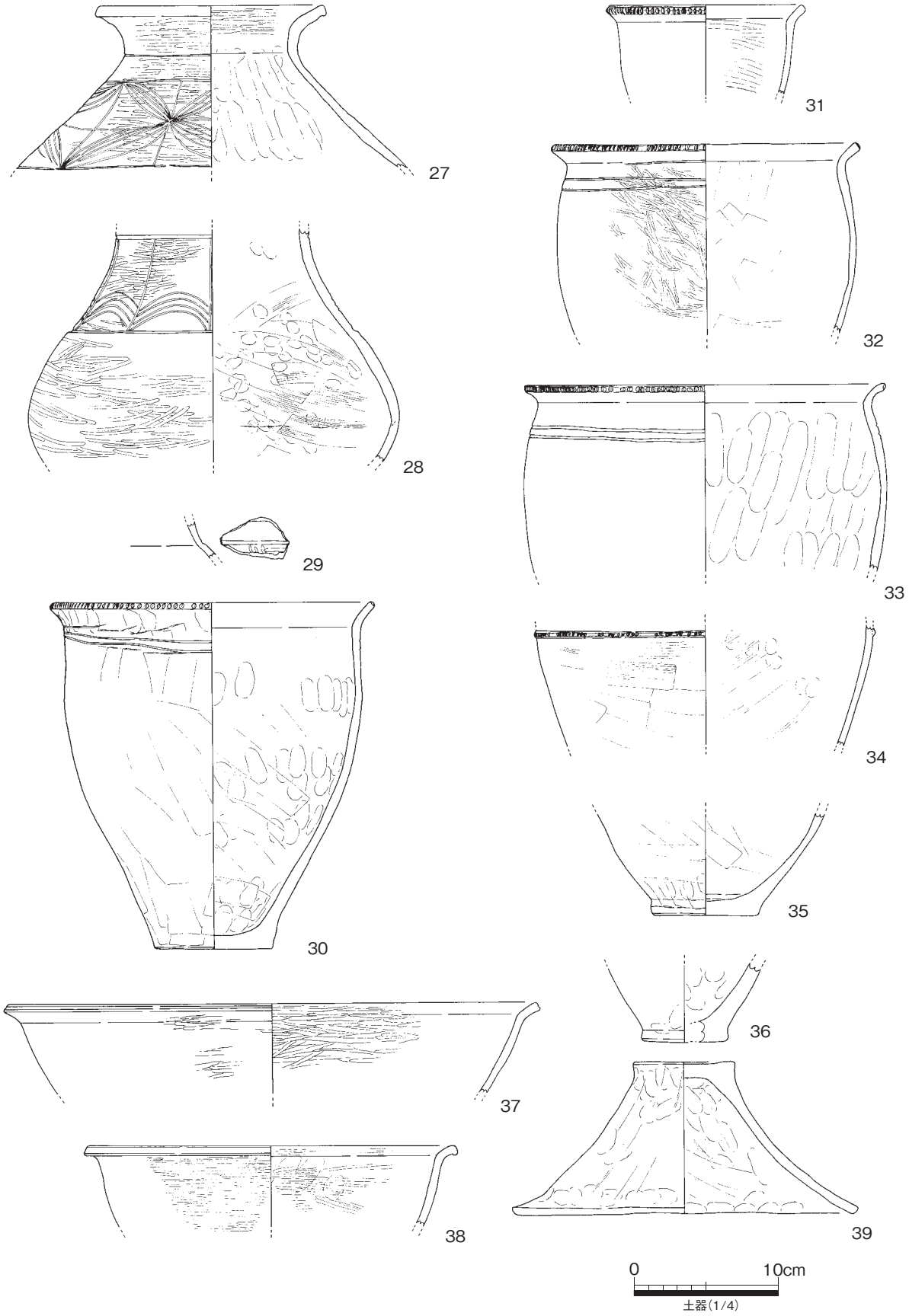


図 31　SK42 出土遺物

い。28 は沈線によって縦位に分割された頸部に上向き重弧文を描く。30 ～ 36 は甕である。いずれも口縁部が「く」の字状に屈曲し、底部が残存する 30・35・36 は、底部と胴部の境が不明瞭となっている。30・32・33 は胴部外面に２～３条のヘラ描き沈線をもつが、沈線は口縁部よりやや下がった位置に施されていることが特徴である。34 は白色の胎土をもち、頸胴部境に１条の刻目突帯を施す。頸部より上位の形態は不明であるが、突帯文土器系の甕である可能性が高い。37・38 は鉢であり、内外面をミガキ締める。39 は甕用の蓋である。

壺や甕に見られる形態から、本遺構出土資料は弥生時代前期前半期に位置付けられる。また、前期初頭の SX36 出土資料よりも新しい段階の属性を備えることから見て、前期前半期でも新相を示す一括資料と判断できる。(信里)

第４節　弥生時代中期から古墳時代前期の遺構と遺物

凹線紋出現期である弥生中期後半古段階を境にして、竪穴住居・掘立柱建物等の居住遺構の形成が開始され、以後古墳前期まで継続する。調査区南部の SR01 は埋没・平坦化しており、北部の凹地として継続する旧河道 (SR02) を除いたほぼ全域に竪穴住居等の居住遺構が展開する。柱穴配置からの復元したものを含めて、竪穴住居 50 棟、掘立柱建物を 25 棟検出したが、A・B 区等調査区東半分は、攪乱を受けている範囲が広く見られることや、建物復元を断念した当該期の柱穴も多く存在していることから見て、住居等の実数は更に増加するものと見なければならない。

調査区南西部の C 区、同北東隅の B 区では、遺構検出面に基本層序Ⅴ層 (砂礫層) が露出し、微高地 (旧中州) と推定できる。微高地を除く範囲では、攪乱部分を除き、遺構の重複に伴って形成された基本層序Ⅲ層 (黒褐色粘土) が広範囲に認められた。このⅢ層上面で精査を開始し、最終的に基本層序Ⅳ層 (黄灰色シルト) まで掘り下げ、遺構検出を行った。

弥生時代の竪穴住居跡は、平均で 0.1 ～ 0.2m 程の壁高の残存を見るに過ぎない。これは、多くの遺構がⅢ層中位から下位でしか掘り込み面を把握することができないことや、微高地 (旧中州) 上面では、中世以降の耕作土であるⅡ層によって削平を受けていることに起因する。したがって、周溝を伴い壁高が低い SH55 や柱穴配置で復元した住居は、平地式ではなく、元来は掘り込みを伴う住居であった可能性が高い。

住居跡内の埋土や床面等からは、ガラス玉や銅鏃等の遺物が多く見られる。これらは、意図的な埋納や遺棄されたようなものではなく、廃絶時の埋め戻しに伴って廃棄された状態で出土している。また、銅鏃は弥生後期前半新段階以降、終末期新段階まで継続して確認できる。住居跡の炉跡内の炭化物層を中心に、土壌水洗を実施したところ、微細な骨片等を回収することができた。これらに伴う同定については、第２分冊第４章第３節を参照していただきたい。

D 区では、弥生後期後半古段階に属する住居 SH51 で鍛冶炉を確認した。調査中に鉄器片を出土を多く確認したため、住居跡の炉跡及び下位の埋没土を対象として、土壌水洗を実施し、鍛冶作業に伴う微細遺物の回収に行った。微細遺物については、分析に供し、その結果を第４章第５節に掲載しているので参照していただきたい。(信里)

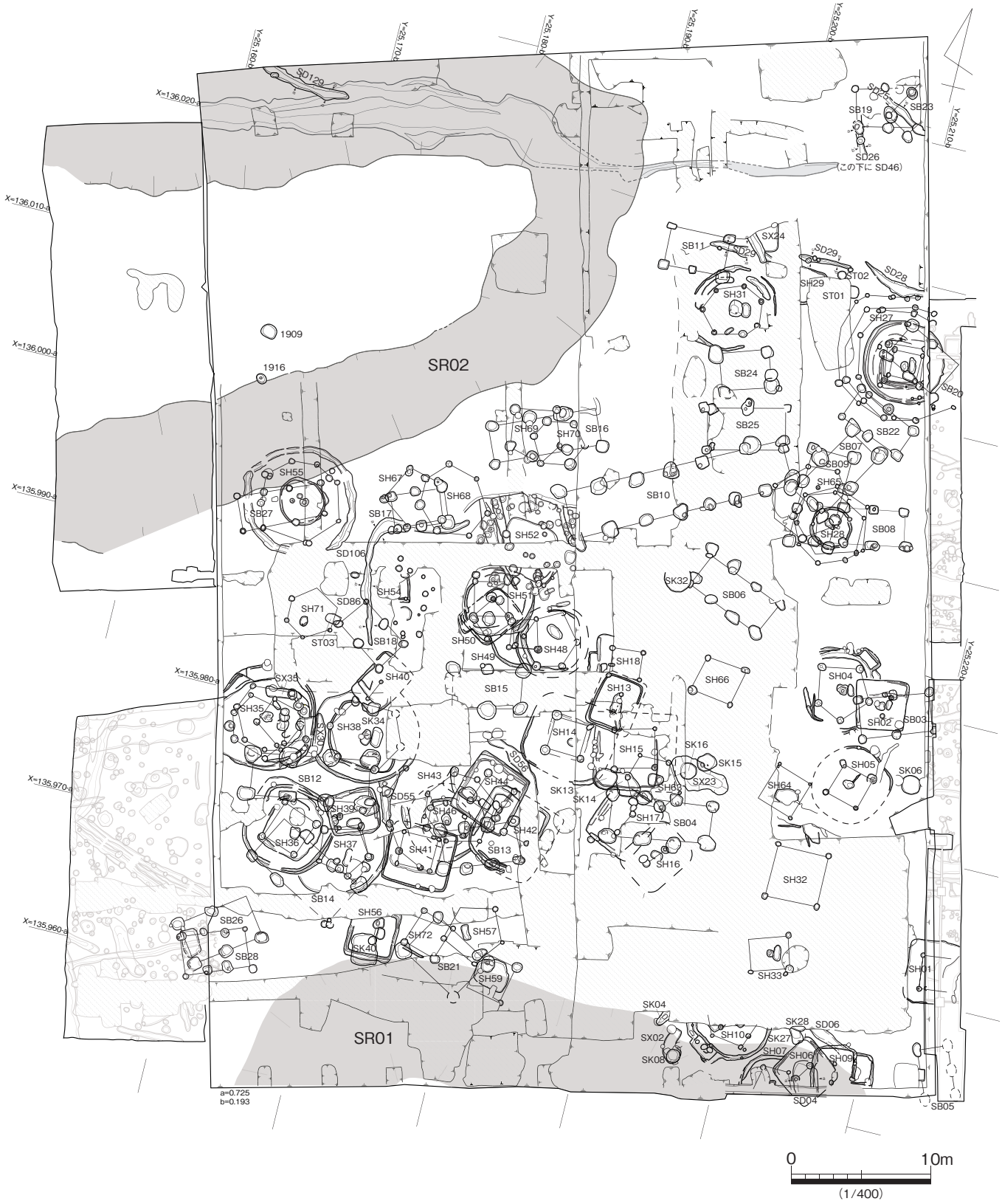


図 32　弥生時代中期～古墳前期の遺構分布

遺構名	平面形	張り出し	建替	直径	長辺	短辺	面積	主柱穴	炉形状	炉数	玉	銅	鉄	砥石	時期	備考
SH01	方形				4.7		22.1	4				1	1	2	古墳前期前半中段階	銅鏃 1, 鉄鏃 1
SH02	方形				3.8	3.55	13.5	2	円形＋楕円形	2				1	弥生後期後半古段階	
SH04	多角形	○		7			22	5	円形＋楕円形	2					弥生後期前半新段階	
SH05	円形			5.5			17.3	4	円形＋排水溝	1	1				弥生後期後半古段階	ガラス玉 1
SH06	方形				3.8	3.7	14.1	2	地床炉	1	1			1	弥生終末期古段階	
SH07	円形			4.7			14.8	5	?	?			1		弥生後期前半新段階	鉄鏃 1, 規模推定
SH09	方形	○			4.1	3.05	12.6	2					1		弥生後期前半新段階	ヤリガンナ ?1
SH10	円形	○		5.8			18.3	2	円形	1				1	弥生後期後半古段階	
SH13	方形				4.05	3.35	13.6	2	楕円	1			1	3	弥生終末期中段階	鉄片 1
SH14	方形				5.9	6.4	37.8	4			2	1			弥生後期後半古段階	規模推定 , 管玉 1, 勾玉 1
SH15	方形		?		5.8		11.6	4						1	弥生終末期新段階	規模推定
SH16	方形？							2	楕円形	1	3				弥生後期後半新段階	ガラス玉 3
SH17	方形				6.9	6.1	42.1	2					1		弥生後期後半古段階	鉄鏃 1, 規模推定
SH18	方形	○						4							弥生終末期新段階	
SH27	円形		1	5.8			18.3	4	円形＋隅丸方形	2	1		2		弥生後期前半中～新段階	鉄鏃 1, 鉄器片 1, 銅鏃 1, ガラス玉 1,
SH28	円形		1	2.9			9.2	2						2	弥生後期前半中段階	
SH29	方形								地床炉				1		弥生後期前半中段階	袋状鉄斧 1
SH31	円形			6.2			19.5	7	円形＋方形	2				1	弥生後期前半古段階	朱精製容器 1
SH32	方形？				8		64	4							弥生終末期古段階	規模推定
SH33	円形？							4	円形＋隅丸方形	2					弥生後期前半新段階	
SH35	円形		3	7.5			23.6	5～6	円形　隅丸方形	3		3	1	2	弥生後期前半新～後半古段階	銅鏃 3, ヤリガンナ 1, ガラス玉 2
SH36	方形		1		6.3	6.2	39.1	4	隅丸方形	1		1		2	弥生後期後半新段階	不明銅製品 1
SH37	多角形								隅丸長方形	1					弥生後期前半新段階	
SH38	多角形							6	楕円形+隅丸方形	2			1	2	弥生後期前半新段階	ヤリガンナ 1
SH39	方形				3.7	3.3	12.3	2		1			1	2	弥生終末期古段階	鉄鏃 1
SH40	方形				4.1	2.8	11.5							1	弥生終末期新段階	
SH41	方形							4				2			弥生後期後半古段階	
SH42	方形				5.8	5.6	32.5	2				1		2	弥生終末期新段階	焼失住居 , 銅鏃 1
SH43	円形			7.5			23.6	7	円形	1					弥生中期後半新新相	周溝
SH44	方形				4.65	4.4	20.5	4	隅丸方形	1		2			弥生後期後半新段階	
SH46	円形			5.5			17.3	6	円形	1					弥生後期前半新段階	規模推定
SH48	円形			5.2				6	楕円形	1	1		1		弥生後期前半中段階	ガラス玉 1, 鉄器片 1
SH49	円形							4	円形	1					弥生後期前半古段階	遺構配置から時期推定
SH51	方形	○			4.9	4.8	23.6	4	円形	1			6	3	弥生後期後半古段階	鍛冶遺構
SH52	方形				3.9	3.8	14.9						1		弥生終末期古段階	鉄片 1
SH54	方形				1.7	0.9	1.6								弥生中期後半新段階新相	
SH55	円形			7			22	8	円形	1			1	1	弥生中期後半新段階新相	周溝 , 刀子 1
SH56	方形				3.75	3.5	13.2	2	隅丸方形	1		1	1		弥生後期後半新段階	鉄片 1, 銅鏃 1
SH57	円形？							5	隅丸方形	1					弥生後期後半古段階	
SH59	方形？							4							古墳前期前半古段階	
SH63	円形？							6	円形	1				1	弥生後期前半中段階	
SH64	方形？							4							弥生終末期新段階	
SH65	円形？							7	楕円形	1					弥生後期前半新段階	
SH66	方形？							4							弥生後期後半新段階	
SH67	円形？							5							弥生中期後半古段階	遺構配置から時期推定
SH68	円形？							7							弥生中期後半中段階	遺構配置から時期推定
SH69	円形？							5							弥生中期後半古段階	遺構配置から時期推定
SH70	円形？							6							弥生中期後半中段階	遺構配置から時期推定
SH71	円形？							6	楕円形	1			1		弥生後期前半新段階	針状鉄器 1, 鍛冶遺構
SH72	方形？							4				1			弥生終末期古段階	

表 11　竪穴住居跡一覧

SH01（図 33･34）

遺構　Ａ区南東の調査区東壁際で検出した竪穴住居跡である。一辺 4.7m の方形を呈し、1/3 が今回の調査区の東に外れ、平成９年度調査の SH13 に接続する。今回の報告では両者を統合して図化した。床面の隅から南北それぞれ１m 内側で、直径 0.3 ～ 0.32m の主柱穴跡２基を検出した。平成９年度調査区の２基（P08・P01）と組み合い、主柱穴は４基で構成される。住居中央部が調査区間の僅かな未調査部に当たるため、炉跡は確認できない。建物の方位は北から約６度西に偏る。

Ａ区東壁断面から住居跡の構造を検討すると、当該住居跡の埋土の上面は中世以後の包含層（Ⅱ層）が覆っており、Ⅱ層下面から住居跡床面までの深さは 0.35m を測る。Ⅱ層形成以前に削平を被っている可能性が高い。埋土上部は暗茶褐色砂質シルト（第２層）が約 18cm 堆積し、弥生時代終末期の土器片、焼土、炭化物が集中して出土した。平成９年度調査 SH13 でも同様に土器集中部が調査されており、住居跡の南側から中央付近にまとまって投棄された土器群と言える。土器片の検出レベルは一様に床面から 0.15 ～ 0.2m 浮いており、住居廃絶後に投棄されたものと推定される。

図 33､2 層は主柱穴跡２基のそれぞれの外側の層厚が薄く､その下に黄色土ブロックを多く含む土層（6 層）が堆積する。この第６層は上部が平坦で、主柱穴跡を境に中央部では極端に薄くなること、また南側の壁溝を境に途切れることから、貼床層と考える。つまり、主柱穴跡の外側は貼床によるベッド状遺構が巡っていたものと判断できる。

住居跡中央部の床面直上で厚さ 0.02 ～ 0.05m の黄色土ブロック混じりの土層を検出した。この土層は小粒の炭化物や焼土を含み、層の上面にわずかな凹凸が存在する。ベッド状遺構下段部に残る踏込み等による土壌化層と考えられる。この土壌化層及び貼床層の上面で、焼土集中部を検出した。これらの焼土は洗浄して泥等を除去した結果、直径１～ 2.5cm の小粒土で構成されることが判明した。回収できた焼土の総重量は 351.12g を測る。

なお､焼土の一部（焼土７）は黒化し､顕微鏡で観察すると微小な金属質の物質が含まれていたため､表面の蛍光Ｘ線分析を行ったが、金属成分は検出できなかった。

土器等の遺物は、廃絶後の流入土とした２層中で多く出土した。土器以外の出土遺物は、砥石２点、鉄鏃１点、銅鏃茎部と推定する青銅器小片１点がある。このうち、砥石 59 は住居跡中央付近の床面直上層で出土した。その他は２層中の出土である。(森下)

土器　40 は広口壺の口縁部片であり､胎土中に雲母片を多く含む。41 は口縁部が短く屈曲する広口壺で、胎土中に雲母片をやや多く含む。42 は頸部から口縁部が連続して外反する広口壺である。43 の二重口縁壺の口縁部外面には、強いヨコナデに伴う強い稜線が見られる。44 は大型二重口縁壺の口縁部片であり、胎土中に雲母片を多く含む。45 は吉備系の細頸壺の胴部片で、混入品である。46 ～ 48 は甕口縁部片である。51 の高杯は白色系の胎土をもち、弥生時代後期後半に属する混入品と見られる。52 の高杯は精製された胎土をもち、杯部の内外面をミガキ締める。

53 は、胎土中に角閃石を多く含み、内外面に赤色顔料の付着を認める高杯であり、備中地域からの搬入土器である。形態から、備中地域のＶ -5 様式や鬼川市Ⅲ式の所産と考えられるが、他の土器群より古相を示すことから、混入品の可能性が高い。

49・50・55 は鉢である。55 は弥生時代からの系譜を引き継ぐ鉢の最終形態に近いものであり、古墳時代前期の所産である。54 は器台の口縁部であり、弥生時代後期初頭の所産である。

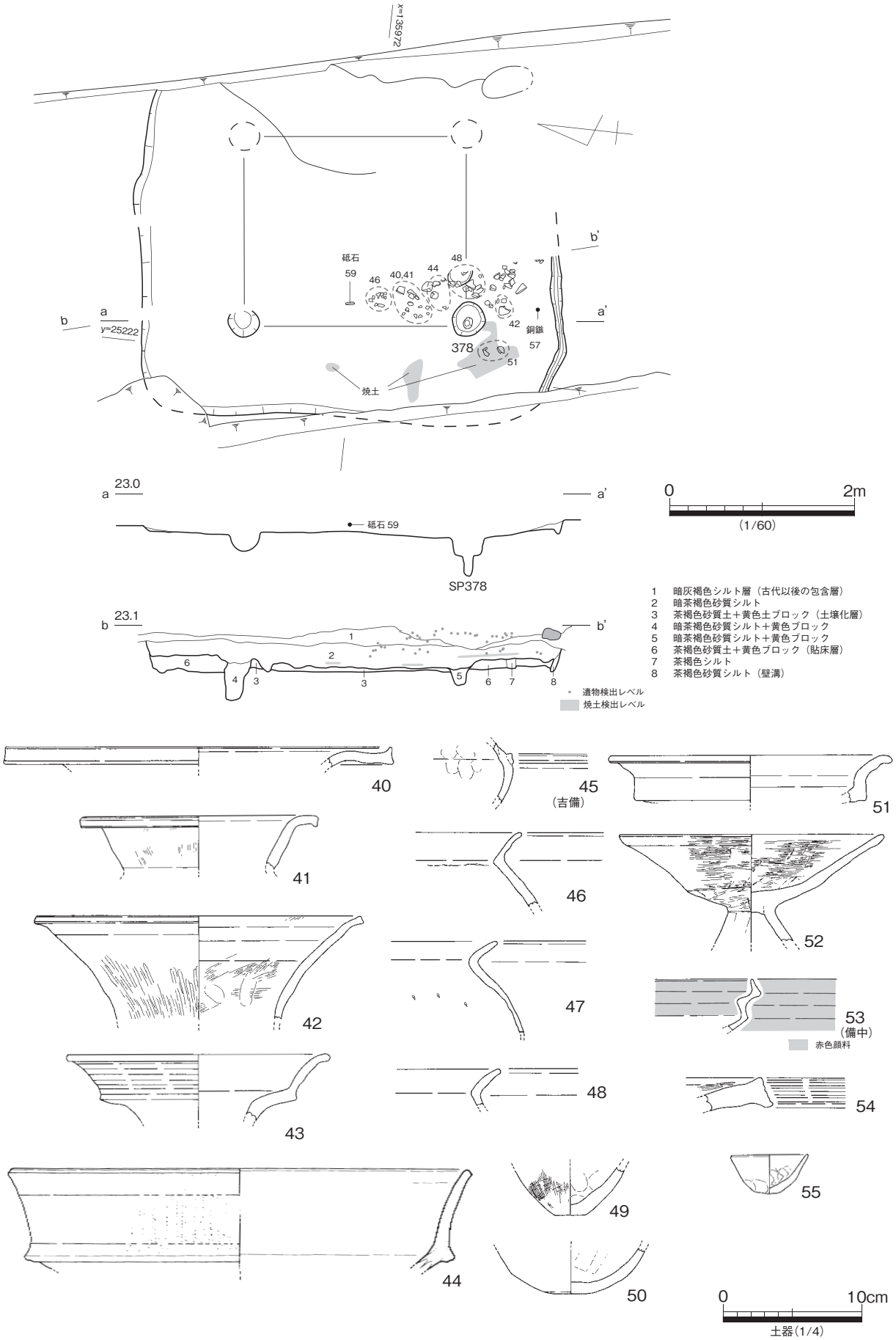


図 33　SH01 平・断面・出土遺物（1）

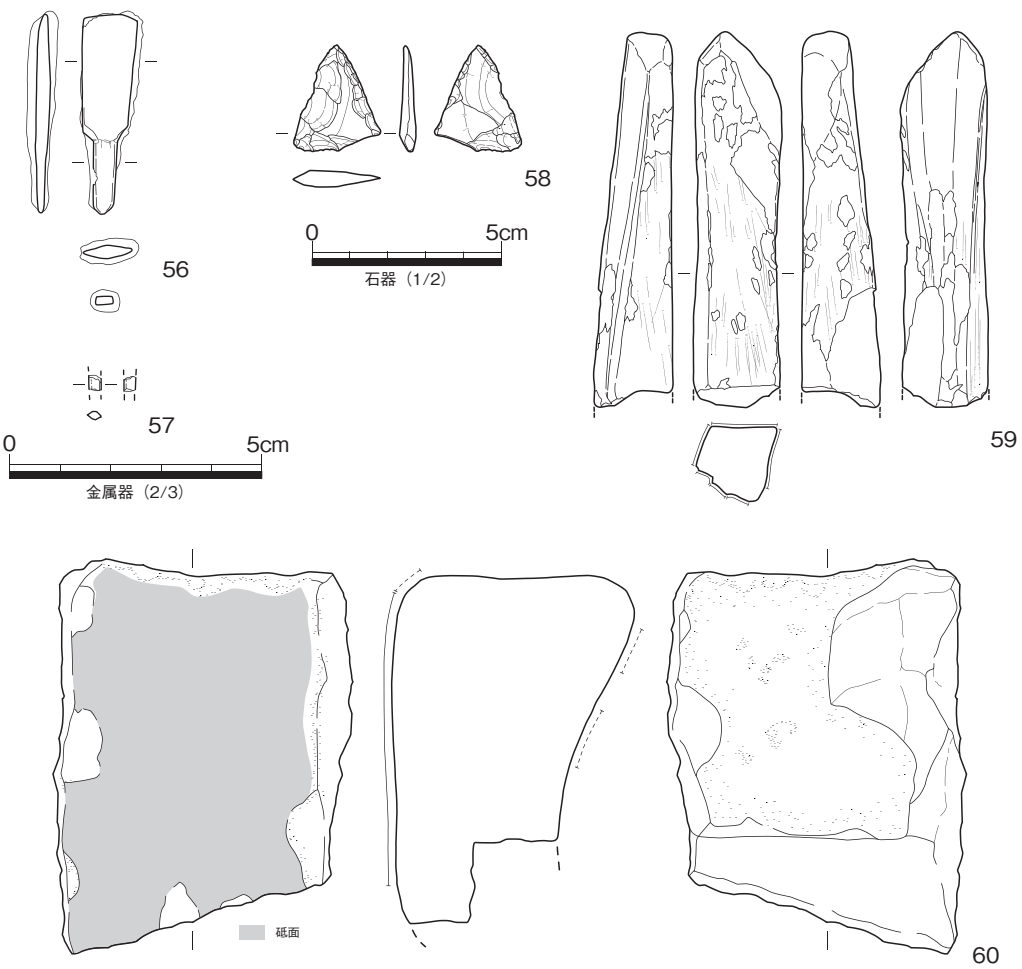


図 34　SH01 出土遺物（2）

金属器　56 は鑿頭式鉄鏃である。身部と茎部の厚みの差は見られず、平板な造りとなっている。X 線写真からの観察では、茎部に木質が確認できる。(信里)

青銅器小片 57 は幅 0.3cm で上下が折損する棒状の小片で、銅鏃茎部と考える。他遺構出土の銅鏃と比較して、幅が小さいが、E 区 SD100 出土の 1698 はこれと同サイズの銅鏃茎例である。
石器　58 は剥片の周縁を平面三角形状に加工したサヌカイト製石器である。加工は粗放で形状が整っていないことから、石鏃の未製品と考える。形態的に見て弥生時代中期頃の混在品と考えられる。59 は流紋岩製の砥石である。断面形が不整方形で一面に段状の研磨痕が残る。二次的被熱のためか表面が淡橙色に変色し、器面に細かな亀裂が生じているが、器面を留める部分は研磨面の平滑度は高い。60 は砥面及び敲打面をもつ砂岩製台石である。砥面はやや平滑である。(森下)

土器群全体の時間的な位置付けは、弥生時代後期の混入品を除いて、古墳時代初頭から前期のものが主体占める。更に 43 や 44 の二重口縁壺の形態や 52 の高杯の形態から、古墳時代前期に属するものと見られる。これらの遺物の帰属時期から、本住居の廃絶時期を古墳時代前期前半とする。(森下・信里)

SH02（図 35 ～ 38）

遺構　A区東側中央部で検出した一辺 3.55 ～ 3.8m の方形竪穴住居跡である。建物の方位は北から約 10 度西に偏る。当該遺構は多数の遺構と重複する。古墳時代から古代の掘立柱建物跡 SB02 の柱穴跡は、当該住居跡調査中に検出し、先後関係を精査した結果、当該遺構に先行する柱穴跡と判断した。また、弥生時代竪穴住居跡 SH04 は遺構検出当初から重複関係に留意し、当該遺構に先行する住居跡と判断して調査を進め、出土遺物からも先後関係を追認した。弥生時代掘立柱建物跡 SB03 の柱穴跡は当該遺構完掘後に検出したことから、当該遺構に先行する柱穴跡と判断し、出土遺物からも追認した。

遺構の深さは、検出面から 0.2m を測る。床面中央部で主柱穴跡 2 基（SP306・307）を確認した。主柱穴跡の外側には、南北ともに貼床によるベッド状遺構が付属する。ベッド状遺構の段の高さは 0.1m を測る。調査中に貼床外縁部をコ字状に巡る壁溝跡を確認したが、記録前に大部分の貼床を除去したために、一部しか壁溝跡の記録がない。北東部の壁溝跡は幅 0.1m、深さ 0.05m を測る。なお、ベッド状遺構下段部には、明確な壁溝跡は認められなかった。

下段部では 2 基の土坑を検出した。土坑 SP310 は深さ 0.08m、土坑 K-1 は深さ 0.07m を測る。後者は主軸からやや東にずれる。どちらも埋土中には炭化物が多く含まれ、重複関係がないことから、同時に機能した 2 基の中央土坑と考える。埋土中に含まれる焼土は、直径 1 ～ 2.5cm の小粒品が多数あり、合計重量は 64.07g を測る。このうち、焼土（焼土 13）は表面が発砲したような細かな気泡を認める。蛍光Ｘ線分析では金属成分は検出されなかった。

遺構埋土上層除去後、残存状況の良い土器群が出土した。これらは図 36 に示したように、南北のベッド状遺構から中央に向かって落ち込む状態で分布する。南側に完形に近い土器が多い。接合関係を点検すると、南北で接合した例が 3 例、そのうち 2 例は中央土坑 K-1 埋土出土品が接合する。このことから、住居機能廃絶後、中央土坑等が埋没する前の比較的早い段階で土器群が投棄されたものと考えられる。

（森下）

土器　61 の広口壺は、口縁端部を下方にやや拡張し、外面に線鋸歯文を描く。胎土は赤褐色を呈する旧練兵場遺跡に通有のものである。62 は内傾する短い頸部をもつ広口壺。66 は直線的に伸びる頸部をもつ細頸壺である。67 の受口状の口縁部をもつ壺は、旧練兵場遺跡ではあまり類例を見ない。

68 ～ 77 は甕である。69・73 の胎土中には、雲母片を多く含む。72 は大型甕であり、ケズリ調整が口縁部直下まで及ぶ。73 は口縁部が叩き出しで成形されおり、胴部の叩き目は入念なハケ調整で消去されている。74 は口縁部が直立気味に立ち上がる甕で、最大径の位置が上半部にあり、やや矮小化した平底の底部等弥生後期後半でも古相の属性を備えている。75・76 は胴長の形態に短く直立する口縁部をもつ小型甕である。78 は大型壺の底部片と見られる。

79 ～ 82 は鉢である。いずれも外面に絞り目が見られ、80 の底部は形骸化した平底となっている。80 は角閃石を多く含む胎土をもつ高松平野の香東川下流域産の高杯で、下川津Ⅱ式の所産と見られる。

（信里）

石器　石鏃２点、砥石１点、叩き石１点がある。石鏃はいずれも長さ 2.5cm 以下の小型品で、埋土中から出土した。84 は基部が欠損し、周縁加工が粗雑なことから、加工途上の未製品と考える。85 は凹基式の小型鏃で摩滅が顕著である。いずれも当該遺構に伴う石器とは考え難い。86 の叩石は棒状石材の

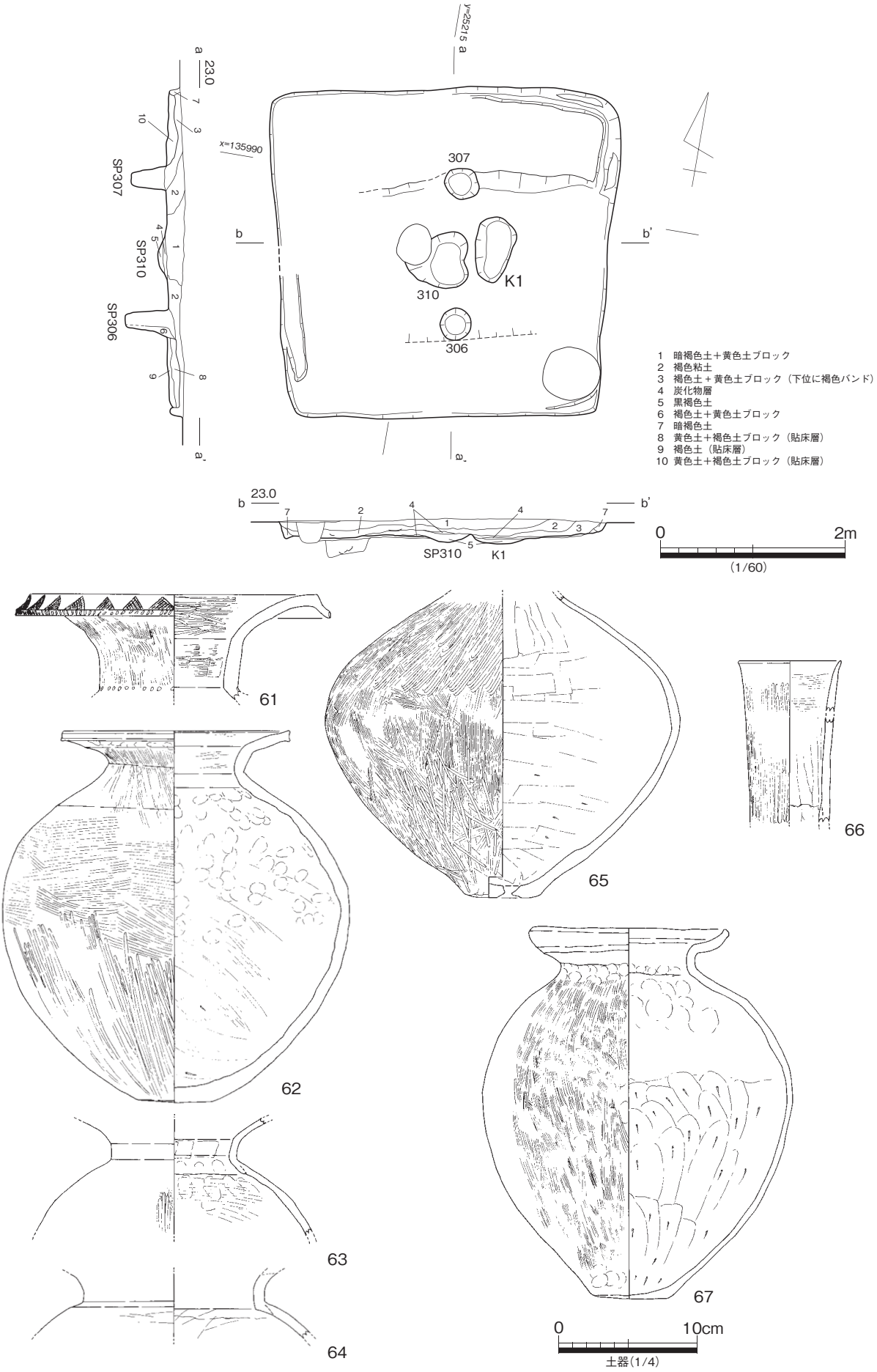


図 35　SH02 平・断面・出土遺物（1）

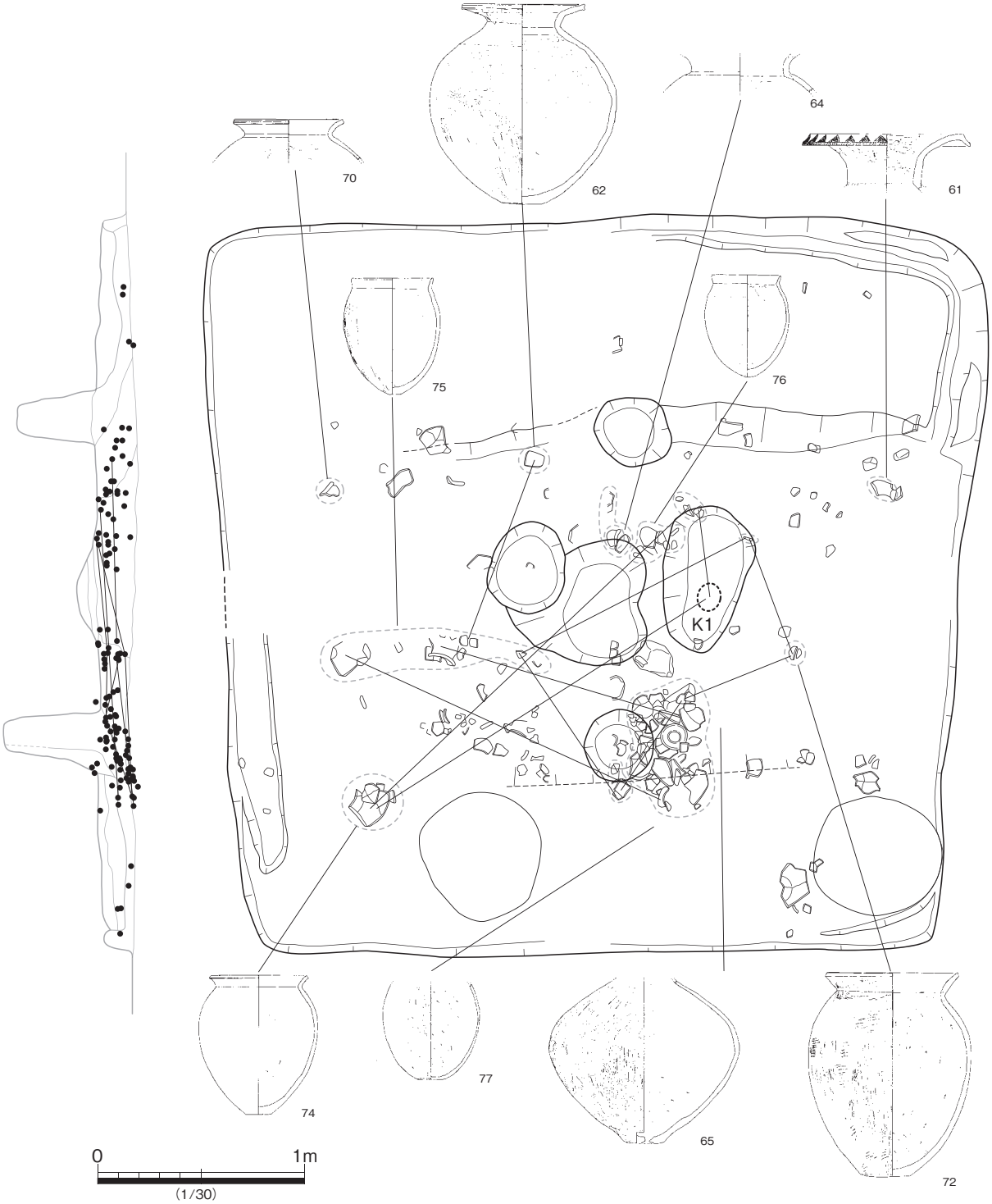


図 36　SH02 遺物出土状況

小口部に細かな敲打痕を留める。87 は粗加工した安山岩の２面に平滑度の高い研磨面を留める。88 は砂岩塊石の下面小口部に敲打痕を留める叩石である。(森下)

以上の土器群の特徴から、本住居は弥生後期後半古段階に廃絶したと推定される。(森下・信里)

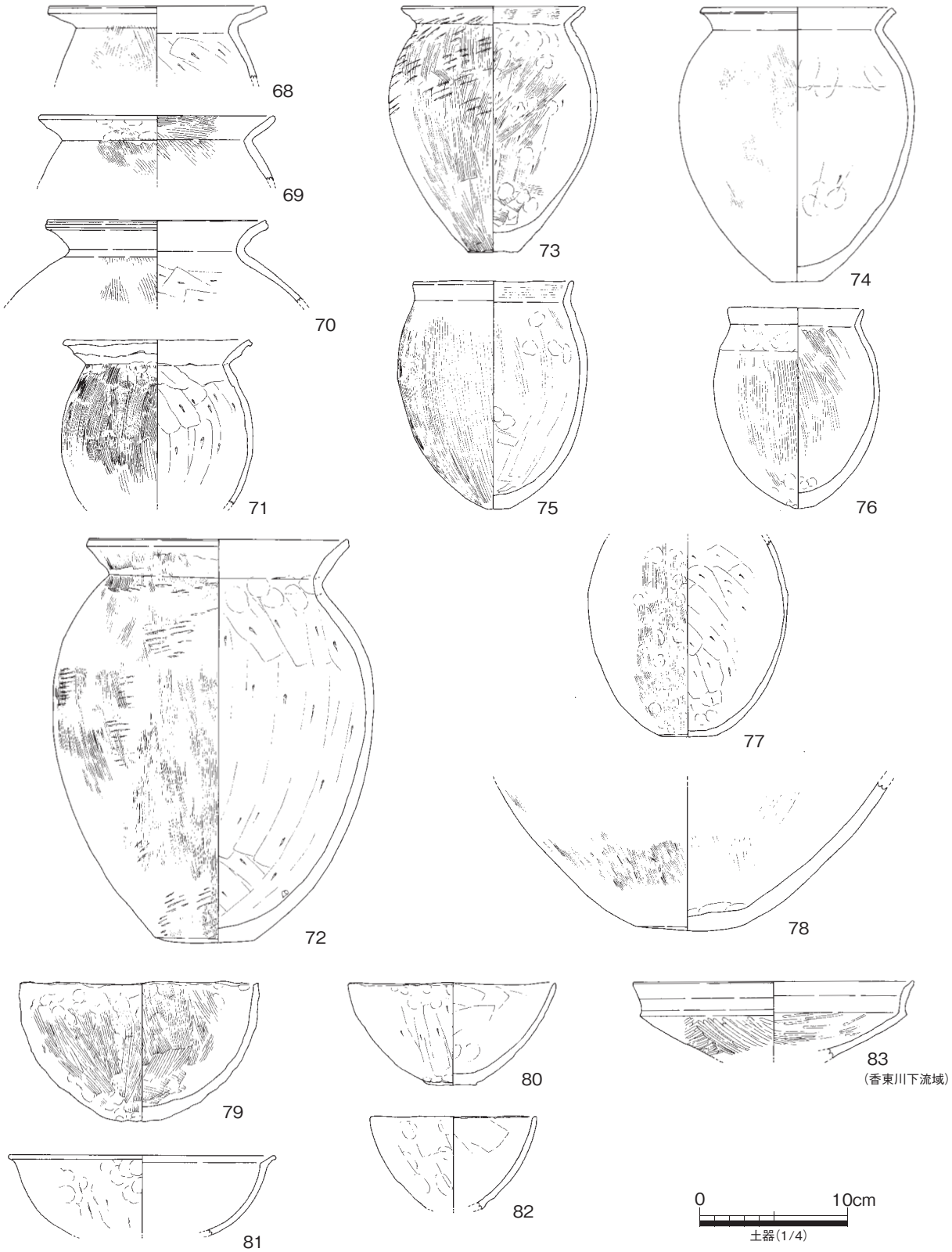


図 37　SH02 出土遺物（2）

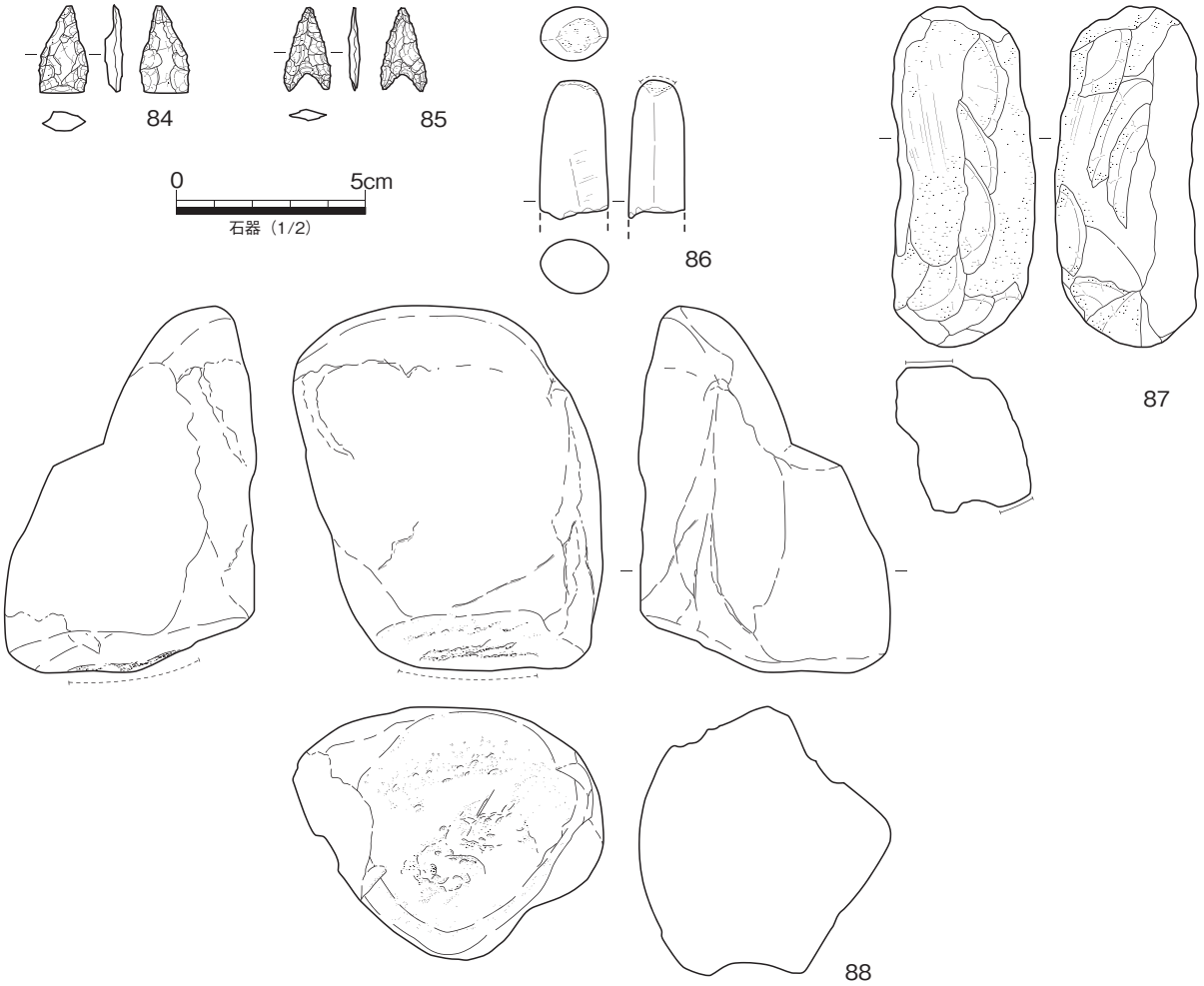


図 38　SH02 出土遺物（3）

SH04（図 39 ～ 41）

遺構　A 地区東側中央部で検出した突出部付多角形の竪穴住居跡である。SH02 と重複し、それに先行する。主柱穴跡は５穴で、中央部に直径 1.8m、深さ 0.5m の柱穴状土坑 K-2 があり、その東側に近接して長さ 1.7m、幅 0.4m、深さ 0.05m の楕円形土坑 K-1 がある。K-2 を中心としてその反対側に長径 0.4m、短径 0.25m の焼土の広がりを検出した。住居平面形は主柱穴に対応して５角形と推定できるが、検出範囲が部分的なため確定できない。北東部には幅 0.85m、長さ 1.7m の突出部が付属する。突出部は北半分が地山削り出し、南半分は貼床で構成され、断面観察では本体の貼床部と高さが同じである。

焼土は床面直上で検出した。床面が被熱する箇所では、直径 1 ～ 2.5cm の小粒な焼土塊が出土した。この部分で取り上げた焼土の総重量は 46.33g である。また、出土した焼土は突出部貼床上面で出土した灰黄白色で堅く焼き締まった焼土で、他とは焼け具合や比重が異なる。この重量は 78.65g を測る。

調査中に土層関係を確認しながら調査を進めたが、貼床層の認識が遅れたこと等により、貼床内側ラインつまりベッド状遺構の平面形を記録することができなかった。断面観察と最終的な床面形状を勘案すると、主柱穴を結んだラインに段を有していた可能性が高い。なお、貼床によるベッド部の下位に幅

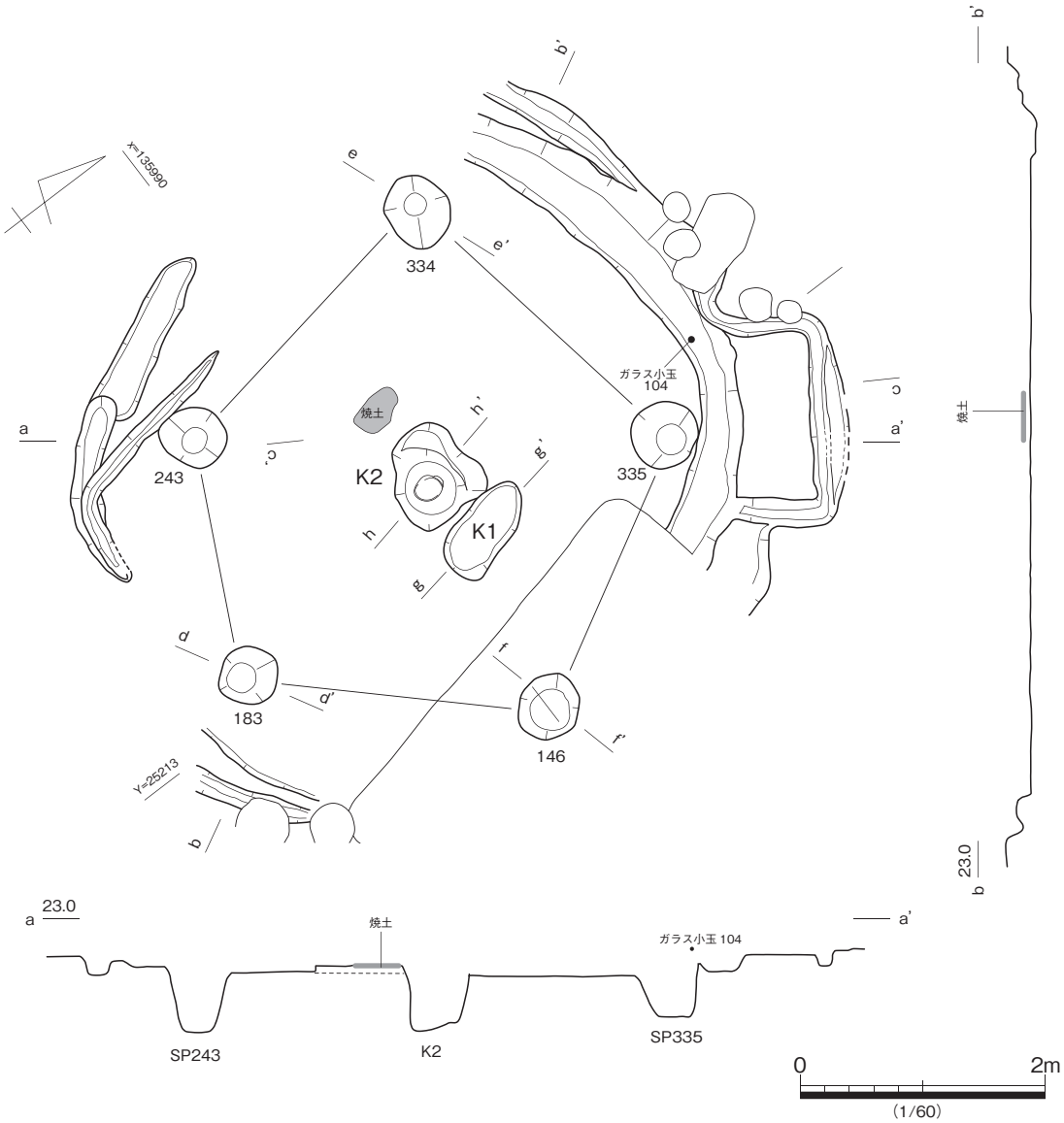
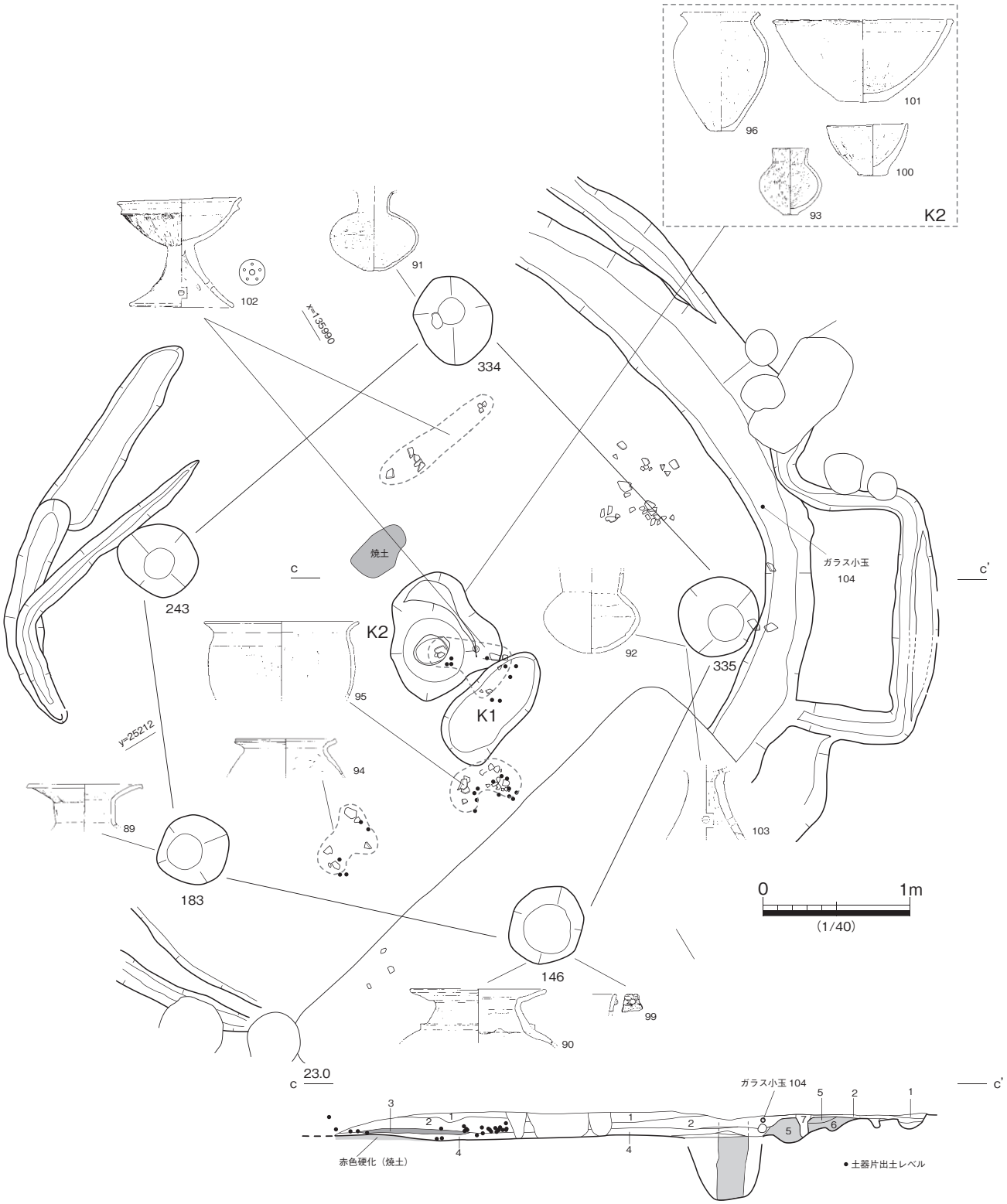

X=135990
Y=25213
334
243
183
146
335
K1
K2
焼土
ガラス小玉
104
a
a'
b
b'
c
c'
d
d'
e
e'
f
f'
g
g'
h
h'
23.0
SP243
SP335
0
2m
(1/60)
SP183
SP334
SP146
22.7
1　褐色土（黄色土ブロック炭混じり）
2　炭層
1　褐色土（黄色土ブロック炭混じり）
2　暗灰褐色土
3　暗褐色シルト（粘性強い）

図 39　SH04 平・断面



1　暗褐色粘質土
2　褐色土＋黄色土ブロック（※層の下位に褐色バンド、一部炭層）
3　炭層（赤褐色焼土層）
4　褐色土（ブロック混層）
5　濁灰黄褐色土（褐色土ブロック少量）・・・貼床部上位
6　黄灰色粘質土（褐色土ブロック多い）・・・貼床部下位
7　壁板痕跡

図 40　SH04 遺物出土状況

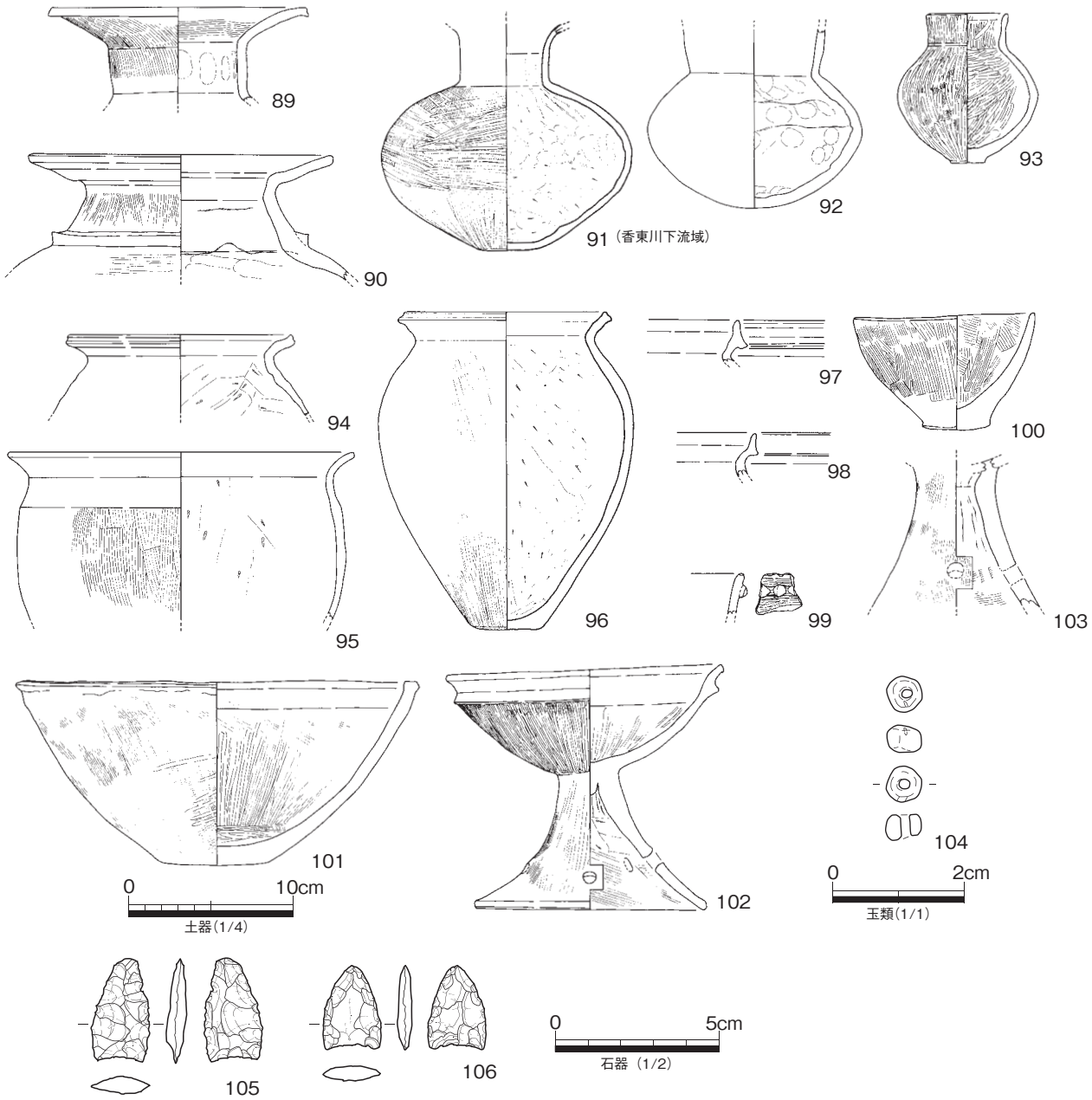


図 41　SH04 出土遺物

0.3 ～ 0.55m の溝跡が周る。Cライン断面で観察すると、この溝跡は断面がU字形で、主柱穴を結ぶラインの若干外側を周壁に沿って周る。埋土は黄色土＋褐色土ブロック層で、貼床を構築する前に埋められたものと考えられる。後述する SH31 でも同様に貼床下部で同様の溝跡を検出しており、機能は不明だが、住居構築手順の一つとして溝の掘削を位置付けることができる。

土器等の遺物は床面上で４箇所に分かれて出土した。このうち高杯 102 は中央土坑出土の破片と接合する。中央土坑 K-2 では、完形土器３点が出土した。住居廃絶に伴って意図的に土坑内へ投棄したものと考える。また､K-2 の埋土下部は炭化物混じりの黒色粘土層が堆積しており､その土壌を洗浄した結果、７点の骨片が出土した。このうち２点は魚骨でタイの犬歯遊離骨である。この他、玉類としてガラス小

玉１点が出土した。出土位置は突出部前面の貼床層上面である。(森下)

土器　89・90 は広口壺である。90 の広口壺は頸胴部境に断面三角形の突帯を施し、口縁部が大きく外反するもので、弥生時代後期後半新段階の属性をもつ。91 は角閃石を多く含む胎土に薄手の器壁をもつ高松平野の香東川下流域産の壺であり、下川津Ⅰ式に比定される。92 は頸部が直立する丸底の壺で、93 は小型の直口壺である。

94 ～ 98 は甕である。95 は口径から見て鉢の可能性がある。96 の半完形の甕は、口縁端部の凹線文は窪みを残す程度に退化しており、胴部形態と併せて弥生後期前半新段階の特徴をもつ。97・98 は口縁部の上下端を拡張する甕であり、弥生後期前半新段階に遡る。99 は縄文晩期の刻目突帯文土器であり、第Ⅳ層中からの混入品と見られる。100 は厚みのある平底をもつ鉢である。101 の中型鉢は、口縁端部上面の面取りを行うことから、弥生後期前半の属性を若干残すが、反転する口縁部は消失しており、全体的には弥生後期前半新段階の特徴を示すものである。102 は口縁部が短く反転する完形品の高杯である。103 は高杯の脚部片である。(信里)

石器　石鏃２点が出土した。いずれもサヌカイト製で、周縁加工が粗雑で先端が尖らないことから、未製品と推定される。(森下)

土器群全体の様相は、弥生後期前半新段階から後期後半新段階を示している。炉跡から出土した 91 の香東川下流域産の壺や 102 の完形高杯の形態から見て、本住居は弥生後期前半新段階に廃絶したと推定される。(森下・信里)

SH05（図 42・43）

遺構　Ａ区東側中央部で検出した円形の竪穴住居跡である。直径 5.5m、深さ 0.15m を測る。北東側で遺構埋土及び床面が残るが、大部分は後世の掘削により撹乱を被る。主柱穴跡は４穴で、中央土坑 K1 が掘り形中央部に位置する。

K1 から北東方向に延長約 1m の小溝跡が取り付く。床面の仕切り溝もしくは排水溝と考える。Ａライン断面の 1･2 層はいずれも基盤層ブロックを含んでおり、貼床層である。主柱穴跡を結ぶラインでベッド状遺構が存在した可能性が高い。なお、外周壁際には壁溝が周る。中央土坑 K1 は小粒の炭化物が含まれるが、まとまった炭化物層の広がりは見られなかった。(森下)

土器　107 は短頸の広口壺であり、弥生後期後半以降に出現する形式である。108 は弥生中期後葉の壺底部片であり、混入品と見られる。109 は甕の口縁部の小片であり、短く屈曲する口縁部の上端を面取りを行う。110 は高杯杯部片であり、口縁端部を面取りし、口縁部の反転部分が段状を呈する。口縁部が直積的に外反する形態から見て、弥生後期後半古段階の所産と見られる。(信里)

石器　砂岩製台石１点が出土している。111 は扁平で不整円形の砂岩川原石の上面にあばた状敲打痕、側縁に線状敲打痕を残す。1/3 程が欠損し、重量は現状で約 1kg を量る。(森下)

出土土器は少量であるが、中央炉跡から出土した 110 の高杯の特徴から見て、本住居は弥生後期後半古段階に廃絶したと考える。(森下・信里)

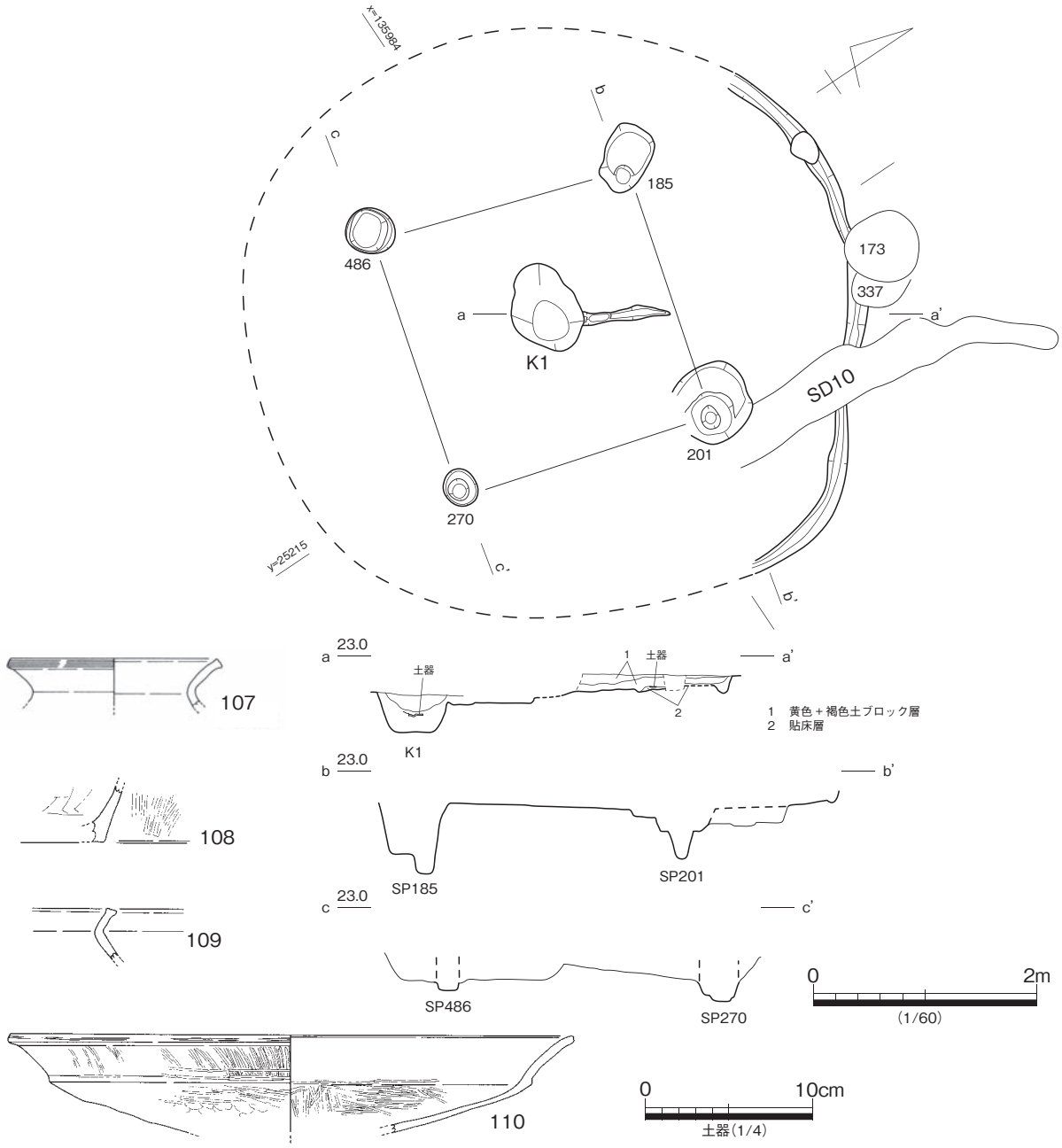


図 42　SH05 平・断面・出土遺物（1）

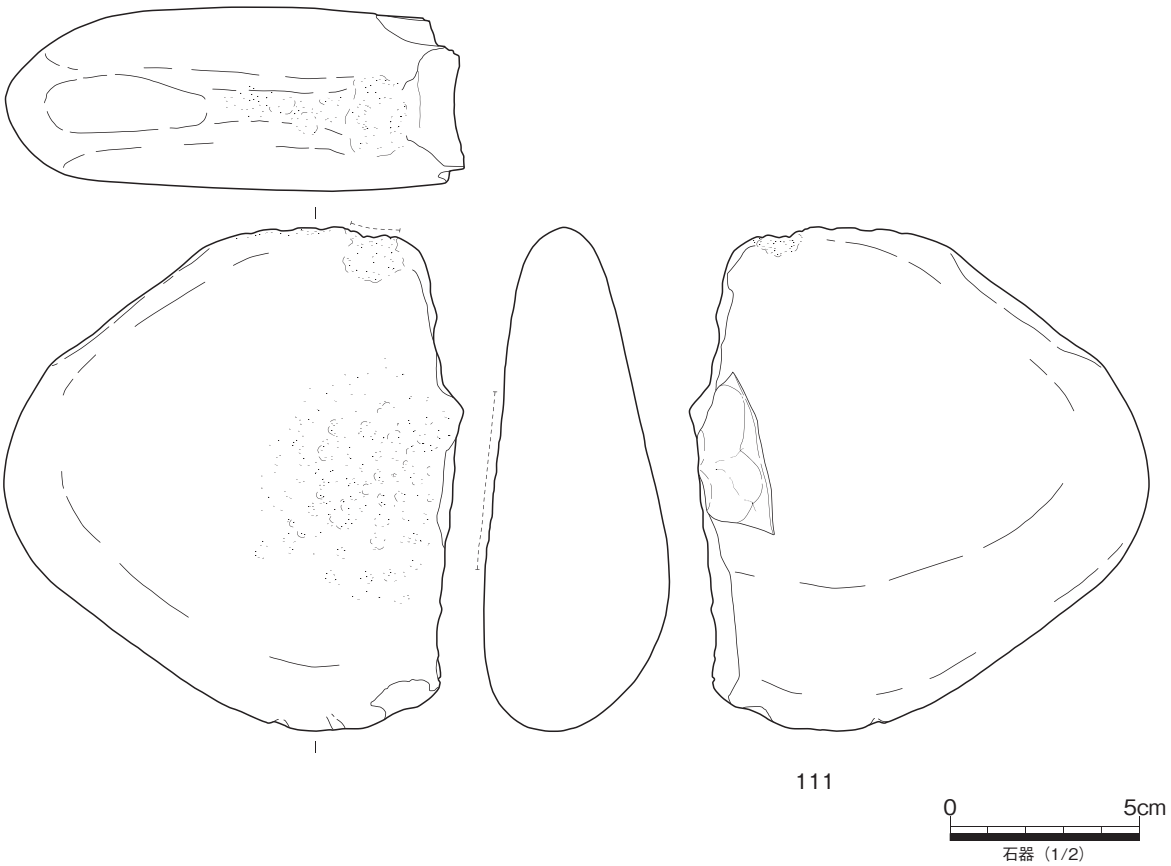


図 43　SH05 出土遺物（2）

SH06（44・45）

遺構　A 区南側中央付近で検出した方形竪穴住居跡である。長辺 3.8m、短辺 3.7m、深さ 0.2m を測る。南北方向の溝跡 SD004 と重複し、埋土上部が削平される。

主柱穴跡は短辺に平行して設けられた P1・P2 の 2 穴である。主柱穴跡間の径 0.6m 程の範囲で炭化物の広がりを検出した。住居中央部には明確な掘り込みはないが、炭化物層がやや厚く認められる（断面 a ライン第 3 層）ことから、中央部に地床炉跡が存在したものと考える。

床面西側では、木目が住居中心を向く炭化材を検出した。屋根を構成する垂木材が部分的に焼け、床に崩落したものと推定される。床面からは図に示したように土器片が比較的多く出土した。このうち、住居西側の炭化材周辺の壁際では、ほぼ完形の鉢形土器 2 個体が近接して出土している。また、床面でガラス玉 1 点が出土した。この他、床面中央付近から南側を中心に 7 ～ 10 点の小焼土塊が出土した。焼土の総重量は合計 116.95g である。このうち、床面直上で出土したものは、焼け程度が弱いものからやや強いものへ、漸次変化する個体がある。(森下)

土器　112 は広口壺の口縁部片であり、弥生後期後半に位置付けられる。113・114・116 は胎土中に角閃石を多く含むことや形態から見て、高松平野の香東川下流域産の細頸壺であり、同一個体の可能性が高い。117 は鋭く屈曲する尖り気味の口縁部をもつ甕口縁部で、胎土中に雲母片を多く含む。118 は赤褐色系の胎土をもつ大形鉢で、底部は残存しないものの、胴部形態から丸底化の進行が窺える。119 は口縁部が大きく外反する高杯であり、雲母片を多く含む。120、121 は小形鉢であるが、底部形態に差

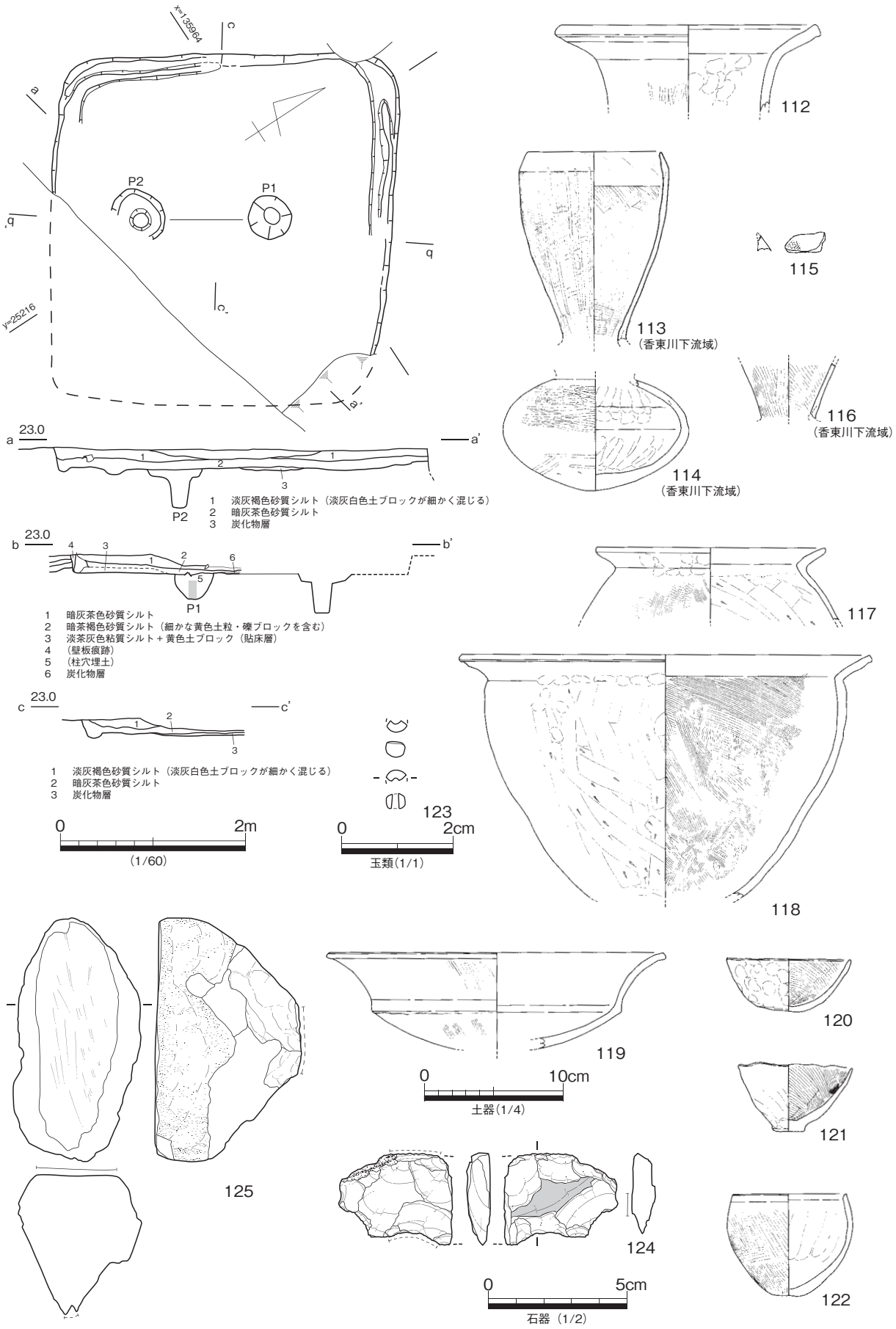


図 44　SH06 平・断面・出土遺物

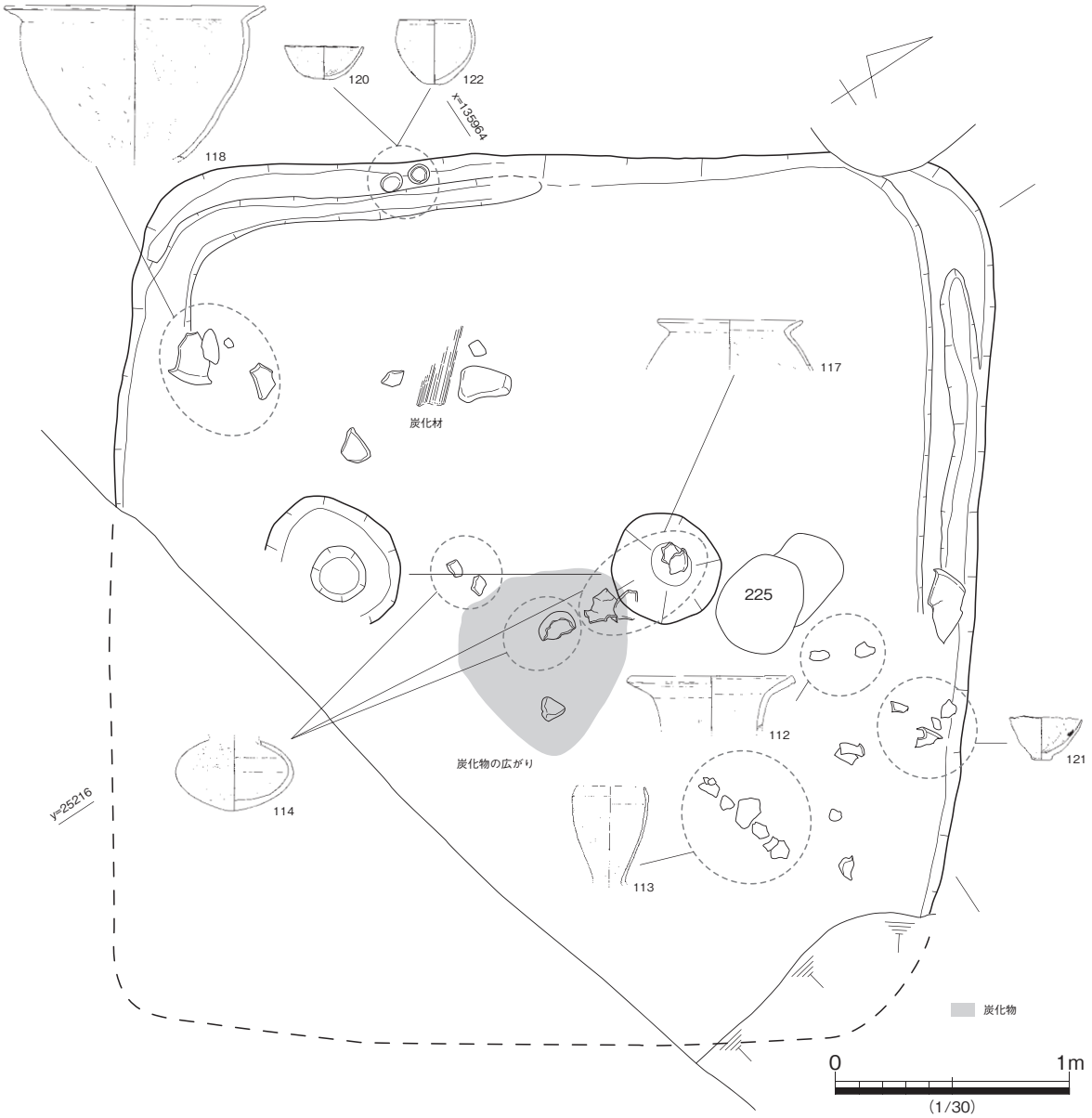


図 45　SH06 遺物出土状況

異が認められるため、121 は混入品の可能性もある。122 は内傾する口縁部をもつ小形鉢であり、胎土中に雲母片を多く含む。底部が尖底になっていないことから見て、弥生終末期古段階の所産と見られる。

(信里)

石器　124 はサヌカイト製楔状石核、125 は流紋岩製砥石である。124 の器面中央の摩滅痕は周縁剥離面に先行する剥片素材面にだけ見られることから、打製石庖丁の転用品と判断した。125 は塊状の流紋岩の一面に平滑度の高い砥面を形成する手持砥石である。砥面の反対側は敲打により石片の稜線を潰し、保持し易い加工を施す。

玉類　123 は床面直上で出土したガラス製小玉である。色調はエメラルドグリーンで３つに破砕された破片資料である。器面には細かなクラックが入り、紐孔の小口付近では紐孔に直交する方向の細かな亀裂が見える。器体内部には気泡もあるが、列状に連なる様子はない。引き延ばし技法以外の手法で製作

された可能性が高い。(森下)

土器群全体の様相は、弥生後期後半期と弥生終末期中段階の資料が見られるが、前者を切り合い関係にある先行住居跡からの混入とし、本住居の廃絶時期を弥生終末期古段階と推定しておく。(森下･信里)

SH07（図 46）

遺構　Ａ区南側中央部で検出した円形の竪穴住居跡である。直径約 4.7m 以上で、南半分が調査区外に外れる。周辺遺構との関係は、SH06 に大部分を削られ、隣接する SH09 との先後関係が不明、また北西側が SH10 と接近するが、掘り形は重複しない。主柱穴跡は 4 穴か 5 穴で、SP232・476 が該当する。

南壁断面で確認すると、遺構面から深さ 0.4m で床面に達し、住居跡中央部付近で炭化物が集中する。炭化物集中に隣接して存在する断面 15 層の掘り込みは、底面に凹凸があり、柱穴跡とは考え難い。また、SP230 も柱穴跡とするにはあまり深くないことから、南北方向に細長い中央土坑の一部である可能性が高い。

ｄライン 11・13 層は褐色土と黄色土がブロック状に混じる土で、住居跡の壁と主柱穴跡との間に顕著に見られる。ベッド状遺構に伴う貼床層である。出土位置が明らかな 131 の器台は、床面から約 10㎝浮いて出土した。その位置は主柱穴跡を結ぶ線に乗っており、ベッド状遺構の段上部に該当する。(森下)

土器　126 は広口壺の口縁部片である。127 は甕であり、口縁端部を上方に拡張する。128 は短く屈曲する甕であり、長胴形の胴部をもつ。129 は直立気味に立ち上がる口縁部をもつ高杯であり、弥生後期前半新段階の所産と見られる。130 は高杯の杯部片であり、129 と同様の形態をもつことから、弥生後期前半新段階に位置付けられる。131 は器台脚部片であり、凹線等の装飾が消失していることから、高杯と同時期に位置付けられる。

金属器　132 は柳葉式鉄鏃である。刃部は身部のほぼ全体に付けられており、茎部と身部の厚みは差異が見られない。(信里)

石器　133 は安山岩製打製石庖丁とした。石理に沿って剥がれた横幅 10cm 以上の厚手の剥片の上下縁を敲打し、側縁に僅かな抉りを入れる。表裏面に摩滅痕が認められるが、厚みが石庖丁としては厚過ぎることや、刃部も敲打が強く及ぶことから、別器種か何らかの石器の未製品の可能性もある。(森下)

出土土器は少量ながら弥生後期前半新段階のもので占められることから、本住居の廃絶時期を弥生後期前半新段階と位置付ける。(森下・信里)

SH09（図 47 ～ 50）

遺構　Ａ区南側中央部で検出した方形竪穴住居跡である。南北に長い長方形を呈し、南側が調査区外に外れる。主柱穴跡は P1・P2 の 2 本で、その配置から掘り形を復元すると、南北 4.1m 以上、東西 3.05m の規模となる。遺構面から床面までの深さは 0.3m を測る。北東側に南北 2.2m、東西 1.45m の張り出し部が付属する。その部分の深さは遺構面から 0.15m で、床面とは 0.2m の段差を有す。本体床面の壁際には幅約 0.3m の壁溝が周る。張り出し部にも 3 方向に壁溝を確認した。調査段階では 2 つの住居跡の

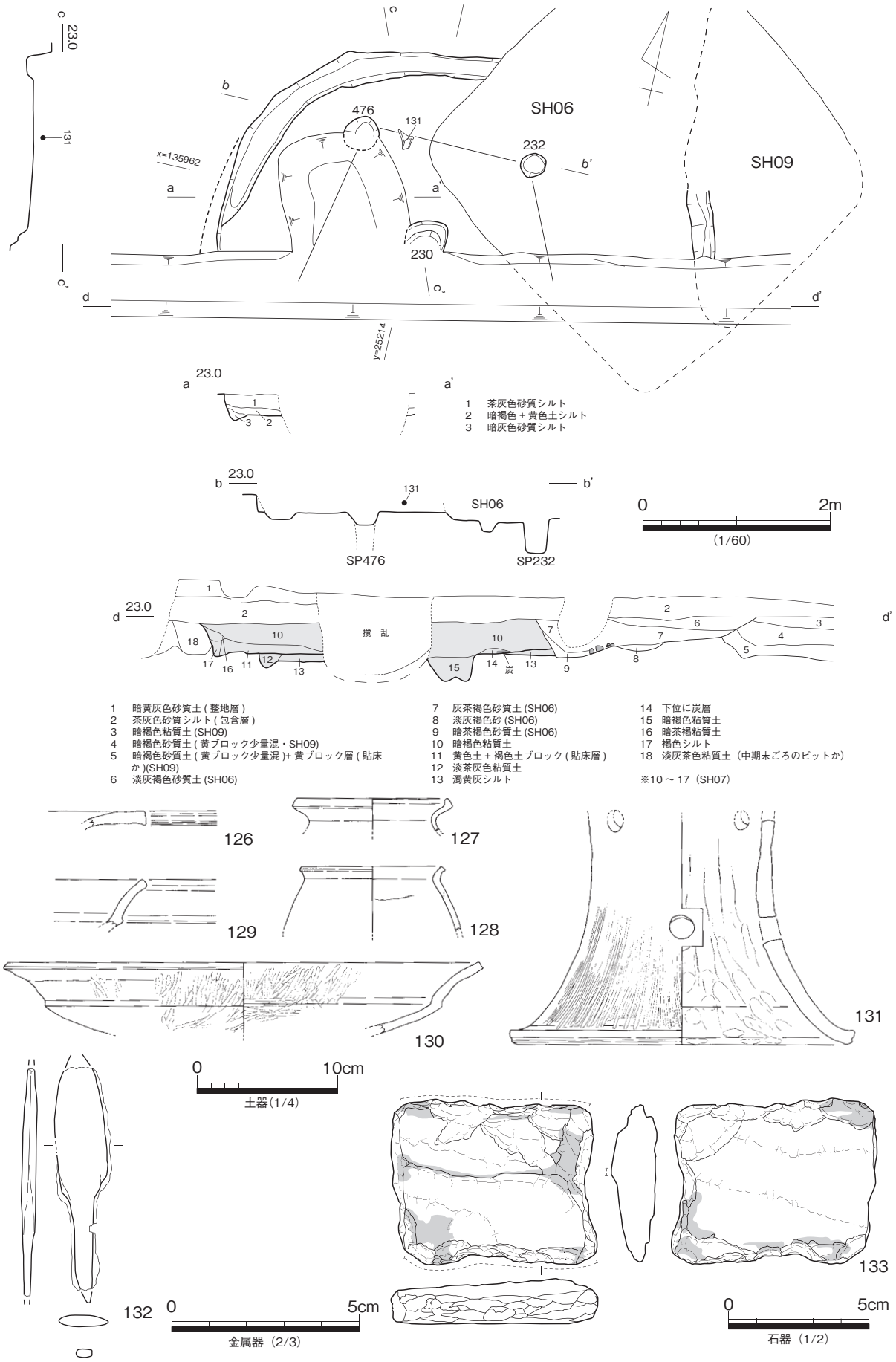


図 46　SH07 平・断面・出土遺物

先後関係を考えたが、張り出し部から本体に向かって連続的な土層堆積が認められることや、土器の出土状況も緩やかな傾斜に沿う検出面を捉えることができたことから、住居跡の重複ではなく、住居跡に付属する張り出し部と判断した。

床面及び床面の数センチ上部に、同一面に広がる多くの土器を検出した。これらは、住居跡中央に向かってやや傾斜する面をもち、土器群の直上には基盤層ブロックを多数含む埋め土と想定される堆積層が存在する。このことから、住居跡の廃絶時もしくは廃絶後間もなく、土器を投棄し、掘り形を埋めた可能性が高い。出土土器には完形に復元できる器台が2個体が含まれる。

なお、床面には炭化物粒を多く含む薄い堆積層（bライン3層）が存在したが、特に窪む部分はなく、中央土坑は存在しなかったものと考える。

埋土中より25.33gの焼土が1点出土した。形状は不整形で、焼け具合の弱い黒化部は気泡状の空洞部を含む。焼け具合の強い表面には指先で細かく押捺した痕跡を認める。(森下)

土器　134は細頸壺の頸部片。135は頸胴部境に列点文が見られることや頸部の立ち上がりから見て、長頸壺の可能性が高い。137は広口壺の胴部から底部の破片であり、弥生後期初頭のものと比較して、胴部最大径が下がるとともに、平底の底部が小形化している。138は直立する口縁部をもつ甕で、胴部が球形に膨らむ。139・140の甕は、口縁端部の上下の拡張は極僅かで、外面に疑凹線文が施される。141は形態から見て壺と考えられる。142は無頸壺の口縁部片で、弥生後期初頭に位置付けられる。143は薄手の甕底部片であり、弥生中期後葉の所産と考える。144はやや厚手の小形鉢。147の中形鉢は、口縁部が反転するものの、弥生後期初頭のものと比較して、反転が緩やかである。148・149は凸状の平底をもつ鉢である。152は赤色顔料の付着は見られないものの、形態から見て装飾高杯の最終形態と見られる。154の高杯脚部内面にはケズリ調整が認められる。155・159は小形の椀形高杯の脚部である可能性が高い。160は円錐脚の弥生後期初頭の高杯脚部と見られるが、旧練兵場遺跡を含めて丸亀平野で一般的なものではない。161は手づくね土器の脚部片。162～164は支脚である。

165、166の器台は、柱状部の直立する部分が短く、後期初頭からの系譜上の最末期に位置付けられる。(信里)

石器　168は平基式のサヌカイト製石鏃である。長さ4.5cmとやや大型だが、先端部の加工が不十分な未製品である。169は結晶片岩製の扁平片刃石斧である。側面と表裏面の一部が残る。刃部稜線は弛緩して鋭さはない。(森下)

出土土器の様相は一部に弥生中期後葉から後期初頭の遺物を含むが、これらは小片であり、また残存率の高い遺物の出土状況が一括廃棄されたことを想定できることから、本住居は弥生後期前半新段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

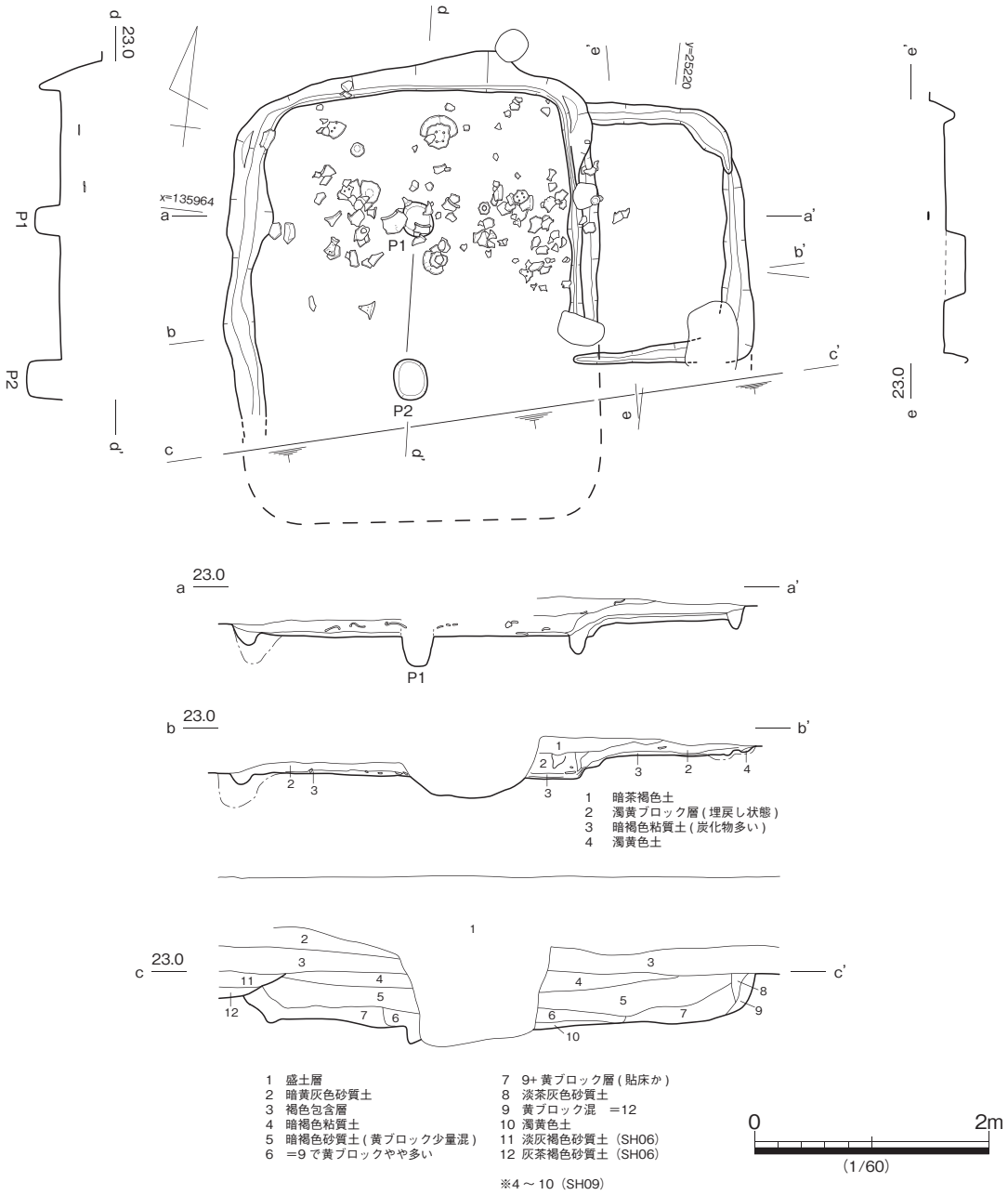

d
23.0
P1
P2
d'
x=135964
a
b
c
P1
P2
d
d'
e
e'
y=25220
a'
b'
c'
e
e'
23.0
e
a
23.0
a'
P1
b
23.0
b'
1
2
3
2
3
3
2
4
1 暗茶褐色土
2 濁黄ブロック層 (埋戻し状態)
3 暗褐色粘質土 (炭化物多い)
4 濁黄色土
c
23.0
c'
1
2
3
11
4
5
12
7
6
3
4
5
6
7
8
9
10
1 盛土層
2 暗黄灰色砂質土
3 褐色包含層
4 暗褐色粘質土
5 暗褐色砂質土 (黄ブロック少量混)
6 ＝9 で黄ブロックやや多い
7 9+ 黄ブロック層 (貼床か)
8 淡茶灰色砂質土
9 黄ブロック混 ＝12
10 濁黄色土
11 淡灰褐色砂質土（SH06）
12 灰茶褐色砂質土（SH06）
※4 ～ 10（SH09）
0
2m
(1/60)

図 47　SH09 平・断面

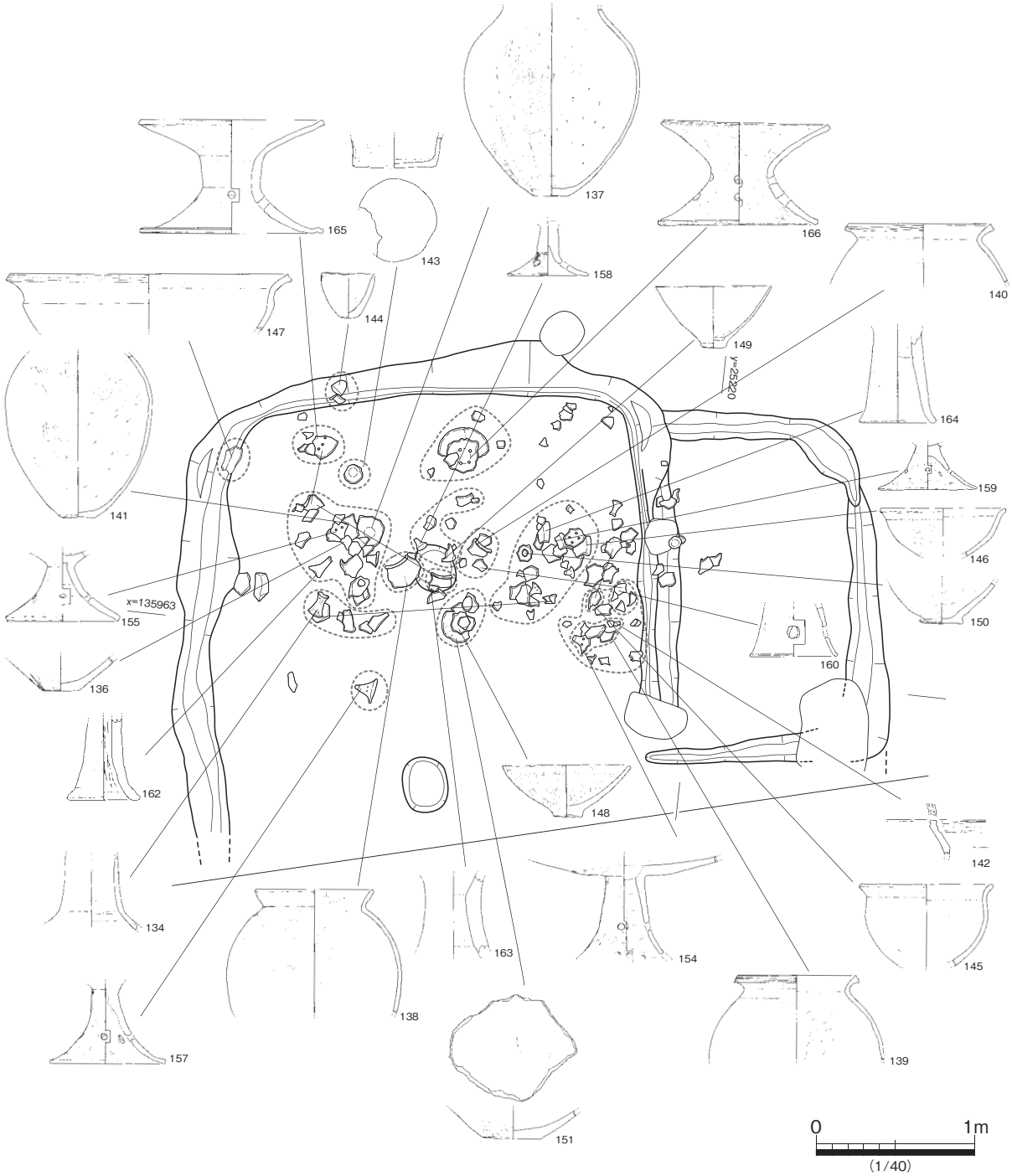


図 48　SH09 遺物出土状況

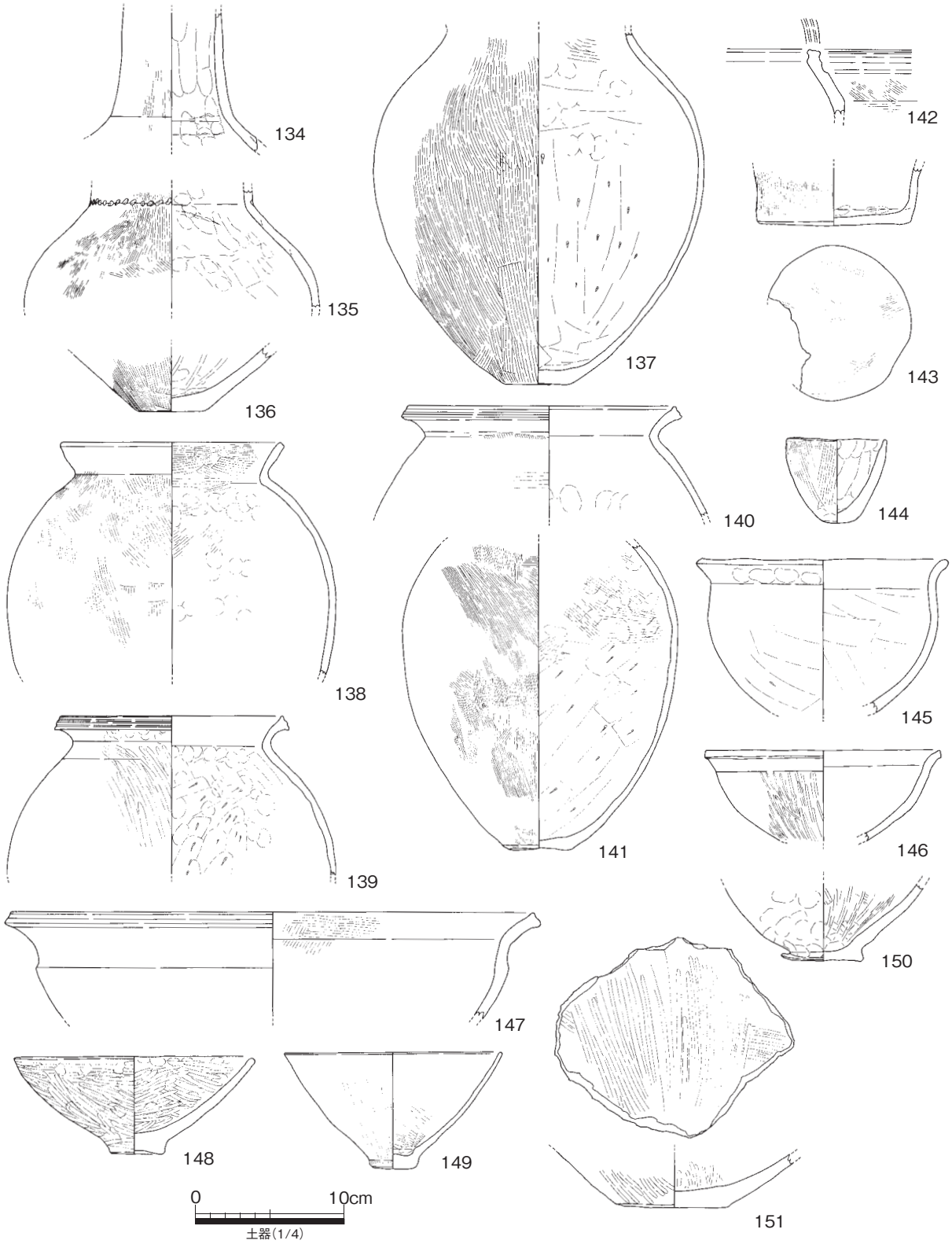


図 49　SH09 出土遺物（1）

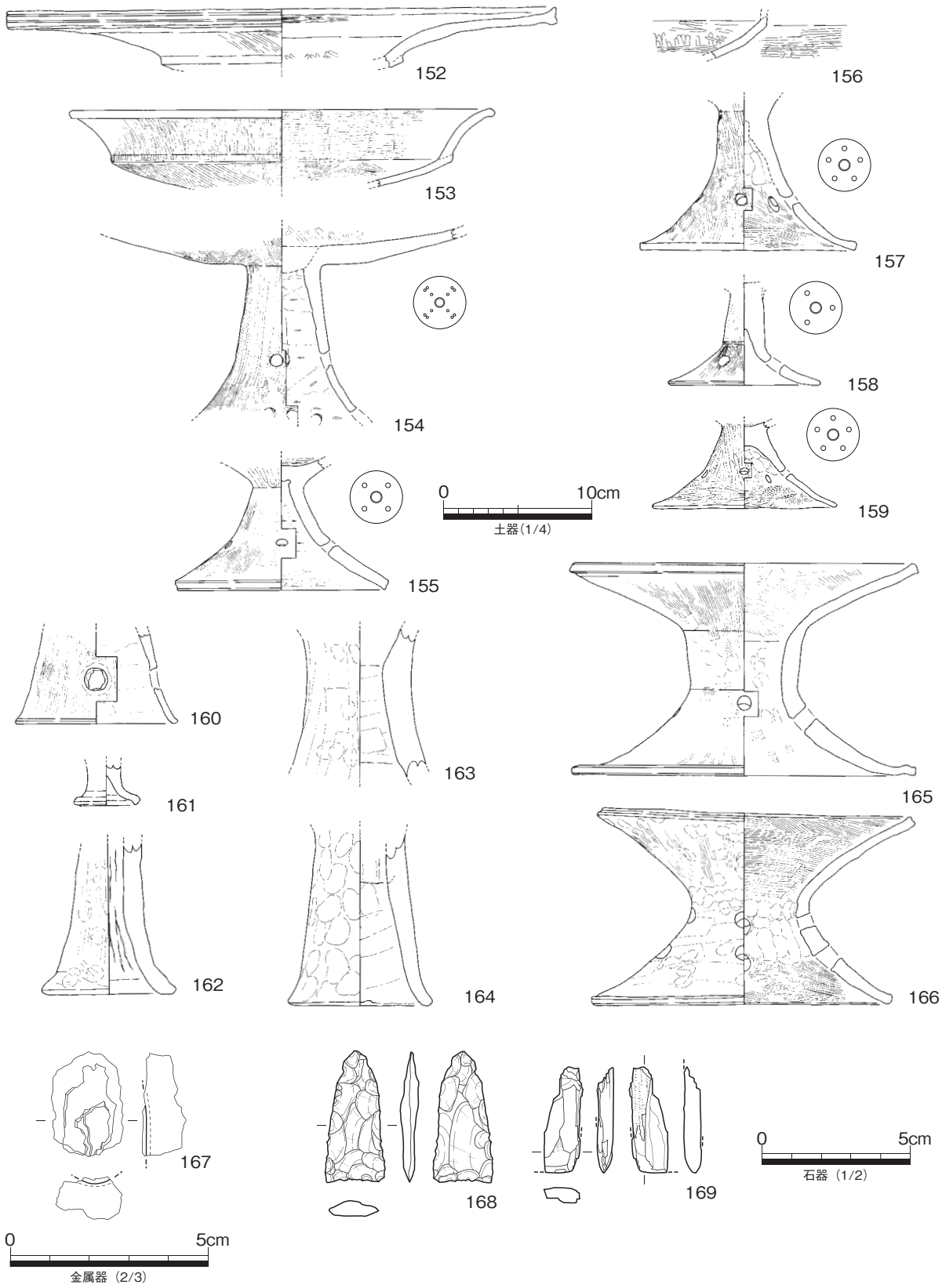


図 50　SH09 出土遺物（2）

SH10（図 51・52）

遺構　A区南側中央部で検出した円形の竪穴住居跡である。掘り形の北半分は、後世の撹乱で滅失するが、現存部の形状から見て東西約 5.8m、南北約 5.25m の楕円形に復元できる。その南西側に幅 2.3m、奥行 0.9m の張り出し部が付属する。

遺構面から床面までの深さは 0.4m を測る。主柱穴跡は P3・P5 の２穴で、P6 は床面から 0.45m の深さがあり、当該遺構に伴う可能性が高いが、他の柱穴跡との組み合わせは不明である。滅失部を含めて柱構造を推定すると、主柱穴は５または６穴と見られる。

床面中央やや北寄りに浅い掘り形 K-1 があり、炭化物が多く堆積する。その周囲には大小の焼土塊が散在する。焼土は床面からやや浮いたレベルで住居跡全面に広がる。

張り出し部は黄色土に褐色土ブロックが混じる土（ｃライン７層）で形成されており、貼床による床面形成が想定できる。ｃラインで見る限り、本体床面との間に高さ 0.2m の明瞭な段を有する。一方で、本体床面はｄライン断面等で主柱穴跡を結ぶラインを境に床面の高さが異なるが、ベッド状遺構の作り出しは必ずしも明瞭ではない。ただ、ｄラインでは黄色土細粒ブロックを含む 14 層が壁溝中の壁板痕を押さえ込む状況が観察できる。壁板保持のために若干の貼床を行ったものと考えられる。

床面からやや浮いて、ｃライン４層に特に多く出土した焼土は、合計 713.84g を量る。これらは、1 ～ 10cm 大のものがあり、2 ～ 3cm 大の小塊が最も多い。表面は面をもつものは少なく、指状の押捺痕や草木の押捺痕が目立つ。床面からやや浮いて、住居跡全面で出土していることから、屋根部材土の崩落と考える。(森下)

土器　170 は小形壺であり、口縁端部を欠損する。171 は口縁部の上方のみ拡張する甕であり、外面に浅い疑凹線文を施す。172 の甕は口縁端部を拡張しているものの凹線文は施されず、口縁部の内面屈曲も弱い。173 の甕は、直線的に外反する口縁部にハケ調整を多く残しており、ヨコナデを施さずに口縁部を成形する。174 は 173 と同様の口縁部形態をもつが、頸部内面に接合痕を明瞭に留める。175 は杯部中位で口縁部が反転する高杯で、内外面に縦位の細いミガキを丁寧に施す。176 は小形の高杯あるいは台付鉢の脚部片である。177 は上端面が傾斜する支脚であり、穿孔は見られない。178 は甕底部片である。(信里)

石器　179 は平基式のサヌカイト製石鏃である。長さ 3.1cm の小型品で、基部下端がやや内側に湾曲する平面形は弥生時代中期に多い形態である。180 は主柱穴跡 P3 より出土した砂岩製砥石である。表裏面に光沢を帯びる程平滑度の高い砥面を残す。(森下)

出土土器に小片が多く詳細に時期決定に課題を残すが、床面直上の遺物の特徴から、本住居は弥生後期後半古段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

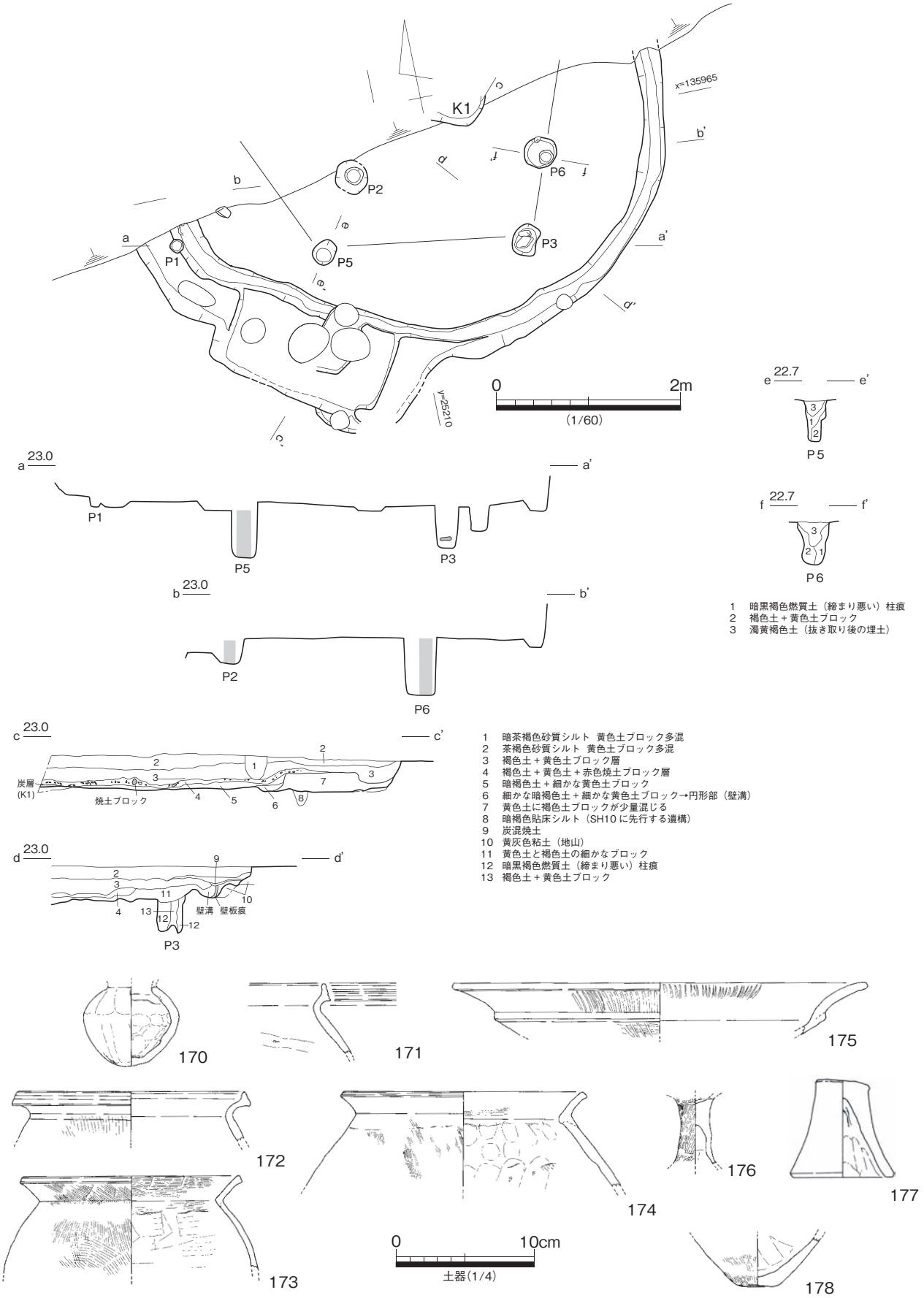


図 51　SH10 平・断面・出土遺物（1）

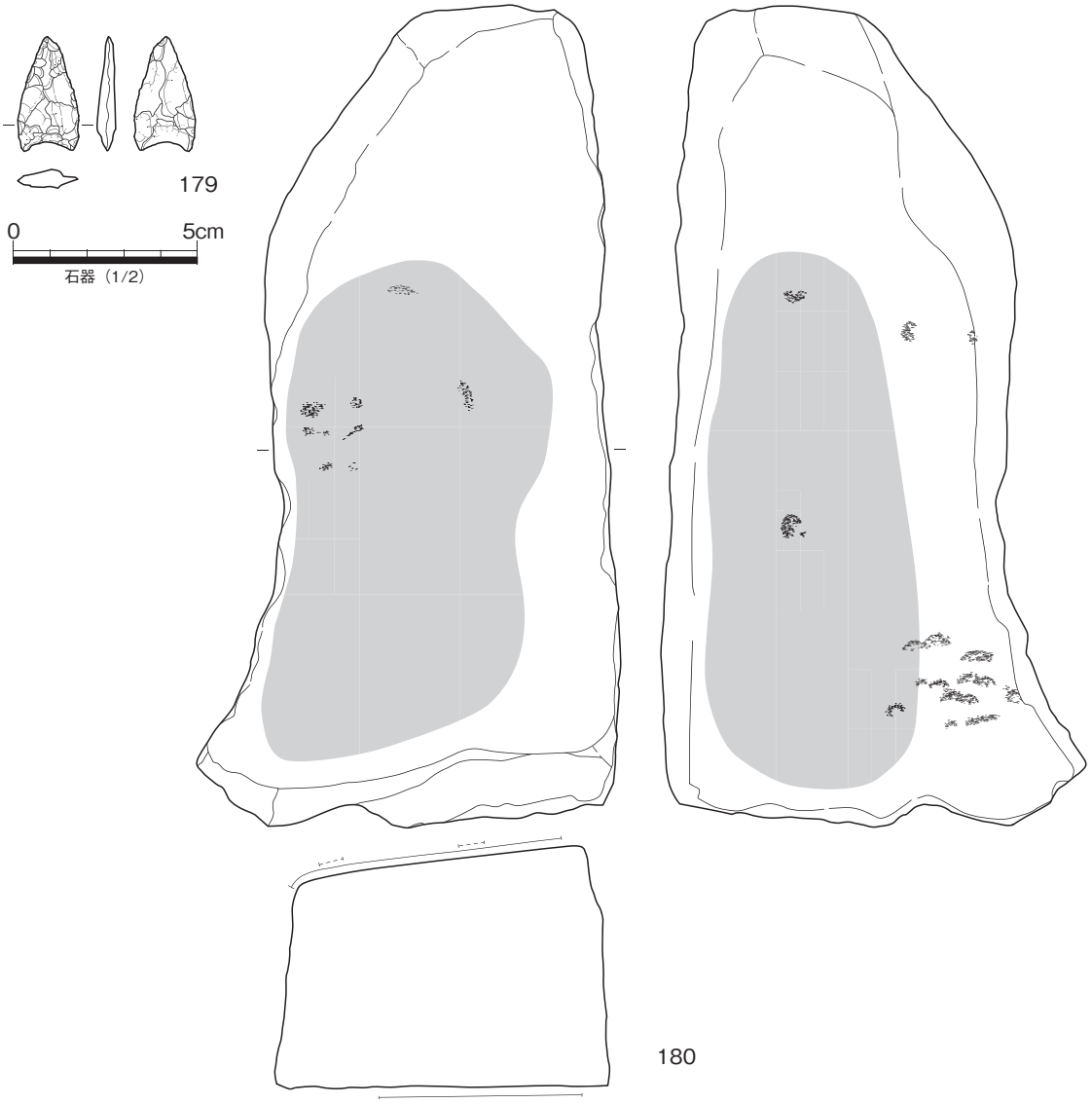


図 52　SH10 出土遺物（2）

SH13（図 53）

遺構　A 区北西部で検出した一辺 3.35 ～ 4.05m の方形竪穴住居跡である。SH15 と重複するが、明確な切り合い関係を把握することはできなかった。主柱穴跡は南北方向の２穴で、その間に南北に細長い炉跡を検出した。また床面精査の結果、主柱穴跡の位置でベッド状遺構の痕跡を確認した。床面出土遺物は少なく、図化した土器は主に埋土中より出土した土器である。

底部付近が丸みを帯びる鉢等新しい土器を含み、壺口縁部は明確な面取りがあり、別の甕底部片は平底面をもつ等混在した様相を示すが、総体として弥生時代終末期として位置付けるのが妥当であると考えられる。

焼土は、合計 11 点で 191.47g が出土した。3 ～ 5cm 大の中型塊である。表面に面をもつものはないが、凹凸は目立たない。焼土中にサヌカイト剥片を含むものがあり、至近の土壌を使用したことを示す。(森下)

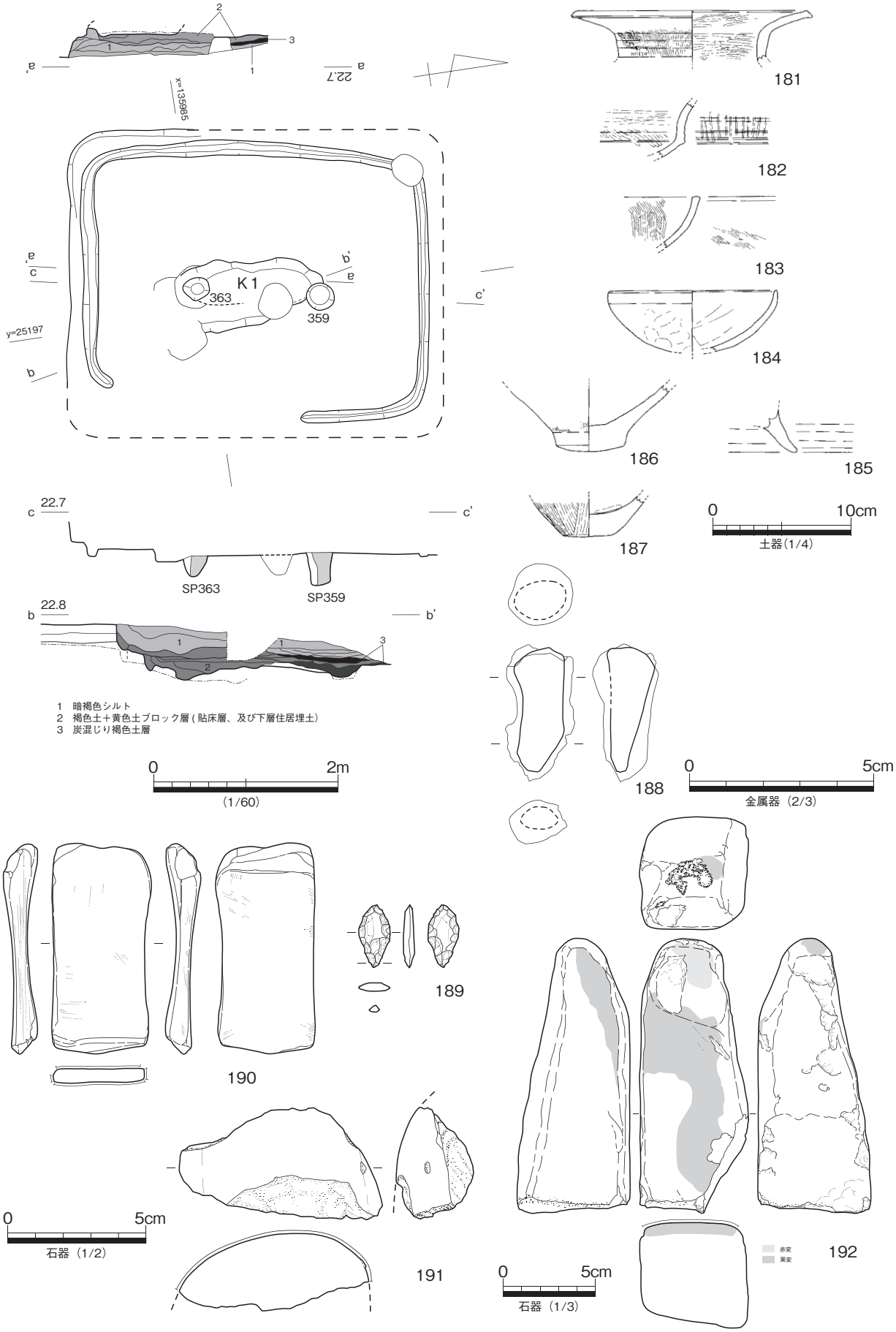


図 53　SH13 平・断面・出土遺物

土器　181 の広口壺は短い頸部から口縁部が直線的に外反し弥生後期後半新段階に位置付けられるもので、胎土中に雲母片を多く含む。182 は高杯杯部片で、形態から弥生終末期の所産と見られる。183 の鉢口縁部は、口縁部上端面を面取りするもので、弥生終末期でも古段階を中心としたものと考えられる。184 の鉢は、形態から見て、弥生終末期中段階のものと見られる。186 は凸状の鉢底部片であり、弥生後期後半古段階を中心に見られる形態である。187 は外面の調整が丁寧なことから、甕底部片と見られる。185 は弥生中期後半期の台付鉢の脚台片か、終末期の複合口縁壺の口縁とみられる。
金属器　188 の鉄器片はほぼ全面が錆に覆われているために形状に不安を残す。厚みから見て、中形品の破片と見られる。(信里)

石器　189 はサヌカイト製石鏃である。長さ 2.3cm の小型品で凸基無茎式に相当するが、下端部を尖らせるような調整加工が見られることから、石錐の可能性もある。190 は流紋岩製砥石である。扁平で小口を除く 4 面を砥面とする。上下の大きな砥面はいずれも研ぎ減りで中央部が窪み平滑度が強い。191 は花崗岩製の磨石片である。幅 8cm 以上の俵型に復元できる。遺存部は全面研磨面に覆われる。192 は砂岩製の縦長の台石である。一面が強く被熱し、特に上部が赤く変色する。折損面である下面は平坦で、安定よく設置できることから、支脚として使用された可能性が高い。(森下)

出土土器の様相は、弥生後期後半古段階から終末期中段階までの資料が混在している。隣接する SH14・15 等の遺構の重複関係を考慮すると、古相を示す土器は周辺遺構からの混入の可能性が高いと考えられることから、本住居は弥生終末期中段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SH14（図 54・55）

遺構　A 区北西から C 区北東に跨って検出した方形の竪穴住居跡である。SH15・13 に先行する他、多数の柱穴跡と重複するため、平面プランが判別し難いが、南西隅付近では壁溝を伴う明確な掘り形を検出した。床面は中央部一辺 2.8m の範囲が一段窪む形態のベッド状遺構を形成し、下段部四隅に 4 穴の主柱穴跡を備える。主柱穴跡は深さ概ね 0.3 ～ 0.55m の深さを備え、SP1265 では柱を固定する裏込め礫を検出した。床面中央部付近で炭化物が出土したが、中央土坑の明確な平面プランを検出するには至っていない。a ライン断面では 10 層･12 層が炭化物を含む土層である。全形を復元すると、一辺 5.9 ～ 6.4m の隅丸方形を呈する竪穴住居跡と判断できる。

出土遺物は土器、銅鏃、管玉、勾玉、石器がある。土器は小片が多く、床面直上で原位置を留めた土器はない。銅鏃・管玉・勾玉は住居跡埋土東側で出土した。このうち勾玉は主柱穴跡 SP313 の検出面からやや浮いた位置で出土、銅鏃は同じく主柱穴跡 SP432 検出面からやや浮いた位置で出土している。a ライン断面に出土位置を投影すると、ベッド状遺構下段部に向かって窪む堆積層中に含まれた可能性が高く、当該住居の埋没開始後しばらくして投棄されたものと考えられる。なお、管玉は出土レベルの記録が不十分なため層位関係が明確でないが、出土状況の写真等から判断してベッド状遺構上段部の床面からやや浮いた位置で出土した可能性が高いことから、銅鏃や勾玉と相前後して投棄されたものと推定する。なお、埋土の水洗を実施したわけではないが、ガラス小玉は出土していない。

焼土は a ライン断面で表示したように小粒塊が埋土中に含まれていたが、僅かな量であり、遺物としては取上げていない。(森下)

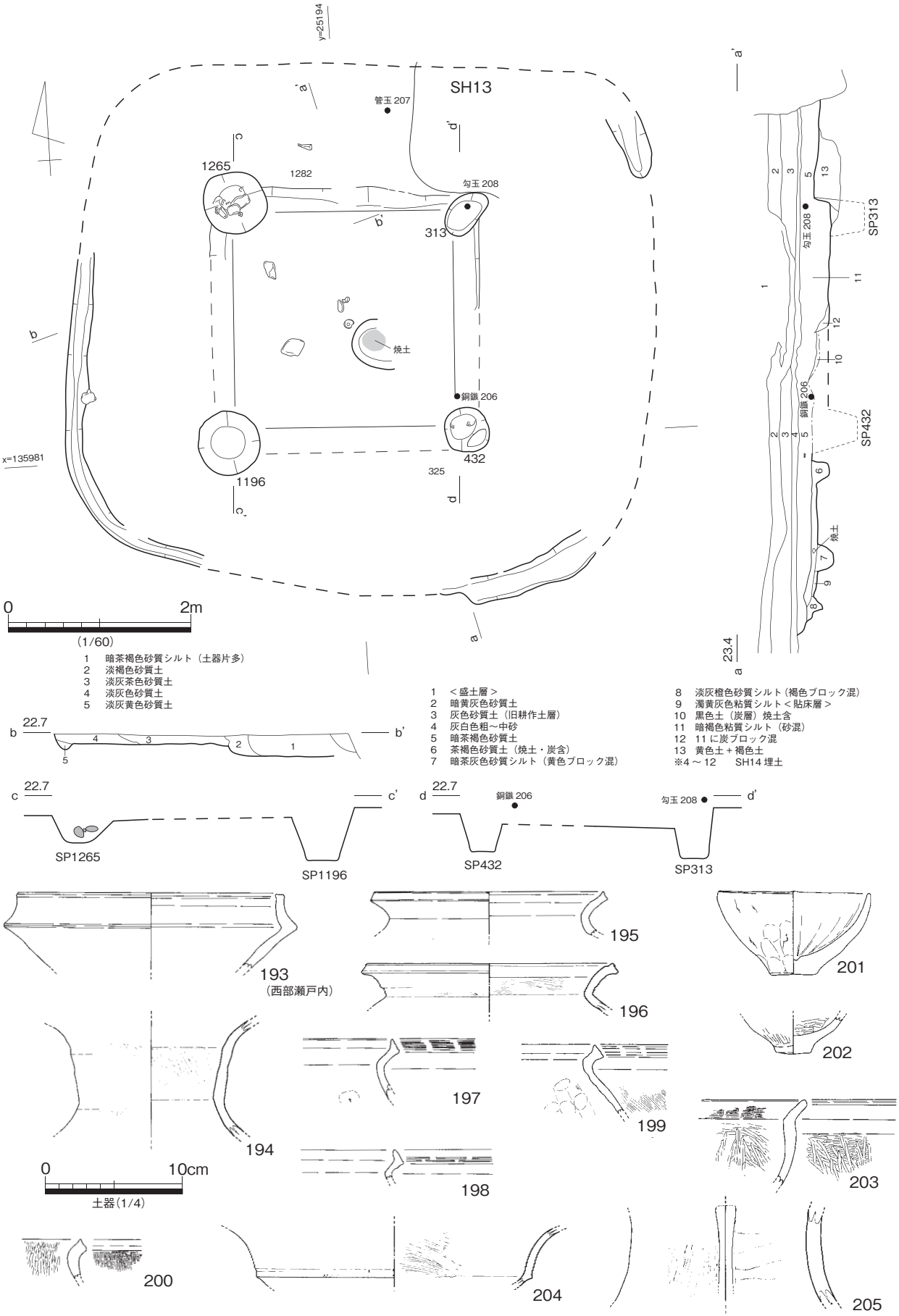


図 54　SH14 平・断面・出土遺物（1）

土器　193 は複合口縁壺の口縁部である。形態・胎土から見て、西部瀬戸内系の複合口縁壺と見られる。194 は広口壺の頸部から口縁部にかけての破片で、胎土中に雲母片を多く含み、弥生終末期古段階に位置付けられる。195 の甕口縁部は、形態から弥生後期後半古段階に比定される。196 は口縁部が鋭く屈曲する甕で、胎土中に雲母片を多く含み、弥生後期後半を中心とした時期に位置付けられる。197 ～ 200 は弥生後期前半古段階から新段階にかけての甕の口縁部片である。204 の高杯は大きく反転する口縁部をもつもので、弥生終末期古段階を中心としたものと考えられる。205 は方形透かしをもつ器台脚部で、弥生後期前半新段階の所産と見られる。201 の鉢は形態から見て、弥生後期後半新段階のものと考えられ、胎土中に雲母片を多く含む。203 の外反する口縁をもつ鉢は、胴部の形態が不明ながらも弥生終末期古段階に位置付けられる。(信里)

金属器　銅鏃 1 点が出土した。現存長 2.35cm、厚さ 0.5cm、先端部と基部を欠損するが、関部から身部が残る。

玉類　207 は長さ 1.0cm、直径 0.5cm、上端孔径 0.3cm、下端孔径 0.15cm の碧玉製管玉である。長／径比は 2：1 で短く太目のタイプである。上端面には製作時の剥離面が僅かに残る。下端面には製作時の顕著な研磨痕を留める。穿孔は上端から下端に向かって一方向のみから施すタイプである。色調は暗緑色で、重量は 0.37g を量る。

208 は小型の硬玉製勾玉である。色調は透明感のあるエメラルドグリーンで、一部灰白色の縞が見える。平面形は C 字形を呈し、頭部から尾部に向かって次第に細くなる。断面は方形で外面側稜線は丁寧な研磨が施され丸みを帯びるが、内面側稜線はそれに比べてやや鋭い。特に内側面は成形時の擦痕が残り、外面に施された仕上げ研磨が内側まで及んでいない。穿孔部は直径 0.1cm で表裏両側から穿孔する。(森下)

出土土器は弥生後期前半から終末期古段階の時間幅をもっている。また、本住居跡上層から掘り込まれる柱穴跡が多く隣接して竪穴住居跡が重複していることも出土土器の時間幅に影響していると考えられる。一方で、主柱穴跡から出土した土器は弥生後期前半から弥生後期後半古段階に比定され古相を示している。遺構の先後関係から、新相を示す遺物は混入品と理解し、本住居は弥生後期後半古段階を中心とした時期に営まれたものと判断する。(森下・信里)

SH15（図 56・57）

遺構　A 区北西部で検出した方形竪穴住居跡である。SH13 と重複し、それに後出する。掘り形東側は A 区中央撹乱により滅失する。主柱穴跡は 4 本で、主柱穴跡の東西に僅かな段差のベッド状遺構が備わる。床面の深さは、ベッド上段部で検出面から 0.15m、下段部で 0.1m である。主柱穴跡の深さは床面から概ね 0.65m とほぼ等しい。主柱穴跡の柱間距離は 2.9m である。東側ベッド部では下段部と上段部の境で細い壁溝を検出した。また住居跡周縁には西側で幅 0.25m、南側で幅 0.15m の壁溝を検出した。ただ、平面図に記録した壁溝プランは、断面 c ラインで見られるように、壁溝埋土上部の窪みを捉えたもので、元来の壁溝は図示した壁溝ラインの外側を周る。ただし完掘後に断面の検討で元来の壁溝が判明したことから、平面記録は取れていない。

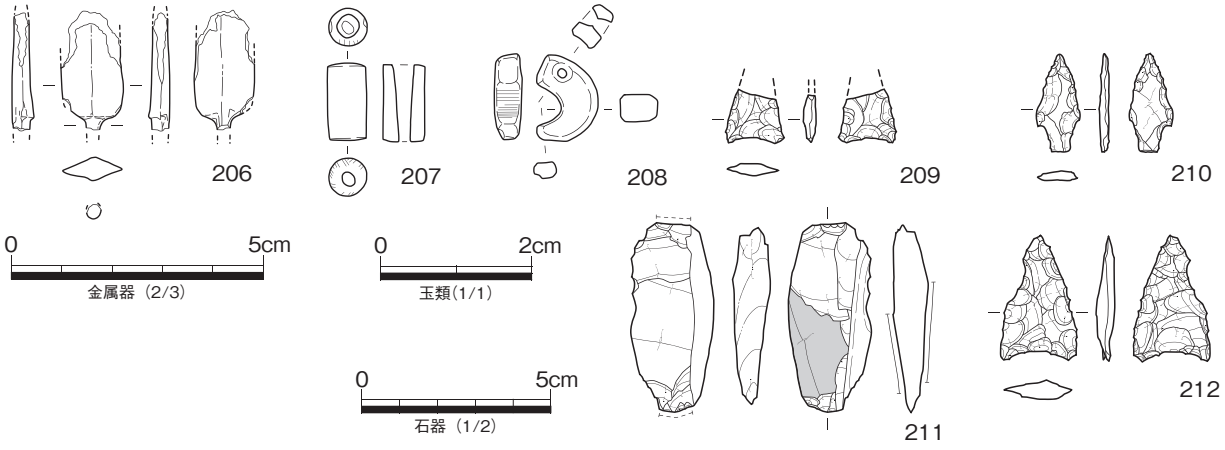


図 55　SH14 出土遺物（2）

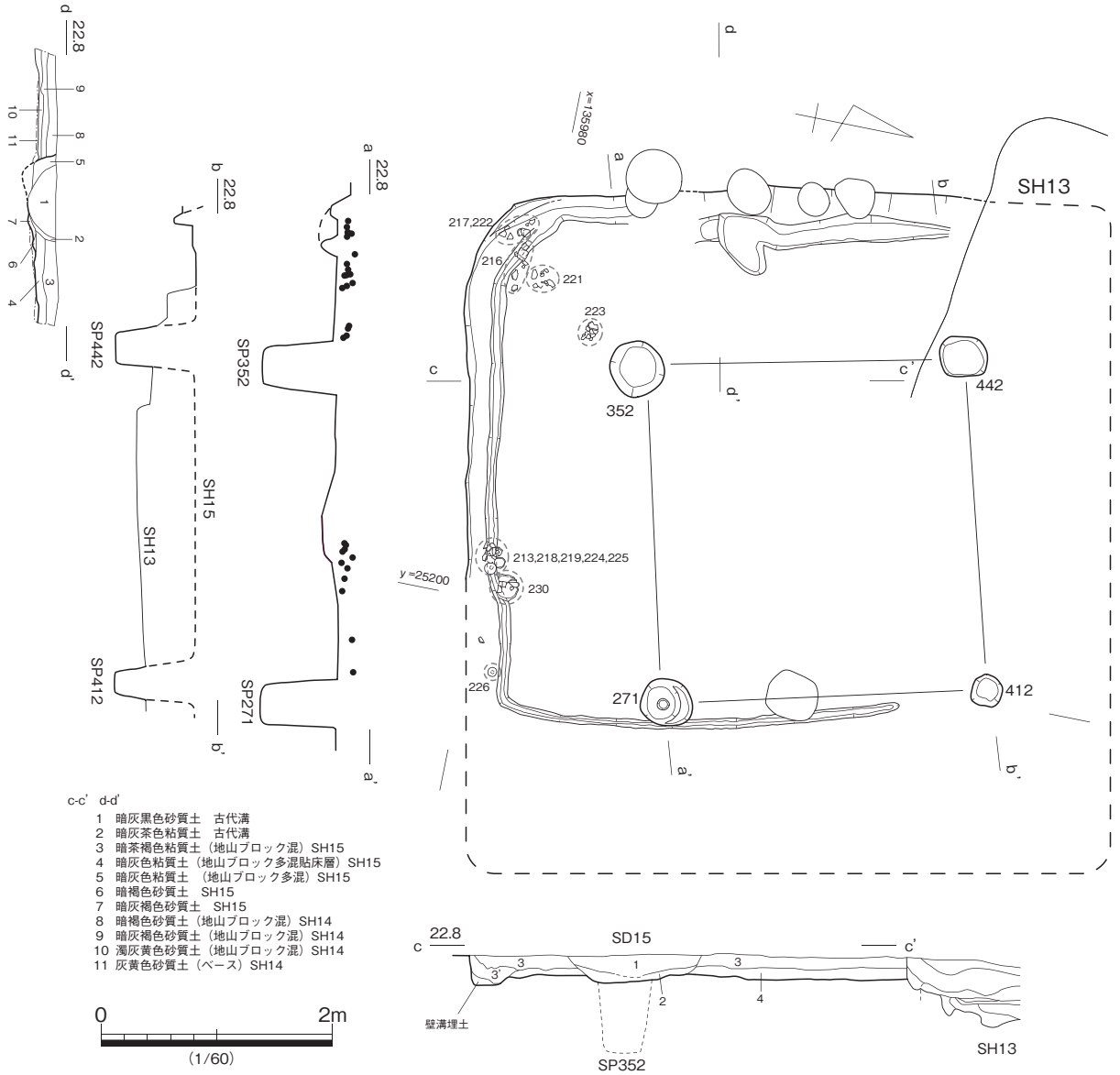


図 56　SH15 平・断面

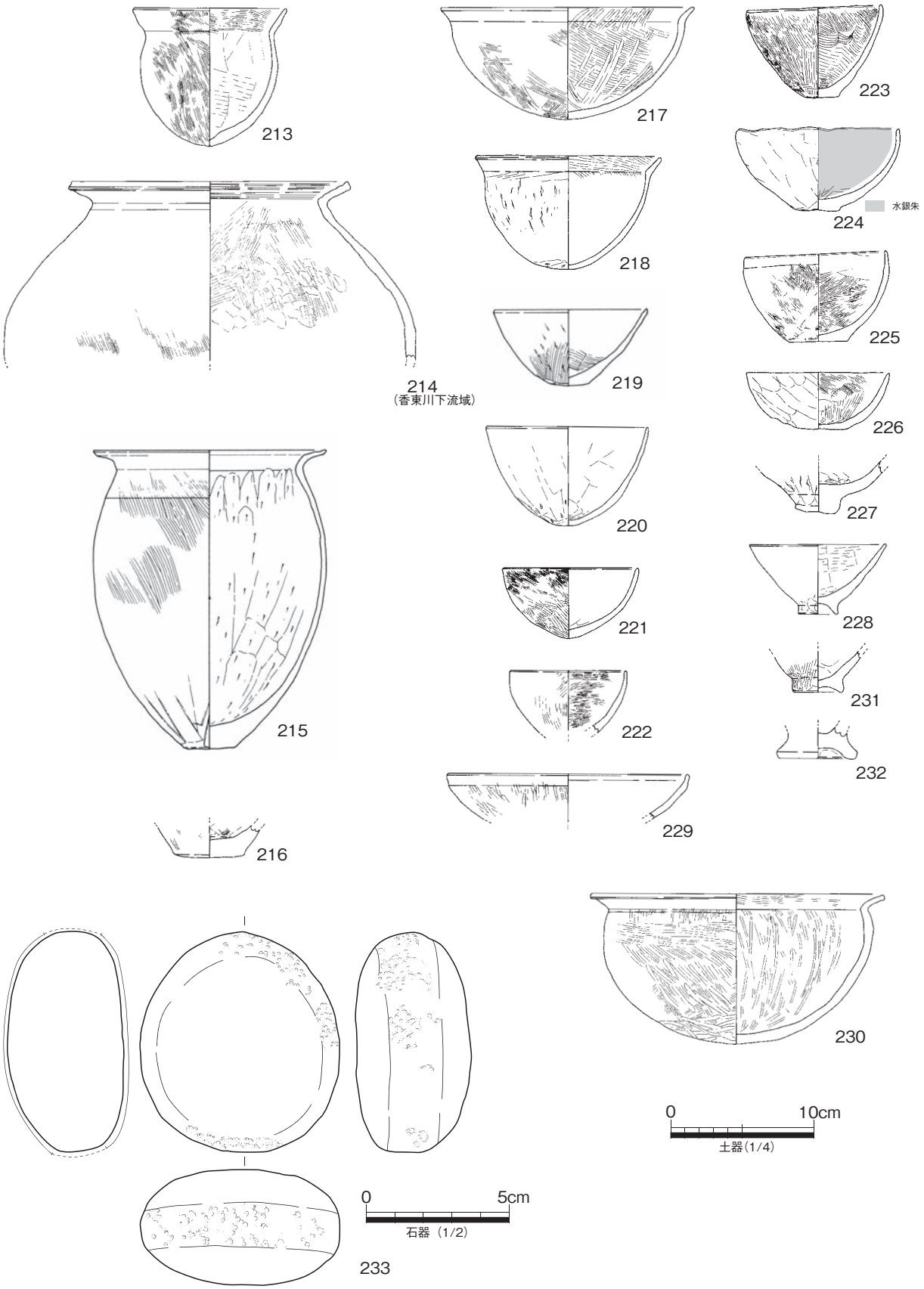


図 57　SH15 出土遺物

埋土は全般的に黄色基盤層ブロックを多く含み、一度に埋め戻したものと推定される。焼土は不定型なものが４点（合計 35.88g）が出土した。床面出土品に 5cm 程の大きさの焼土塊があるが、表面の残りは良くない。

床面南側を中心として遺存状態が良好な鉢を主体とした土器群が出土した。出土レベルは、a ライン断面では床面からやや浮くが、c ライン断面の貼床層（4 層）の厚み約 0.06m を考慮すると、これらの土器群は貼床層上面で出土したものと理解できる。小型甕１点、小型鉢３点、中型鉢１点（213・218・224・225・230）が南壁面沿いのやや東寄りの位置でまとまって出土した。このうち 224 は完形の直口鉢で内面全面に水銀朱が付着する。それ以外の土器は水銀朱の痕跡は見られなかった。また、住居跡床面南西隅では中型鉢１点（217）、小型鉢３点（223・221・222）がまとまって出土した。これら床面出土の土器群は壁溝平面プランを検出する前に出土したもので、上述した最終壁溝復元線の内側で壁溝が示す構造物に接するように置かれていたものと推定できる。同様の出土状況は、焼失住居跡である SH42 や当遺跡の既存の調査事例等にも多く見られる。(森下)

土器　213 は小形甕で、尖り気味の底部をもつ。弥生終末期段階頃の所産と考えられる。214 は高松平野の香東川下流域産の甕である。発達した口縁部形態から大久保編年の④～⑤段階の弥生終末期に位置付けられる。215 の甕は受口状の口縁部をもつもので、弥生後期後半新段階に位置付けられる。217・218 は短く屈曲する口縁部をもつ中形鉢であり、弥生終末期中段階に位置付けられる。219 ～ 228 は小形鉢である。底部形態から弥生後期後半から終末期中段階のものが混在しているが、221・222 は終末期中段階以降に出現するもので、尖底でハケ調整が多用される特徴的な鉢である。224 の内面には赤色顔料が認められ、分析の結果、水銀朱である可能性が高い。(信里)

隣接する遺構の重複関係が影響して、出土土器は弥生後期後半古段階から終末期中段階の時間幅を示しているが、本住居跡に最も伴う出土状況を示すのは、213 の小形甕と 221・222 の鉢である。これらの出土土器の帰属時期を援用し、本住居は終末期新段階に廃絶したものと判断する。(森下・信里)

SH16（図 58）

遺構　Ａ区西側やや南寄りで検出した竪穴住居跡である。検出した遺構は主柱穴跡と推定される２基の柱穴跡及びその間に挟まれた浅い楕円形土坑である。土坑は埋土中に少量の炭化物が含まれていたことから、中央土坑と判断した。平面形を推定する材料が乏しく、隅丸方形と復元したが、明確な根拠がある訳ではない。東側の主柱穴跡 SP304 は、埋土上部が粘性の強い暗褐色系粘質シルトに基盤層の黄色シルトをブロック状に含む土層で、その下部で柱穴掘り形及び柱痕を検出した。したがって上部層は住居廃絶時の柱抜き取りを目的とする掘削の際に流入した堆積層である。また、埋土下部の柱痕部も、上部と同じく粘性の強い褐色系シルトが堆積することから、基部まで柱を抜き取ったことが推定できる。

SP304 埋土の上部・下部の境付近で弥生後期後半頃の土器片とともにガラス小玉３点が出土した。その他、柱穴跡埋土の水洗によって魚骨（遊離歯）２点、不明骨片１点が出土した。鑑定の結果、魚骨はタイ科の犬歯１点、臼歯１点と判明した。不明骨は白色化が見られる。

玉類　234 ～ 236 は主柱穴跡 SP304 より出土したガラス小玉である。234 は直径 0.95cm、厚さ 0.2cm の

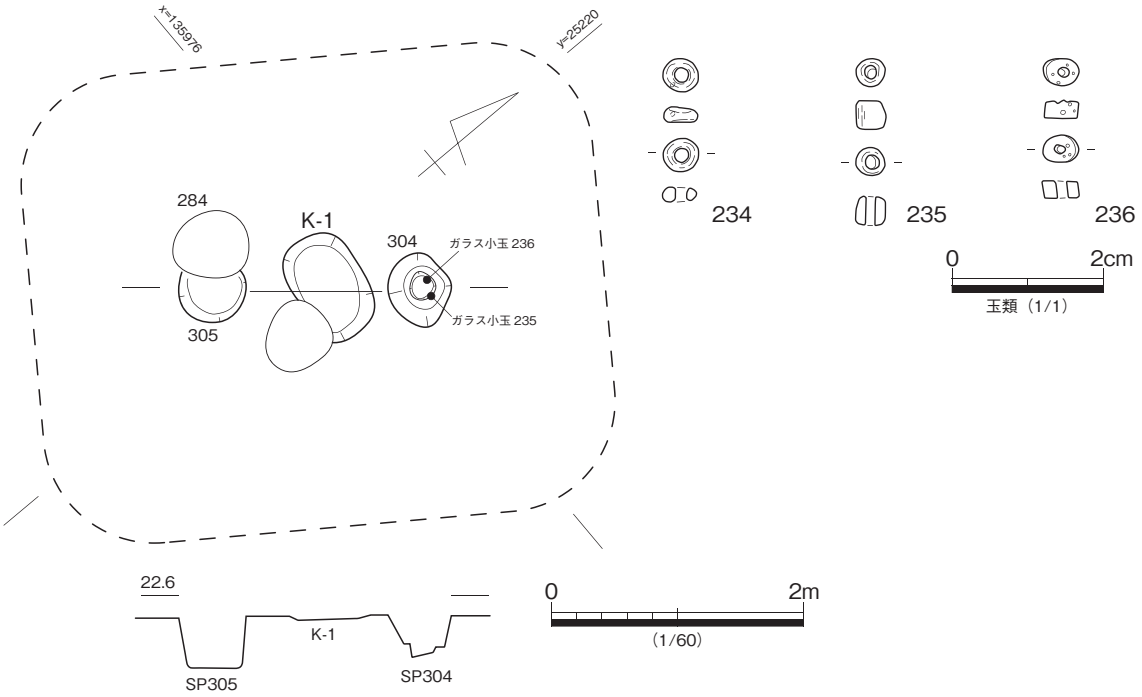


図 58　SH16 平・断面・出土遺物

扁平な形態で、上下に平坦面をもたず、孔から器面にかけて丸く仕上げる個体である。色調はエメラルドグリーンで器体内に中孔と同一方向（縦方向）の気泡筋が観察できる。235 は直径 0.4cm、厚さ 0.4cm の筒状の形態で、中孔に直交して上下に僅かな面を作る。色調はエメラルドグリーンで器体内に中孔と同一方向（縦方向）の気泡筋が観察できる。236 は直径 0.5cm、厚さ 0.25cm の扁平な形態で、上下に緩やかな凹凸面をもつ。凹凸面はガラス管切断痕跡で、切断後の仕上げ成形によって若干の滑らかさを認める。色調はエメラルドグリーンで器体内に中孔と同一方向（縦方向）の気泡筋が観察できる。以上の３点は、ガラス管を引き延ばし、切断して個別に仕上げ成形を施す製作技法が推定できるが、同一遺構から出土した同色系の小玉においても仕上げ成形に違いがある点は注目される。(森下)

当該住居跡では所属時期を示す土器は出土していない。(森下・信里)

SH17（図 59・60）

遺構　Ａ区西側中央部で検出した方形の竪穴住居跡である。東側をＡ区中央撹乱により滅失する。主柱穴跡は２穴で中央土坑は検出できなかった。主柱穴跡を中軸と考えると、南北 6.9m、東西 6.1m の規模が復元できる。検出面から床面までの深さは 0.35m である。幅 0.2 ～ 0.5m の壁溝が周る。断面図５層を貼床層と見ると、主柱穴跡ラインを境として住居の南北にベッド状遺構が復元できる。

床面西側壁際で土器片がまとまって出土した。また、焼土や炭化物が部分的にまとまって出土している。住居北西隅付近は後述する掘立柱建物跡 SB04 の構成柱穴である SP415 と重複するため平面プランの確認に手間取り、遺構形状の記録を残すことができなかったが、出土遺物等から見て掘立柱建物跡 SB04 に後出するのは確実である。SP415 でも焼土がまとまって出土しており、当該住居跡の焼土との区別が一部困難であった。確実に当該住居跡に伴う焼土は小型品２点 15.22g を回収したのみである。

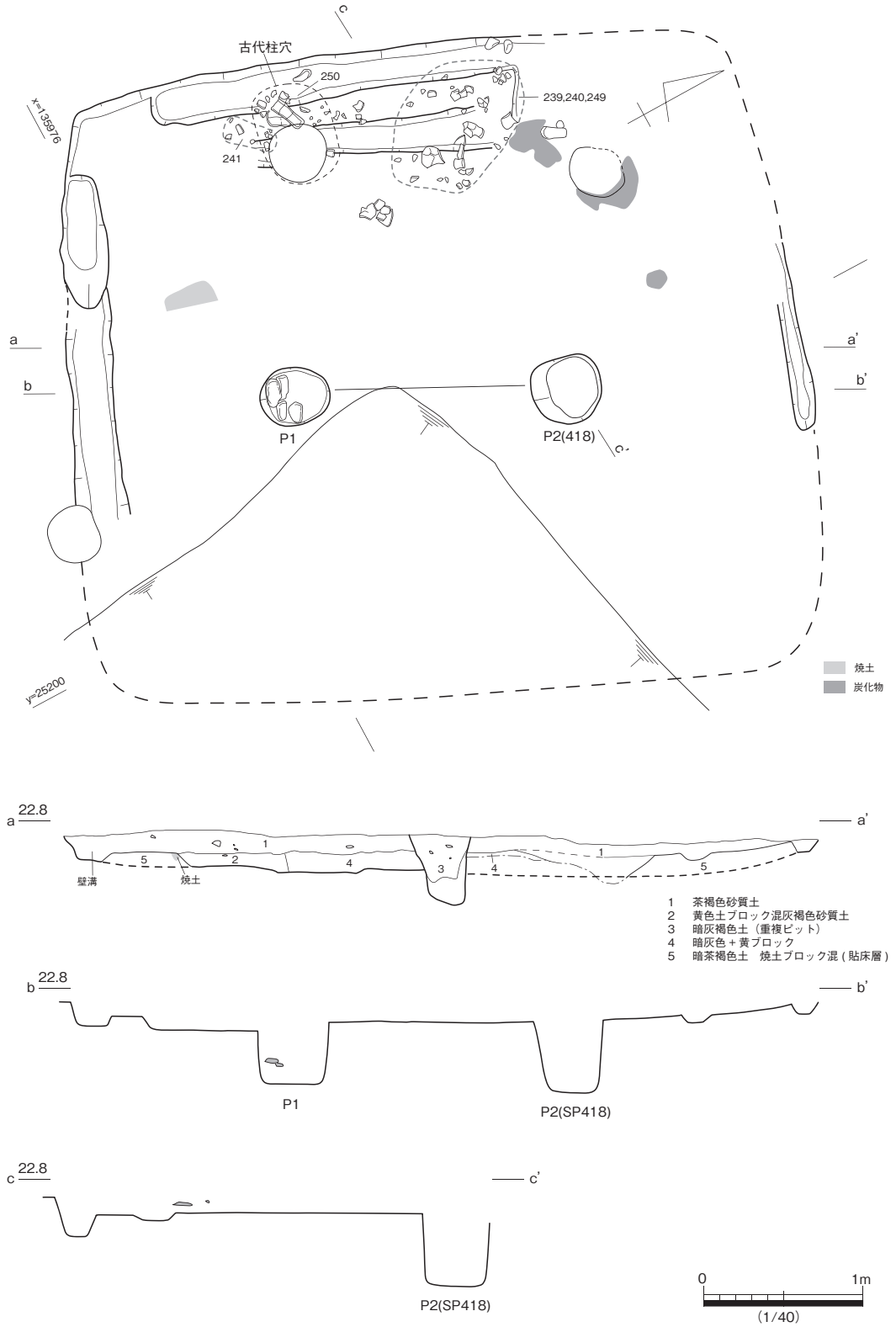

古代柱穴
250
239,240,249
241
x=139976
y=25200
a
a'
b
b'
c
c'
P1
P2(418)
焼土
炭化物
22.8
壁溝
焼土
1 茶褐色砂質土
2 黄色土ブロック混灰褐色砂質土
3 暗灰褐色土（重複ピット）
4 暗灰色＋黄ブロック
5 暗茶褐色土　焼土ブロック混（貼床層）
P1
P2(SP418)
P2(SP418)
0
1m
(1/40)

図 59　SH17 平・断面

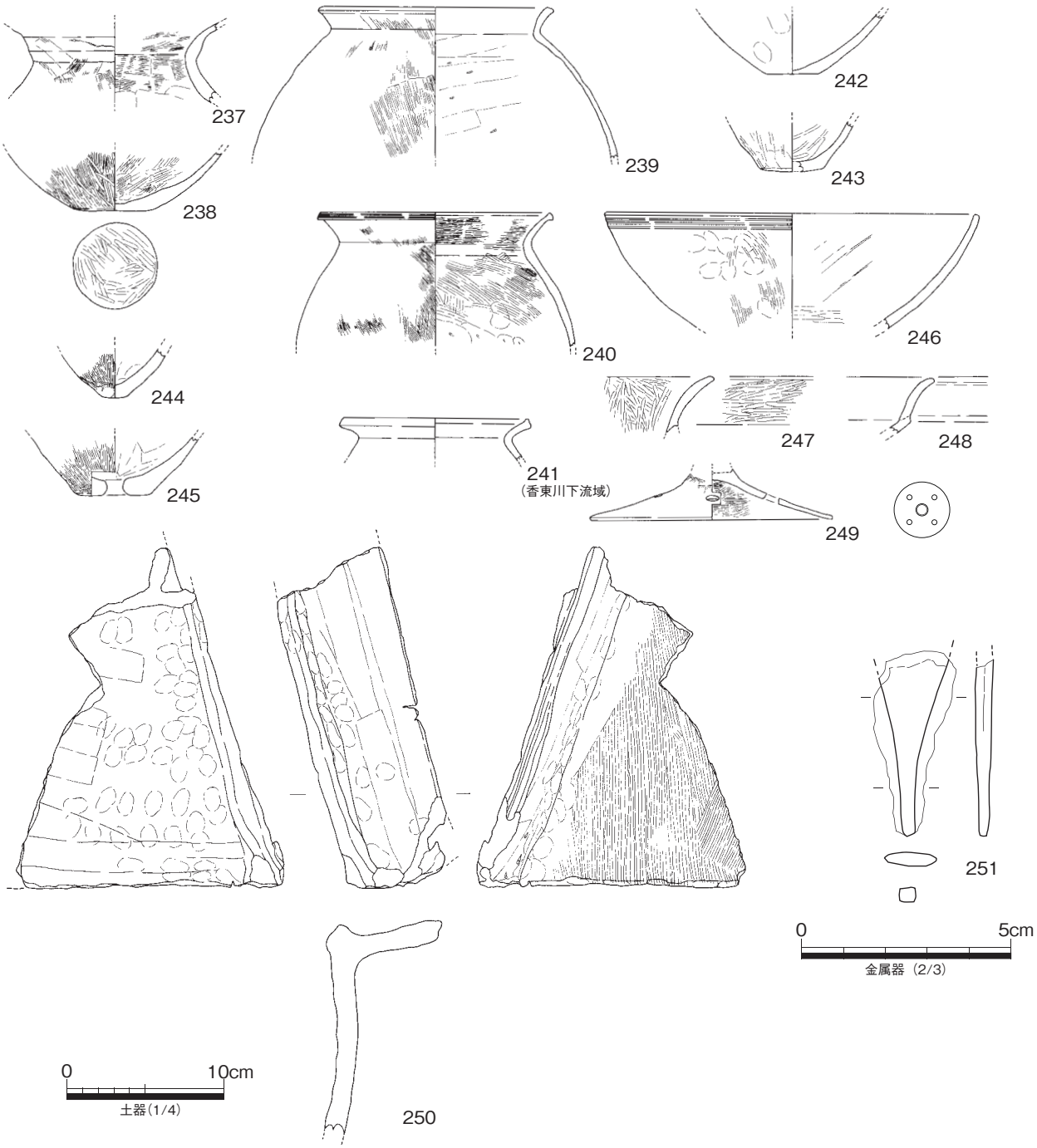


図 60　SH17 出土遺物

図示した焼土の出土位置は、さらに同じ掘立柱建物跡 SB04 の構成柱穴跡 SP332 の位置に合致する。a ライン断面においても SP332 の中央付近、つまり柱抜き取り痕と考えられる位置で出土している。したがって当該遺構として取上げた焼土は、下層遺構の混在品である可能性が高い。床面北西隅からやや中央寄りで検出した炭化物については、周辺の土器とのレベル差がないことから、当該遺構に伴うものと見て良い。しかし、西壁沿いで出土した土器群のうち、一部の土器は古代の移動式竈であることから、古代の遺構を掘り残したことも確実である。いずれにしても、主柱穴については明らかに深い柱穴跡であり、竪穴住居跡であるのは間違いない。

出土した土器のうち、239・240・241・249 は西壁付近でまとまって出土したものである。また、242 ～ 247 は a ラインを境に東側の床面及び西側埋土下層で出土したものである。251 の鉄鏃は東側床面出土である。(森下)

土器　237 は広口壺の頸部片。238 は薄い器壁と底部形態、胎土中に角閃石を多く含むことから、高松平野の香東川下流域産の壺底部片と見られる。239 は直立気味の口縁部上端部を面取りする甕であり、弥生後期後半古段階の所産と考えられる。240 は口縁端部がヨコナデによって強調される甕である。241 の甕は口縁部の屈曲が緩く、口縁端部が僅かに拡張される甕であり、口縁部形態や胎土中に角閃石を多く含むことから、高松平野の香東川下流域産と推定できる。口縁部形態から大久保編年の下川津Ⅱ式あるいは②段階に比定できる。242 は外面粗雑な調整から、鉢底部の可能性が高い。246 はボール状の中形鉢であり、口縁端部上端部が面取りをされることから、弥生後期前半新段階から後半古段階の特徴をもつ。247、248 は高杯の口縁部。249 は低脚の台付鉢の脚部片であり、弥生後期後半古段階のものと見られる。250 は土師器移動式竈片で、混入品である。
金属器　251 は鉄鏃の身部から茎部にかけての破片である。身のほぼ全域に刃部が作出されたと考えられることから、柳葉式鉄鏃と判断できる。(信里)

住居北東部よりまとまって出土した土器群の帰属時期から、本住居は弥生後期後半古段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SH18（図 61）

遺構　A 区北西隅で検出した方形竪穴住居跡である。西側に幅 1.6m、奥行 0.6m の張り出し部が付属する。大部分をA区中央撹乱により滅失するが、主柱穴跡の配置から平面プランを復元した。当初は、張り出し部を別の竪穴住居跡 SH19 が重複すると推定して調査を進めたが、対応する主柱穴跡を検出することができなかったことから、SH18 の貼り出し部と判断した。

張り出し部の床は住居跡本体の床より約 0.1m 高いレベルにある。住居跡本体の壁際に幅 0.3m の壁溝が周るが、張り出し外縁にも幅 0.15m の壁溝が周る。

埋土は暗茶褐色粘質土で、炭化物、焼土、基盤層ブロックを含む。張り出し部床面直上の基盤層ブロックで構成する薄い土層（a ライン 3 層）は、貼床層と推定される。床面の一部に炭化物がまとまる範囲がある。

なお、当該住居跡西側では、別の竪穴住居跡 SH20 が存在するものとして調査を進めた。しかし、明確な主柱穴跡の配列を得ることができなかったので包含層に位置付けた。遺構検出時には少なくともその包含層を当該住居が掘り込んでいたので、竪穴住居跡とは特定できない何らかの遺構が当該住居構築前に存在した可能性が高い。包含層として報告した 5540 の土錘は当該住居構築前に埋没したその遺構から出土した遺物である。

SH18 出土遺物は、土器小片が多く、実測可能な遺物は図示した 4 点のみである。252・253 は住居跡本体部分、254・255 は張り出し部で出土した土器である。また、埋土中から多数の焼土小片が出土したが、焼き固まって遺物として取上げた焼土は 2 点（7.37g）のみである。(森下)

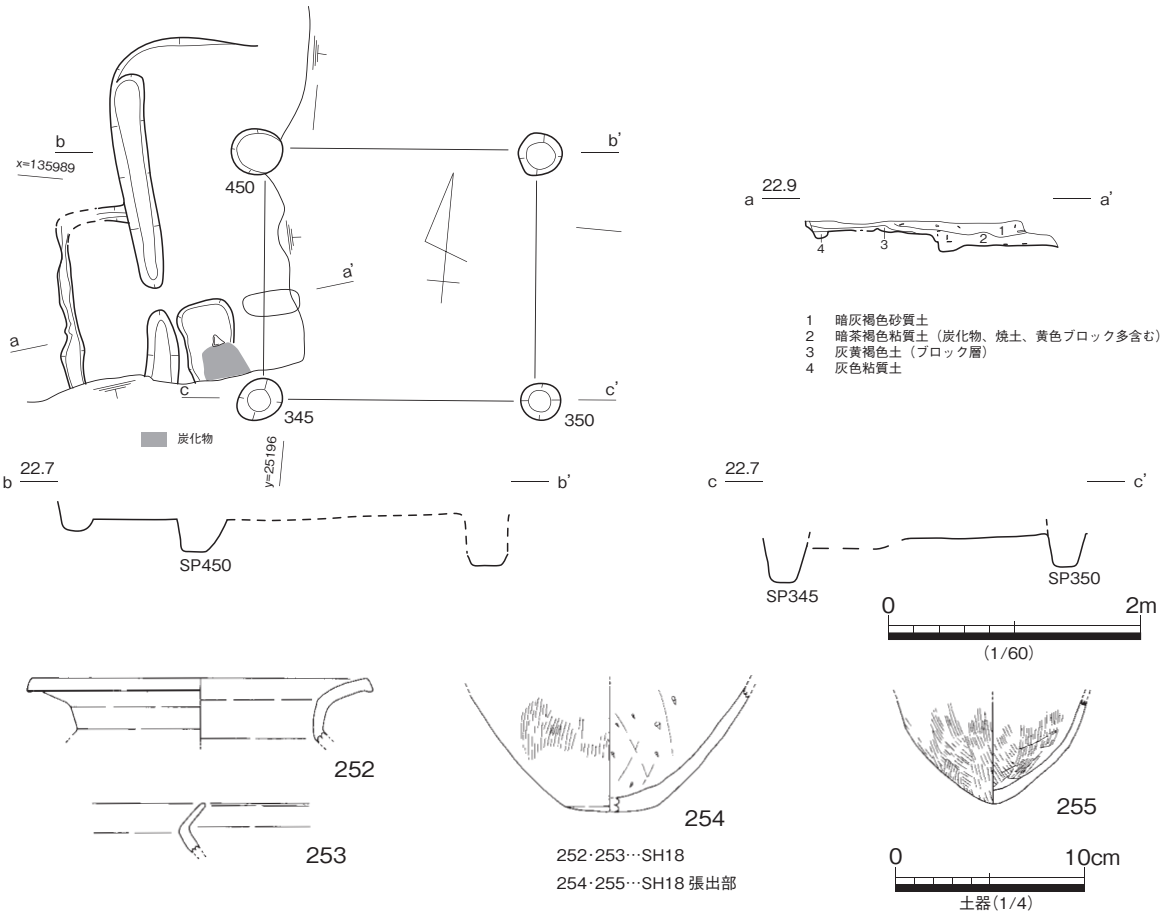


図 61　SH18 平・断面・出土遺物

土器　252 は広口壺の口縁部片であり、口縁部があまり発達しておらず弥生後期後半に位置付けられる。253 の甕は口縁部が短く屈曲する。詳細な時期は不明ながら、弥生終末期頃と見られる。254 は甕の底部片。やや丸みをもつ矮小な平底の底部から、弥生終末期古段階に位置付けられる。255 は、ハケ調整が多用される尖底の鉢で弥生終末期中段階から新段階のものと見られる。(信里)

時期決定可能な遺物は少ないが、255 の尖底鉢の特徴から、本住居は弥生終末期新段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SH27（図 62 ～ 66）

遺構　B 区東側中央部、平成 8 年度調査地に跨って検出した円形の竪穴住居跡である。直径 5.8m で壁際に幅 0.2m の壁溝が周る。床面は中央部の一辺 3.55m の範囲が一段低く、いわゆるベッド状遺構を形成する。ベッド上段の深さは検出面から 0.2m、下段の深さは上段から 0.15m である。主柱穴跡は 2 群検出した。1 回の建て替えを行った住居跡であることがわかる。最終廃絶時の主柱穴跡は下段四隅の 4 基（SP651・652・827・650）である。下段中央部では 2 基の中央土坑を検出した。そのうち K1 は柱穴状の深い土坑で、K2 は断面が浅い皿状となる土坑である。両土坑の上面は炭化物層が覆う。炭化物除

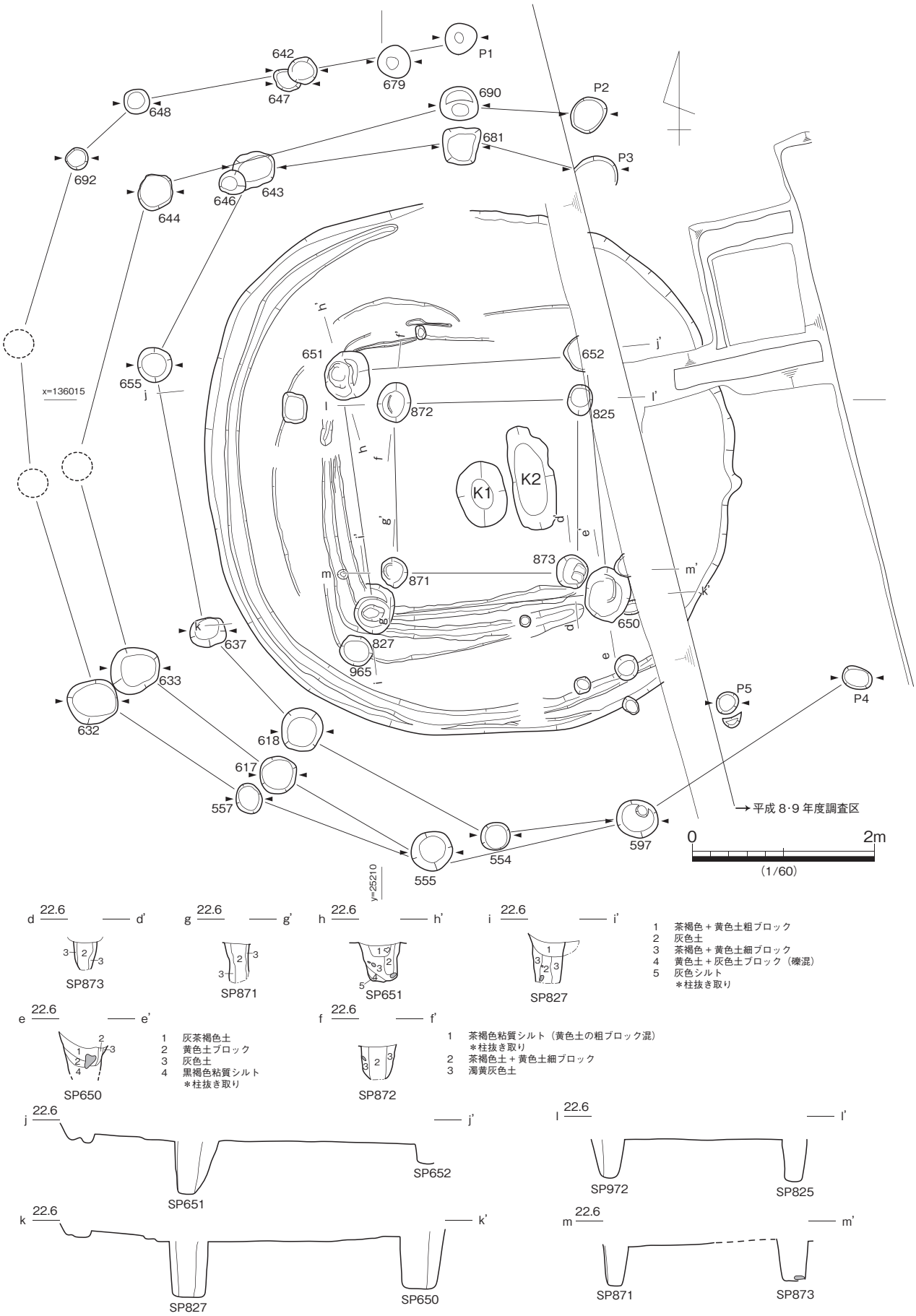


図 62　SH27 最終床面平・断面

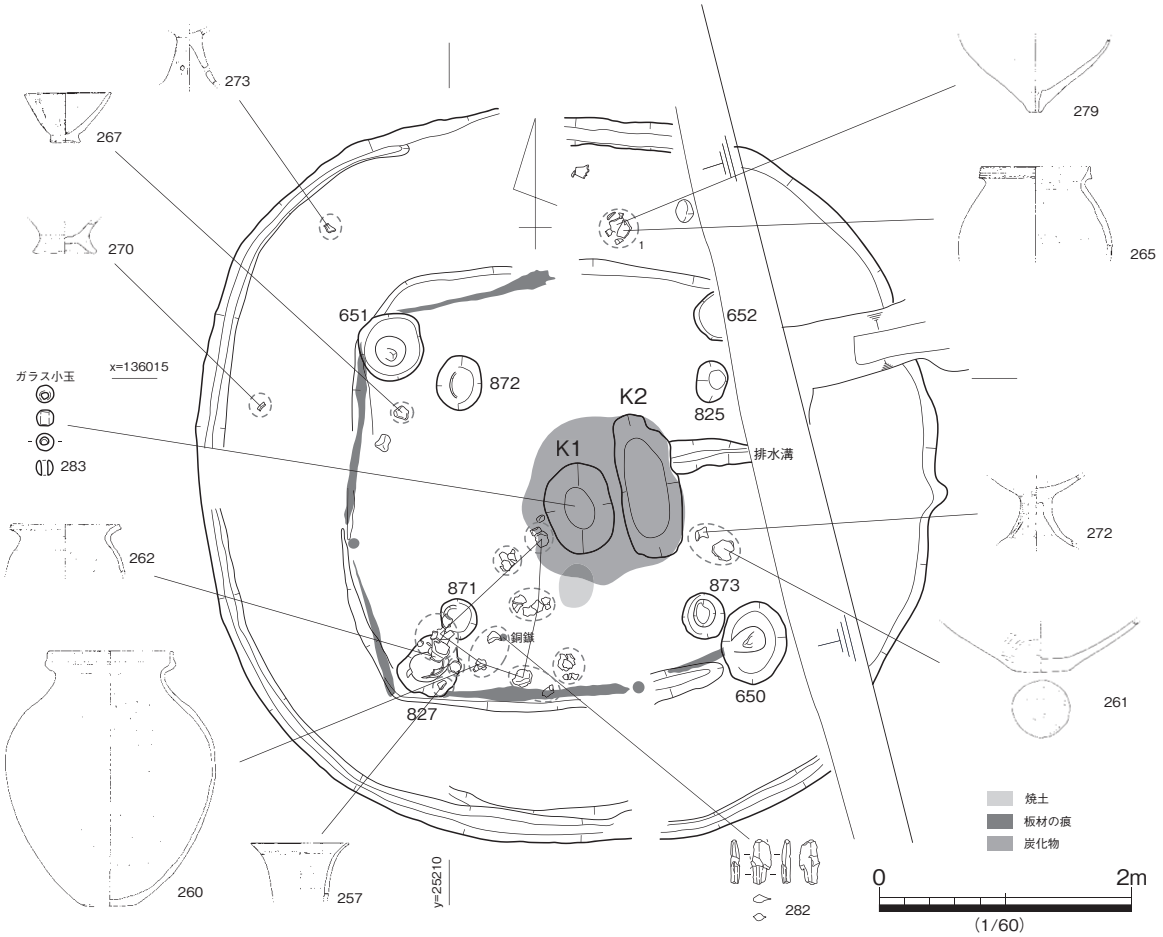


図 63　SH27 上層床面遺物出土状況

去後、これらの土坑平面プランを検出した。両土坑間に重複はなく、どちらも炭化物層が埋土中に流入することから、これらは同時期に存在したものと考える。また、K2 から東に向けて幅 0.25m、深さ 0.05m の浅い排水溝を検出した。東に向かって細くなり、平成 8 年度調査地では検出していない。

ベッド状遺構上段部は断面図に示したように、主に基盤層ブロックが混じる貼床で構築される。また、壁溝は貼床層の上位から掘り込まれる。下段部検出中に、幅 0.05 ～ 0.1cm の板痕跡及び小形の木杭の跡を確認した。また、下段部掘下げ後、その縁に浅い壁溝状の小溝を検出した。この小溝と板痕跡の方向がほぼ一致することから、上下段の境には元来木板等が置かれており、床面踏込み等により下段部床面に食い込み、小溝を形成したものと考えるのが妥当である。

下段部床面では、当初検出した主柱穴跡の内側でもう一つの主柱穴跡 4 基（SP825・871 ～ 873）を検出した。これらは床面の炭化物や基盤層・褐色土の微細ブロックからなる薄い堆積層を除去した後に検出した。当該住居跡の建て替え前の主柱穴跡と判断できる。

出土遺物は図示のように主に下段部において床面遺物が出土した。特に主柱穴跡 SP827 周辺では、床面から柱抜取穴に連続する流入土に多くの土器が含まれており、住居廃絶直後に遺物投棄が行われた可能性が高い。なかでも完形に復元可能な壺（260）は床面・主柱穴跡上層、中央土坑 K1 から出土した破片が接合したものである。これらの土器群に伴い、銅鏃（282）が出土した。その他、中央土坑 K1 よりガラス小玉 1 点が出土している。

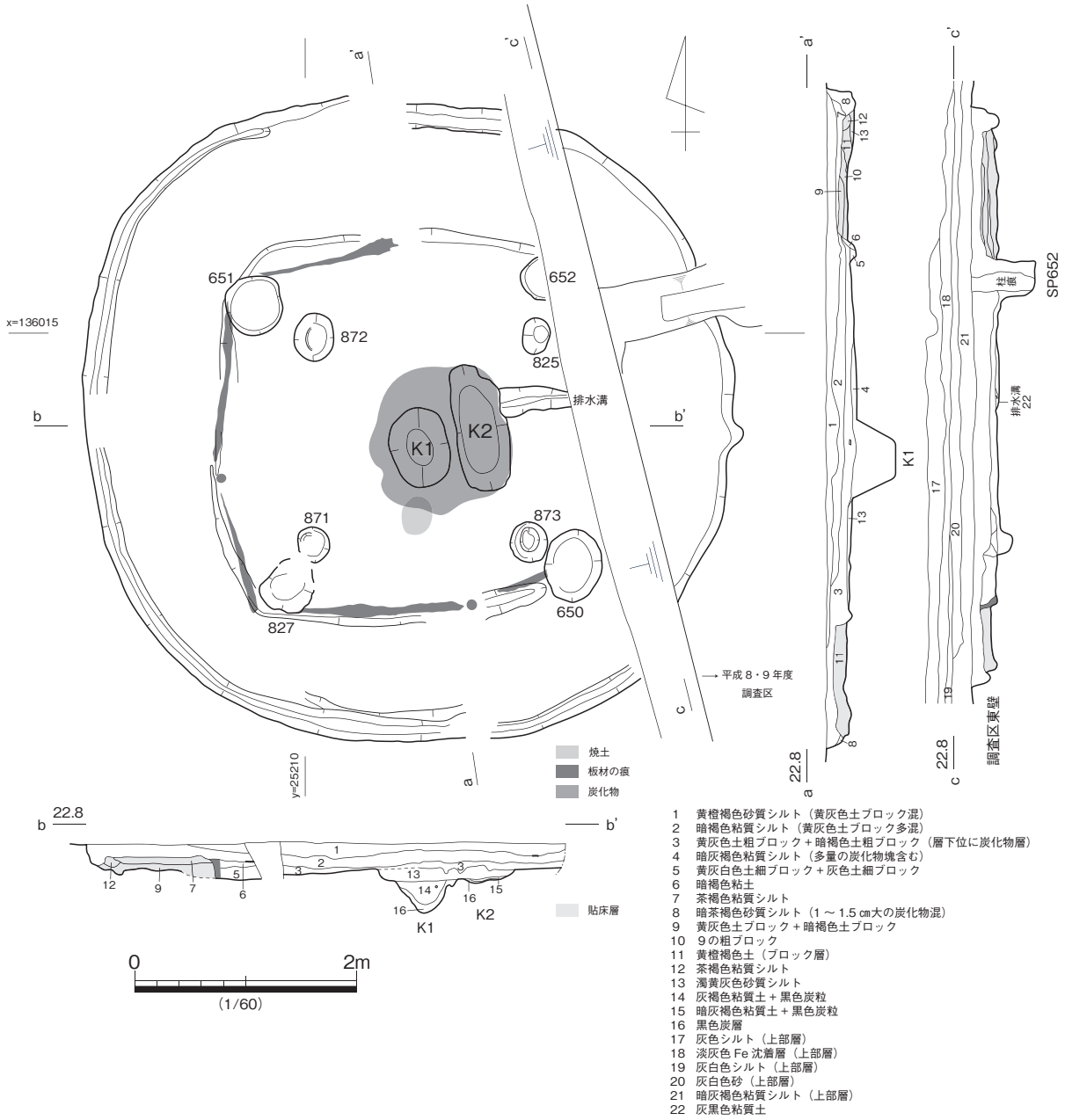


図 64　SH27 上層床面平・断面

当該住居跡の掘り方外周には、外縁から 1 ～ 2m の範囲で多数の柱穴跡が分布する。これらは一見不規則な配置にも見えるが、住居跡の外周線に沿った配列を観察すると、柱間 2 ～ 3m で住居跡を取り囲むように並んでいることがわかる。それぞれの柱穴跡の深さは 0.2 ～ 0.3m と、さほど深いものではない。当該遺構と重複する掘立柱建物跡の可能性も考えたが、建物跡として復元できる配列はないことから、住居跡に伴う柱穴跡列と考えた。同様の柱穴跡列は弥生時代後期から終末期にかけて類例が知られており、住居周堤の外縁を画す柱穴跡列と指摘されている。当遺跡においても住居周堤を示す遺構（溝跡）は類例があり、掘り方外部施設として位置付けるのは無理がない。

焼土は合計 35.94g が出土した。そのうち上層出土の 1 点は、比重が重く焼き締まった個体である。主柱穴跡 SP651 では小塊 2 点（10.65g）が出土している。(森下)

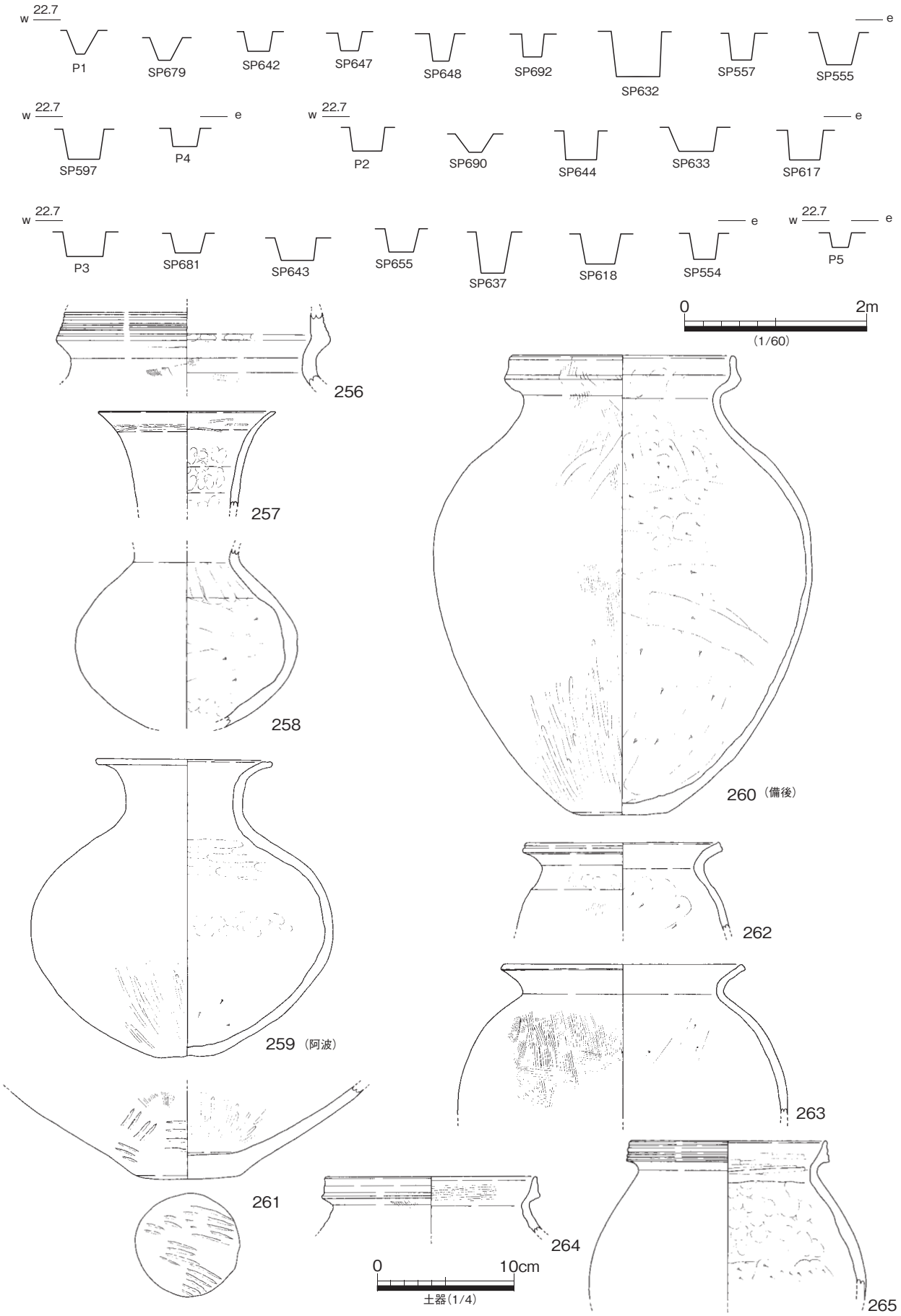


図 65　SH27 柱穴断面・出土遺物（1）

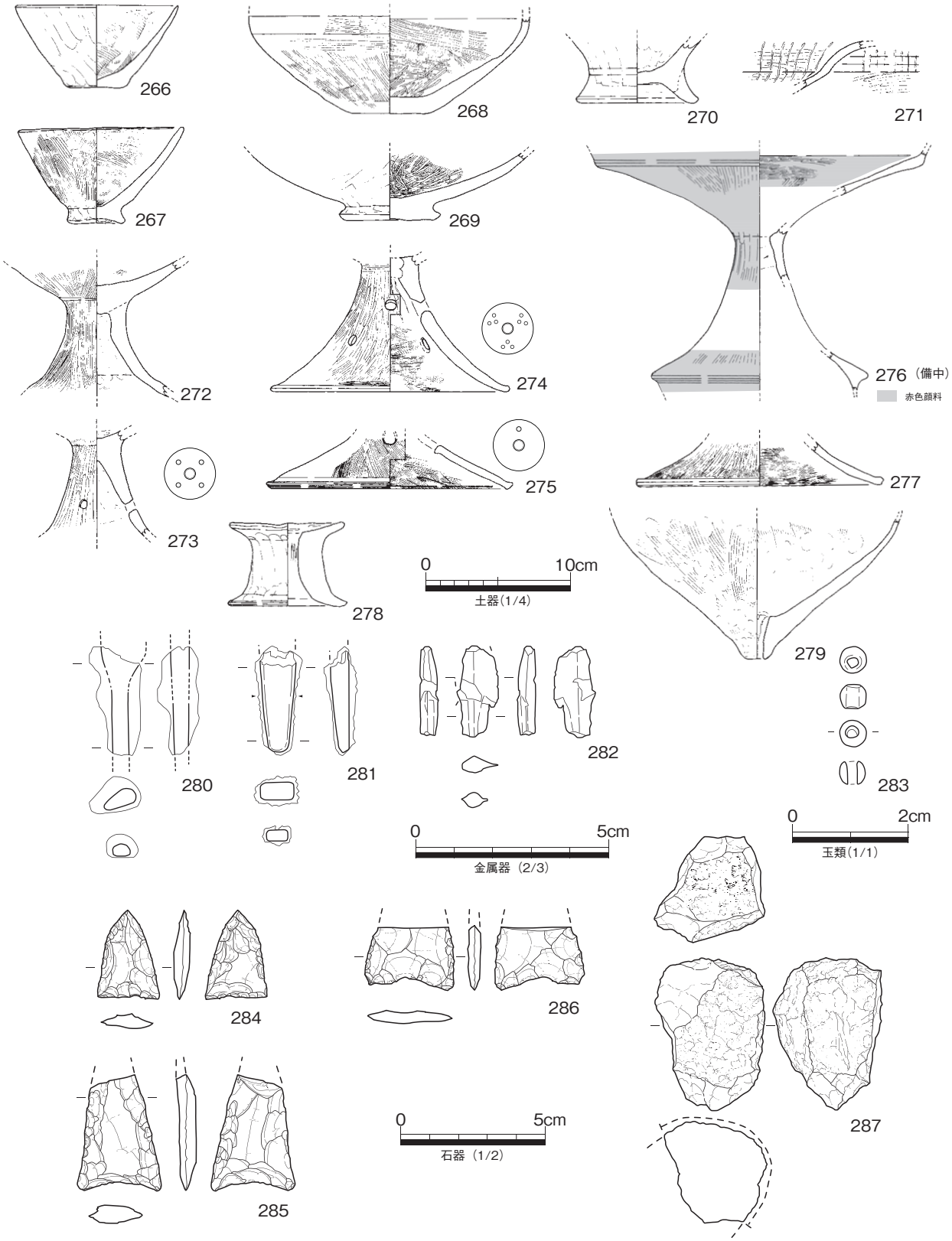


図 66　SH27 出土遺物（2）

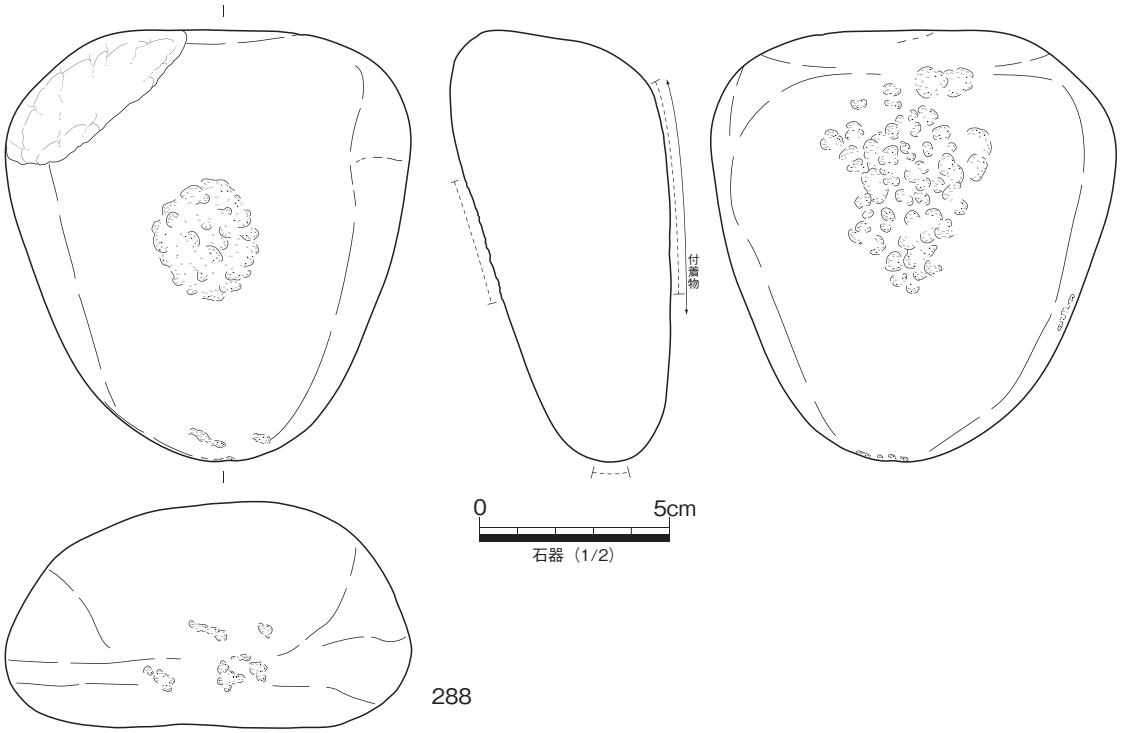


図 67　SH27 出土遺物（3）

土器　256 は複合口縁壺の口縁部片であり、口縁部外面には擬凹線文が見られ、胎土中に雲母片を多く含む。257 は細頸壺の頸部から口縁部片。内面に指頭圧痕を明瞭に留め、胎土中に角閃石を多く含むことから、高松平野の香東川下流域産と見られる。259 の広口壺は胎土中に片岩粒が確認できることから、阿波地域からの搬入土器と見られる。260 は口縁部が内傾する拡張口縁をもつ壺である。胎土は赤色を発する旧練兵場遺跡に一般的な胎土をもつが、口縁部形態等から備後地域の影響を受けた模倣土器と判断する。261 は大形壺の底部片で、タタキ調整が外底面に及ぶ。262 は口縁端部が凹線状に窪む甕であり、内面削りが口縁部直下まで及ぶ。263 は張りのある胴部をもつ甕である。264・265 は上方に拡張する口縁端部外面に小条の凹線文を施す甕であり、265 は口縁部や胴部形態から弥生後期前半新段階に位置付けられる。266･267 は小形鉢。底部形態に異同はあるものの、直線的に外反する胴部から口縁部は、弥生後期前半新段階の特徴を良好に留める。268・269 は中形鉢の底部片。270 は弥生中期後半の台付鉢の脚部片で、混入品である。272 ～ 274 は高杯脚部であり、275 は低脚であることから見て、台付鉢の可能性もある。276 の高杯は、杯部の内外面と脚部外面に赤色顔料の塗布が認められ、形態や胎土中に角閃石を多く含むことから、備中地域からの搬入土器と見られる。備中地域のＶ－２様式、又は鬼川市Ⅰ式に比定される。278 は小形の支脚である。279 は尖底の有孔鉢である。
金属器　280 は有茎鉄鏃の茎部片と見られるが、断面形が鮮明に把握できない。281 は器種不明の鉄器片である。(信里)

282 は連鋳式銅鏃の関部片である。刃部最大厚 0.5cm、刃部復元幅 1.12cm、茎部厚 0.5cm とやや大型である。刃部中央は鎬が研ぎ出され、関部も微小ながら鋭角的に逆棘を研ぎ出す。茎部は、中央に刃部

から連続する鎬線が見えるものの、側縁部は鋳造時のバリを留める。側面形状も刃部がやや反り返る傾向にある。形状、研ぎともに完全な仕上げに至っていない銅鏃と言える。
玉類　283 はコバルトブルーのガラス小玉である。直径 4.5mm、紐孔径 2.0mm で、今回報告するガラス小玉にスカイブルーが多い中で、唯一のコバルトブルーの色調をもつ玉である。大きさはスカイブルーの一群よりやや大型である。ガラス内部及び器表面に多数の気泡があり、筋状に連なる部分があることから、引き延ばし技法で製作されたものと考える。なお、小口部の最終整形は丁寧に丸く仕上げており、ガラス製作時には冷却前に柔かい素材で整形したことが予測できる。
石器　サヌカイト製石鏃３点、黒雲母花崗岩製叩石１点、砂岩製叩石１点が出土した。石鏃のうち 284 は完形、他の２点は上半部を欠く。285 は欠損部を復元すると長さ 5cm 前後の大型石鏃である。いずれも在地系の凹基式の形態を呈する。287 の叩石は備讃瀬戸の岩黒島で産出する黒雲母花崗岩に類似する。大粒の黒雲母斑晶を含む極めて硬い石で、敲打痕は明瞭ではないものの、打裂面は強烈な打撃を施した痕跡と考える。288 は表裏面中央付近にアバタ状の敲打痕が残る。(森下)

本住居は最低１回の建て替えを想定できるが、これらの出土遺物は全て最終段階の住居に伴うものである。特にベッド状遺構内側の床面上から出土した 259 の広口壺と 260 の拡張口縁をもつ壺は、最終住居に伴う主柱穴の柱材抜き取りに伴う遺物と接合しており、住居廃絶時期を明確に示すものと考えられる。これらの土器の形態から本住居は弥生後期前半新段階に廃絶したものと推定される。(森下・信里)

SH28（図 68・69）

遺構　Ｂ区南東で検出した円形竪穴住居跡である。壁溝を伴う掘り方は直径 2.9m と小規模だが、その外縁に直径約 5.7m の柱穴跡列が取り巻く。また、壁溝に沿って５基の柱穴跡を検出した。そのうち SP532 や P2 は特に深く、当該住居跡の主柱穴跡と位置付けることが可能である。その他の壁溝に沿った柱穴跡は深さが足りないが、写真等の記録から見ると柱穴跡の底まで調査が行き届いていないものと判断できるので、壁溝に沿って主柱穴が周っていたものと考える。掘り方中央部では薄い炭層を確認した。また、他の掘立柱建物跡の柱穴跡との重複のために十分な検証はできていないが、SP624 の東側に付属する窪みは中央土坑としての位置付けが可能かも知れない。

床面からやや浮いた位置で 10 点程合計 68.5g の小焼土塊が出土した。そのうち、１点は重量 53.16g の 7cm 角の扁平な焼土で、やや内彎する側に面をもつ。外周の柱穴跡列は SH27 と同様に、周堤外縁を画す遺構か、あるいは当該住居跡が大壁構造をもつ平地式住居であった可能性も否定できないが、明確ではない。

出土遺物は多くが掘り方埋土より出土した。そのうち 292・294 は床面で出土した土器であり、当該住居跡の廃絶時期を示す遺物である。(森下)

土器　289 は短頸の広口壺の口縁部片である。290 は口縁端部に竹管文を施すことから見て、無頸壺の口縁部と見られる。291 は弥生中期後半の壺底部片であり、混入品の可能性が高い。292 の甕口縁は内面に明瞭な稜線を残す弥生後期初頭の所産と見られる。293 は小形の高杯の脚台片である。294 の高杯は口縁端部の拡張が痕跡化しつつあり、弥生後期前半中段階の所産と見られる。(信里)

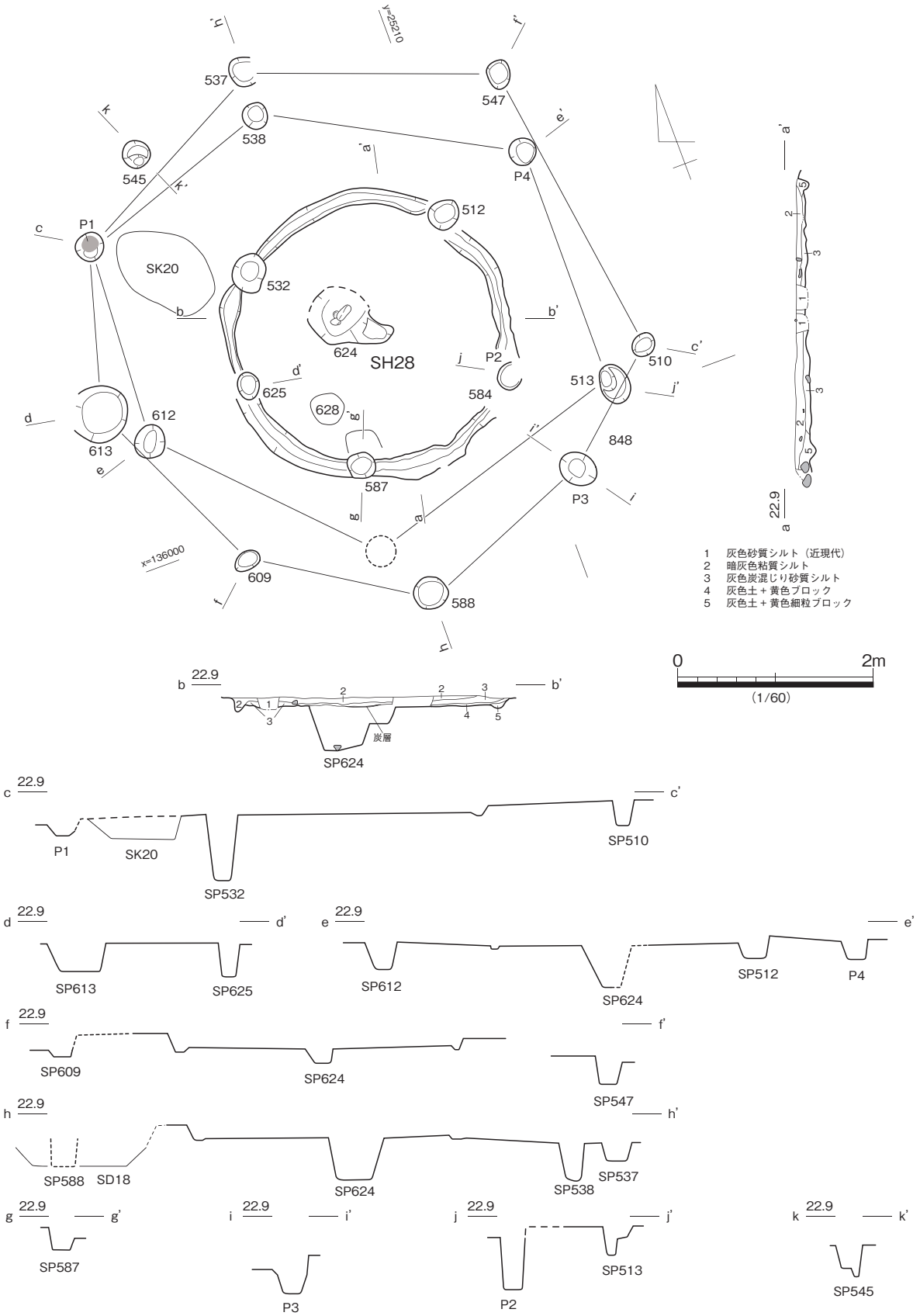

y=25210
x=136000
537
547
538
545
P4
P1
512
SK20
532
624
SH28
P2
510
513
625
584
628
612
613
848
587
P3
609
588
22.9
1 灰色砂質シルト（近現代）
2 暗灰色粘質シルト
3 灰色炭混じり砂質シルト
4 灰色土＋黄色ブロック
5 灰色土＋黄色細粒ブロック
0
2m
(1/60)
炭層
SP624
SP510
SP532
SP613
SP625
SP612
SP512
SP609
SP547
SP588
SD18
SP537
SP538
SP587
SP513
SP545

図 68　SH28 平・断面

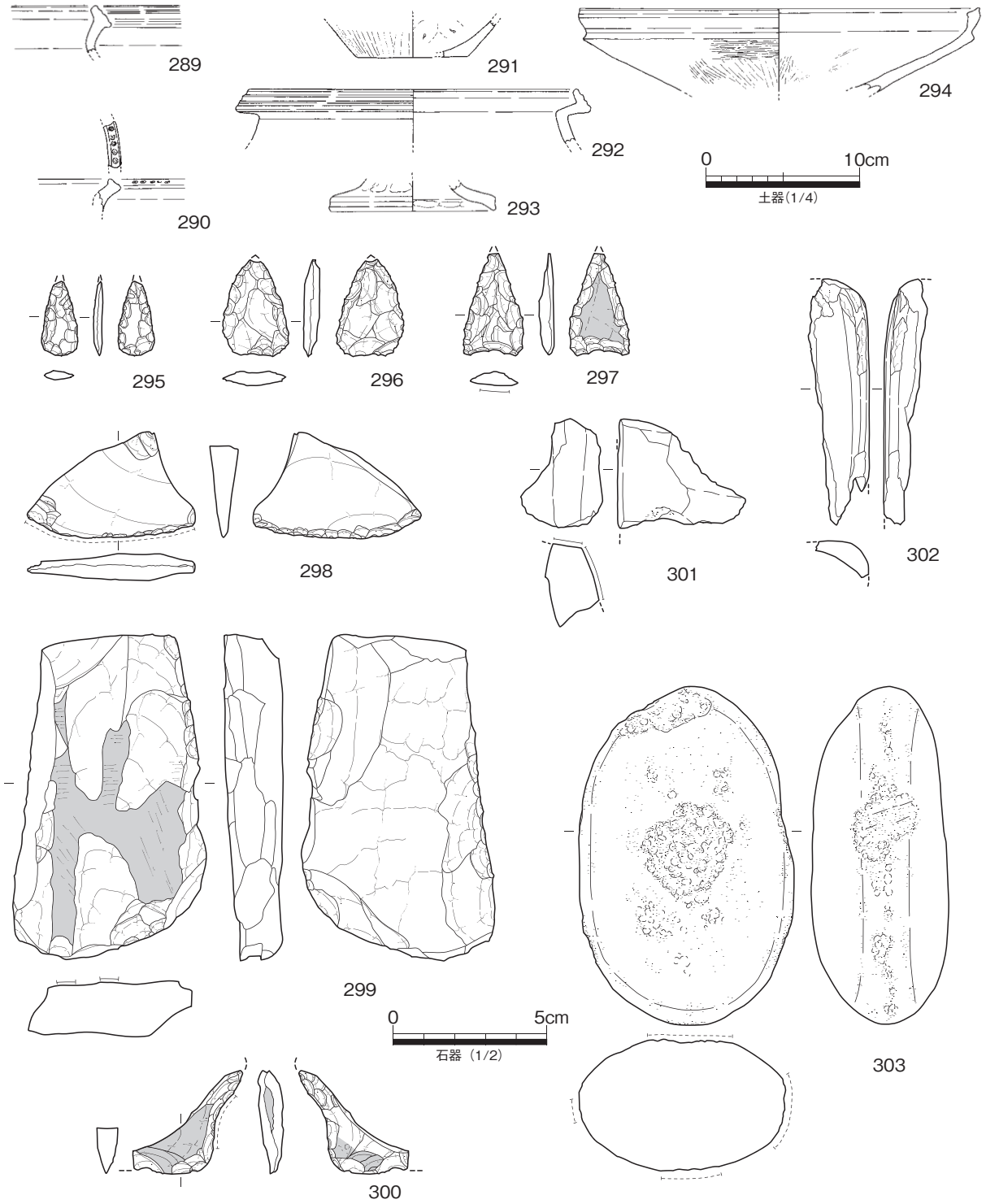


図 69　SH28 出土遺物

石器　サヌカイト製の石鏃３点、スクレイパー１点、打製石庖丁１点、結晶片岩製柱状片刃石斧１点、流紋岩製砥石２点、砂岩製叩石１点が出土した。石鏃はいずれも小型で、295 は他の２点と違って灰白色を呈し、風化が顕著であることから、縄文期の混在品の可能性が高い。296 は特に基部の左右の形状が非対称で、製作途上品の可能性が高い。297 は完成された石鏃だが、片側素材面に強い摩滅痕が残ることから、打製石庖丁を石核に転用し、そこから得た剥片を加工した石鏃であることがわかる。299 の

砥石は黄白色の風化した流紋岩を素材とし、器面全体を敲打により成形し、表面の一部にのみ砥面が残る。砥石の成形直後の使い始めの砥石と言える。一方、301 は光沢のある砥面を隣り合う 2 面に留める使用痕跡顕著な砥石である。(森下)

出土土器は弥生後期初頭から後期前半新段階にかけての時間幅をもつが、367 の高杯の形態から、本住居は後期前半新段階に廃絶したものと推定する。(森下・信里)

SH29（図 70・71）

遺構　B 区中央で撹乱に接して検出した竪穴住居跡である。床面を精査したが、主柱穴跡は検出できなかった。北側は直線的なプランだが、南側の撹乱に挟まれた部分ではやや内側へ向く弧状のプランを検出している。幅 0.2m の壁溝が伴い、床面中央付近で焼土や床面が赤色化した部分を 2 箇所検出した。埋土は暗褐色系シルト層で、床面からやや浮いた位置で大量の土器が出土した。それらの土器を除去した後、床面北側で袋状鉄斧が出土した。床面の土壌を水洗選別し、磁着検査を行ったが、鉄片や鉄滓は出土しなかった。焼土も微細なものが多く、ほとんど取り上げられていない。ある程度焼き締まった個体に限定すると、合計 13.64g である。ただし、全面赤色化した砂岩礫（334）が出土しており、床面焼土の存在と合わせて、高温作業が行われた可能性は高い。土器には二次焼成を受けたものは確認できない。(森下)

土器　304 ～ 306 は細頸壺の口縁部。305 と 306 は同一個体の可能性が高い。307 は直立する頸部に口縁部が短く外反する広口壺であり、弥生中期後半から連続する形態である。頸部の凹線文は消失しており、弥生後期前半古段階に位置付けられる。308 は長頸壺で、口縁部形態や頸部の退化した凹線文の特徴から、吉備系土器と判断できる。309 は内傾する頸部に断面三角形の突帯を施す広口壺である。310 は形態から見て長頸壺の可能性が高く、胴部外面に波状の沈線による記号文を施す。313 の短頸広口壺は、弥生中期後半から連続した系譜上にあるもので、口縁部が厚くなり、胴部最大径の位置が下がる等後期前半の特徴をもつ。311 ～ 314 の壺底部は比較的大きい平底を留めている。315 ～ 317・319・320 の口縁部を拡張する甕は、弥生後期前半古段階と比較して内面の口頸部境の位置が下がり、やや上向き気味に外反するなど後期前半中段階の特徴をもち、口縁端部外面の凹線文も擬凹線化する等共通した特徴をもっている。321 は単口縁の甕である。322 の台付鉢は内外面をミガキ締める。323 の手づくね状の小形鉢は、古墳時代前期の混入品の可能性が高い。325 ～ 327 は高杯の口縁部片である。325 は深手の杯部をもつもので、口縁端部を斜めに面取りする。326 は口縁端部を両側に拡張する高杯であり、弥生後期前半古段階のものと比較して、拡張が鈍く、上端面の凹線文も形骸化している。329 の台付鉢脚部は、形態や外面の沈線文や胎土中に角閃石を多く含むことから、備中地域からの搬入土器と見られる。330 の高杯脚は、3 孔一対の透かし孔をもつ稀な属性をもつ。331 は粗雑な調整から見て、土製支脚と見られる。332 の器台は、脚部上位に円形透かしをもつ。

金属器　333 は小型の袋状鉄斧である。袋部の折返しを僅かに留める。身部と刃部の厚みの差はあまりなく、ほぼ連続して刃部先に至る。(信里)